

# やみなべのネタ倉庫

やみなべ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

いつかやりたいなあと思いつつ、温めていたら段々発酵してきたネタを適当に並べるだけの場所です。いや、腐って土に返すよりはマシかなあ、くらいなんですけどね。

誰かのインスピレーションにでもなってくれば幸いです。

書きたいのはやまやまなのですが、まだ完結してないものばかりだし、ね。

ちなみに、万が一にも設定等々そのままに書いてくれる人がいればメッセージを頂ければいくらでもどうぞ。

いや、マジで。

# 目次

ありふれた生命の使い方	1
〈ありふれ×Fate／GO〉ありふれた	
職業と人理の盾	36
〈IS×ARMS〉インフィニット・スト	
ラトス　　く不思議の国の天使　　―	48
うたわれるもの　　く比翼のレンリ　　く	
67	
〈Fate／sn×史上最強の弟子〉Fa	
te／Strongest Night	98
Fate／Zero　　く最初で最後の反抗	
期　　く	120
〈リリカルなのは×FGO〉魔法少女リリ	
カルなのは　　く星見の夢現　　―	144
〈鬼滅の刃×Fate／stay ni	
ght〉蝶屋敷には家事幽霊が憑いてい	
る	183
〈鬼滅の刃×月姫〉死を視る眼、命を燃や	
す痣	216
〈艦これ×FGO〉神機残響海戦　　硫黄島	
く天地　　人の狭間　　―	238
蝶屋敷には家事幽霊が憑いている（柱合	
会議編）	279
〈シンフォギア×プリズマ☆イリヤ〉重な	
る世界、繋がる思い	295

- 〈呪術廻戦×Fate/sn〉呪いは廻り、運命は巡る 309
- 呪いは廻り、運命は巡る（特別講演会編） 327
- 〈カゲジツ×FGO〉は？ 陰の実力者つて、なんのこと？ 355
- は？ 陰の実力者つて、なんのこと？（リンドブルム編他） 401
- 蝶屋敷には家事幽霊が憑いている（蝶屋敷編） 445
- 〈カゲジツ×FGO〉陰の実力者？ 知らない人ですね 463

# ありふれた生命の使い方

人生なんて所詮二者択一の連続だ。

AかBか、ではない。その区分方法だと、時にはCやD、あるいはそれ以上の選択肢が発生する。

そう、AかBかではなく、選ぶ1か0か。選ばないそれが全てだ。

どんな複雑な状況でも、どれだけ雑多な選択肢があつたとしても、結局は同じこと。

思い浮かぶ選択肢一つ一つを順番に、1か0かで検証していく。選ぶ1なら実行し、選ばない0な

ら次の選択肢へ。それを繰り返し、最後の選択肢……「新しい選択肢を探すか」さえも  
選ばない0なら、もう一度最初から。

これはきつと、「選択」という事柄以外にも言えることで、要は1か0か、あるそれが全て。

ならば、「1」と「0」の羅列で構成されたプログラムで動く機械と人間、両者にどれほどの違いがあるうか。

そんな考えを持つようになったのは……果たしていつからだろう。

物心ついた頃には既にはそうだった気もするし、この生命の帰結が見えたと思った  
あの時”かもしれない。

あるいは、この悪趣味な箱庭へ招かれた時だろうか。それとも、もつと別の……  
(まあ、そんなことどうでもいいか……)

今更思索に耽つても仕方がない。いや、あるいはこれはある種の現実逃避なのかもしれない。

とうの昔に諦めはついている……というよりも、諦めた後のくせにこんなことを思うなんて、それこそ失笑ものだ。

もう自分は「0」で、既に「1」を選んでいる。

取り返しはつかないし、立ち止まることもできない。

後は、精々上手くやるだけだ。

視界の端には、並走する様にピツタリと横につく「ソレ」が見える。

後ろからは、多分「あの人」も追ってきているだろう。

自分を止めるためでは……ない。だって……

(考えることは同じ……かな)

そう、きつとどちらも考えていることは同じだ。

だって、僕たちはまるで違うようで、ある一点ではとても良く似ているから。

——元より「0」しか持たないソレと

——一足早く「0」へ至った僕

そして——ようやく「0」にたどり着けた人

ここにいる僕たちは、誰も彼もが「1」がない。

持っていないなかったのか、失ったのか、捨てたのか。その違いはあれど、根本は同じ。だから、行きつく結論が同じだとしても、なにも不思議はない。

「じゃあ、頼める?」

「確認…訂正。了承、最終機構の実行を承認。……………良い旅を」

「ははっ、それいったい誰のセンス? 趣味が悪いなあ。いや、一周回っていい趣味してるのかな?」

「反省、最後にユーモアに挑戦しましたが、上手くいきませんでした。記録の消去を要請します」

「……」

驚いた。何が驚いたって、ソレが冗談なんて口にすること自体が驚きだ。

必要な時に必要なことだけ口にする、そういうものだと思っていたのに。

正直、アレが冗談だとは全く思っていなかったのだ。大方、どこかの誰かに吹き込まれたものをなぞっただけだろうと……。

啞然とする僕を尻目に、背後から微かな笑い声が漏れた。

ソレの冗談がツボにはまった……という事はないだろう。

あの年中眉間に皺を寄せた人を笑わせるには、この程度では到底足りない。

だから、笑ったのはもつと別の理由だ。その理由も、大凡想像がつく。

そしてきつと、これこそが彼らの望んだことで、かつてソレを使わなかった理由でもあるのだろうか。

「……すまん。結局、お前たちを巻き込んでしまった」

微かな笑い声に続いて背中にかけられたのは、苦渋に満ちた謝罪。

この人の真意は知っている。だから、この結末に至ってしまったことが苦しくて仕方がないのだろう。

一人で何もかも背負う、なんてどこぞの勇者みたいなことを考える人じゃない。

ただ、「背負うべき人たちが共に背負う」というのがこの人の理念だ。

そこに僕たちは含まれていなかったというだけの話。

とはいえ、別に背負ったつもりはないし、巻き込まれたつもりもないのだが……。

(まあ、なんて言ってもきつと責任を感じるんだらうなあ)

そういう人だ。ならば、余計なことに時間を費やすべきではない。

残された時間は、もう数秒もないのだから。

「先輩なら上手くやってくれますよ、それで良しとしましょう」

「肯定、むしろ本懐です」



「教え子……いや、●●に頼らねばならんと言うのが、尚更情けないがな」

小声で呟かれたので聞き取れない部分はあったが、何を言ったのかは想像に難くない。  
い。

（ああ、ようやく認めただ。まったく、ツンデレといふかなんといふか……）

事ここに至るまでついぞ口にしなかつたその言葉。

それを、この土壇場で微かに零すあたり意地つ張りと言ふか頑固と言ふか……。

だからこそ惜しいと思う。どうせなら、思いつきり大声で言つてやればいいのに。

そうすれば、先輩もきつと喜んだことだろう。

（ああでも、こつこつという状況で言われたんじや素直には喜べないか）

そんなことを思っているうちに、遂に身動きが取れなくなっている先輩にたどり着き、追いつく。

視界の端に映つた先輩の眼が、驚きに見開かれる。

当然だ、今も僕たちの後ろではみんなが先輩同様動けなくなっている。

だが、別に奇跡とか偶然とかそういうのではない。一応、それぞれなりの理由があつて動けているのだ。

その理由に気付けない先輩ではないはずだが、それなのに驚いているあたり、さすがに余裕がなかつたことの表れだろう。

その顔が、少しばかり前の……でも、遠い昔のようにも思えるあの人を思い出させた。随分と変わってしまったが、やはり先輩は先輩なのだと改めて実感する。

何かを言おうとしているが、生憎とそれを聞き届ける余裕はない。

それは、置き去りにしてきた人たちが挙げる叫びにも似た声も同じ。できるなら聞きたい声もあるのだけど、聞けないのが少し残念だ。

(あの人は、最後なんと言ってくれているのだろう。まあ、仕方がない、か) なにしろ、目の前のクソ野郎に生じた僅かな虚、これを無駄にはできない。

千載一遇であり、恐らくは唯一無二の好機。

残念ながら、僕たちは勇者でもなければ神子でもなく、ましてや理不尽を更なる理不尽で踏みつける化け物でもないけれど……それでも、十把一絡げの雑魚、一山幾らのモブ、路傍の小石……そんなにオマケにだって意地がある。

「吠え面かきやがれ!!」

これは奈落の化け物の物語に付随する、負け犬と出来ない兵器、そして……死に損ないの余話である。

\* \* \* \* \*

月曜日。

それは多くの人々、自宅警備員さんなどをはじめとした一部例外でもない限りは、概ね一週間で最も気と足の重くなる日だろう。

とはいえ、それも朝の内の話。昼時ともなれば、いい加減休日モードから平日モードにスイッチが切り替わる。

それを示すように、午前の授業を終えた各教室に朝の憂鬱とした空気はなく、むしろ活気と喧騒が溢れている。

騒がしいを通り越しいつそ「五月蠅い」と言ってもいいざわめきの中を、一人の少年がゆつたりとした足取りで歩いていく。

歩調は決して速くはない。スタスタとかキビキビとか、そういう擬音からは程遠い。

まあ、さすがにノソノソとかトボトボとか言うほど緩慢ではなく、その中間とでも言えбайいだろうか。

早くもなく遅くもない速度で歩く少年の顔に浮かぶのは、微かな笑み。

まるで心地よい音楽でも聴いているかのような、今にも鼻歌でも歌い出しそうな穏やかな笑顔だ。

そんな彼が歩いているのは、2年生のフロア。

では少年が2年生なのかと言うと、それも違う。少年は1年生で、今は2年の先輩に用があつて訪れている。

普通なら見慣れない生徒の存在に気付き視線を向ける者の一人や二人いても良さそうだが、誰一人として彼に見る者はいない。

無視しているわけではない、気付いていないわけではない。

いることはわかっているし、見慣れない生徒であることもわかっているが、ただ何となくそちらに視線が向かない。

それは、少年に不思議なほど現実感がないからだろうか

存在感が薄いか、浮世離れしているかとは違う。

言語化は難しいが、見る者が見れば「ここにいない」とそんな印象を抱かせるなにか。

あるいは、「空気のよう」と表現する者もあるだろう。ただし、その場合は「今にも溶けて消えてしまいそう」と言う意味になるが。

そんな、なんとも表現に困る少年は迷いのなく一つの教室の前で足を止める。

戸の窓から中を覗けば、そこには目当ての人物が机に突っ伏していた体を丁度起こしたところ。

前の授業である体育が早めに終わり、体調の問題で見学していたおかげで着替える手間がなかった分、早く教室に着けたのが功を奏したようだ。

いつもならさっさと教室を出て昼寝をしている相手だが、念のために見に来て正解だったらしい。

「失礼します」

一応の礼儀として戸を開けながら挨拶をする。

やはりここでも、妙な現実感の薄さが作用しているようで、視線を向ける生徒はほんどいない。

ただ、さすがに数人程度は少年に視線を向ける生徒もいる。

基本的には「誰だ?」「二年生?」と言った様子の反応を小声や視線で向けてくるが、中には例外もいる。

例えば……:というか、唯一彼の要件を察した凜とした少女が「なるほどね」と言わんばかりの表情だ。

その少女……八重樫雫は少年に向けて軽く肩を竦めて見せる。

本人として「ちよっと待ってあげて」とでも言いたいのだろう

ただ、碌に話したこともない、本当に「顔見知り」程度の間柄ではそれを察するのは無理と言うもの。

ただ、僅かに疑問符を浮かべながら雫の視線を追えば、その意味も分かる。

(? ……ああ、なるほど)

そこには、目当ての先輩の寝ぼけ顔ではなく、腰まで届く長く艶やかな黒髪の少女の後ろ姿。

少年からすればやはり先輩にあたるその少女が、目当ての先輩を色々構っていることは知っている。

少年からしてみればその真意は明らかなのだが、どうやら「知らぬは本人たちばかり」という状況らしいことも。

いや、どうも周りの生徒の表情や視線を見る限り、ほとんどの生徒は気付いていないようだ。

もしかすると、気付いているのは少年と雫だけかもしれない。それほどまでに、周囲からの反応は非好意的だ。

(なんで気付かないかなあ……いや、認めたくないだけ? それならまあ……)

納得がいけないこともないような気を否定するのは些か狭量と言うものか。

なにしろ、相手は校内の二大女神とまで称される美少女、白崎香織なのだ。

それが冴えないオタク少年にそういう感情を持つているなど、普通は受け入れがたい……のかもしれない。

理解も納得もいまいぢできないが、そうとしか解釈しようがないのでそういうことにする。

むしろ、彼からすれば逆の感想が浮かぶのだが……。

(鈍感すぎるのはアレだけど、やっぱり白崎先輩は見る目があるなあ)

別にそこまで古い付き合いというわけではなく、件のオタク少年とは中学時代からの(一応)友人だ。

だからというわけではないが、その人間性はそれなりに理解している。

だからこそその感想だ。そして、きっと周囲の人間は彼の人間性をあまり……と言うかほとんど知らないのだろう。

知っていれば、彼のクラス内での扱いはもつといいものになっているはずだと思う。

まあ、別にそれを非難する気はないし、「オタク」という人種に対しての偏見も仕方ないとも思う。

そもそも、彼の良さは香織や雫のそれとは違い目立つ類のものではない。積極的なアピールもしないので、余計分かりにくい。だからと言って隠したり取り繕ったりもしておらず、オタクなことも含めてオープンにしている。

結果、目に留まりやすい「オタク」な部分だけが同級生たちに周知されているのだらう。

（先輩の周りに流されないとこころはすごいと思うけど、もうちよつと周りの目を気にしても良いと思うんだけどなあ）

オタクであることを隠せとか、積極的に自分の良さをアピールしろと言うわけではないが、明らかに一人だけ浮いている。たぶん、それが一層周りからの扱いを悪いものになっているのだろう。

基本、人間に限らず生き物は異物を排除しようとするものだ。そして、周囲の目や気にしないことなど、この年頃はおろか大人だって難しい。

意識的にか無意識的にかは定かではないが、自分たちとは違う事を彼らも気付いている。「ナンバーワンよりオンリーワン」と口にすることはできる。そうありたいとも恐らく思っているだろう。

だが、実際にそうあるほど強い人間は稀有だ。たぶん、そうありたいけどできないやつかみも含まれているのではないか、少年はそう思っている。

オタクであることを隠さないのもそうだ。誰だつて一つや二つ隠しておきたいことがあり、彼らの認識ではオタクであることもそれに含まれるのに、隠そうとしないどころか「それがどうした」と言わんばかりのオープンさ。



できないことをできるからと言って、痺れたり憧れたりする人間ばかりではない。むしろ、自分にはできないことを平然とやってのけることに反感を持つ人間だっている。

その相手が、一見すればあらゆる面で自分より勝るものが必要ならおさらだ。

そこに加えて、校内屈指の美少女からの積極的アプローチ。これでは一層反感が募ろうというもの。

あるいは、二人が付き合ったりでもすれば状況は改善……

(されないよなあ、たぶんだけど)

外部から見れば、ある種の「美女と野獣」になるのだろう。余計に反感が募るだけだ。

(いじめとかになつてないだけマシ……ってところかな。いや、案外もうなつてるのか?)

残念ながら、入学してから日の浅い1年生では、特に他学年となると既に程度の低い嫌がらせを受けていることなど知りようもない。

加えて、腕つぶしや人望など諸々含めていじめの抑止力になる物を持っていない身なので、もしそうだとしても防ぎようがない。

ただ、だからこそ少年は香織や雫のことも「スゴイ」と思う。

(周りはあの調子なのに、白崎先輩はそんなの全然気にしないんだよなあ。多少天然と  
言うか鈍すぎる気もするけど。それに、八重樫先輩も「温かく見守る」って感じだし)

あの二人は二人で、周りに流されない芯の強さを感じる。

まあ、雫に関して言えば、眼差しが優しすぎて「お母さんみたい」と思ってしまったのだが。

それでも、あの二人が周囲とは一線を画する人物なのは確かだろう。

二大女神と言って男子どころか女子からも人気の高い二人だが、外見だけではなく内面も伴っているからこそだ。

それに並ぶ内面の持ち主と思えば、後輩としても中々に鼻が高い。

少し位アピールしても罰は当たらないだろうに……とも思うが。

（まあ、そんなことに気を遣うくらいなら趣味に全力を傾ける人だし、言っても無駄だろうなあ）

無駄な努力とわかっていることだし、理解している者が少なくとも三人はいるのだから、わざわざ言う必要もないだろう。

そういうものように結論し、やれやれとばかりにため息をついて顔を上げてみれば、香織の積極的なアプローチにタジタジと言った様子だ。

（馬に蹴られたくはないし、出直そうかな……あつ）

どうやら判断が遅かったらしく、うっかり二人の目が合ってしまった。

（助けて！）

(どうぞお幸せに)

(見捨てられた!?)

(では、僕はこれで……)

(薄情者~~~~~!?)

別にアイコンタクトで意思疎通ができたわけではない。少なくともオタク少年……南雲ハジメは全くと言って良いほど意味を拾えていない。ただ、可愛い後輩に助ける気が全くない事が分かったただけだ。

逆に後輩の方はほぼ完全に拾っているのだが、分かった上でにこやかに流してさっさと背を向ける。

ついでに、雫に対しても軽く会釈。あちらからは「仕方ないわね」あるいは「悪いわね」と言わんばかりの苦笑が返された。つくづくオカンである。

「あ、し、白崎さん！ えつとく、そ、そうだ僕これからちよつと用事が!？」

「用事？ あ、なら私も手伝うよ」

「いや、それは……」

当然用事などデマなので先が続かない。忙しなく泳ぐ視線からその場しのぎなのは明らかだが、香織はハジメの言葉を疑っていないらしく華のような笑顔を浮かべて善意100%だ。

さすがにハジメとしても、そんな表情をされると罪悪感がチクチクしてくる。

とはいえ、ここで流されるわけにはいかない。罪悪感よりも周囲の視線の方が痛いのである。

故に、ハジメは薄情にも背を向けた可愛い後輩……佐伯翔<sup>さえきかける</sup>をだしに使う。

「あく、そこにいるのは1年の佐伯君じゃないか！ いったいどうしたんだい！」  
清々しいまでの棒読みである。

とはいえ、純真な上に天然が入っている香織は「え？」と素直に反応して振り返った。もちろん、その瞬間にハジメが「良し、この隙に」的な若干悪い表情を浮かべたことには気づいていない。

学校一の美少女である香織に好意を向けられているなど全く思っていないハジメからすれば、香織の存在は邪魔者とは言わないまでも厄介なものとかわざるを得ない。

フレンドリーに接されて邪険にするような人間ではないので殊更悪く思ったりはしていないが、扱いは対応に困る相手なのは確かなのだ。

とはいえ、翔としてもここで巻き込まれるのはたまったものではない。

加えて、余計なところでタイミングの良さを発揮した校内随一のイケメンとして評判の天之河光輝が「南雲にも用事があるみたいだし……」とかなんとか言いだし、さらに親友である坂上龍太郎が「早く飯にしようぜ」とせっつくものだから、事態は待ったな

しだ。

あるいは、相手が香織でなければそこで話は切れるのだろうか、彼女は彼女で中々に押しが強い。

自分の想いには気付いていないくせに、妙に積極的なのだ。

それくらいのことには知っている翔からすれば、絶対にここで引き下がるはずがないと思わずにはいられない。

絶対、間違いない、翔も含めて面倒な事態になる未来が目に見えかぶようだ。

なので、全力の「何もあります」アピールでこの場を凌ごうとしたところで、思わぬ方向から待ったがかかる。

「見つけたぞ、佐伯。お前、こんなところで何をやっている」

不意にかけられた声に振り向けば、そこには中肉中背の濃紺色のスーツを着た男性教諭が立っていた。

比較的小柄で170cmに5cmほど届かない翔より少々高い位置にある目は、その人柄を表すように厳しい。

翔のクラスの担任教諭である山戸やまとけい継だ。

昨年三十路を迎えたばかりというには些か老けて見えるのは、眉間に深く刻まれた皺にも一因があるだろう。

「あ、先生。どうかしました？」

「話があるから生徒指導室に来说っておいたはずだが？」

「あく……そういうえば、そんな話もあつたような」

「ふん、忘れていたな……まあいい。そう時間のかかる話でもない。それより……」

苦笑いで誤魔化そうとする翔に向けられていた視線がハジメたちに向けられると、全員の背筋が思わず伸びる。

なにしろ、継は昨年までハジメたちのクラス担任を持つていたのだ。丸1年この厳めしい目に晒されていれば、思わず背筋も伸びるといふもの。

まあ、顔立ちや視線の厳格さに対し、実の所そこまで頑迷な人物ではないし、ハジメたちもそれを知っているのだが……第一印象と言うのは色々厄介だ。

「南雲、目の下にクマができているな。またゲームか」

「あ、あはははは……」

ギロリ、と言う擬音が相応しいほど視線が鋭くなる。

実際にはよく見なければわからないほど薄いクマなのだが、見逃してくれはしない。

対して、ハジメも翔に倣つたわけではないだろうが、同じような苦笑いで誤魔化しにかかる。

もちろん、それで誤魔化されてくれるような相手ではないが。

とはいえ、口数の多い人ではないのでそれ以上言い募ったりはしない。

代わりに、香織をはじめとりあえず周りにいた面々に「あいさつ代わり」とばかりに端的なコメントが飛んでくる。例えば香織と光輝には「他人のことも良いが、まずは自分のことだ」とか、龍太郎には「パン？　また早弁か」とか、締めの際には「あまりこいつらを甘やかすな」といった具合だ。

香織と光輝はよくわかっていないらしく首を傾げ、龍太郎は「勘弁してくれ」とばかり。

逆に、雫は何か感じるものがあるのか神妙な様子だ。

ただ、あるはい「だからこそ」こうも思う。

（外見と口下手なせいで誤解されがちだけど、よく見てる。龍太郎はまあともかくとしても、自分自身のことがおぼついてない香織と光輝のこともわかってるし、私がつい先送りにしてることとかも見抜ているのよね）

例えば、光輝の悪癖であるご都合解釈について、だ。

光輝自身には自分自身をもっと客観視しろと言っているのだし、折に触れて注意するだけでは足りないことを雫にも指摘している。香織についても同様だろう。

ただ、如何せん言葉足らずなところのある人なので、雫くらい察しが良くないと完全には読み取れないのだが。

だが、一つだけどうにも釈然としない点がある。それは、ハジメへの対応だ。

「しかし、南雲。いつまでここに通うつもりだ」

「え、え〜つと……」

「ここにお前に必要な物などないだろうに」

（なんでこんなに南雲君にはあたりが強いのかしら……でも、生徒の選り好みとかする人じゃない。檜山君とかへも基本的なところは変わらない）

あまり素行が良いとは言えない生徒に対しても、厳しくはあれどもハジメに対するほどではない。

分かりにくいのが、より良い方向に進んでほしいという思いを雫は拾う事ができる。

ハジメに対する時にはそれができないわけではないのだが、妙に厳しすぎるといっ

……

（ゲーム嫌いだから？ いえ、それだけとは……）

確かに、継のゲーム嫌いはそれなりに有名だ。雫は直接見たことはないが、校内への携帯ゲーム機の持ち込みやゲームアプリの利用には普段から2段階しくらいで厳しいという噂も耳にしている。

修学旅行に持ち込んだ時は、床に叩きつけて壊しそうになったのを何とか自制した、なんて話もある。



真偽のほどは定かではないが、そんな噂が飛び交うくらいにはゲーム嫌いでは通っていない。

だから、徹夜でゲームをして登校してくるハジメを目の敵にしているのだ……なんて噂もあるが、雫はそれには懐疑的だ。

彼は厳しくはあれども、決して理不尽な教師ではない。

むしろ、外見と言動の厳めしさに反し寛容で、生徒の自主性を尊重してくれる、と言うのが雫の人物評。

顧問を務める生徒会や文芸部では特に慕われ、体育祭や文化祭でちよつと弾け過ぎな内容があつても擁護してくれるし、文芸部の作品がかなりきわどくても眉をしかめるだけ。

話しかけにくくはあるが、話のわかる相手だ。

そんな彼が、例え重度のゲーム嫌いだったとしても、ハジメを目の敵にするとは思えない。

とはいえ、ならどうしてこうも厳しいのかと言うと答えが出ない。

その答えを出すには、雫とハジメの関係性は薄すぎる。

逆に、ハジメとそれなりに親しくしている翔は内心でただただ納得するばかり。

（あゝ、わかるわかる。確かに、先輩ってなんで高校に進学したんだろうって思うことあ

るんだよなあ。

進学なんてしないで……というか、今からでも中退して働けばいいのに)

翔は知っている。ハジメの父親はゲームクリエイターであり、母親は少女漫画家であること。

そして、オタクとして見下されている彼だが、誰よりも真面目に人生を考えているし、現状クラスどころか学校の誰よりも社会的評価を受けられる能力を有していることも。

なにしろ、父親の会社や母親の作業現場でバイトし、既に即戦力級の技術があるのだ。その他の「無限の未来が広がっている」「未知数」と言えば聞こえの良い、卵たちとはものが違う。

担任であった継もそれを知っているからこそ、「お前なんてまだ学校なんて意味のないところ来てんだよ。そんなことしてないで働いて社会に貢献した方がはるかに有益だろうに」と言いたいらしい。

彼の目には、ハジメがいつでも出られるのにわざわざ鳥籠に入った鳥にでも見えていくのだろうか。

だからこそ、さつさと出ればいいのにと苦言を呈さずにはいられない。

あれはあたりがきついのではなく、単に呆れているのだ………実にわかりにくい。

そんな継や翔の内心を知ってか知らずか、ハジメは深々とため息をついて内心で愚痴

る。

（もういつそ、こいつら異世界召喚とかされないかな？）

どう見てもこの四人組、そういう何かに巻き込まれそうな雰囲気ありありだろうに。

……どこかの世界の神か姫か巫女か誰でもいいので召喚してくれませんか？）

そんな愚痴が届いたわけでもないだろう。

だが、確かにそれは何の前触れもなく出現した。

光輝の足元に、白銀に輝く円環と幾何学模様が。

突然の事態にだれもが動けずにいる中、魔法陣は徐々にその輝きを増していく。

同時にその範囲を広げ、まもなく教室全体がまばゆい光に満たされる。

遅れて生徒たちの間で混乱が生じはじめ、同時に先の授業後から生徒たちと談笑して

いたために教室に残っていた社会科担当、畑山愛子が叫ぶ。

「みんな！ 教室の外へ！」

だが時すでに遅く、皆が動き出すよりわずかに早く魔法陣は爆発的な光を放ち全てを

飲み込んだ。

しかしその瞬間、ハジメだけは聞き取ることができた、目の前の厳めしい男性教諭が

零した一言を。

まさか、帰れるのか？

その意味をハジメが知るのは、いくらか後の話。

\* \* \* \* \*

※以降、セリフだけのダイジェスト版でお送りします。

尋常ではないネタバレの嵐なのでご注意ください。

「ようこそトータスへ、勇者様。そしてご同胞の皆さま。歓迎いたしますぞ。

どうか、エヒト様のご意思の元、我らをお救いください」

「……………なんにも、かわつちやいねえんだな、ここは!!」

「先輩の天職って…………」

「あく…………これ」

「錬成師？ ステータスは…………あ」

「翔は？」

「薬師、らしいです」

「ぐ！ ステータスもそうだけど、技能もたくさんある、ね」

「ありますね。まあ、薬物耐性とか状態異常耐性とか、すつごくらしい気もしますけど」

「違う、錬成つてのは…………」

「なんで、先生そんなに詳しいんですか？ 確か、短剣士じゃありませんでしたっけ」

「昔取った杵柄ってやつだ、気にするな」

（いや、かなり無理あるんですけど……）

「まるで本を読むのがサボりみたいな言われ様でしたね」

「まあ、仕方ないんじゃないかな」

「了見が狭いというか……いえ、世界と言うか視野が狭いんですね。自分の知ってることしか知らないのが人間ですけど、自分の知らないものがあることを知らないんですよね、あの人。まるで子どもだ。いや、力ばかりある分、子どもより性質が悪い」

「君、そんなさらっと毒吐く人だったっけ」

「薬師なので」

「毒も薬のうち？ って誰が上手い事言えと？」

「すまない。二十層と聞いて油断した。まさか、あんなトラップにかかるバカがいたとは……」

「先生……」

「俺もついていくべきだった。そうすれば、こんな……」

「いいえ、先生のせいじゃありません。アレは、誰にもどうしようもなかったことですから」

「……誰にも、か。だからこそ、俺は……」

「佐伯、八重樫、俺は今からオルクスに潜る」

「南雲君を探すんですか？ でも、一人でなんて無茶です！」

「もしかして、先生の隠し事と関係ありますか？」

「南雲にでも聞いたか？」

「ええ、まあ……」

「あいつはアレで察しも良い。気付いたとしても不思議はないか」

「八重樫、お前は一人で、と言ったが逆だ。俺一人なら、恐らく底まで行ける。他ならいざ知らず、幸いこの迷宮のことはよく知っているからな。その意味で言えば、白崎が起きていなくて助かった、あいつがいたら無理やりにもついてきただろうからな」

「そうか。あの人たちは、お前を使わなかったんだな」

「これは……ゴレム、なのか」

「ん……でも、見たことない形」

「だろうな。こいつは既存のどのゴレムとも違う」

《確認、攻略者2名。これより主人として<sup>マスター</sup>認証します》

「なあ、アンタいったい何者なんだ。もういい加減、教えてくれないんじゃないか？」

「そう、だな。お前たちはここまでたどり着いた。なら、もう隠す意味もない。

まあ、お前たちももうある程度予想はできてるだろう。

俺の名は……ケイ、ケイ・オルクス。組織としての解放者の一員、オスカー・オルクス  
の弟子だ」

※第一章だとオリキャラの内、大体この人がメインになっちゃうんだよなあ。

第二章以降は分散すると思うんだけど。

ちなみに第二章以降をダイジェストにすると……。

「私も、一緒に連れて行って。ううん、なんと言われたってついて行くから」

「俺は、お前の知ってる俺からかけ離れたもんになっちゃった」

「あの時みたいにな、手の届かないところに行っちゃうのは……嫌だから」

「ハジメ、連れて行こう」

「は？ いや、だが……」

「こいつとは決着を着けなきゃいけない。こいつに勝って、ハジメの特別になる。

それに、どうせすぐに諦める」

「こいつじゃないよ。でも、勝って特別になるっていうのは同感かな」

「ほら、一応持っておけ」

「なんです、これ？」

「薬だよ。それも神話級のな。薬師のお前なら、俺とは違った使い道もあるかもしれないねえだろ」

「……なるほど。じゃ、有難くいただきます。でも、何で2本？ 貴重なものなんでしょう」

「1本は………お前用だ」

「……はい」

「あと、どれくらい保つ」

「天職のおかげで思ってたより引き延ばせてますけど、2・3ヶ月ですかね」

「………すまん」

「元々わかりきっていたことですから、気にしないでください」

「ああ、そうだ。一応言っておくが、亜人族を見かけたら助けておけ」

「は？ そりやまたなんでだよ」

「必要だからだよ。俺じゃ、辿り着けない場所もあるからな」

「ふくん」

「ん……あそこに薄汚いウサギがいる」

「誰が薄汚いですか!？」

「ああ、ホントだな。涙やら鼻水やらでばっちいが、確かにウサギだ」



「初対面で酷過ぎません!？」

「二人とも……」

「ハウリアねえ。兎人族も変わったもんだ」

「何か知ってるんですか？」

「ハウリアって部族は知らんがな。ただ、俺の知ってる兎人族を一言でいうなら……」

「言うなら？」

「部族単位のマハトマ・ガンジー」

「……だれ？」

「ああ、私たちじゃないと分からないよね」

「おいおい、それって非暴力不服従のか？ それがどうしたらこうなるんだよ？」

「クラルス、だど。お前が？」

「そうじゃが、どうかしたのかのう？ って、なんじゃ！ 人の顔を見るなりいきなり泣

き出しおって!？」

「おいおい、どうしたよ？」

「戦友の！ 同志の！ その子孫がこんな変態じゃ泣きたくもなる!？」

「ん……わかる。この駄竜は存在が罪。死んで全竜人族と私たちに詫びるべき」

「あふん！ ハアハア、ご主人様に続き、なんと弁えた御仁じゃ……たまらん」

「フラメル！ フラン！ 俺は、俺は……！」

「いや、誰だよ」

「多分、昔の仲間とかだと思っけど……」

「二人とも、クラルスの名に恥じない奴らだった。」

だが！ 何が酷いって、こいつとフランが瓜二つなのが余計腹立つ!!」

「ああ、それは受け入れがたいですよねえ……」

「んん、いかに下着を変えねば。しかし、フランじゃと。そなた、大婆様のことを知って

おるのか？」

「は？」

「へ？」

「ほ？」

「あんた、いったい何を……」

「んん、いくら強力な魔物でも、相手が生物なら僕の土俵なんですよねえ」

「っ!? まさか、これは毒か！ だが、どうやって……」

「技能、調合の派生スキルに『薬品生成』と言うのがありまして」

「毒人間、つてことかい」

「別に毒に限りませんよ。回復薬や解毒剤、造血剤に睡眠薬。まあ、大抵の薬は作れちゃ

うんですよ。

回復役が減っちゃったんで、結構重宝してるんですけどね。

ただ、生物じゃない相手や薬の効かない相手にはさっぱり効果がないんですけど……彼らには、問題ないみたいで安心しました」

「ちいつ！ 厄介な……」

（まあ、先輩からもらったこれと僕の体質との合わせ技が完成したら……我ながらヤバすぎるよねえ。生きたBC兵器とかシヤレにならないし。どうしよ……）

「油断大敵、ですよ」

「なん、で……確かに、人形にしたはずなのに……」

「色々な薬を使ってたからですかねえ。不思議じゃありませんでした？ 刺した割に出血、少なかったでしょう」

「ふん、だからって君一人で何ができるってんだ！」

「佐伯君！ あなただけでも……！」

「いえいえ、もう仕込みは終わってますから」

「は？」

「直接戦闘能力が皆無に近い僕に勝ち目はありませんからね、操られてるふりをしてい  
る間に色々と」

「なにを……」

「生憎と完成したばかりで実戦使用は初めてなんですよ。さてさて、どうなることやら。まあでも  
まともな死に方はしれないと思つた方が

いいですよ」

「握れますか？」

「っ!？」

「僕の体は薬であると同時に毒。その上、あれもありますからねえ。触るのはお勧めし  
な……」

「舐めないで! そんなの、こつちは先刻承知の上よ! あなたには何度も助けられた  
! 本来私たちがやらなきやいけないことも肩代わりさせてきた! それなのに今更、  
貴方を拒むわけないじゃ……」

「……」

「……………佐伯君、あなたこの手……」

「まあ、そういう事でして。まさか、躊躇なくとは思いませんでしたけど」

「~~~~~」

「皆さんには秘密にしてください。知つたところで、何がどうなるものでもありません  
から」

「あなたはそれで……」

「良いも悪いもありません。もう、済んだことですから」

「おい、師匠」

「いい加減その師匠つてのやめろ。今更お前に教えることなんぞない。

あつという間に追い抜きやがって。

大体、師匠とかいう割にお前には敬意つてものがないだろ、敬意つてもんが」

「良いから聞けつての。その……なんだ、アンタにはこれでも結構感謝してるんだ。だから……なんだよ」

「お前、熱でもあるんじゃないか？ おい白崎、ちよつとこいつ診てくれ！」

「アンタもか！ お前ら俺のことなんだと思つてやがる！ あ、こら待ちやがれ！」

「らしくねえこと言つてんじやねえよ。寒気がする」

「この野郎……」

（笑えるな、師匠。俺が、一番大事な時にいらなかった俺が、今や師匠なんて呼ばれてやがる）

「わかつた、もう言わねえよ」

（礼を言うのは俺の方だ。お前は知らんだろうが、クソ神を歯牙にもかけないお前の態度が俺にはどれだけ痛快だったことか。散々やられっぱなしだった使徒どもを蹴散ら

す姿が、どれだけ励みになったことか。

ありがとな、馬鹿弟子。お前が希望をくれたんだ)

「なんでだよ！ それだけの力があって、なんで見捨てるんだよ！ 俺に力があれば、みんなを救って……」

「黙れ、天之河」

「え？」

「みんな救うだと？ お前、何様のつもりだ」

「いや、だって、人を救おうとするのは当然で……」

「いいか、そういうのはまず人を救えるほど余裕があるやつがすることだ。何度も言っただけだ『他人のことも良いが、まずの自分のことだ』と」

「ですが、だからと言って見捨てるなんてことは間違ってるでしょう！」

「正しいか間違っているかじゃない。余計な世話だと言っている！」

「よ、けい？ な、なにが余計だっていうんですか」

「俺は、少なくとも俺はお前に、あるいは誰かに『救ってほしい』なんて思っちゃいない」「救われたくないっていうんですか？」

「違う。俺たちは、誰かに『救ってもらわなきゃならない』ほど惨めじゃないと言ってるんだ。」

こいつはあいつにも言ったがな、お前たちは自分たちが帰ることに全力を注げ。この世界のことは、この世界に生きる者たちでやればいい。どこかの誰かに救ってもらわなきゃならんほど俺たちは惨めじゃないし、救われなきゃ生きていけないのなら、いつそ滅べばいい」

「なっ!？」

「何を驚く。それともなにか、お前はこれからもずっと俺たちを救い続けてくれるのか？ そんなものは優しさとは言わん。そんなものは人を墮落させる悪魔と同じだ。」

救うつてのは、ただ助ければいいなんて言うほど軽くねえんだよ。

いいか、俺たちから

尊厳を奪うな。

未来も、自由意思も、何もかも奪われてきた。俺たちに残された宝を奪うのなら、お前は勇者でも何でもない、ただの略奪者だ」

「略、奪、者……」

「まあ、あいつはこの話をしたら即答で『そのつもりだ』とか言ってたがな。つたく、あいつ向こうに戻ってまっとうに生きられるのか？ 不安だ」

# へありふれ×F a t e / G Oへありふれた職業と人理の盾

「世界座標を観測、極東日本」

「時間軸座標……確定。あら、西暦二千年代初頭だわ。大当たりじゃない」

「ここから諸君、久しぶりの慣れ親しんだ時代だから浮かれるのもわかるが、それは早とちりつてやつだぜ。」

「ここでしくじれば、またどことも知れない土地、いつだかわからない時代、下手をす

ロストベルト

るとどこぞの剪定事象や異聞帯に流されてしまいかねないってこと、忘れてないかい」

「すみません、ダ・ヴィンチ所長代理」

「至急、確定作業に入ります」

僅かに緩んだ空気を若々しい声が戒める。

威厳とかそういう類のものは感じさせないはずなのに、その声には聴く者の芯に響く何かがあつた。

それを示すように決して強くはない声を受けて、即座にそれなりの広さがある室内の空気が引き締まった。

それは声の主への全幅の信頼の賜物であり、彼らが即座に己を戒め切り替えることの



できるプロフェッショナルの集団であることの証左だった。

「アンカー固定、存在証明……完了」

「お、今回はずいぶん深くいったな。計測したところ、向こう1・2年ほどは留まれそうですよ」

「へえ、そいつは有難い。大抵、もって数カ月、下手すると数日で流されてしまうっていうのに」

「所長代理」

「いや、皆まで言わずともわかっているさ。せっかく長期的に腰を下ろせるんだ、羽を伸ばさなくちゃ損つてもんだ」

「さっすが天才!」

「わかってますね!」

「なあに、私は万能の天才だからね。人の心理を読み取るくらい訳ないさ。」

「とはいえ、それも全ての作業を終えてからだ。さあ、あとはこまごまとした雑事だけとはいえ、だからこそさっさと済ませてしまおう」

「「はい」」

（とはいえ、本当にこれだけ長期で留まれるのは久しぶりだ。

何かあるんじゃないかと疑ってしまうのは……考えすぎだといいいんだが。

まあ、何かあるなら対処するし、何もなければ羽を伸ばす。やることに変わりはないか)

『人理継続保障機関 フィニス・カルデア』それが彼らの所属を示す名称。

かつては国連所属の秘匿機関として活動していたが、それも随分と昔の話だ。

時を超え、世界を超え、虚数の海にすら潜ってきた彼らは、気付くと世界に居場所を失っていた。

どこにでも行ける代わりに、どこにもいられない。

それが今のカルデアだ。

度重なるレイシフトやゼロセイルの結果、存在が不安定になってしまったが故の結果。

人類史を救うために繰り返したそれらの代償は、安くはなかった。

とはいえ、彼らに後悔はない。

やらなければならなかった。そうしなければ彼らに残された道は“終わり”だけ。

終わるのが嫌なら進み続けるしかなく、進んだ代償が現状だとしても仕方がないと思う。

“終わる”ことに比べれば、まだマシだから。

生きるために戦い続けた彼らは居場所を失ったが、まだ生きている。

ならまあ、なんとかなるさ。

数々の苦難を乗り越えてきた彼らにとつては、これもその一つに過ぎないのだろう。

しかし、それはそれとして折角の長期的な安定滞在だ。

次はいつこれほどの長期にわたつて留まっていられるかわからない。

ならば、今だからこそでできることをするべきだろう。例えばそう……

「みなさん、お疲れさまでした。作業はどうですか？」

「ああ、キリエライト君。ちょうど今、最後のシークエンスが終わつたところだ」

「折角だし、藤丸君と一緒に外を散策してきたらどう？ ついでに、周辺情報も集めてく

れるとありがたいんだけど」

「はい。では、先輩を探してきます」

「マシユ、ちよつといいかい？」

「？ どうかしましたか、ダ・ヴィンチちゃん」

「うん、ちよつと聞きたいんだが……君、学校に行つてみる気はあるかい？」

「……………はい？」

※カルデアはレイシフトやゼロセイルのやり過ぎで武蔵ちゃんみたいな漂流者になつています。カルデアの技術がある分、ある程度一所で安定して過ごすこともできま

すが、それも基本的には数カ月程度という有様。

そんな中「ありふれ」の地球側に出てしまい、我らが魔王様たちと同じ高校に。学生生活を体験したことのないマシユへの、カルデア職員一同からの粋な計らいってやつです。

マシユとしては藤丸と一緒に登校とかけたのですが、(たぶん)高卒なので「勘弁して」と辞退。ただ、今風の若者らしくバイトとかしてこの時代を満喫しています。ちなみに、マシユは同級生たちから「大学生の恋人がいる」と思われています。

※以下、セリフのみのダイジェスト版

(天職は………守護者、ですか。ステータスも耐性と魔耐重視、次に体力が来て、筋力や魔力、そして敏捷。

概ね、サーヴァントとしての私のステータスとバランスは同じですか。ただ、この数値が高いかどうか……高いもので150、低いものは40。果たしてこれは、どの程度のものなのでしょう？ それに、技能欄にある『霊装顕現』。これは、人目のない所で検証が必要です)

「……やれるんだな?」

「やります」

「待つてください、それは危険なのでは?」

「キリエライトさん？」

「南雲さん、あなたは決して戦闘向きではありません。なのに……」

「危険なのはどこでも同じだよ。それに、他の場所じゃ役に立たないけど、ここでならできることがあるなら、ね？」

「……………白崎さんがあなたを好いている理由が、分かった気がします」

「え？ あ、いや……」

「あなたは、少し先輩に似ています。それに、私も友達が悲しむのは見たくありません」

「キリエライトさん？」

「次のベヒモスの突進、私が止めます。そのタイミングで行ってください」

「で、でも！」

「私の天職は守護者だそうです」

「それは、聞いてるけど……」

「適材適所、違いますか？ 私は私にできることをします。ですから南雲さん、あなたも」

「……………わかった」

「ご武運を。必ず、戻ってきてください」

「ははは、それフラグっぽくてちよっと怖いんだけど」

「フラグ、ですか？」

「くうっ！ 『いまは遙か理想の城が使えれば……』」

（サーヴァント化しても思うように動けない。やはり、先輩とのラインが切れたせい？

ならせめて……）

宝具、偽装登録……：仮想宝具・疑似展開／人理の礎！！」

「キリエライトさん？」

「八重垣さん、白崎さんは……」

「眠っているわ。お医者様は精神的ショックから心を守るための防衛措置じゃないかって」

「そう、ですか。あの……」

「キリエライトさんのせいじゃない。あなたは必死にベヒモスの突撃を止めてこれていたのでしょう？」

感謝こそすれ、あなたを非難する人なんていないわ。香織も、きつと……」

（先輩に……会いたい。私、どうしたら……）

「やれやれ、ようやく通信が繋がったと思ったら、思っていた以上に大ごとになっているね」

「あの、ダ・ヴィンチちゃんはこの状況をどう思われますか？」

「ん？ ふうむ、エヒト神と言ったかな？ まずその神様が胡散臭いね、神様の思考が我々のそれとはかけ離れているのは今更だけど、色々と不審点が多い……が、情報が少なすぎる以上、推測の域を出ない。今はそんなことより、より現実的な話をすべきじゃないかな」

「とうとう？」

「マシユ、戻ってくる気はあるかい？」

「戻れるんですか!？」

「ああ、マシユだけ……だがね」

「なんでキリエライトだけ!？」

「わ、私たちは!？」

「すまないが、我々の有する技術による移動は、対象にも高い適正が求められる。

マシユに適性があるのはわかっているが、君たちの場合は未知数だ。

当然、検査しなければわからないし、そのためにはそれなりの設備がいる」

「そう、ですね。適性の有無を調べることは、現状不可能でしょう」

「あの、もし適性がない人がその移動をしたらどうなるんですか？」

「まあ、移動できないならまだマシ。最悪、どこかの隙間に落ちて行方不明、なんてこともあるが、それでもやるかい？」

「それで、マシユ。君はどうする?」

「私は……残ります。皆さんを、クラスメイトを置き去りにしていくことはできません」  
「うん、まあ君ならそういうだろうね。我々としても、君の意思は極力尊重したい。」

となれば、次善案で行くか、いや、ホントはこっちになるだろうと思つてただけ  
さ」

「次善案ですか?」

「じゃ、藤丸君後は任せませ」

「は? ま、まさか先輩を!」

「当然だろう。君たちはコンビだ、マシユが戻らないなら藤丸君がいくしかないだろう」

「すみません、先輩。私のために……」

「気にしないで、いつもは俺がマシユに心配かけさせてるんだからさ」

(シユーン……)

「あ、ああそうだ。ダ・ヴィンチちゃんから霊基グラフのコピーを預かってるんだ。これを使つて応援を呼べてさ」

「みなさんを……できるんですか?」

「魔力とか通信状況の都合で基本七クラスを一人ずつ、しかもランダムらしいけど……」

「それは……賭けですね」



「うん」

「静謐さんはまだマシとして、頼光さんや清姫さんが来たときは、私が先輩を守ります  
!!」

「あ、うん。静謐も静謐で不安だけど、積極的じゃないだけまあ確かに。」

「あとは黒ひげとかも不安だ。ケモミミとかいるらしいし、絶対暴走する……」

「アタランテさんたちなら返り討ちにしてくれますが、この世界の獣人と言う方々はあまり強くないそうですからね。それに不安と言えば、ヒトツマニアの御二人もです」

「イスカンダルもなあ……征服だあとか言いだしそうだし」

「神嫌いのギルガメツシユ王も危険かと……」

「……………」

「……………」

「まあ、個性の塊みたいな人ばかりだからなあ」

「はい。エミヤ先輩ではありませんが、頼りになる方々の反面暴走力も尋常ではありませんから」

「はあ………」

「アルターエゴ。殺生院キアラ。救いを求める声を聞いて参上いたしました……」

「チェンジで」

「これがハルツイナ樹海……」

「圧巻です」

「ん、開拓しがいのありそうなところだね」

「「え……」」

「みんななくなつちやえば、もう私たちの土地だよね？」

（先輩!?! バニヤンさんを連れてきたのは不味かつたのでは!?!）

（だよね！ 俺も今そう思った！ 不味い、このままだと樹海が消える!?!）

「我こそは冥界のエレシユキガル。死の国を統べ……つて、何なのかわこのゴーレム!?!」

「へえ、これが異世界の神様かあ」

「あれ、さつきまでのウザさはどうしたんですか？」

「だな。なんだよ、いきなり神妙になつちまつて」

「ん……きつと、更なるウザさの前触れ」

「……………」

同じ神なのに、何なんだろうね、この差。ミレデイさんは世の不条理を見たよ」

（（そんなに嫌な奴なのか……））

「ふ、踏んでもいいんじゃないよ？」

「……………」

「……先輩？」

「あ、いや、カーミラとかふーやーちゃんとかと相性良さそうかなあつて」

「どうでしょう？　カーミラさんたちは拷問がお好きなのであつて、そういう性癖かというと……」

「拷問とな？　そこんとこちよいと詳しく教えてたも」

（あ、これももしかしくなくてもヤバいやつだ……）

## 〈I S×ARMS〉インフィニット・ストラトス　　〈不思議の国の天使〉

閑静な住宅街を進む、一台の高級車。

高級住宅地でもない場所であることを考えると、やや浮いてこそいるもののそれ自体は特に問題はない。

車が止まったのが、古式ゆかしい日本家屋なのも別にいい。

その家に「新宮流古武術道場」という看板がかかっているのも良いだろう。

では、何が問題なのかと言うと……

「いい加減にしゃがれ、このクソガキがあ!!」

「うっせえ、クソ親父い!!」

荒々しい怒声と重厚な打撃音が響いてくることだ。

道場なので多少の騒音は仕方がないのかもしれないが……これはない。

明らかに練習とか鍛錬とかではないし、時代遅れな道場破りの線も薄い。

というか、どう聞いたとしても親子喧嘩以外の何物でもないだろう。

ただし、怒声や打撃音の質的に「ただの」とは間違っても言えない。

それを示すように、道行く人々は誰もが顔を伏せて足早に通り過ぎていく。

無理もない、誰だって厄介ごとには巻き込まれたくはない。

こんな、あからさまに訳ありそうなのが起こっている家の前など、さつさと通り過ぎるに限る。

逃げるように通り過ぎる人々を、いったい誰が非難できようか……。

にもかかわらず、わざわざそんなわけありそうな家の前に留まる車の主とは何者なのか。

「まったく、相も変わらずの馬鹿どもが……」

運転席から降りてきたのは、不機嫌さを隠しもしない四十代の中年男性……と言うには些か精悍過ぎるか。

欧州風の堀の深い相貌、見事な赤毛の下の眉間には深く皺が刻まれ、どちらかと言えば老けて見えそうな外見をしている。それでも一見すると三十路ほどに見えるのは、老いや衰えと言ったものをまるで感じさせない力強い顔立ちや、一分の隙もない立ち姿故だろう。細身ながら弱々しさはなく、むしろしなやかな筋肉を備えていることがラフな服装の上からでもわかる。

屋敷から響く不穏な騒音とはまた違った意味で、この場には些か不釣り合いな人物だった。

だが、彼と言う人間を知る者ならなにも不思議は思うまい。

何しろここは、彼にとって「生家」ではないにしても「実家」と言うべき場所なのだから。

独り立ちした成人男性がたまの帰省をする、なにも不思議なことではない。

「こんの石頭が！ 頑固親父なんて今どき流行らねえんだよ！」

「はっ！ そういうことは俺に一発でも入れてからにしゃがれ!!」

「んだと……やつたろうじゃねえか！ 往生しやがれ！」

「顔洗って出直してこい、百年早え!!」

「おお……ぐがっ!?!」

「ふん……」

近所迷惑を顧みることなく続く騒音に不機嫌そうに鼻を鳴らしながら、久しぶりの木製の門をくぐる。

喧嘩の理由も双方の主張も、彼は承知している。だからこそ、この衝突が仕方がないものであることを知っていた。

馬鹿だとは思っても、否定はしない。どちらの主張にも、それなりの理があるのだから。

勝手知ったる実家。彼は迷いのない足取りで、現在進行形で怒声と打撃音の飛び交う

道場の前を素通りし、母屋へと向かう。

庭の一角では、一人の黒髪の女性が丁度洗濯物を干しているところだった。

「あら、アルじゃない。どうしたのよ、大学は？」

「今日、僕のコマはない。受け持ちの患者も安定している。子どもたちはあいつと高槻のところ遊びに行つた。他に聞きたいことは？」

「全く、相も変わらず可愛げのないやつね、あんたは……」

女性は洗濯物を干す手を止め、「やれやれ」とばかりに肩を竦めて見せる。

もう彼は三十年以上の付き合いになるが、可愛げのなさは全く変わらない。

まあ、子どもの頃からこうなのだから、年を食つたからと言って今更可愛げが身につくはずもない。

可愛げがない事は自覚しているとはいえ、いい歳をしてそんなことを言われた男性……アル・ボーエンにも聞いたことはある。

「四十路を超えた男にそんなものを求めるな、恵。そういうお前は仕事は良いのか？」

「今日は午後からよ。うちの社員は優秀だから」

「ブルーメンカンパニー専務取締役か、偉くなつたもんだ」

「そういうアンタは藍空医大の医学部部長でしょ？ あの手先がねえ……月日が経つのは早いわ」

気心の知れた者同士だからこそかわせる、皮肉の応酬にも似た遠慮のない物言い。

彼らの年齢や社会的地位を考えれば、在り得ないやり取りだろう。

だが、二人とも問題があるとは全く思っていない。

いい歳なのは自覚しているが、社会的地位なお互いの間でどれほどの意味があるう。

若かりし頃は生命すら預け合った、ある意味肉親以上の間柄だ。何を遠慮することがあろう。

まあ、この二人の場合、そもそも肉親と言うもの自体がいなかったりするのだが……。

「隼人は……まだ納得していないようだな」

「そうね。気持ちはわかるけど」

「あの馬鹿のことだ、早々納得するはずがない」

「どっちのこと？」

「両方だ。二人揃って頭が悪い」

「クククククク……ま、否定はしないわ」

我が子と夫を「馬鹿」と切って捨てられたにもかかわらず、女性……新宮恵は愉快そうに笑うばかり。

本心からそう思っているのか、それともアルの言う「馬鹿」が単なる罵倒ではないと



思っているのか……あるいは、その両方かもしれない。

「酷い母親だ」

「……………利口だったら、きつと私たちはここにいないわ。アンタは確かに天才だけど、なんとか紙一重って言うでしょ」

「……………僕をお前らと一緒にするな」

「一緒よ。自分のことを運命とかに決められるのが我慢ならない。反発してぶち壊して、自分でレールを引かなきゃ気が済まないひねくれ者。そして、あの子たちもしっかりその血……いいえ、意思を受け継いでくれた。

それ自体は、喜ぶべき事なんでしょうね」

彼らにとつて、血の繋がりと言うものにはあまり意味がない。

その出生を知れば、当然だと思うだろう。

彼らが「兄弟」と呼ぶ者たちは、血ではなく理不尽な運命プログラムで縛られ、それに抗う意思の繋がりのみだから。

その意思が次代にも受け継がれていることは、嬉しいと素直に思う。

きつとあの子たちもまた、人間として力強く生きていけるだろう。

そうあれるよう、「家族」全員でありつたけの愛情を注ぎ、何者にも負けず、流されず、自分自身の足で立って歩けるようにと育ててきたのだから。

その思いは正しく実を結んだ、あの子たちはきつと何があろうと人間らしさを失わずに生きていける。

その確信がある……のだが、今はそれが少々厄介なことになっている。

「あんたは賛成派なんだっけ？」

「別に。特に賛成したつもりはない。だが、確かに篠ノ之東に近づくには I S 学園に入るのが有効だ。

特に今年は……」

「篠ノ之東、あの天災の妹がいるのよね。本人にとつては、良い迷惑でしょうけど……」  
本人には何の落ち度もないというのに、異端児ともいべき姉やそれにまつわる周囲に翻弄される 15 歳の少女。

かつての自分たちを彷彿とさせるその境遇には、同情せずにはいられないのだろう。

「だが、その状況が嫌なら自分でなんとかするしかない。誰かがなんとかしてくれる、なんて期待しても意味がないんだからな」

「まあねえ……そりやどこかの王子様が助けてくれたりするかもしれないけど、”かも”を待つててもねえ」

「あるかどうかもわからない救いを待つなんてナンセンスだ。かつてお前たちがそうしたように、自分で未来を掴むしかない、違うか」

「違わないけど……簡単に言うわね。私たちだつて結構大変だつたわよ。15歳の女の子にそれを求めるのは酷じゃない?」

「なら、いくつならいいんだ? 二十歳か? 三十路か? いくつだつて関係あるものか。」

それとも一人だからか? 動き出さなければ仲間も味方もできるものか?」

「厳しいわねえ」

「そういうお前はすいぶん甘くなつたな」

「母親……だからかしら?」

空になつた洗濯籠を抱えて軒先に恵が腰を下ろせば、アルもその横に座る。

天才の悪い癖だ。自分にできたことだから、他人にも同じことを求めようとする。

誰も彼もが、彼のように……あるいは自分たちのように強くないことを恵は知っている。

弱さは罪だ、と言う者がいる。だが、恵にはそんな苛烈なことは言えない。

母となつたからか、年を取つたからか、あるいはもつと別の理由か。

「母親かどうかは関係ないだろ。それはお前だからだ」

「あら、もしかして口説いてる?」

「バカを言え。お前のような女、願い下げだ」

「……………言うじゃない」

「……………だが」

「ん？」

「同情くらいはするさ。見ず知らずの誰かの都合で振り回されるのは、たまったもんじゃない」

「……………そうね。アンタも、あの頃のアンタじゃないか」

言動こそあまり変わっていないようだが、彼は彼で丸くなった。

年月か、経験か、親となったからか。あるいはその全てか。

改め、時の流れと言うものを噛み締めずにはいられない。だからこそ……

「あの子たちに、余計なものを背負わせたくはなかったのだけど……不甲斐ないわね」

「業腹だが、あの女は確かに『天災』だ。ブルーメンのネットワーク、日本やアメリカをはじめとした各国の諜報機関、何をどうやっても足取りが追えない」

「高槻のお父さんが現役だったなら、追えたかしら？」

「さてな。とはいえ、さすがに年だ。だいたい、親の世代に継るのはみつともない」

「返す言葉もないわね」

篠ノ之東の名を世界に轟かせた最大の要因「インフィニット・ストラトス」。

その最大のブラックボックスであるコアは、各国の研究機関が全力を注いでも未だ謎

に包まれている……とされている。

しかしその実、恵たちは即座に気付いた。

アレが「自分たちと同じもの」であることを。

当然だ。最初の「I・S」である白騎士が起動したあの日、もう二度と感じる筈のなかった「共振」を感じたとなれば、疑う余地がない。

あれ以来、彼女たちはありとあらゆる手段で篠ノ之束を追い続けているが、捕らえることはおろか足取りを掴むことさえできずにいる。

かつては「人類最高の頭脳」を自称し、事実それに相応しいだけの能力を持っていたアルですら認めざるを得ない。篠ノ之束は、アルという「最高の天才」を上回る「天災」なのだ。

「……ほんとに、アザゼルがまだ残っていたことも驚きだけど、よくもまあ一人でコアの精製なんてやってのけたもんよね」

「どうやら篠ノ之神社の御神体と祭られていたらしい。隕石として降ってきたと考えれば、まあわからんでもない。アレが生物であることに気付き、碌に設備すらなかったにもかかわらず共振という言葉を見つけ、さらにはコアの抽出。I・Sを見る限りお前たちのそれとは少々異なるようだが、驚異的であることに変わりはない」

エグリゴリが莫大な資金と時間、そして人材を投じてなし得たことを当時十代の少女

が独力でやってのけたのだ。

正直、何かの冗談としか思えない。

「折角、全部終わったと思つたのに……寝た子を起こすんじゃないっての」

「……」

「まあ、彼女の考えも頭から否定する気はないけど、こっちはそんな気はないんだけどねえ」

「……」

「どうかした？」

「いや、静かになつたな」

「ああ、そういえば。えつと……一時間か、今日はずいぶん長くもつたわね」

「毎日あんな頭の悪いことをやっているのか、あいつらは」

「そう言わないの。あの子なりに根性見せたんだから。普段なら十分かそこから終わるのよ?」

「まあ、実力差を考えれば当然だな。………確かに、一時間は良くもつたか」

「あん? なんだ、アルじやねえか。何してんだよ」

「何をしているかだと? そんなこともわからないほど脳が退化したの……がっ!!」

ナチュラルに偉そうなコメントを返していると、前触れもなくアルの頭頂部に衝撃が

走る。

「お前はいくつになってもホント変わんねえな」

「お、お前のゲンコツもな……」

(いい歳して何やってんだか)

呆れた様子で何年経つても変わらないやり取りをする二人を一瞥し、すぐに夫である新宮隼人に背負われたポロ雑巾……もとい、息子である新宮勇吾を見やる。

見たところ、清々しいまでにポロポロだが早急な手当てが必要な外傷はない。

怒鳴り合っていた割に、隼人が上手くケガをしないようにやってくれたらしい。

まあ、両者の実力差を思えば当然だろう。

勇吾はこの年頃とは思えないほどの技量の持ち主だが、相手が悪すぎる。

隼人は数多くの実戦、いくつもの地獄を潜り抜ける中で若くして達人的な技量を身に付けていた。

それをさらに長い時間をかけて磨き上げたのだ、あの頃の隼人にすら届いていない勇吾では勝ち目がないのは当たり前だろう。

「で、どうするの?」

「……………一本取れたらって約束だった」

「そうね」

「結局、今日まで一本も取れなかった」

「むしろ、ハンデ無しでアンタから一本取れってのが無理難題でしょ」

実際、今の隼人から一本取れる人間は世界中探しても数えるほどしかいない。

なにしろ、世間的には「世界最強」と言われている「初代ブリュンヒルデ」ですら、数年前偶々起こった小競り合いでは軽くあしらわれてしまったのだから。

どれほどの才覚を秘めているようと、基本的にはルールのある試合しか経験がなく、実戦と呼べるものは精々一度。窮地や地獄など経験したことのない小娘では相手にならなくて当然だ。

年季も、潜ってきた修羅場も、覚悟も、背負うものも何もかもが違う。

負けないし、負けられない。その重みが違うのだ。

「……………」

「わかってるんでしょ。この子はこの子なりに、私たちが勝ち取ったものを引き継いで、守ろうとしている」

「……………」

「まだまだ子どもだと思ってたけど、いっちょ前に男の子になってたのね」

「まだガキなことには変わりねえだろ。暑苦しいばかりで、他が何も追いついちゃいねえ」



「あら、アンタがそれを言う？ 昔はすぐに頭に血が上ってたくせに」

「む……」

「むしろ、こいつの方がまだマシだろう。直情傾向なのは同じだが、高槻の影響で冷静な部分もある」

一応褒めてはいるものの、そこはアルだ「単細胞なことに変わりはないがな」と付け加えることを忘れない。

「……………お前の入れ知恵か？」

「バカを言え。僕ならもつとうまくやる」

「でしようね。アンタと殴り合いになつてる時点で、根本はこの子でしよ。アリスが一枚かんでる可能性もあるけど、あの子も大概頭が回るしね。せいぜい軽く監修した程度でしよ」

「だな」

乱暴に頭をかきながら、隼人は背負った息子を居間へと運んでいく。

その顔には、先ほどまでとは違うあきらめにも似た表情が浮かんでいた。

「……………ちつ、しようがねえ。どうしようもねえ未熟者だが……………根性だけは一端か。

……………つたく、誰に似たんだかなあ」

(いや、どう考えてもアンタお前でしよ)

とはいえ、これはもう事実上の白旗と見て良いだろう。

「それで、あんたが来たつてことは勇吾用の I・S ができたつてこと？」

「ああ。コアはヴァイオレットに融通してもらった。元国務長官は伊達ではないな。基

本装備は三月兔を参考<sup>マーチ・ヘア</sup>にしている。これだけやれば……」

「まあ、対外的な隠れ蓑には十分ね。篠ノ之束と、あとは多分織斑千冬にも意味がないでしょうけど」

篠ノ之束は、間違いなく勇吾の存在を知れば即座に背後関係にも気づくはず。

彼女と繋がり<sup>の</sup>の強かった織斑千冬も、事情を知っている可能性が高い。

だが、背後関係がばれるのは問題ない。むしろ、それが狙いだ。

勇吾は、自分自身をエサに篠ノ之束を釣るために I S 学園に入るのだから。

恵たちでは厄介過ぎて慎重にもなるだろうが、勇吾なら……そう考える可能性は高い。

少なくとも、闇雲に追いかけるよりは。そんな狙いも看破されるだろうが、あちらも勇吾の存在は無視できまい。

I・S が作られた理由はいくつかあるが、その理由の一つには「A R M S」への対抗手段としての面があるのはまず間違いない。

事実上、誰からの制御も受けていない、使い方によつては世界すら滅ぼせる核をも凌

駕する力。

危機感を抱くのは当然だし、警戒するなどは恵たちも言わない。

実際、彼らの戦いが終わってからも当分の間は監視やら何やらがついていた。

思うところがなかったわけではないが、相手側の考えもわかるだけに丁重に流した数年間。

わざわざ事を荒立てる気はなかったし、そもそも本人たちからすれば、何が悲しくてようやく勝ち取った平穩を棒に振らなければならぬのか、と言うところだったのだ。

とはいえ、ヴァイオレットやブルーメンをはじめとした協力者たちのおかげで、そんな煩わしい日々も終わりを告げた。

これであろうやく……と思っていたのだが、そのしばらく後に篠ノ之束絡みのアレコレである。

彼女がどうして今更「ARMS」を危険視するか……は、わからないでもない。

組織規模なら逆に取引のしようもあるが、個人の感情はその人物次第。

どんな取引をしようと、どれだけ無害をアピールしようと、する気のない相手に譲歩はない。

要は、篠ノ之束は未だに「ARMS」を危険視しているのだろう、交渉の余地がないほどに。

なぜそこまで……と言う疑問はあるが、篠ノ之束個人をほとんど知らない恵たちでは察しようがない。

一応のプロファイリングの結果として、「自分以外に自分の命を左右される可能性があるあることが受け入れられないからではないか」とは言われているし、割と信憑性はあるが……。

「この子たちを巻き込むのは不本意だったんだけど、仕方がないか。」

私たちが同じ立場でも、多分同じことを言ったでしょうしね」

「……………だな」

「なら、篠ノ之束がちよっかいかけてくる前に、こっちでなんとかするよう頑張るしかない、ちがう?」

「違わねえな。幸い、こいつが I S 学園に入れば俺らも動きやすくなる」

「ええ。とりあえずは、高槻達と合流かしらね」

「へ、懐かしいな。全然うれしくねえが」

「ほんと、嫌な同窓会もあったものよ」

今までは万が一にも勇吾やアリスと言った子どもたちになんかあつてはならないと思ひ、大きくは動けなかった。

だが、これからは違う。

アリスはすでに成人し、勇吾もI S学園の寮に入る。新宮家と高槻家には他にも子どもがいけないわけではないが、その子たちは巴家の方で見てもらう事になっているし、それ以外の体制もようやく整った。

これでやっと、気兼ねなく動ける。

まるで昔に戻ったかのような活力が、二人の体を満たす。

だが、そこでふつと恵は意識のない我が子の前髪を優しく梳きながら語り掛ける。

「勇吾、アンタの名前は私たちの親友からもらったものよ。誰よりも優しく、そして強い女性ひとだった。

アンタは自分の名前があの子から貰ったって知ったら、どんな顔するのかしらね。なんで女からって渋い顔をするのか、それとも実はもう気付いているのかしら？」

（まあ、別に隠してたわけじゃねえしなあ。普通に墓参りにも連れて行ってたし）

「だけど、あの子から貰った理由は一つ。アンタも、あの子のように強さと優しさを持った人間になって欲しかったから。そして、あの子が見られなかったものを見てほしかった。

だから、無茶するんじゃないわよ。必ず、またこの日常に戻ってきなさい」

「起きてるときに言ってやればいいじゃないか」

「……………素面じゃ言えないわよ、こんな恥ずかしいセリフ」

だが、それが母から子へのただ一つの願いであることに変わりはない。

無論、意識のない勇吾にはそれを知る術はない。

当然ながら、恵が胸の内では紡いだ祈りもまた。

(お願い、ユーゴー。この子のことを、どうか守ってあげて)

しかし、それを聞き届けた者がいたことを恵はもちろん、その場にいた誰もが知らない。

(ええ、分かっていますよ、恵さん。この子のことは、ずっと見てきました。

私にとっても、この子は息子のような子。だから絶対に、この子があるべき日常に返します)

なによりも強い絆で繋がった仲間であり、同志であり、親友からの願い。

ましてやそれが、我が子に等しい「宿主」を想ったものとなればなおのこと。

何をおいても守る、それがかつて「天使」<sup>エンジェル</sup>と称された彼女の誓い。

そして、今の彼女にはまた別の名がある。

(……私は<sup>我が名は</sup>ユーゴー・ギルバート<sup>ウィンド</sup>。新宮勇吾とその世界を守る泡沫の夢)

## うたわれるもの　　く比翼のレンリく

私にとって最も古い記憶は、燃え尽きた城下町でしょうか。

この時点でわかることですが、まあ碌な生い立ちではありません。

ふふつ、改めてあなたがどれだけ冷遇されているか、この時点で分かるというものでしょう？

ああいや、別にハク殿のようにそれ以前の記憶がないとかではないのです。ただ、思いつく価値も意味もないというだけで。

というか、これは後から知ったことですが、城下町が住処のあった裏町も含めて燃えたのが当時戦をしていた隣国ではなく、自国の皇が火を放ったからと言うあたり、もう色々終わっているでしょう？

はい？ それはそれとして私の生い立ちが知りたい？

………はあ。わかりました。ええ、分かりましたとも。長い付き合いです。貴方の頑固さは私も承知しています。まったく、面白みの欠片もないというのに物好き………は？ 妻のことを知ろうとするのは夫として当然？

分かっているのですか？ 私たちのそれはあくまでも政略、妻とは名ばかりの監視役

なのですよ？

そんな……全てを受け止める覚悟はどうに決めている、ですか。大した殺し文句です。ま、相手が私でなければですが。

そういうことは、私のような下賤な性悪女ではなく、もつと高貴な世間知らずの御姫様にでも言つて差し上げなさい。

貴方は今でこそこの有様ですが、容姿も能力も一級品です。事実、帝都では大層おモテになつていたでしょう？

私もそこまで狭量ではありません。立場上浮気を見過ごすことはできませんが、一夜の火遊びくらいは見逃しましょう。少し甘く囁いて差し上げれば、夜伽の相手には事欠かな……全く、本当に頑固です事。

惚れた女以外に手を出す気はない？ 貴方がそんな齒の浮くようなことを言えるとは知りませんでした。まあ、私を絆そうとする策としては少々臭すぎますし、本気だとしたら悪趣味もここに極まりですね。

いずれにしろ、私も見る目がありません。

それでいいから話の続きを？ ………………わかりました。なにか軽く流されたようで不愉快ですが、まあいいでしょう。

で、確か私の生い立ちでしたか。先ほども言った通り、碌なものではありません。が、



かと言ってそれほど珍しくもありません。それこそ、帝都でも探せばいくらでもある様な話ですよ。

物心ついた時には父はいませんでした。どの部族の出かも知りません。なにぶん、私を生んだ女は私ですら呆れ果てる売女ばいたでしたから。いったいどの馬の骨と交わつてできた子か、本人にもわからないのでは？

ええ、そうです。見ての通り……と言つても、私は片翼ですが。それでも一応はオンカミヤリユーですね。つて、なぜそこで項垂れるのです。

は？ 美しく誰もが憧れた其方の翼は私を庇つたせいで失われた？ 何をバカバカしい事を。貴方を庇つたのは打算以外の何物でもありません。身を挺して後の近衛大将を庇つた勇士という評判のおかげで、随分動きやすくなりました。

第一、私たちが翼で飛んでいるわけではないことは貴方ももう知つているでしょう。わざわざ教えることでもないので帝都では飛べなくなつたことにしています。特に問題はあります。まあ、慣れるのに多少練習が必要だつたことは事実ですけど。

そもそもウルトリイ様を見たでしょう。美しい翼と言うのはあの方のそれを言うのです。ああ、カミユ様の翼も星々の輝く夜空のようで大変お美しいですね。このあたりは好みの問題ですので、私には甲乙つけられません。

……ああもう、世辞は結構！ 別に貴方と美しさについて議論するつもりはありません

ん。

大体、貴方たちが私の翼を美しいと思ったのは、他を知らなかったからに過ぎません。ヤマトにはオンカミヤリユーがいませんでしたからね。私が基準になってしまふのは仕方がないのでしよう。

とにかく、私はオンカミヤリユーです。つまり、親もそうです。本来なら、オンカミヤムカイで大神ウイツアルネミテアに仕えるべき者たち。

まあ、何事にも例外はいます。中には厳しい戒律を嫌い、出奔する破戒僧すらいるのです。

一般のオンカミヤリユーの中には、そういった仕事に身をやつす者がいても不思議ではないでしょう？

まあ、そちらの詳しい出自は知りませんし、特に興味もありませんが。

ともかく、そんな生い立ちだったので自分の食い扶持は自分でなんとかするしかありませんでした。

物乞いでもしていたのか、ですか？ クスクス……下級とはいえ貴族は貴族ですね。物乞いが成立するには、周りがそれなりに豊かでなければなりません。私のいた國、シケリペチムは当時この土地では三大強國と称され、それなり以上には豊かでしたが、頻繁に戦をしていたこともあり貧富の差が激しかったのですよ。

一部の富裕層を除けばみな自分が生きるので必死。当然、子どもとはいえ物乞いに分け与える物はありません。

ならばどうするか……お判りでしょうか？ ええ、その通り。奪うしかありません。

まあ、奪うと言っても基本は盗みを中心でしたが。ああ、別に倫理や道徳を気にしてではありませんよ。というか、そんなもの当時の私にはありません。生きるのに精一杯の状況では、ヒトも獣も大差ないということは、あなたもご存知でしょうか？

ただ単に、子ども故の非力が理由です。とりわけ、私たちオンカミヤリユーはシャクコボル族に次いで非力ですからね。まあ、その分術法……大陸で言うところの呪法に長けるわけですが……そのためには学が必要です。そして、当然私にはその学がありませんでした。如何に長けていようと知らなければ使えないのが物の道理。

非力な私が生きるためには、余計なことに力は使わず隙について盗むしかなかっただけです。

とはいえ、力に訴えたことが一度もない……とは言いませんが。ふふつ、その辺りはご想像にお任せしましょう。

貴方が妻として迎える女が、無辜の民を害したかもしれぬ。清廉潔白な貴方にとつてはさぞ耐え難い事……それも含めて受け止めるくらいの甲斐性はあるつもりだ？

そもそも、生きるために全力を尽くすのは当然？

ふ、ふんっ！ 口では何とでも言えますけど……！！

と、とにかく！ それが私の生い立ちです。他にこれと言って特筆するようなことはありません。

名、ですか？ 確かに私の今の名は大恩ある御方から頂戴したのですが……さあ？ 当時は「こら」とか、「おい」とか、「ガキ」呼ばわりが精々でしたので、あつた……のかもしれないんですが、特に思い当たる響きはありませんね。

なんですかその顔は？ どうして今までで一番つらそうな顔をここでするのです。まったく、昔からそうでしたが、貴方の考えていることが私にはとんと理解できません。名がないのは自分がないのと同じ？ 幼子……それも愛した女がそうだったことを悲しめぬ漢がいるか？ はあ、漢と言うのはよくわからないものです。ないものはない、ただそれだけでしよう。

ですが、後半はともかく前半は同意しましょう。名がないのは自分がないのと同じ、なるほど真理です。

だからこそ私にとって、全てが燃え尽きる以前の記憶は無価値なのでしようね。

というか、一々茶々を入れるのはやめていただけませんか？ 一向に話が進みません。ヤマトへ向かうところに行き着く前に、夜が明けてしまいます。

結構。では、続きを……と言っても、このあたりは私もあまり覚えてはいませんが。

なにしろ、ある時気が付けば周りは火の海、緊急時用に掘っておいた穴倉へ避難。あとは火が収まったのを見計らって這い出し、火事場泥棒をしていたところで身なりの良い女性を通つたとなればすることは一つ、当然身ぐるみを剥ぐでしょう？

いえ、それはあくまでも私の理屈ですね。申し訳ありません、ですからそこで真剣に悩まないでください。なんとというか……自覚はあるものの、自分の卑しさを改めて突きつけられるので。

？ それはそれとして、覚えていないという割によく覚えている？ ああ、失礼。正確には、そのあとのことをあまり覚えていないのです。何しろ、瀕死の重傷を負つて意識もありませんでしたから。

一応言っておきますが、エルルウ様……ああ、その身なりの良い女性ですが、その方がやったわけではありませんよ。

拙いなりに隠行して近づき襲い掛かった瞬間、とてつもない力で身体が吹き飛ばされたのです。

貴方も見たでしょう、ムツクルのことを。ええ、あの白虎に殴り飛ばされました。私は気付いていませんでしたが、エルルウ様から少し離れたところにいたアルルウ様とムツクルもいたのです。

積極的に殺そうと思っていなかったのが幸いでした。もし殺そうとしていけば、殴る

のではなく引き裂かれて夕餉にでもなっていたでしょう。

冗談に聞こえない？ ええ、本気ですから。まあ、それでも右半身の骨がいくつも折れていましたし、危うく死ぬところだったのは事実ですが。

なので、それ以降のことはエルルウ様に教えていただいたことになります。

瀕死の私はエルルウ様が庇ってくださいったおかげでムツクルのお腹に収まらずに済み、それどころか治療までしていただけました。あまつさえ、意識が戻るまでの間付きつきりで看病していただき、目が覚めれば皇城の一室です。

ふふつ、当時の私の混乱は貴方には想像もできないでしょうね。

私はエルルウ様を押そうとしましたし、エルルウ様もそのことはご存じだったはず。なのに、あの方は私が目を覚ますと我がことのように喜んでくださいました。薬師だから……だけではないでしょう。如何に薬師でも、襲った相手をそこまで気に掛けることなどできません。

少なくとも、私でしたら無理です。むしろ、良くて放置、高確率でトドメを刺しますね。

？ なんです、顔を青くして。そこまで容赦がない者も逆に珍しい？ まあ、否定はしません。

ですが、私のことはどうでもいいのです。重要なのは、エルルウ様が筆舌に尽くしが



ルウ様の不始末、妹の不始末は姉の責任とかで、押し切られました。祖皇様も随分と気にかけてくださり、とりあえず傷が治るまでの間は城に住まわせていただけることになったのです。

皆様も大層よくしてくださいました。例外は、聖上くらいでしょうか。あの方だけはしばらくの間渋い顔をしておられましたが、祖皇様やエルルウ様が相手では文句も言えなかつたのでしょうか。

それに……………ユズハ様も取り成してくださいましたから。

ミコト…………クオン様の母君ですよ。

生まれつき身体が弱く、光も持たず、度々発作を起こされ、余命幾許もない方でした。そんな身の上なのに…………あの方は、一度としてご自身を悲観なさいませんでした。

まったく、私は……………本当に醜い。あの方はどれほど苦しくてもその全てを受け入れて耐えておられたというのに、私は周りに当たり散らしてばかり。

ああ、今思い出しても情けなくなりませぬ。

いくつもの心無い言葉をぶつけ、散々にどうにもならないことを不幸と嘲りました。あの方がご自身を嘆き、世の不条理を呪うことを期待して。なのに、あの方はその全てを黙って受け止め、あろうことか私を抱き寄せてくださった。何も言わず、ただ頭を撫でて…………申し訳ありませんが、これ以上は秘密です。形ばかりの…………いえ、真の夫婦で



あろうと秘密の一つや二つあつて当然でしょう？

はい、貴方のそういうところには感謝します。

私はエルルウ様に命を救われ、ユズハ様に心を救われました。私などよりはるかにお辛い筈のユズハ様は、それでも未来を見据え、周りへの感謝と愛を忘れませんでした。あの方にも少しでも近づきたい、救つてくださった方々の御恩に少しでも報いたい。

それが私の全て……貴方と同じですよ。皆さまが作り上げ、愛した國とその民に全てを捧げる。

そう決めた後は、ベナウイ様の元へ駆け込みました。

お忙しいことは承知していましたが、あの方が最も容赦なく鍛えてくれると思つたので。

案の定、それはもう鬼のようにしごいてくださいました。読み書きや算術から始まり、武芸や礼儀作法……山のような課題を押し付けられたものです。ふふつ、祖皇や聖上が逃げ出したくなる気持ちもわかります。

まあ、流石に付きつきりで……とはいきませんし、せつかくなので術法も学びたかつたこともあり、ムント様にもお世話になりました。あとは……とある方に稽古をつけて戴こうとしたときは、皆さまま血相変えて止めにかかられましたね。「ベナウイのしごきで遂に壊れたか!」「死に急ぐんじゃねえ!」と。

え？ いったいだれに…ですか？ ふふっ、あなたもご存知の方…とだけ言っておきましよう。

まあ、そんな具合に死に物狂いで走り続けました。

残念ながら國の窮地にも、祖皇様がお隠れになられる場でも、力不足で何もできませんでしたが…。

私がそれなりに働けるようになるころには、もうほとんど今のトウスクルの形は出来上がっていました。

土地のほとんどをトウスクルが治め、それ以外を治める國々とは盟を結ぶ。

戦乱の絶えなかつたこの土地は、急速に安定しました。

クオン様がお生まれになったのは、祖皇様がお隠れになってしばらくしてからです。

丁度、一山超えて急速に安定し始める直前でした。

その時から考えて、今のトウスクルの形がほぼ出来上がった頃ですね。私が國を出ることを決めたのは。

なぜか？ もう近くに脅威がないのなら、次は遠い脅威に備えるべきでは？

要はそういう事です。世界はこの土地だけではなく、海の向こうにはまだまだ世界が広がっている。

その程度のことには知っていましたし、僅かながらヤマトのことも伝わっていましたか

ら。

だから、海を超えて世界を見て回ることにしました。その先に、私の大切なものを脅かすものがないか。

あるとすれば、それにいったいどう対抗すればいいかを知るために。

皆様を説得するのは骨でしたが、一年かけて納得していただきました。

海を渡つてからは三年ほど各地を回りましたが、幸いトウスクルの脅威となる國はありませんでしたが、それ自体は僥倖でしたね。余計なところに時間をかけずに済みました。

ええ、お察しの通り元々最終的にはヤマトへ向かうつもりでした。もちろん、潜り込むことを前提に、です。

皆様には言っていないかもしれませんが……というか、言えば絶対お許しにはならなかったでしょうね。

必要性があるのはわかっていても、皆様お優しい方々ばかりですから。

あとはもう、貴方もご存知のことばかりでしょう。

私はヤマトに仕官し、数年して貴方やミカツチ殿と出会いました。当時、私は小隊長。貴方は他所の小隊に配属された一兵卒でしたね。本来、それなりに稀有な能力を示していたとはいえ、余所者の私の出世はそこが限界だったのですが……どんどん出世してい

く貴方の尻馬に乗ったのが功を奏しました。

周りからやつかまれる分、味方をすれば見返りも大きいと読んだ私の先見も中々のものでしょう？

まあ、まだ血の気が多く、敵陣に突っ込んだ貴方を庇う形で恩を売れたのは、正直出来過ぎでしたが。

まったく、貴方ときたらそれはもう恩を感じてくれているので、私としては内心高笑いが止まら……はい？ ああ、そういうえばあの頃からですね、貴方が冷静沈着な立ち回りを身に付けたのは。

ふふつ、そんなに赤くなって、それほど私に庇われたのが不本意でしたか？

え……惚れた女に良い所を見せようとして大失敗した人生最大の恥部？

正直、しばらくの間情けなさで死にたかった？

というか、今思い出しても死にたい？

え、いや、なにを……ちよ、ちよつ待ちなさい！ なに腹を斬ろうとしているのですか！？

武士ものぶの情けだ、止めてくれるな？ 止めるに決まってるでしょう！？ 事実上の初

夜になにをしようとしているのです！ というか、ネコネやトリコリ殿はどうするので

す！？ 貴方が死ねば二人がどれだけ悲しむか、私はいったい二人に何と言え……あ、

いや、そうではなくて……貴方が死んだらトウスクールはアンジュ殿下のことを見捨てま

すよ！　今すぐ放り出しますからね！　それで良いんですか！！　貴方の近衛大将としての忠義と誇りはそれを許すのですか！！　は？　あとのことはムネチカ殿に任せろ。  
レン…………いや、レンリ殿、其方も政略などではなく真に愛する者と結ばれよ。常世コトウアハムルから其方の幸せを願っている？　いぎ、さらば…………じゃな…………~~~~~  
~~~~~い!!!!　何考えてだこの馬鹿!!　わ、私は別にあなとの婚姻を不本意だとは…………つて別に実は嬉しいとか、諦めていた想いが…………とか、そういうわけではなくて、これはあくまでもトウスクルのため、クオン様のためであつて…………いいから、落ち着け!!

ゴシヤツ（調度品の壺でドタマを勝ち割った、響いてはいけない音）!!

.

. .

. . .

. . . .

. . . . .

. . . . .

. . . . .

. . . . .

「はあはあ……ま、まつたく！ 契りも交わしていないのにいきなり未亡人にするんじゃないってのシヤバ僧が。」

つとと、いけないいけない。こんなところ、ネコネにはとても見せられません。もう破綻してしまつたとはいえ、あの子はまだ私を『先生』と呼んでくれているのです。なら、せめてそれにふさわしくあらないと」

乱れた息と着物、ついでに言葉遣いを直す。

次いで、たつたいま気絶させたばかりの困つた漢を見下ろしてぼやく。

「……………まつたく、貴方はわかつているのですか？ 私の本性を知っているのは、あの頃を知る皆様を除けば貴方ぐらいなのですよ。その意味位、気付け馬鹿。というか、あの時ちゃんと思いは告げたでしょう。いやまあ、死に際……もとい殺そうとする場面で『サハリエ・ナトウリタ』はないと自分でも思いますが。それでも、昔その意味は教えたでしょうに。」

なのに、何がどうすれば『真に愛する者と結ばれよ』になるんです。はあく……………」

漢の傍らに腰を下ろし、つい思い切りどついてしまつた頭に触れる。

幸い、出血はないし目立つた瘤もない。つくづく頑丈な漢だ。

「……………エルルウ様、ユズハ様。私、惚れた漢間違えたかもしれません。」

なにが悲しくて、初夜にこんなことしなきゃならないでしょう……………それともこれは

罰？ 皆様が心配してくださっているのを承知の上で、十年以上國に戻らなかった報い？ でもでも、それはトウスクールを思えばこそですし……というか、途中で離れたら明らか不審ですし、これはしょうがないというか……ああでも、ライコウ殿は知つていて泳がせていたようですし、この馬鹿も一応は気付いていて敢えて手元に置いていたんですよね。

うう……なんだか自信がなくなつてきました。それもこれも……全部お前のせいだ！ なにスヤスヤ眠つてる！ 初夜に女ほつたらかして寝るとかアホか!!

それともあれか、お前『ピーツ』なのか！ 母親の胎の中に『ピーツ』を忘れた『ピーツ』なのか！ いつまで寝ている！ さっさと起きろ、この『ピーツ』野郎！ ああ、それともその哀れな『ピーツ』は飾りか。ハツ、だから女を前に寝たふりか。情けない、この『ピーツ』が『ピーツ』な『ピーツ』大将様が……つてそんなことを言いたいんじゃない!?”

なんだか自分でもよくわからない精神状態のまま、もうずいぶん昔に置き去りにしたはずの罵詈雑言が湯水のように溢れ出る。本人が自嘲した通り、育ちの悪さが表れている。

何が悲しいって、惚れた漢にそんなことを口走ってしまったている自分が悲しくてたまらない。

これに比べれば、歓喜と緊張で胸が張り裂けそうだったところへ放り込まれた、バカの数々の失言に対する悲しみの方がまだマシだ。

「いやまあ、そもそもそんなことを言わせるようなことを言った私にも非があるというか、恥ずかしさを誤魔化すために卑下し過ぎたことは反省しますけど………はあ、今夜は自棄酒ですな」

実は部屋の中に隠し持っていた酒樽を引つ張り出し、蓋を開けて顔から突っ込む。

生憎、器に入れてチビチビやるような気分ではないし、部族の性質上どこぞの剛腕の酒豪のように樽を持ち上げるほどの腕力もない。がぶ飲みしようとすると、こうするより他ないのだ。

(全くもう！ 全くもう!! 全くもう!!! 全くもう!!!)

この馬鹿！ この馬鹿!! この馬鹿!!! この馬鹿!!!!

八つ当たりであることは重々承知だが、それでも気持ちのぶつけ所を見つけられず、息継ぎもせず一心不乱に飲み続ける。

酒の飲み方を教えてくれた帝都で人気の宿屋の女主人に知られれば、いったい何を言われるやら。

笑われるか、呆れられるか、怒られ……は多分しない。ただ、普通に怒るより怖い事が起こりはするだろう。



(でも……惚れた女に良い所を見せようとして大失敗ってことは、つまりあの頃からってことですよ?)

うう、普通こういうのって先に惚れた方が負けなのでは?　なのにこれって……カララ様、私いつたいたいどうしたら……)

顔の火照りを鎮める様にさらに深く顔を突っ込む。

酒だけではなく男女関係方面の教えを受けたこともある女僕に、届かぬ弱音泣き言を漏らすのが、当然返ってくものはない。

(というか、だったらなんで今まで告白の一つもしないのよ!

馬鹿!!　ヘタレ!!!　女誑し!!!　幼女趣味の遊び人!!!)

不名誉極まる罵詈雑言……ただし、一概に否定しきれないソレが後から後から湧いてくる。

しかし、彼女だつてわかつてはいるのだ。当時の自分たちの立場ではそれが無理だという事も。

(そりやまあ、もし仮にあの頃告白なり求婚なりされていたら、罨か策の類だったと思うけど……と言うか絶対にもうさうさだ。真に受けるなんてありえないし)

酔いが回ってきたのか、再度言葉使いが荒くなっている。というより、乱れてキャラもブレてきている。

しかし、思っていること自体はその通り。

二人とも、揃って滅私奉公の具現のような性格だ。

自分の恋慕よりも御國のため民のため、感情を殺し、私心を捨て、忠義を尽くす。

もし仮にその手の話をするとなれば、相手を利用するためだ。他の相手ならいざ知らず、自分たちの間では。

なぜわかるか、答えは簡単。

(だって、私だったらそうする……一応、そういう策も考慮してたから)

検討はしても実行しなかったのは、そんなものが通じる相手ではないことを知っていたから。

きっと、あちらも同じだろう。

(本当に?)

本当にそうだろうか。確かに、通じないとは思う。

お互いに、彼女の立ち位置がばれていることを知った上で、近衛大将とその副官と言  
う立場で接してきた。

あちらは泳がせることにそれなりの利を見出していたから。

こちらがギリギリの境界を見極めて動けばあちらも動かないことを知っていたから。  
でも、本当にそれだけだろうか。

そもそも、そんな阿吽の呼吸染みた認識がある時点で、それだけではなかったのかも  
しれない。

あちらが惚れたのは出会って間もない頃。

こちらが惚れたのは副官として支えつつ、裏でこそ動くようになってから。

しかし、思いを寄せるようになって間もない頃は必要以上に慎重になつていた気もするし、逆にある時を境にかなりギリギリの境界に寄せるようになってしまった時もある。

これはつまり、相当感情による影響を受けていたことの証左ではないだろうか。

あちらが彼女の立ち位置に気付いたのも、好いた女だったからこそかもしれない。

(ああ、認めよう。私は、意図的にその手の話を避けていた。少なくとも、彼の前では、  
自惚れてもいいのなら、彼もそうだったのだと思う。

お互いそのことに触れない……触れる可能性を極力排除することが誠意だと思つて  
いた)

実らぬ思いであることを承知していたから、墓まで持つていくつもりで秘めてきた。  
想いは告げられない。告げたとしても、それは策や罫で包まれてしまう。

なら、せめてもの誠意はそんなことをおくびにも出さないことだと思つてきた。

ただし、相手への誠意というよりも、それはむしろ……

(自分自身の想いを汚したくなかつた……のでしようね。國のため、が聞いて呆れる)

いい加減苦しくなってきたので、『ぷはあっ』と息継ぎ。

ついでに、いまだ伸びている漢に再度視線を落とす。

「あなたも、そうだったの?」

答えは返ってこない。

「もう立場を気にする必要はない……とはいきませんが、何の因果か秘める必要はなくなりしました。

なら、いい加減貴方も想いを伝えてください。私が先になったことは、この際不問にして差し上げますから。

あまり待たせるようなら、私にも考えがあります、から、ね……」

流石に無茶が過ぎたようで、急速に意識が遠のいていく。

壺を掴む手からも力が抜け、体が傾いていく。

だが、重力に引かれて派手に床に叩きつけられる寸前、力強い腕に抱きとめられた。

(なんだ、やつぱり起きてたんじゃない……)

女の愚痴を、こんな無様な姿を寝たふりをして見ていたなんて、本当に趣味の悪い漢。

あくあ、どうしてこんな漢に惚れてしまったのでしょうか。昔は、ハクオ口様やバナ

ウイ様のような人が良いと思っていたはずなのに……)

漢の顔を見上げながら胸中でぼやくが、生憎と暗くて顔は良く見えない。

ただ、どこか苦笑した様な空気が漏れたので、もしかすると少し口に出ていたのかも  
しれない。

「せ、めて…漢、見せ…ろ……」

「……まったく、其方は本当に手厳しいな」

別にならずと起きていたわけではなく、意識が戻ったのはついさっきだ。

目を覚ましてみれば、妻となる女が今にも倒れそうな光景が目飛び込んだ。

慌てて抱き留めたので、正直事情やその他諸々はさっぱりである。

ただ、それでもわかることがある。

「……そうだな。つい口をついてしまったが、流石にあれはない」

確かに積年の想いの一端は告げられたと言えそうだが、あれは彼にとつても不本意  
だった。

仕方なく、割と自棄になってでその後も「愛した」とか「惚れた」と口にはしてみた  
が、どうも戯言の類と思われてしまったらしい。

ならば、改めてこの想いを告げよう。何度でも、何度でも……いつか、彼女の心に届  
くように。

（其方も気付いていた通り、某が其方を副官としたのは監視のためだ。

飛べなくなったとしても、其方の能力は惜しかった。ライコウ殿の引き抜きを突っぱ

ねるのが大変だったことは其方も知らぬだろう。『お前の手に負えるのか』と、何度言われたことか)

敢えて手元に置き、ヤマトの強大さを間近で知らせることで抑止力とする。

二人が考えていたのは概ねこういうことだ。だからこそ、間者と知りつつ傍に置いた。

問題なのは、余計な情報は与えず、与えたい情報だけ与えるよう上手く手綱を握ること。

彼女は優秀だっただけに大層苦労したし、ライコウならばもつと上手くやっていたと認めざるを得ない。

しかし、それでも手元に置き続けたのは……

(いったいどこに、惚れた女が他所の漢の所へ行くことを善しとする漢がいる。

どんな形であれ、其方と共にありたかったからだ)

そんな思いがあつたことは否定しない。いや、今なら素直に認めることができる。

幸運……と言うには些か複雑な状況だが、それでも……思いを秘める必要はなくなつたのだから。

既に仮面はこの國の皇に預けている。もとより、それが亡命のための条件だったからだ。

だが、彼にはもう一つ仮面がある。目には見えない心の内に被った仮面、近衛大将の仮面が。

しかし彼は、今まさにそれに手をかけた。

「覚悟しろよ、姐さん。先に形が出来上がっちゃったが、こつからは俺も本気で行くからよ」

惚れた女を、本気でものにしに行く。

一応告白はされていることになるが、アレでは到底足りない。

彼女こそ何もわかっていないのだ。

（俺がどれだけ姐さんに焦がれてたか、それを骨の髄まで知ってもらうぜ。

こちらとら何年も燻らせて我慢の限界だったんだ、もう遠慮はしねえ）

最低でも、自分と同じところまでは来てもらう。

帝都では身持ちの固い漢で知られていたが、そんなものは偶々だ。

ただ単に、叶わぬ恋があったからこそ過ぎない。

それが叶うとなれば、いくらでも野獣になろうというもの。

（オボロ皇には感謝しねえとな）

亡命や支援のことでトウスクール側の者を受け入れなければならぬのは、元からわかっていた。

ただ、それがこんな形になったのはオボロ皇の粋な計らいに他ならない。様々な思惑あつてのものだろうし、実際にそれは鎖として機能し得る。

恐らく、まっとうな夫婦のようにはなれないだろうが、それこそ今更だ。

少なくとも、帝都であるまま時が過ぎてもこうはならなかったであろうことは間違いないのだから。

(それにクオン殿……姉ちゃんにも、な。

オボロ皇には悪いが、礼代わりにあんちゃんとのことは力になると決めちまった。

ま、こつちのが先約だし、そこはしゃーねえだろ)

何しろ、そもそもクオンの取り成しがなければ自分には生命がなかった。

本来なら、自分の首と仮面アクルカを取引材料に、皆の亡命を勝ち取るつもりだったのだから。首を繋げたのは、クオンのおかげに他ならない。

「にしても、まさか姐さんがこんな大物だったとはなあ……本人は自覚ねえようだが」  
血筋や立場と言うのではなく、能力と言うか発想と言うか、そういう個人的な部分で予想外の大物だったことに驚きを隠せない。

彼女に言わせれば「単に思い付きを口にしただけです」「別に私が創ったわけではありませぬ」と言うのだろうし、それはそれで間違っていないのだが……。

「まあ、生い立ちを知ればなるほどと納得も良く。姐さんからすれば、普通は神聖視され



る呪法もただの『使える道具』なんだろうなあ」

以前から、かなり割り切った思考の持ち主であることは知っていたし、それが彼女の有能さの一端に繋がっているのも事実だった。

とはいえ、まさかここまでとは思わなかった。

「ライコウ殿は気付いていたのか……いや、ねえな。知つてれば、もつと本気で取りに来ていたはずだ」

なにしろ、トウスクールから使者が訪れた折にもたらされた献上品の中で、間違いなく最も驚かれた物の発案者が彼女なのだ。

何年も前にポロリと零した一言を、祖皇が拾い、以降長い時間をかけて形にした画期的一品。

そんな発想が出てくること自体、普通なら在り得ない。

呪法にしる術法にしる、それらは全て『特別』なものなのだから。

それを便利に使うなんて発想自体が、時代の先を行き過ぎている。

「まあ、子どもの発想を拾い、研究を指示した祖皇もさすがの傑物と言ったわけだが」

恐らく、他の國ではよくて無視されるか、悪くすれば『罰当たり』扱いされかねない。

それほどまでに、この世界での術法・呪法は『特別』なのだ。

「トウスクール……というよりオンカミヤムカイ独自の呪法を物に込める秘技。」

通常は儀式や戦なんかに使われるそれを………まさか、家庭の便利道具にしちまおうとはなあ」

脱帽だ、とばかりに天を仰ぐ。

そう、トウスクルの同盟國の一つ「オンカミヤムカイ」は術法に長けたオンカミヤリユーが中心の國。

そして、彼らはその長所を生かし、術法を指輪や腕輪に込める彼らだけの技術を有していた。

普通は術法が使えない他の部族が戦で使用したり、術法の増幅に使われたりするそれを、時に竈、時に食材の保存に使うという発想は今までになかったものだ。

普通なら「恐れ多い」として誰も考えない、考えようとしぬい。

だが、生い立ちの関係から信心などと無縁の彼女は、火を生む指輪を見て「それでモロ口を蒸せばいいのでは？」と言ったそうだ。

当時は戦が激しかったこともあり余裕もなかったが、それでも祖皇の指示で細々と研究が始まり、彼女が國を経った頃には本格的に動いていたらしい。

結果、トウスクルはヤマトにもない画期的な道具の数々を開発。

技術力において、大國ヤマトすら震撼させるであろう品々は一人の少女の眩きから生まれたのだ。

「あんちゃんは『こんろ』とか『れーぞーこ』とか言ってたが、やはりトウスクール本国のそれは献上品の数段上を行ってやがったな」

帝に献上されたのは、正しくは火の呪法の宿った指輪など数点だけ。

呪法を物に込めるといふ時点でヤマトにはない技術だった。

しかし、その応用である品々は一つもなかった。手の内を見せるつもりはない、という事だろう。

彼の見ることでできる範囲では、今のところ日常生活への転用が主だが、恐らくそれだけではあるまい。

彼女の発想をもとに、より突飛な……思いもかけない何かがあると考えるべきだ。

(というか、既に一つ見てるしな)

帝都から脱出する折に使われた“門”。

あれも元は彼女の発想だというのだから恐ろしい。

正確には、知り合いの“残念な破戒僧”との共同発案らしいが……あれには愕然とするやら、背筋が凍るやらで大変だった。

クオンがトウスクールとの戦いを止めようとした理由がよくわかる。

あのまま続いていけば、勝てないどころか本当に負けていた可能性があるのだから。

(こうして振り返ると、策を弄してでも姐さんを取りに行くべきだったのかもなあ。今

更だが)

当時は裏事情を知らなかったので仕方がないが、知ればそう思わずにいられないのがかつての彼の立場だ。

(いや、それを言うなら帝都への道中、姉ちゃんが普通に煮炊きであの指輪使ってた時からか。

あの時は、姉ちゃんも呪法の心得があるのか、くらいにしか思ってたからなあ)  
あの指輪ですら、未だトウスクルでも一般には普及しておらず、アレを持つのは皇族や一部の豪族くらいらしい。

なんでも、本来は戦用のそれを煮炊き用に火力を調整し、なおかつ長時間使えるようにするのに相当苦労したらしい。おかげで、未だに庶民には手の届かない高額の商品なのだとか。

「本当に、とんでもねえ女に惚れちまったらしいな俺は」

酔い潰れた妻(になるはずの女性)の頭を膝に乗せ、飲み残しの酒を盃に注ぐ。

そうして、夜空で輝く月を肴に遠い過去に想いを巡らす。

(そう、あれは……俺が帝都に上がって間もない頃だったな)

小隊同士の合同訓練、それが二人の出会いだった。

あの時のことは、何年たっても鮮明に覚えている。

初めて見る、翼を持った人。

顔は多くの術師がそうする様に薄布で隠され、人相は判然としなかった。

というか、大きな声では言えないが、実は……

(男だと思つてた……つてのは、言えねえよなあ)

色々理由はあるが、一つは今までに見たオンカミヤリユー族の女性に共通する特徴故だ。

ただ、彼女だけが例外なのである。

それも、彼女たちのその特徴に目が行つた際のあの目ときたら……

(死んでやがった。いや、あれはむしろ……)

今にも呪いそうな目で見ていたのが忘れられない。

指摘すれば、命はないと彼をして直感するほどに。

ならば、性別を間違えていたと知られれば、当然「なぜ」と聞かれるだろう。

誤魔化しの効く相手ではないし、バレれば生命がない。

(よし、これこそ墓の下まで持つていこう)

そうして、改めて古いが鮮明な記憶を振り返る。

まだ何も知らず、彼女もまた自分と同じ志を抱いていると思つていたあの頃を。

# 〈 Fate / sn × 史上最強の弟子 〉 Fate / Strongest Night

日本国都内某所。

世界屈指の大都市を象徴するかの如き摩天楼、その中でも一際異彩を放つ高層ビルがあつた。

いや、それ自体は特に何の変哲もないビルなのだが、ただ一点風変わりと言うか、場違いと言うか……とにかく妙な点のあるビルだった。具体的には、そのビルの所有者を示すマークが……不審極まりない。

まあ、その点さえ除けば基本的には普通のビルである。

例え、一步踏み込めば「しくんばあく！」と言う意味不明の挨拶がされていたとしても……。

例え、あるべき場所に階段がなく、代わりに妙に手の込んだトラップが仕掛けてあつたとしても……。

……訂正する、やっぱり普通じゃない。

とはいえ、今重要なのはそのビルの不審さではない。

重要なのは、そんな不審極まりないビルの上層に位置する応接室に座す美女の存在だ。

年齢は四十代中頃ながら、その美貌には衰える様子が微塵もない。

二十代に見える……などではなく、年齢相応の老いの兆しと美しさが奇跡的な同居を果たしているのだ。

その女性は優雅な仕草で用意された紅茶を口へと運ぶ。

応接室に通されて早十分が経とうとしているが、焦れた様子はない。

静かに紅茶を飲む様子には気品と余裕があり、どこか女王然とした風格すら感じられる。

まるで、彼女こそがこの部屋……否、ビルの主であるかのように。

しかし、あくまでも彼女は一人の客。今は面会を求めた相手を待っている立場に過ぎない。

だというのにこの風格だ。給仕役を任された男性は完全に委縮しきつっている。

別に彼女としては不機嫌なわけでも威圧しているつもりもないのだが……

今となっては、むしろ男性の方が待ち人の到来を待ちわびていることだろう。

ようやく応接室の扉が開かれた時の二人の反応は、まさに両者の心情を表すかのようだった。

女性はカップをゆつくりと降ろすと静かに視線を向け、男性は気色に満ちた表情を浮かべていたのだから。

そんな事情を知ってか知らずか、応接室の扉を開いた外見には二十代ほどに見える男性は、その人となりを表すかのような穏やかな口調でまず謝罪の言葉を口にした。

「すみません、お待たせしました遠坂さん」

「別にいいわよ、たいして待ってないし……というより、謝るのはこつちでしょ。いきなり押し掛けたのは私ですもの。悪いわね、あなただつて忙しいでしょうに」

そう言われれば男に返す言葉はない。

忙しいのは事実であり、今もかなり無理をして面会の時間を捻出しているのが実情だ。

事務仕事は山とある……というわけではないし、そもそもそんな仕事は基本的に回ってこない。

彼に求められるのは、自身の専門分野における役割だけだ。

僅かな時間をひねり出すのにも苦労するような忙しさも、自らの弟子の育成に関わることが9割を占めている。

ただそれでも、やるべきことは数えきれず、忙しいのは事実。

誤魔化しても良いが、そんな誤魔化しが効く相手でもないので困ったような笑顔を浮



かべるしかないのだ。

「さて、昔話に花を咲かせてもいいけど……そもそもそこまで親しい間柄でもないし、咲かせるような昔話もない。だから単刀直入に話を進めたいのだけど、構わない？」

「ええ、まあ……はい」

元々生きる世界が違う事もあり、ほぼほぼ接点はないに等しい。

ただ、女……遠坂凜の弟子と男には少々縁……と言うか因縁がある。

味方として共闘することもあれば、敵対かそれに近い形で向き合うこともあった。

その関係で、男も凜と少なからず縁を結んだ、とそういう間柄である。

加えて、両者の立場的にもあまり接点を持つのは好ましくない。

関わりは最小限に……あとはまあ、兼一の忙しさを考慮してくれたりもしているのだろう。

なんだかんだで、相手への配慮も忘れない完璧超人なのだ、昔から。

「一応確認んだけど、私……あなたにいくつか貸しがあったわよね」

「やっぱり、その話ですか」

案の定と言うべきか、やはり今回の面会の申し入れはいつぞやの「貸しの徴収」が目的らしい。

彼自身は特に貸しを作ったりしたことはないが、彼の弟子が何度か世話になってい

る。

その貸しを持ち出されては、男としては凜の話が無碍にはできない。

「それで、僕に何をさせたいんですか？」

「そう警戒する必要はないわ。大した……ええ、本当にあなたにとつては大したことじゃないから」

「？ どうしたんだろう、なんとというか……らしくないな。」

いつだって自信に溢れている遠坂さんが、こんな顔をするなんて。それに、瞳の奥の影はいったい……」

「あまり人の心を覗くもんじゃないわよ。相手が女なら、尚更ね」

「つと、失礼しました」

つい武人としての習慣で観察してしまつたが、流石に不躰だつたと反省する。

ただ、やはり気にならないといえば嘘になる。遠坂凜らしからぬ目の奥に宿つた影の存在。

それが、今回の貸しの徴収と無関係という事はあるまい。

とはいえそれも、話を聞かないことにはどうにもならないのだが。

「それで頼みの方だけど、これを……」

「中身を拝見しても？」

「ええ、もちろん」

凜が懐から取り出したのは、簡素な造りの木製の小箱。

重量は極めて軽く、危険物の類が入っている可能性は低い。

武人である男にその手神の方面の感知能力はないが、長い年月をかけて磨きぬいた武人の勘が、罨の可能性を否定している。

まあ、元々そんなせい真似をするような相手ではないことは知っている。

縁の浅い相手ではあるが、その程度の信頼と信用は置いている。

故に、男は相手の素性を考えれば無謀なほどにあつさりと蓋を開けた。

「……躊躇がないわね」

「必要ありませんから」

「そう……まあ、あなたにそう言われて悪い気はしないか」

何しろ、相手は彼女が知る限りで屈指の人格者だ。

少なくとも、人間としてであれば最大限の礼儀と敬意を払うに値する。

いつも顔突き合わせている“人でなし”共とはわけが違う。

そんな相手にそう言われれば「なるほど、私もなかなか捨てたものではない」と思えてくる。

「これを、ですか」

「ええ」

「これをどなたかに届けろと？」

「いいえ。あなたに持っていて欲しいの」

「それはいつまで？」

「一生。あなたの命が尽きるまで……いえ、その後もずっと持っていて欲しいの」

意図の読めない頼みに、*“根っからのお人好し”*と評される男も内心で首をかしげる。

その程度の頼みであれば、わざわざ貸しのことを持ち出すまでもないからだ。

にもかかわらず「貸し」の話をしてきたという事は、彼女にとってはそれだけの重みのある頼みという事。

それはきつと、先ほど垣間見た彼女の眼の奥の陰と何か関係があるのだろう。

聞きたい気持ちはあるが、その衝動をグツと抑える。

男ももう良い歳だ。結婚し、子どもも生まれ、今や弟子まで取った身。

何かしらの事情があると分かっているが、無神経に踏み込むほど、彼も若くはない。

「……わかりました。確かに、お預かりします」

「ええ、ありがとうございます」

「では、貸しの方はこれで……」

一つ帳消し、という事になるのだろう。

男としてはそのつもりはないのだが、相手の性格はある程度理解している。

男がなんと言ったところで、前言を翻すことはあるまい。

ならば、相手のメンツを立てるのが大人の武人と言うものだ。

そう思つての発言だったのだが、返つてきた言葉にはさすがに度肝を抜かれた。

「すべてチャラで構わないわ」

「は？」

「だから、これで完済。良かったわね身軽になつて」

「……」

数々の修羅場を潜り抜け、いい加減それなりに勝負度胸も身についたと思つた男だったが、啞然として言葉も出ない。

凜への借りを一つ返すだけでも一苦勞であることを彼はよく知っている。

なのに、ただリボンを預かるだけで全てなしになるとは、それこそ天変地異並みの異常事態である。

そんな男の内心に気付いたのか、凜は笑っているのに笑っていない極上の笑みでぶつとい釘を刺してきた。

「……………何が言いたいのかはわかっているけど、言ったら………フツ殴ツ血チKILキLル

わよ?」

「い、イエスマム」

徒手の間合いでは自身の流儀を加味しても、なお圧勝できるだけの技量を有していると思っっているが、今だけはそんな理屈は通じないと本能で悟る。

余計なことを言えば、その瞬間予言は現実になる。

その確信が男にはあつた。

「ま、あなたの疑問も当然ね」

「教えてくれるんですか?」

「いいえ。ただ、いずれ時が来れば分かるわ。今までの貸しすべてと釣り合うってことが、ね」

そう言つて、凜は紅茶だけはしっかりと飲み干すと、用は済んだとばかりに颯爽と帰つていった。

残されたのは、理由も目的もわからない頼み事と……

(赤いリボン、か。さて、どうやって身に付けよう)

一度請け負つたからには、最後までそれを通すのは当然とばかりに気に付け方を考える。

とはいえ、彼もまさかこんなことになるとは思わなかったことだろう。

数十年後、今際の際になつてもなお、結局凜の頼みの意味は分からずじまい。

それどころか、あれ以来彼女は一度として男の前に姿を現さない、などと。

だが、それは違う。違つたのだ。

彼女が言つた「時」、それは何も彼の命があるうちのことを指していたのではない。

凜が見ていたのはさらにその先。

彼女は知つていた。かつて自らが参加した一大魔術儀式におけるイレギュラー。

自身が呼び出した使い魔の正体と、なぜ彼が呼ばれたのか……その理由を。

故にこう考えた。「いずれ英霊に至るであろう人物に、その人物を召喚させたい者の

持ち物を持たせれば、それが縁となつて召喚される英霊を操作することができるはずだ

”と。

その読みは見事的中する。

時代は遡る。あるいは、全く別の世界線へと移り変わる。

縁と呼ぶにも細い糸。決してそれは聖遺物などと呼ばれるようなものではない。

そもそも、持ち主たる少女自身にすらそんな認識はない。

当然だ、それは彼女姉が別れの間際に渡した手製のリボン。

姉妹の絆、目に見える繋がり……当事者たちにとっては尊くあれど、ただそれだけの

もの……そのはずだった。

しかし、それがいつかの未来において、人理にその名を刻む傑物の手にあつたとすれば意味が変わる。

今はまだ一人の少女の私物に過ぎない赤いリボンが確かな縁となり、一人の男を呼び寄せた。

曰く「一人多国籍軍」。

曰く「武の一つの到達点」。

曰く「史上最強の弟子」。

曰く「あれで凡人とかないわー」。

その男の名は……

「はじめまして、僕の名前は白浜兼一。君が僕を呼んだマスターかな？」

暗く、深く、無数の蟲が蠢く地下。

そんな「真つ当」なんて言葉からかけ離れた場所で、むしろ不自然なほど自然に、男は膝をついた少女へ手を差し伸べながら、至極真つ当な自己紹介をする。

柔和な顔立ち、穏やかな声音。英霊……なんて、仰々しい名称とは到底結びつかない平凡さ。

特別背が高いわけではなく、体格が良いわけでもない、まさに中肉中背。



黒髪黒目の色彩は日本人である少女にとつても目に馴染んだもので、見る人によつては「ハンサム」に見えないこともないかもしれない程度の顔立ち。

もうどこからどう見ても場違い感が半端ではない男が、魔法陣の中心に立っていた。

その上「あ、ちなみにクラスはアサシンだよ……アサシン？ え、僕が？ ええ……」なんて、自分自身で困惑していると来た。緊張感とかその他諸々色々台無しである。

「……………あ、おいおいおいおいおいおい！ なんだよこれ、何なんだよこれはさあ!!

聖杯戦争だぞ！ サーヴァントの召喚だぞ！ それなのになに呼び出してんだよこの愚図は！」

少女の後ろで直前までどこか怯えた様子でいた少年が、いつそ感心するレベルの変わり身の早さで少女を罵倒している。

少女はその場等を受けて顔をうつ向かせ、グツと口元を引き結ぶ。

その様は何かに怯えるようであり、同時に何かに耐えるようでもあり、また……どこか安堵したように兼一には見えた。

「ふざげんじやないぞ！ やりなおせ、やりなおせよ！ この僕が折角役立たずのお前の代わりに戦つてやろうつていうのに、こんな外れ呼び出しやがつて！ わかつてんの

かよ、おい!!」

「え〜つと、ちよつといいかな……」

「あん? 何勝手に喋ってんだよ、道具のくせに! お前は良いからさつきと来てくれない。僕たちはこれからちゃんとしたサーヴアクトを召喚しなくちゃならないんだ。わかる? 用なしなの、だからさつきと「黙れ慎二」…ヒツ!? お、お爺様?」

同じく少女の後ろに立っていた老人の一瞥を受け、それまで居丈高に振る舞っていた少年の声がひきつる。

「さて、孫が失礼したようじゃの。儂の名は間桐臓硯、こやつらの祖父じゃ」

「……そうでしたか。改めて、僕の名前は……」

「よいよい。そなたの名はこの老いぼれの耳にもしつかり届いておる。

じゃが、あまり関心はせんな。聖杯戦争において真名は秘すべきもの。迂闊にもらせばそれが致命傷となろう。

これからは、アサシンと名乗るべきじやろうな。わしらも、其方をそのように呼ばせてもらおう」

「ああ、そうみたいですな。すみません」

老人…臓硯からの忠告に兼一は素直にうなづく。

一応それが慣例であり常道であることは理解している。例えば、聖杯には全く興味がない

く、「勝ち残るのも無理だろうなあ」と思っていたとしても。

付け加えるなら、そもそも彼の真名は知られたところで全く困らない。明確な弱点がないとかではなく、今の時代では彼は限りなく無名に等しい。

知る人ぞ知る……と言えなくもない程度には名が知れてはいるが、それも武術界限でのこと。魔術の世界の住人が彼のことを知っているとは到底思えない。

その意味でも、真名を隠すことにはさほど意味がないのだが……今はそれよりも優先すべきことがある。

「ところで……」

「うむ、その娘がそなたを召喚せしマスターじゃ。桜、いつまでそうしておる」

「……はい、お爺様」

（……………まだ若いのに、何て目を）

緩慢な動作で立ち上がった少女：桜の目を見て、兼一は奥歯を強く噛み締めた。

前途ある若者がするような目ではない。彼女の目は、絶望と諦観で埋め尽くされていた。

まるで、人生それ自体を見限ってしまったかのような、そんな目。

と、同時に兼一は桜の髪を結うリボンの存在に気付く。

（ああ………なるほど、つまり今が借りを返す時つてことですか。遠坂さん）

古い知り合いが残した不可解な頼み事。その意味の一端がようやく知れた。

生憎と、自らの主と彼女の間にごんな関係があるのかは知らない。残念ながら、家族関係などを知るほどの深い繋がりではなかった。兼一が知る彼女の関係者は、本人を除けば弟子と好敵手、それに時計塔の君主代理ロードくらいなもの。

とはいえ、「あの」遠坂凜が仕組んだことだ。

彼女はきつと、目の前の少女のためにこれを仕組んだのだろう。

(だとすれば、僕は彼女のために全力を尽くすだけだ。さしあたっては……)

「さて、桜。あとはわかっておるな」

「はい」

「うむ、では……」

「あ、ちよつといいかな、マスター。まず君の名前を聞かせてくれない？」

「はあ？ おまえ、何聞いてたんだよ。だいたい、そいつの名前なんて知る必要は……」

「いや、だって……僕のマスターは彼女なわけだし、ちゃんと本人の口から聞きたいじゃないか」

「……ありがとうございます。でも、ごめんなさい」

「？　なんで謝るんだい？」

「私は、すぐにあなたのマスターではなくなります。これからは、兄さんがあなたのマス

ターになつて戦うから」

「……………どんな理由があるかはわからないけど、それが君の願いなら………わかつた」

それは兼一の本心だつた。彼には聖杯に託す願ひはない。

いや、そもそも生前に己が為すべきことを全て……とはいかないまでも、出来る限りのことをしたという自負がある。

悔いはある、心残りもあつた。されど、第二の生を受けてまで固執するほどの物はな  
い。

だから、彼としては自らを呼び出すほどの何かがある人物に、できる限り助力しよう  
と思つている。

少なくともそれが、彼の信念に悖らないことである限りは。

その魂の在り方は、ある種「聖人」と呼ばれる者たちに近い。

「ごめんなさい」

「いや、気にしないで。でも、その前にひとつだけ……」

「え？」

「ちよつと失礼」

そう言つて、兼一は僅かに顔を上げた桜の胸元……ちよつと心臓の真上に掌を置く。

そして……

「フッ！」

僅かな呼気と共に、地下室がまるで地震でも起こったかのように鳴動した。

天井からはチリともホコリともつかない細々としたものが降り、突然の振動に慎二が尻もちをつく。

「お、お前いきなりなにしやが「ぐおっ」……お、お爺様？」

「なるほど。マスターの心臓あたりに何かいると思つたら、あなただつたんですね」

「お、お主……気付いて」

「ええ、魔術のことはさっぱりですが、人体のことはそれなりに通じているつもりです。

気配に違和感があったので、やってみたんですが……とりあえずマスターの心臓から出てくれませんか？」

あまり人を疑うことはしたくないんですが、あなたの目を見る限りあまり信用すべきではなさそうですから」

磨き抜かれた洞察力は、傀儡越しとはいえ臓硯の在り様を正しく見抜いていた。根っからのお人好しと称された彼だが、それでも理解している。

世の中には、どうあつても許してはならない存在と云うものがあるという事を。

丁度、今まさにうら若き少女の心臓に巣食う何者かのような。

「くっ……よ、よいのか。桜の心臓、今すぐにでも……」

「あなたが何かするよりも、僕の発勁の方が早いですよ。今は手加減しましたが、次は」  
「わ、儂を一撃で潰すほどの力を籠めれば、桜がどうなるか……!」

「そんな不手際はしませんよ。他の部位には一切傷つけず、あなただけを攻撃する……  
造作もありません」

「ぐぬう……おのれ、よもやサーヴァント如きにい……」

「さあ、どうしますか。ああそれと、体中にいる何かも連れて出てください。まあ、そこらは一匹ずつ駆除してもいいんですけど」

表情一つ変えずに脅しをかける兼一に、臓硯の傀儡が忌々しそうな視線を向けるが微動だにしない。

いつの間にか蚊帳の外に追いやられた慎二は呆然としたまま座り込み、桜もまた理解が及ばないのか固まっている。

二人は思いもしなかったのだろう、自分たちの全てを支配するこの妖怪が追い詰められることがあること自体が。

（くっ、動こうとすればその瞬間に察知してきよる。出し抜くには、一度引くより他にな  
いか。

白浜兼一……日本の英霊なのは間違いないが、どの時代の英霊じゃ。この屈辱、必ず

や晴らしてくれる!!)

「……どうやら、行ったようだね」

臓硯が桜の体から抜け出し、兼一もまた当てていた手を放す。

とりあえず、これで桜のことは大丈夫だろう。

「さ、これでとりあえず君は自由になった、と言って良いと思うんだけど……どうするマスター？」

※以下、サーヴァント設定でございます。

真名：白浜兼一

クラス：アサシン

属性：秩序・善

筋力：B 耐久：A++ 敏捷：C 魔力：— 幸運：E— 宝具：C (EX)

クラススキル

気配遮断B (EX) Ⅱ 武芸者の無想の域「明鏡止水」として有しており、本職の暗殺者ほどではないがランクは高い。括弧付きでEXなのは、「強者としての気配」が全く表に出ないことから。そのため、初見で彼をサーヴァントであると見抜ける者はまずいない。



## 保有スキル

一人多国籍軍：A＋十||空手・柔術・中国拳法・ムエタイ・我流・対武器術（香坂流）、一連の武術を統合した特殊スキル。また、それらをどれほど極めたかの値。複数の武術を修めている分、一つ一つにおいてはその頂点に今一步及ばない。

活人拳：A||不殺の信念。意識が無くても戦闘を可能とし、十全な技のキレを保持したまま決して相手を殺さずに闘う。その性質上、聖杯戦争の様な殺し合いには果てしなく不向きなスキル。

心眼（真）：B＋||修行・鍛錬によつて培った洞察力。窮地において自身の状況と敵の能力を冷静に把握し、活路を見出す『戦闘論理』。本来であれば最高ランクの心眼（真）を保有している筈なのだが、生来の甘さのせいでランクが下がっている。

戦闘続行：C＋十||異常なまでのタフさ、別名「人知を超えた驚異の『痩せ我慢』」。通常なら行動不能なダメージを受けても戦闘を可能する。が、あくまでも痩せ我慢。また、時と場合によつては「死んでも蘇ってくる」可能性すらあるとか……。

## 宝具

逆鱗<sup>ママ</sup>抉<sup>タ</sup>りし無垢<sup>ヤツ</sup>なる声<sup>チャツ</sup>||ランク：E 種別：対人 レンジ：5 最大補足：1人

対象の心の中心、最も触れられたくない箇所へ『口』撃してしまふ。成功した場合「狂化：E」が対象に付加され、冷静さを失う代わりに筋力・耐久・敏捷に補正がかか

る。本人も無意識かつ無自覚に行ってしまう無差別発動型の宝具。あまりの業の深さ故、ついには宝具にまで至ってしまった。『死んでも治らない』白浜兼一最大の悪癖。役立たずにも程がある三流にもとどかないダメ宝具。

デッドオーア！

梁山泊Ⅱランク：C++ 種別：対人 レンジ：1〜50 最大補足：1人

無能非才、武術家として全く欠片も芽の無かった白浜兼一を、武の極みへと導いた彼の聖地にある種の結界空間として展開する宝具。最高効率を遥かに超越した鍛錬を施し、才能の有無に関係なく対象を急激に成長させる。一度入ると三日間は出て来られず、場合によっては命を落とす可能性のある危険な代物。内部は閉ざされた空間で、外界から干渉・観測する術はなく、中でなにが起こっているかは外には知る由もない。知る術はただ一つ、中に入つて修業を受ける事なのだが……出て来た者は頭を抱えて震えるばかりで、内部であつた事を何一つ語ろうとしないため、やはりその内実は闇の中。一説には、時間の流れすら異なつていると言う話すらある。その苛烈どころの話ではない修業を耐えきつた者は、戦闘続行や肉体改造、活人拳などの多様なスキルを得ることが出来る。ただし、生き残る事が出来ればの話だが……なにしろ非常に無茶な修業なので、効果は絶大だが命の危険も同じ位に絶大。ちなみに、肉体改造と自己改造は似て非なるスキル。別の肉体を付属・融合させるのではなく、元からある肉体を武術体質へと造り変えるもの。

努力は才能を凌駕する。ランク：EX 種別：対人 レンジ：1 最大補足：1人

白浜兼一の人生そのもの。常識的に考えれば「越えられない限界」を力づくで打ち破って来た実績が宝具化した物。既に完結した存在であるが故に能力的な成長をしない筈のサーヴァントでありながら、今なお進歩し続けることを可能とする。「死」と言う名の壁ですら、彼にとつては生前に越えて来た無数の「壁」と大差はない。とはいえ、無条件に成長し続けると言うわけではなく、成長のためには相応の鍛錬が必要であり、壁を越えるには彼が生前そうしていた様に、これまた常軌を逸した無茶が必要になる。肉体が宝具なのではなく、彼の人生の在り方そのものが宝具と言える。

# Fate／Zero（最初で最後の反抗期）

誰かの声が聞こえる。

漂白されつつある意識に、誰かが語り掛けてくる。

もうここがどこで、自分がだれで、何をしていたのか、何がしたかったのか、そのほとんどが失われてしまった。

にもかかわらず、不思議なほど明瞭に声が聞こえてくる。

—— 悔いはない？

いいえ、そんな綺麗なことは言えない。

—— 心残りはない？

まさか。やりたかったことも、見たかったものも、数えだしたらキリがない。

—— 満足してる？

………ええ、もちろん。

悔いはある、心残りもある。だけど、私はこの選択に満足している。

だって、今私は生まれて初めて、こんなにも誇らしいもの。

——他人のために命を捨てることが？

血の繋がりはないし、共有した時間は短いせいの中でもさらに極僅かなるほど、そこだけを拾えば確かに“他人”ね。

——恨んでいたのでしょうか？

どうだろう。そうだった気もするし、そうじゃなかった気もする。

私の十数年の生、その大半は灰色で色彩に乏しい。

だから、そんな灰色の時間の中で名前を付けた感情が、果たして正しいのかよくわからない。

——なら、今何を思ってるの？

愛おしい。私は、ただただあの子が……あの子を取り巻く世界と人々が愛おしい。

そのために使えるなら、生命だって惜しくないと思えるほどに。きつと、お母様もそうだったんでしょね。

ほんのわずかな共に過ごした日々、だけどその日々はお母様たちと過ごした時間に負けず劣らず……ううん、圧倒的なま間での鮮やかさを持っていた。

だからはつきりと断言できる、私はあの子を……シロウを愛している。

——それは、なぜ？

——そんなの簡単よ。だって私は……

「お姉ちゃんだもん。弟を愛するのも、弟を守るのも、当たり前のことじゃない」  
そう、それは当たり前のこと。長い間ずっとずっと知らなかった、いくつもの「当たり前前」の一つ。

ああ、でも、やっぱり悔いや心残りはたくさんある。

「もつとシロウ達と一緒にいたかった、たくさん話したかった」

「お花見っていうの、一緒に行きたかったなあ」

「キリツグのこと、もつと聞いておけばよかった」

「シロウとサクラの結婚式、出たかったなあ」

「春の空、夏の花、秋の山……見たことのないもの、いっぱいあるんだよね」

「二人の子どもも見たかった、きつと可愛かっただろうなあ」

「それに、叶うなら……」

お母様にシロウを会わせてあげたかったし、家族みんなでシロウのご飯を食べたかった。  
た。

ああ本当に、心残りばかりだ。

だけど、それでも……シロウはこれからも生きていく。サクラやリンと一緒に。

なら、それだけで……私は満足だ。

その一言を最後に、私の意識は今度こそ真っ白になった。

\* \* \* \* \*

「……」  
硬い感触。柔らかなベッドからはかけ離れた、無機質な硬さ。

「……」  
湿気を含んだ土の香り。嗅ぎ慣れない、だけどどこか落ち着く畳の香りからは遠い匂い。

「……」  
肌を刺すような冷たさ。まるで何も身にまよっていないかのような、ダイレクトな冷気が体を包んでいる。

「……えっ？」

そこに来て、ようやく白い少女は重い瞼を開いた。

目を開けはしたものの、光源に乏しいせいで周囲の状況はよくわからない。

ただ、やけに広々とした空間に自身がいることだけはわかった。

少女は状況への理解が追い付かないまま、ゆっくりと体を起こす。

「どうして私、生きて……シロウ、シロウは?！」

ようやく頭がはつきりしてくると同時に、ただ一人の家族のことを思い出す。

しかし、いくら周囲を見渡せど、影も形も見つからない。

焦りはやる心を何とか落ち着け、彼女は冷静に状況を確認していく。

「……まずは、どうして私が生きているか、よね」

そう、彼女は確かに死んだ。正確には、肉体を最愛の弟のために譲り渡し、自身の命を以て大聖杯の門を閉じた……その筈だ。

にもかかわらず、今確かに彼女は失ったはずの肉体と命の息吹を得ている。

(まさか、第三魔法が失敗した?)

一瞬その可能性が頭をよぎり、体が内側から凍り付いたかのように凍えたが、すぐに否定する。

(ううん、今の状況と第三魔法の成否は関係ない。仮に、もし仮に失敗していたとしても、私が生きている理由にはならないもの)

彼女が命を失ったのは、正確には大聖杯と一体となることで内側から門を閉じたためだ。

第三魔法の成否にかかわらず、彼女は肉体を失う事になる。



それにより魂のない抜け殻となった身体を弟の暫定的な入れ物にするというのが、彼女が講じた弟を救うための方法だった。

つまり、第三魔法の成否以前の段階で彼女の死は確定している。

(それに……)

ようやく暗闇に慣れてきた目で周囲を見渡せば、案の定と言うべきか……見覚えのある風景が目映る。

(やっぱり、ここは大空洞……だけど、どういう事？ サクラとリンの戦いで、大空洞は崩落寸前だった。なのに今は、まるでそんな様子がない。それどころか、大聖杯も無事。これじゃ、何もかもなかったみたい……)

背後にそびえる巨大な構造物を見る限り、大聖杯は今も問題なく稼働している。

その中に巢食っているはずの存在に関しては、今のところなんとも言えない。

表面的には気配はないように思えるが、奥の方はどうだろう。

(大聖杯に触れればわかるでしょうけど、下手をすると今度は私が汚染されかねない。それに、今の状況もわからないことが多すぎる。まずは、一つずつ確認していくべきかしら。そのためにも、とりあえず外に出るべきよね)

一番手っ取り早い方法であると同時に、最もリスクの高い方法でもあるそれは、最終手段にすべきだ。

なにより、彼女にとっての最優先事項はそこではない。状況の把握など所詮は建前、まず何よりも優先すべきなのは……

(シロウは、無事かしら?)

命と引き換えにしても助けたかった、弟の安否。

状況を把握するために外に出るなど、結局はそのための口実に過ぎない。

もし、状況が彼女にとって最も望ましいものであるのなら、理由は定かではないがこれは好都合。

自身の選択に満足し誇らしく思っただけでも、心残りも悔いも山ほどあったのだ。

だが、何がどうなっているかはともかく、命があるのならそれらを拾い上げていくことができる。

疑問も大聖杯が稼働している事実も、その前では芥同然だ。

しかし、そんな彼女の期待は見事に……ある意味では当然のように裏切られた。

「はあ、ホントどうなってるの?」

まだ気怠さの残る身体に鞭を打ち、なんとか大空洞から出て山を下り、道中で拾ったボロを纏って裸足のまま歩くことしばし。

ようやくたどり着いた衛宮邸は……荒れ果てていた、とまではいわないものの明らかに人の気配がなかった。

また、彼女の記憶が確かならばなかったはずの傷や汚れが散見されたし、あのシロウがそれらを放置していたとは考えにくい。

(まさか、あれから何十年も経っていて、もうだれも住んでないとか?)

ある意味、一番ありそうな可能性がそれだ。

というか、とりあえず思いつく可能性がそれしかない。

まあ、全くよくはないし限りなく最悪に近いが、その場合でもできることがあるにはある。

「……………とりあえず、遠坂の屋敷を目指すべきでしょうね。血筋が途絶えたりでもない限り、管理者が居を移すとは考えにくいし」

冬木の土地で二番目の霊格を有する遠坂邸から移転する可能性は、魔術師的に在り得ない。

あれからどれだけの時間が経っているかはわからないが、アインツベルンを名乗る者が現れれば遠坂としては無視できないはず。

頼れるかどうかはともかく、ある程度の情報を得ることはできるだろう。

(リンの子孫って考えれば、少し位は期待しても良さそうだけど……せめて、衣食住だけでもなんとかしたいわね)

なにしろ、今の彼女には生きていくために必要なものが全て不足している。

エネルギー源となる食料も、体を休められる寝床も、体を温める衣類も、何もかもがない。

今でこそボロを着ているが、それまでは一糸まとわぬ全裸だったのだ。

名門魔術師の令嬢でもあった彼女にとって、あらゆる意味で在り得ない。もちろん、今も大差はないが。

「本当は、ここに入れればいいんだけど……」

最後に、衛宮邸の重厚な門扉を寂しそうに見上げる。

彼女の身体能力では、壁をよじ登ることも難しい。また、弟の家に不法侵入するというのも情けなくて涙が出るのでしたくない。彼女にとっても、ここは家に等しい場所なのだ。

現実的な理由として、まだ結界の類が残っていないとも限らない。

変に怪しまれるようなことはすべきではないだろう。

「はあ………痛っ!? もう! 小石踏んだ〜!」

裸足で歩いていれば、そういう事もある。

できるだけ石やガラスなどを踏まないように気を遣っているが、なにぶん夜間なので完全にはいかない。

恐らく、この先も似たようなことはあるだろう。ましてや、ここから遠坂邸まではか

なりの距離がある。

そのことを考えれば、ますます憂鬱になるというものだ。

「うう、お腹空いたし、寒いし、足は痛いし。もうどうなつて……っ！」

たまりにたまつた鬱憤を少しでも晴らそうと叫ぼうとした瞬間、彼女の感覚が微かな魔力を感じた。

（魔力？ 夜とはいえこんな街中で？）

人通りもほとんどなく、月の位置から見て真夜中なのは間違いない。

しかし、だとしても碌に隠蔽もせずに魔力の気配を漏らすなど、いくらなんでもあり得ない。

魔力の量は微細だが、それでもだ。

「……………少  
しだけなら」

大いに逡巡した末、彼女は魔力の発生源を確認することに決める。

碌に自衛手段もないまま乗り込むのは危険だが、それ以上に気にかかる。

魔術師としてはあり得ないほどに杜撰なこの状況。

誘いや罠の可能性もありはするが、そもそも管理者のいる霊地でそんな不躰な真似をするとは考えにくい。

かと言つて、管理者が……それもあの遠坂がこんな杜撰なことをすることも、許すこともあり得ない。

直接間接を問わず管理者の関与はないだろうし、外部の者の仕業にしても稚拙すぎる。

だからこそ、今の状況を知る何らかのヒントになるかもしれない。そう考えたが故だ。

あるいは、彼女も焦っていたのかもしれない。

だからこそ、短慮であると思いつながらも情報を得られる機会に飛びついたのだろう。

だがその決断は、結果的に彼女にとって最良のものとなる。

「これは……酷いわね」

魔力の気配を追って侵入したのは、何の変哲もない一軒家。

扉に鍵はかかっていたが、そんなもの彼女にとってはないも同然。

魔術で軽く解錠し、簡単な隠行の魔術で侵入を果たすことができた。

案の定と言うべきか、侵入されることは想定してないらしく、結界をはじめ諸々の備えはなし。

まあ、そのおかげで楽々侵入できたのだが……内部は、惨状としか言いようがなかった。

恐らくはこの家の住人であろう中年夫婦とその親と思しき老婆、それに子どもが二人。

誰一人として生存者はおらず、全員がいつそ鮮やかな手際で殺されていた。

（魔力の元は……これね。でも、これって……）

死体に魔力の気配はなかったが、代わりに足元から微かな魔力を感じる。

薄暗いため見づらくはあるし、まだ不完全ではあるが……それは、彼女にとって無視できないものだった。

（サーヴァントの召喚陣、この人たちの血を使って書いているのね。

でも、こんなやり方で陣を描くなんて、三流術者だつてやらないわよ。それに……）

リビング中央の召喚陣とは別に、壁に掛けられたカレンダーには無視できない数字が書かれている。

もしそうだとすれば、あまりにも想定外だ。

だが、あまり状況を飲み込むための時間は与えられていないらしい。

廊下の方から水の流れる音がしたかと思えば、扉の開閉音と何者かの足音が聞こえてきた。

「いやあ、まいったまいった。俺としたことがこんな大事な時に催すとはねえ。

にしても、どうするかなあ。思っていた以上に血が足らなくて結局全員殺っちゃった

けど、せっかく悪魔呼んでも生贄の一つもないんじや悪いよなあ」

「悪魔？ ふうくん、いったいどこで知ったのか知らないけど、随分半端な知識しか持っていないようね」

「ん？ あれ、お嬢ちゃんどこに隠れてたの？ っていうか、絶対この子じや……」

「生憎、あなたの質問に答える気はないわ。私の質問に、嘘偽りなく答えなさい」

外見相応、あるいはそれ以下の身体能力しか有さない彼女だが、それ以外の武器がある。

相手が弟にも劣るど素人となれば、暗示にかけることなど訳はない。

この場の下手人であろう男を即座に暗示にかけると、必要な情報を聞き出していく。とはいえ、聞きたいことなど精々二つだけだったが。

——— 今の年月日は？

——— いったい何をしようとしていたの？

ただ、それだけ。男の素性やその他諸々に興味はない。

本当に、自分にとって必要な情報だけを尋ね終えた彼女は、最後に命令を与えた。

「そう。じゃ、あとは誰かが起こすまで眠っていなさい。もちろん、目が覚めても逃げないこと」

その指示を聞き届けると、それまで虚ろな表情で答えていた男は倒れるように血溜り



の中で眠りにつく。

これで、地震が起きようが嵐が来ようが起きることはない。

あとは、誰かが見つけて警察にでもしよつ引かれるだろう。

「ふうん、令呪の兆しはもうあるのね。シロウは……まあ、なんだかんで選ばれるべくして選ばれたけど、これは人数合わせにもほどがあるわ。まあ、せつかくだしそれは貰っておくけど」

男の手の甲に刻まれた痣が、少女の元にあっさりと移動する。

男から必要な情報を得たことで、少女はいま置かれている状況を把握することができた。

これから先、これは必ず必要になる。

「それにしても、まさかずっと先の未来じゃなくて十年前とはね。ホント、いったい何がどうなってるのよ」

理屈をはじめ何もかもが不明なままだが、今の状況だけは理解できた。

今は、彼女が生きていた時代から十年前。まだ彼女が両親と共に過ごしていたであろう時期。

いや、今はもう両親は帰らぬ戦いに出立した後か。

とはいえ、それなら衛宮邸の有様も納得がいく。

家事の達人である弟があの家に住むようになるのは、今より少し後の話。

それ以前がどうだったかは知らないが、あの様子からして空き家だったのだろう。

大聖杯のことも、それなら得心が良く。

(まあ、遠坂の所に行く前でよかった。それに、いいこと思いついちゃった♪)

魔術師ですらない人数合わせの男から兆しの痣を奪うのと前後して浮かんだアイディア。

何の奇跡か偶然か、こういう状況になってしまったのなら……やってみるのもいいかもしれない。

(どうせいつまで動けるかわからない身体ですもの。なら、精々少しでも心残りを晴らしてみましよう。

まずは、あの子と縁のあるものつてなると……やつぱり「土蔵」かしら。なら一度引き返して、それから相談して決めましょ。乗ってくれるといいんだけど……)

この先のことを考え微かに笑みを浮かべながら、それまでとは一転して軽い足取りで立ち去っていく。

「さあ、せつかくの機会ですもの。最初で最後の反抗期、はじめちゃうから覚悟してよね、キリツグ」

※以下、セリフのみによるダイジェスト版、そして盛大なネタバレの嵐です。

「召喚に応じ参上した、君が私のマスター……か？」

「ええ、よろしくアーチャー」

「……………」

「あら、どうしたの？ 見惚れちゃった？ それとも、懐かしい？」

「いや、状況は理解した。色々と疑問点はあるが、君にもわからないことを聞いても仕方がないな」

「あく、その他人行儀な感じやだなあ。別に、私のことは『お姉ちゃん』って呼んでくれていいのよ」

「外見から言えば、『妹』……いや、むしろ『娘』だろうに」

「あら、それを言うなら『誘拐犯』と『攫われた女の子』じゃないかしら」

（この上なく苦々しい表情だが、否定できないとも思っている）

「とりあえず、一つ訂正しておこう。というか、真っ先に気付くべきではないかね」

「？ なにか？」

「私のクラスはアーチャーではない。キャスターだ」

「え？ まあ、弓兵よりも妥当と言えば妥当だけど……」

「それで、聖杯にかける望みでもあるのかね、君は」

「そんなものはないわ。というか、今の話を聞いてなんでそうなるのよ」

「確かに。最早私には思い起こすことができないが、そのような破綻した願望機に願ったところで結末はしているからな。だが、ならば君はなんのために聖杯戦争に参加する？」

「そうね、強いて言えば前はできなかつた反抗期をしようかと思つて」

「反抗期？」

「ええ。シロウもせつかくだしどう？ この際だから、思いっきりキリツグを振り回してあげようと思うんだけど」

「……………くつ、なるほど。それは確かに、君だけの特権だ」  
「違うわ。私じゃなくて、『私たち』の特権よ。子どもが親に甘える、ごく当たり前のことでしょ？」

「あく、あのバーサーカー、シロウとの相性最悪だわ。ちよつと勝ち目が無いと思う」

「ほう、それは困つたな。それで、いったいこのサーヴァントかはわかるかね？」

「なんか隠蔽能力みたいなのがあつて、ステータスすらよく見えないのよね。」

でも、状況から考えて間桐のサーヴァントだと思う」

「なるほど、ならば都合だ」

「そうね、敵としては相性最悪だけど、味方としての相性はむしろすごく良い。」

「サクラを助けるついでに、マスター権だけでも奪えるといいんだけど」

「ねえシロウ」

「なにかね？」

「カリヤ、あのままでいいの？ 勝てるとは到底思えないけど、万が一うまくいっても、父親殺したらむしろサクラ……はわからないけど、リンからは恨まれると思うんだけど」

「まあ、少なくとも良い感情は向けられないだろうな」

「でも、カリヤはそれがリンやサクラのためになると思ってるのよね？」

「そうだな。おそらく、冷静な思考能力はもうないのだろう」

「元はサクラを助けるためにだったのに……」

「残念ではあるが、致し方あるまい。すでに説得が通じる状態ではない。事実を突きつけたところで、かえってコントロールできなくなるのが目に見えている。ならば、彼の最初の想いにできるだけ沿う形で誘導してやるべきだろう」

「いいの？ セイバーに声をかけなくて」

「今の私と彼女の間柄ではな。何を言ったところで、敵の言葉を鵜呑みにするとも思えない。」

「まあ、今回は君の提案に乗ると決めたのだ。横道は極力控えるさ。それに……」

「それに？」

「今回ではないようだが、いずれ彼女が解き放たれるときは来る。

その時に関わるのも、やはり私なのだろう」

「ふう〜ん」

「さて、一つ取引といこう」

「取引ですか？」

「ああ。間桐は早晩潰える。そこで君のもう一人の娘、桜の身の振り方についてだ」

「でも、それは夫と……」

「確かに、遠坂時臣が遠坂の当主であるからにはそうするのが筋だろう。

だが、今は聖杯戦争の真つ最中。最終後もあの男の命があるとは限らん以上、より生きていく可能性の高い者と交渉すべきと判断した」

「っ！ それは、あなたが夫を殺すという事ですか」

「特別狙っているというわけではないが……かといって、助ける義理もないのでね」

「それは……」

（実際問題として、あの様子だとうまく事を運ぶのは難しいのよね。リンには悪いけど、トキオミには死んでもらった方が都合が良いし）

（否定はしないが、君はリンも助けたかったのではないか？）

(ええ、そうよ。私が助けたいのはリンとサクラ、そしてシロウ。

積極的に殺すつもりはないけど、サクラを助けるのに邪魔になるならそうするわ)

「桜が間桐に養子に出された理由は大凡察しがついている。彼女の才覚を思えば、養子に出すという選択そのものは理解できる。まあ、相手のことをもう少し考慮すべきとは思うがね」

「なにを、言って……」

「とはいえ、先ほど言った通り間桐は長くない。ならば、代わりに養子先が必要だろうか？

そこで私は、衛宮切嗣を推す」

「衛宮の魔術は時間干渉。虚数属性の桜との相性も悪くはない。また、あの男は魔術師ではなく魔術使い。良くも悪くも魔術師としての拘りが無い。身を守るために魔導の教えを必要とする桜には、むしろ好都合な相手だろうさ」

「……」

「無論、ただでは言わん。これに応じてくれるのなら、君に……いや、遠坂にこれを譲ろう」

「これは、いったい……」

「真作ではなくて申し訳ないが、それでも性能的には申し分ないと自負している。凜なら、それがあれば階を掴むことができよう」

「あなた、は……」

「ふむ、目が覚めたかね。アイリスフィール・フォン・アインツベルン」

「サーヴァント、キャスター」

「ああ、お察しの通り。と言つても、未だ顔を見せていないサーヴァントは私一人なのだから、そう考えるのは当然だな」

「なぜ、私を……」

「むしろ当然だろう？ 君は今回の儀式の賞品そのもの。手元に置いた方が有利なのは明白だ」

「っ!？」

「クツ、思いのほか素直な反応だが、そういうものは隠した方がいい。でないと、せつかくの隠蔽が意味をなさない」

「カマをかけたのね」

「いいや、この件に関して言えば既に知っていたことだ」

「それは、どういう……」

「ふむ、答えるのは吝かではないが、体調の方はどうだね？ だいぶマシになっているはずなのだが……」

「え？ ど、どうして……あなた、私に何を！」



「私は何もしていない。ただ、私のマスターが君の負荷の原因を取り除いた……いや、この場合は奪ったというのが正しいか。完成度で言えば、彼女は君を上回るからな」

「聖杯に興味がないといったな、キヤスター」

「ああ、その通りだ」

「ならば……ならば私に渡せ！ 私には聖杯が」

「必要か？ だが、断る。私は聖杯に興味がない。しかし、誰かに渡すつもりもない。

あれは、私の手で破壊する。もう二度と、こんな馬鹿な真似ができないよう完膚なきまでにな」

「なんだと！」

「あれは君が考えているようなものではない。いや、そもそも君に聖杯など本当に必要なのか？

よく思い返せ、アルトリア・ペンドラゴン。君は本当は、何が欲しかった。何のために王になった」

「だまれ！ 何も知らぬあなたに知った風な口をされる謂れはない！」

「そう、だな。最早君の事情を思い出せぬ私に、何を言う資格もない。ならば、腕づくで阻むのみだ！」

（バカな、バカなバカなバカなバカなバカなバカなバカなバカなバカなバカなバカな!!）

なぜ、私の剣が防がれる。これではまるで、剣の間合いも、私の太刀筋も全て見切られているようではないか)

「君の疑問は正しい。確かに私は、君の間合いも太刀筋もよく知っている」

「なに！ 私はあなたと合ったことなど……」

「ああ、ない。ただし、それはあくまでも『君』に限った話だがね」

（いったい、いったい彼は何を言っている。私は知らない、なのに彼は知っている。そんなことがあるわけが……）

「あるだろう、一つだけ。交わるはずのない線が交わる可能性が」

「っ！ あなたは、まさか……」

「そういう事だ。君にとつてはあずかり知らぬことだろうが、あえて言わせてもらおう。

『久しぶりだ』な、セイバー!!」

「なかなかどうして、私も捨てたものではないだろう」

「……………ええ、見事でした。まさか、魔術師相手に……」

「だとすれば重畳。今思えば、私はずっと……君に届かせるために剣を振るい続けているたのかもしれないな」

「私の、ため……」

「どうかね、騎士王。まだ、聖杯を求めるか？」

「……………ええ、私はまだ引き下がるつもりはありません」

「やはり、そう何もかもうまくはいかないか。まあ、イリヤの目的は概ね達せられたのだから、それで良しとしよう」

「ですがそれは、聖杯に願いを託すためではありません」

「？」

「あなたは私が間違っていると聞いた。私はそれを易々と受け入れるつもりはありませんが、あなたの言に耳を傾ける価値があることは認めます。故に……………いつか示して見せなさい。私が納得のいく答えを」

「……………なるほど、そのための聖杯か」

「ええ。聖杯を追い続ければ、いずれまたあなたと出会う日も来るでしょう。その時には、今度こそ」

「承知した。では、私も精々君に示すに足る答えを探すとしよう」

# へりりカルなのは×F G O魔法少女リリカルなのは 星見の夢現く

『胡蝶の夢』という言葉がある。

夢と現実とがはつきりと区別できないこと、またその区別を超越できないことのとたとえとされ、中国の思想家『莊子』が、蝶となつた夢を見、目覚めた後、自分が夢のなかで胡蝶になつたのか、胡蝶がいま夢のなかで自分になつていいのか、と疑つたと伝える『齊物論』の故事に由来する。

この言葉はある意味、藤丸立香という人間の在り様を的確に表現しているといえるだろう。

いつの頃からそうだったのかはわからない。何かきっかけがあつたのか、あるいは初めからそうだったのか、もはや判然としない。ひとつ確かなのは、俺には自分とは別の私の記憶が並列して存在しているということ。

どちらが夢で、どちらが現なのか、はつきりとしたことはわからない。荒唐無稽なあちらの私の方が夢であるようにも思えるし、その実俺こそが私の見る夢なのかもしれない。

思春期の頃には割と真剣に悩んだりもした。なにしろ、こちらの俺私は男性なのに対し、あちらの私俺は女性なのだ。そりや色々悩む。色々が具体的に何かは聞かないでほしい、色々は色々だ、『色』だけに。

……いや、つまらないことを考えるのはよそう。

ただ、どうやら自分藤丸立香という人間は、あちらもこちら俺も夢というものに縁の深い人間らしい。なにしろ、あちらの私俺はこちらの俺私を認識することはないが、代わりに色々な夢の中に迷い込んでいた。

そう、当初は平凡な人生を送っていた私俺だったが、ある時気まぐれで受けた献血がきっかけでスカウトされ、あれよあれよという間に「フィニス・カルデア」なる場所に足を踏み入れることになった。

そこから先の人生は荒唐無稽にして波乱万丈、一時期は「あ、あ私ちが夢だな」とも思ったものだが、夢というにはあまりにも生々しすぎた。なにしろ、あ私ちらが受けた傷と同じものがこちら俺にもあつたし、夢を見ている間はそれが夢とは思わず死に物狂いで駆け抜けた。あちらとこちらでは時間の流れが違うのか、一夜で数日が経過することもあれば、その逆もあつた。まあ、総合的にはあ私ちらの方が進みが早いようで、気付くと数年の差が生じていたが……まあ、この程度は些細なことだろう。

問題なのは、ダメ押しとばかりに私俺が身に着けた魔術と交わした縁私が俺私にも繋がって

いたこと。

どちらが夢にせよ、あれは決して蔑ろにしてはいけないものだと思つたのにそう時間はかからなかった。

だから、彼らと縁を結んだ身として、最低限の責務を果たさなければならぬ。

あちらで言うところの霊基グラフの代わりとでもいうように、全身に刻まれた彼らと繋がる“シルシ”。

当初、この身に刻まれた縁はわずかだったが、なんとなくどこにそれがあるかが分かった。高校生の長期休暇というのは、まあそれなりに自由が利くものだ。両親が割と自由にやらせてくれる人だったおかげもあるが、とりあえずは日本全国津々浦々、わずかに感じる縁を辿って“シルシ”を集めて回った。あちらの私の旅俺に比べれば、マウンテンバイクに跨つての一人旅など何ほどのものでもない。まあ、共に旅する相棒後輩がいな  
いことには、一抹の寂しさを覚えたものだが。それでも高校を卒業するにはあらかた集め終わったものの、どうやら全体の1/10にも届いていないらしい。

残るは海外。離れば離れるほど距離感も方角も曖昧になるが、放置するわけにもいかない。旅先で偶にあったことだが、“シルシ”から力が流れ出し“シャドウ”のような状態になったこともあった。騒動になる前に回収できたのは、幸運以外の何物でもない。次もまた幸運が働くとは限らない以上、早急な回収が望ましいだろう。

幸い、大学に進学したことで行動の幅も広がる。おそらく、数年後にはパスポートは様々な国の判で埋め尽くされることになるだろう。

皆の力を借りられればいいのだが、あいにく俺の魔力量ではサーヴァントの召喚は一騎が精一杯。二騎目を維持する余裕もないし、それどころか長期的に一騎を維持することすら難しい。ましてや、宝具の発動など論外だ。カルデアのような魔力供給システムを確立できれば解決できる問題だが、一学生の個人資産で作れるようなものではないし、そのための知識も技術もない。作れる仲間にも心当たりはあるが……

「いや、その程度のことのために呼びつけるわけにはいかないよな」

いつだって結論はここに行きつく。みんなと会えないことに寂しさを覚えたことは一度や二度ではない。でも、「シルシ」の回収は基本的に一人でできるし、必ずしも皆の力が必要なわけではない。そもそも、皆が力を貸してくれたのは「人理の危機」があったからこそだ。そういった緊急事態でもないのに彼らの力を借りるのは、きつと違う。安易に彼らの力に頼り、縋ってはいけない。それはきつと、みんなとの縁、彼らの信頼への裏切りに他ならない。

できることはできる範囲で努力し、できないこともできる範囲に収めるべく最善を尽くす。そのうえで、どうしても足りない部分を補わなければならない、そんな時にほんの少しだけ力を借りる。たぶん、それが正しいのだ。

そもそも、何のために自分にはあちらの記憶があるのだろうか、彼らとの絆が残されているのだろうか。

そこに意味があるのか、実は意味などないのか。

彼らとの交流の中で鍛え上げられた対人スキルのおかげで、幸い色々なところに顔が利く。こちらにも多少の不可思議なことはあるようだが、彼らの力を必要とするほどではない。

この世界で生きていくには、あまりにも過ぎた力と繋がった自分。いったいどうすればいいのか、自問自答の日々は続くが答えは出ない。

いや、実を言えば少しだけ不安なのだろう。

俺私は本当はみんなと縁を紡いだ私俺ではなく、みんなと共に旅をしたマスターではないのではないかと。彼らを召喚すれば、それが明らかになる。それが……怖い。自分私はみんなのことを知っているのに、「お前は誰だ」と問われることが恐ろしい。

「まあ、それでもやらないうけにはいかなんだけどさ」

とにもかくにもシルシの回収は必須だ。力の流出はそうあることではないので、のんびり気長にやればいい。一人にできることなどたかが知れているし、できる範囲で頑張るしかないのだから。

さしあたっては、ゴールデンウィーク中にもまずは大陸に渡るべく準備を進めるべ



きか。パスポートは手配済みだし、旅券も問題なし。あちらとこちら、その双方で旅慣れてはいるつもりだが……準備に手を抜くべきではないだろう。

不測の事態はいつ何時でも起こりうる。

そうちようど、今まさに目の前でオレンジ色の毛並みの狼（つぽい生き物）が同年代のグラマラスな美女に変身したように。

（バイト帰りに、近道しようとしたのがまずかったかなあ……）

「……」

「……………」

「……見たね」

「……いえ、拙者何も見ていないでござるよ」

「……ああ、そうかい。そいつは悪かったね」

「いえいえ……」

「ところで、狼つてこの辺りじゃやっぱり目立つかねえ？」

「犬で誤魔化せないこともないと思うけど、あのサイズだとどうしても……あつ!!」

「やっぱり見てんじやないか——つ!!!」

「しまった——つ!?!」

ふじまるりつかはにげだした。しかしまわりこまれてしまった。

そのままビル脇の路地裏に引きずり込まれる立香。遮音の結界でも貼ってあるのか、いくら夜間とはいえこれだけ叫び合っても誰もものぞきに来ない。それが誰にとつての幸で、誰にとつての不幸かは定かではないが。

とりあえず、割と「見ちゃいけないものを見た」らしく、訳も分からないままひときわ高いマンションの一室に連行される。

そこで待っていたのは、古今東西の美男美女を見慣れた立香をして「将来的には美の女神もかくや」と思わせる、長い金髪をツインテールにした黒衣の少女。

「アルフ? どうしたの、その人」

「ごめん、フェイト! 実は……」

両手を合わせて勢い良く頭を下げ、かいつまんで何があったかを説明するアルフ。よく見ると、いつの間にか頭の横に犬耳と腰の後ろに尻尾が生えている。

なんとなく蚊帳の外とか口を挟み辛いとか、手持無沙汰な立香は何とはなしにマンションの一室に視線を巡らせる。広々としており家賃は相応に高そうだが、あまり生活感を感じられない。人が暮らしていれば相応に染みつく、それぞれの「匂い」がまるでないのだ。

(仮宿つてところかな? それにあの子たち……退魔士や妖怪の類がいるのは聞いたことがあるけど、そのどれとも違う。魔力っぽい感触はあるけど、なんか違うんだよなあ)

あちらの自分が収めた技術や知識については、こちらの立香も無駄にはできないと一応修練は積んでいる。まあ、元の才能がお察しなので、大したことはできないが。

それでもある程度魔力を感知する感覚はあるのだが、いかんせん目の前の少女たちから感じる力の感触はいまいち判然としない。魔力つぽいものがあるような気はするのだが、いまいち図り切れない。まるで度のあつていない眼鏡越しに対象を見ているような感じだ。

それはあちらにとつても同じなのか、微妙に警戒心をはらんだ視線が向けられている。魔力を帯びていることに気付いたのなら相応の警戒をするはずだし、逆ならこのようなどちらともつかない視線を向けないはず。彼女たちとしても、立香のことを扱いかねているのだろう。

なんてことを考察していると、フェイトと呼ばれた黒衣の少女が歩み寄ってくる。

「あの、ごめんなさい。アルフのこと、見ちゃったん…ですよね？」

「うん、まあ」

もう誤魔化しても仕方がないので、素直に答える。内心では、少しばかり身構えながら。いったい何が語られ、何を聞かれるか。その場合、どこまで話せばいいか慎重に思考を巡らせていた立香だったが、フェイトの口から出たのは予想外の言葉だった。

「あなたには、しばらくここにいてもらいます。できるだけ早く自由になれるよう頑張

りますから、少しだけ我慢してもらえませんか？」

俯きながら、心底申し訳なきそうにか細い声で紡がれる言葉。何も聞かない代わりに、何も教えない。つまり、一切合切関わらせるつもりがないのだろう。その上で、秘密を知られてしまったから事が済むまで拘束する。そういう方針ということか。

もしここで開放すれば、余計な情報の流出が発生し何らかの不都合が発生するかもしれない。少なくとも、彼女がしようとしている何かにはそれが起こりうるということだ。何も聞かず語らないのは、巻き込みたくないからだろう。

気持ちは、わからないでもない。同時に、優しい子なのだろうとも思う。拘束云々は彼女の都合だが、聞かず教えずの姿勢は立香への配慮が見て取れる。だが、こんな小さな子がこうまで背負い込むのは何とも痛々しい。せめて少しくらいは……と思ったのだが。

「あー、それは……」

「本当に、ごめんなさい」

（やれやれ、これはまた……）

随分と意志が固い……いや、これは頑固や意固地に近いかもしれない。それなりに対人関係においては質・量ともにこなしている立香だが、話を聞く気がない者が相手ではできるとは限られる。

少なくとも、フェイトの心の扉を開くには相応の時間を要するだろう。

そして、今の彼に彼女の要求を突っぱねる手段はないに等しい。なにしろ、もてる技術と力を総動員してもアルフから逃れられる自信が全くない。なら、答えは一つだ。

「はあ……わかった。とりあえず、ここから出なければいいんだね？」

「はい。この部屋の中なら、自由にしてもらうていいので」

「OK。ただ、大学の友人とバイト先には電話させてくれないかな。無断欠席と欠勤はさすがに不味いからさ。もちろん、余計なことを言わないかの確認がてら傍についてもらうて構わないから」

「不自由させるあんたには悪いけど、もしもなにかやろうてんなら……」

「アルフ、ダメだよ！　ごめんなさい。そういうことでしたら大丈夫ですから」

そうしてフェイトの許可を得たところで、立香はバイト先にはしばらく欠勤すること伝え、大学の友人にも代返を頼む。幸い顔が広いこともあって、どちらも快諾をもらえた。まあ、大学入学後まもなくしばらく欠席になるとは思いもしなかったし、まさか「年下の女の子に拉致監禁」される羽目になるとはもつと思わなかっただろうが。

こうして立香とフェイト、そしてアルフとの奇妙な共同生活が始まった。

二人は昼夜を問わず度々外出し、部屋には鍵以外にも何らかのロックがかけられるこ

とに。立香では詳細はわからなかったが、テレビは見られるし二人が雑誌や新聞を差し入れたりしてくれるので、「監禁」という字面ほど不自由には感じなかった。

むしろ、問題なのは食事面。何をしているかは知らないが、忙しいのはわかるとはいえ、レトルトやコンビニ弁当の類で済ませるのは如何なものか。

大学進学を機に一人暮らしを始めた立香だが、一応は自炊する方向で生活を組み立てている。この辺り、あちら側の自分と契約した某オカンの影響だろう。腕前は「男料理」の域を出ないが、さすがに小さい女の子の不摂生は見逃せない。というか、どう見たって顔色が悪いフェイトを放っておくなどできるはずもない。

まずはアルフに食材を買ってこさせ、消化に良い粥や野菜スープで胃を鳴らすことから始めることに。気付くとどこぞのメシ使いよろしく、すっかり家事全般を請け負ううになつていた。

まあ、アルフがドッグフードをスナック菓子感覚でバリバリ食べていたのには若干引いていたようだが。ただ、そのアルフからは……

「あんだ、自分の置かれてる状況理解してんのかい？」

と苦言を呈されることに。もちろん立香とて自分が監禁されていることはちゃんと理解している。ただ、その程度で物怖じするような神経はとうの昔に放り捨てているだけだ。

そんな日々が続くうち、やがてフェイトが怪我をして帰ってくるが増えた。ある時は手を、またある時は肩を、酷い時には全身を鞭で打たれたような姿で。その度にアルフとともに手当てをしてきたが、ついに今日アルフは返ってこなかった。

誰よりもフェイトを案じていた彼女がフェイトの傍にいない。その異常性を立香はよく理解していた。

「フェイト」

「なにも、聞かないで」

フェイトは頑なだった。何度か立香も対話を試みたものの、何も語ろうとはしない。普通に話ができるようになったし、食事をはじめとした家事のことで感謝もされている。そういつたことについては、恥ずかしがったり控えめながらに自分の思いをちゃんと口にしてくれる子だ。きつと、しっかりとした大人に厳しくも優しく育てられたのだろう。

ただ、外で一体何をしているかや彼女の関係者にまつわる話になると固く口を閉ざす。そこに、彼女なりの配慮が多分に含まれていることはわかる。立香を巻き込まない、その一点においてフェイトは大変頑固だった。

いつそ空気を読まずに踏み込むべきかと思つたことは一度や二度ではない。だがきつと、それをすればフェイトはもつと頑なになるだろうことは容易に予想できた。

ただでさえ、最近の彼女は悲壮感すら漂っている。これ以上追い詰めるようなことはしたくない。むしろ、少しでも心身を安らげられる場所を提供すべきではないか。そう思った立香は、あえて踏み込むことをしなかった。

代わりに、彼が選択したのは……

「あっ……あのー！」

「何も言わなくていいから。今はゆっくり眠るといい」

「……………はい」

フェイトをベッドに横にならせ、その頭をやさしくなでる。

(子守歌の一つでも歌ってあげられれば、いいんだけどな)

歌とかハロウィンとかには、あちら側の影響で若干トラウマがある。夢にトラウマを植え付けられるとは、何たる理不尽か。おかげで、懸命に頑張っている子どもに子守歌すら歌ってやれないのだから。

だから、立香はせめて精一杯の思いやりを込めて絹の如き金の髪に触れる。この健気で優しい子が、少しでも張り詰めた心を緩められるように。

「フェイトは、偉いね。その年でこんなにも頑張って……君は、本当に立派だ」

「私は、そんなんじゃない……」

「それは、君がよくないことをしているから？」



「っ!? それ、は……」

「答えなくていい。ただ、君の様子を見ればなんとなくわかる。正しいと思えることをしているなら、君はもつと誇らしく胸を張っているはずだ。そうじゃないってことは……そういうことなんだろうって、俺が勝手に思ってるだけ」

実を言えば、フエイトたちが何をやっているかはすでにある程度つかんでいる。稀釈した自分の血を使って描いた召喚陣。散々悩みはしたが、どうしてもフエイトを放つてはおけずサーヴァントの召喚に踏み切った。喚んだのは、諜報においては無類の力を発揮する「百貌のハサン」。正直、どうなるか不安だったのだが……

「アサシン、ハサン・サツバーハ。召喚に応じ参上した、汝が我らを招きしマスターか」  
(ああ、やつぱり……)

その声を聴いて思ったのは「やはり」という諦観だった。

結局、彼らと縁を繋いだのは俺私ではなく、あちらの私俺だったのだろう、と。

だがそんな思いは、堪え切れぬとばかりにあふれた笑い声によってかき消された。

「く、ククククク! ハハハハハ!! なんとという顔をしているマスター! ああまったく、雨に打たれる捨て犬のような顔をなさるとは……我らに他人行儀にされるのがそれほど寂しいので?」

「百……貌?」

「安心召されよ、我らが主よ。たとえ世界が違おうと、姿かたちが変わろうと、あなたが我らがマスターであることに変わりはありませんぬ」

「……………泣くよ、割とマジで」

こうして召喚した百貌の一人をフェイトに着け、残りで街を探査。結果、途中参加ということもありことの仔細まではわからないし、フェイトたちが転移したりした場合には同道できないので肝心かなめの部分はよくわかっていないが、ある程度の情報はつかむことができた。

まあ、それ以前のフェイトの様子から得た印象だけでも、今話している程度のことには察せられていたのだが。

ちなみに、召喚陣については百貌たちに協力してもらって完璧に始末したことで、フェイトたちには怪しまれていないらしい。

「たとえ君のしていることが正しくないとしても、それでも君が誰よりも頑張っていることは本当だ。それは、事の善悪とは別の問題だよ。一生懸命頑張っている、その事實はちゃんと評価されるべきことだ」

「……」

「だから、君はとても立派だと思う。誰かのためにそんなにも頑張れる君は、いつかきつと……みんなに愛される女性ヒトになれるはずだ」

「愛……して、もらえるのかな？」

顔を枕に埋めたまま、か細い……涙声が漏れてくる。

「うん、きつと……」

「私、頑張ってるよね？」

「ああ。ちよつと頑張りすぎなくらいに」

「頑張ったんだ、母さんに喜んでほしくて。頑張って……でも、なんでこんなに辛いのかなあ？ 私はまだ、母さんに笑ってほしただけなのに……」

それは、初めてフェイトが零した自身にまつわる話であり、心からの慟哭だった。

甘えることをせず、弱音を吐くことなく、痛ましいほどに強くあろうとした彼女が見せた弱さ。

そこから先は、もう言葉にはならなかった。継りつき、ただひたすらに泣きじやくるフェイトを、立香はただ黙って受け入れる。

ある程度状況を理解しているとはいえ、彼女の家庭環境については無知に等しい。何も知らない者が、賢しげに語っていいことではない。

一体どれほどそうしていただろう。ようやく泣き止んだフェイトだが、まだ嗚咽を漏らしている。

そんな彼女に向けて、立香は心に深く刻まれた言葉を贈る。今すぐでなくてもいい。

いつか彼の言葉が、この優しい少女の救いになればいいと願って。

「ある人が言っていた。命とは終わるもの。生命とは苦しみを積み上げる巡礼だ、って」  
「……じゃあ、私たちは生きている間ずっと、苦しまなくちゃいけないの？」

「いいや、それは違う。確かにあらゆるものは永遠ではないし、最後には苦しみが待っているのかもしれない。」

でもそれは、断じて絶望なんかじゃない。限られた生をもつて死と断絶に立ち向かうもの。終わりを知りながら、別れと出会いを繰り返すもの」

そう、それは決して苦しいだけの道ではない。生きるということは誰かと出会うということ。出会いとは、魂の欠片の交換だ。受け取った欠片は自分自身と混ざり合い、次の誰かに新たな欠片となって引き継がれる。

そうして人はどこまでも遠く、どこまでも広く繋がっていく。たとえ生命が終わったとしても、自分という存在は終わらない。それが人間という種の輝きであり、それこそが歎びなのだ。

「……輝かしい、星の瞬きのような刹那の旅路。これを、愛と希望の物語と云うんだよ」  
「よく、わからないよ……」

「大丈夫、いつかきつとわかる日が来る。たくさんの人と出会って、別れて……そうしていつか気付く。君の人生は、ただ目が覚めているだけで——」

そうして、最後の夜が更けていく。

翌朝、決意を秘めた表情でフェイトは立香に別れを切り出した。「たくさん迷惑をかけてごめんなさい」「いっぱい優しくしてくれてありがとう」「何も返せなくて……」そこまで言ったところで、立香はフェイトの頭を優しく撫でて言葉を止めた。

「フェイト。いいかい、覚えておくといい。こういう時はね、『またね』っていうんだよ」「でも、私はもう……!」

「縁は異なるもの。どこでどう絡み、結び、繋がるかわからない。一度はキレた縁が、思いもかけない所でひょっこり顔を出したりするものさ。俺も君も、まだまだ人生は長い。だから、何かの拍子でまた会うことがあるかもしれない。だからここは、『またね』が正しいんだよ」

そうして二人は別れた。この時のフェイトにとっては今生の、立香にとっては一時の別れ。

なんとなくだが、彼女とはまた会う気がしていたから。

同時に、フェイトの様子から終わりが近いことは予想できた。きつと舞台は、地球ここではないどこか。

英霊とは人類の超越者ともいえるべき超人たちだが、それでもフェイトたちの足跡を追えるものは限られる。

ずっと蚊帳の外ではあったが、立香はせめてあの優しい女の子の顛末を見届けたかった。

だから、喚ぶ。ぶっちゃけ、すつごく気は乗らないのだが……いま回収しているシルシの中で、それができるものはあのロクデナシしかないから。

「あゝ、すつごくヤダ。フェイトはあんなにいい子なのに、なんでよりもよつてあんなのを……」

口ではブーブー文句を言いつつ、久しぶりに戻った自室で召喚陣を組み上げる。すでに百貌は一度退去させている。魔力の余裕はあまりないが、どうせこれでケリがつく。ならば、多少の無茶は許容範囲だ。

で、召喚は成功し、狙った相手はちゃんと来てくれたのだが。

「やあ、久しぶりだねマスター君。事情は大体承知しているよ、ほら私『千里眼』持ちだからね。いやあ、あんな女の子を弄れるなんて、すごく……」

「余計なことではないこと。あくまでも目的は見届けることであつて、茶々は入れない。本当に、どうしても必要な時以外は口も手も出さない。オーケー？」

「えゝ、それじゃつまらな……」

「ん？」

「はいはい、お望みのままに。まったく、君がそこまで気に掛けるとは……まあ、いずれ

の楽しみにとっておこう」

そうして、自力で獲得した「単独顕現」を用いて立香の縁を辿り消える花の魔術師。改めて、あんなのにフェイトを任せなければならぬ現状に頭を抱える立香だった。

「つとと……あ、これはちよつとやばいかも……」

さすがに、この短期間でサーヴァントを連続して二騎も召喚するのは堪えたようだ。

パラケルススから学んだ秘薬を一息に煽り、早々にベッドの中へ。フェイトのことを心配していないわけではない。むしろ、花の魔術師は夢魔との混血だ。夢を通じて彼が見ているものを見られるように手配済み。

そこで立香は、一人の母親の大きく純粹であるが故に踏み外してしまった愛を垣間見る。

それは悲しくも、何よりも美しい娘への愛だった。だからこそ、花の魔術師に頼んだ。虚数空間という魔法の使えない領域に落ちる彼女の夢と繋げることを。花の魔術師の夢に関する能力は、術というよりも夢魔としての生態に近い。どうやら魔術も成立しない空間のようだが、それでも関係はない。

そこで預かったのは、遅すぎたかもしれないが大切なことを思い出した彼女から託された遺言。いずれ機を見て伝えることを約束した彼女の顔は、本来の穏やかな為人がかがえる、フェイトによく似たものだった。

\* \* \* \* \*

ところで、話は全然変わるのだが、立香にはここ「海鳴市」で大変気になる人物が一人いる。

とても良く見知った風貌で、名前にも憶えがあつた。まあ、風貌の持ち主と名前の持ち主はそれぞれ別の人物なのだが。とはいえ、彼の知る人物たちとは微妙に違う。

まず年齢、立香の知る彼と似た人物たちは十代後半か二十代後半の容貌だ。だが、彼は高く見積もっても十代半ば。見かける時は買い物袋を提げているか、フェイトと同年代と思しき少女の乗った車いすを押していることが多い。まあ、その辺はなんだかとても「らしい」としか言えないが。

(まあ、俺っていう例もあるし、あつちも記憶が同期しているかはさておき、並行世界的なアレなのかな?)

なにやら、並行世界の同一人物がうんぬんかんぬんという話を某聖杯の少女に聞いたことがあるような、ないような。まあ、穏やかに暮らしているようなので変な茶々を入れることはすまい。

縁があれば、そのうちちゃんと出会うときが来るだろう……と思っていたのだが、



フェイトとの別れから数ヶ月後、何とも奇妙というか、なんとというか……。

件の車いすの少女の他に、妙齡の美女二名と幼女一名にアルフ並みにデカイ犬（狼？）を連れだした一行の一員として歩いているではないか。『可愛い子なら誰でも好きだよ、オレは』とか言つちやう色黒のほうを思い出し、もしかしてそういうあれなのか、と思つたとしても許されるだろう。

まあ、実際にはステディというよりもファミリーだったわけだが。

あと気になることがあるとすれば、百貌たちをフェイトにつけていた時、彼女と何かとぶつかり合っていた白い女の子のことか。白状すると、割とあれにはびつくりした。

何しろ、高校時代の同級生の妹ではないか。今も同じ海鳴大学に通っており、特別親しくはないが知らない仲ではない程度の間柄。そんな相手の妹が、やけにメカメカした杖を握って、光弾をぶっぱしているのだ。驚くなどという方が無理な話だろう。

フェイトとの一件が終結した後も、早朝などに訓練をしているようで……割と気が気でなかった。

まあ、一応隠す努力はしているようなので、立香も基本的には知らぬふりをしているが。

なにしろ、立香としても彼女たちとどうかかわればいいのか、そもそもかわるべきか自体が判断できない。

百貌たちに集めてもらった情報はどうしても断片的で、事件の全容と関連した人や組織については判然としないことも多い。花の魔術師は残された魔力量の関係で、フェイトの母親との対面を終えた段階でやむなく退去せざるを得なかった。

再度召喚できるようになる頃には、すでにこの町に彼らの影も形もなかった。あとは花の魔術師に縁を辿ってもらうか、白い少女：高町なのはから情報を得るか、だ。ただ、どちらも気が乗らない。花の魔術師は何をしでかすかわからない不安があるし、のはにあまり無体なこととはしたくない。どうやら彼女が、フェイトを救ってくれたようだから。

なので、立香はあえて更なる情報収集はせず、偶に陰からなのはを見守るにとどめている。もしも彼女が下手をうち、その力が露見しそうになるならフォローできるように。

あとは、また春先のようなことがあっても対処できるように、魔力供給システムの確立に向けて動き出したくらいか。とはいえそちらの場合、資金繰りの問題もあって即座にどうこうというものではないが。

それが結果的に、次なる事件でも蚊帳の外でいざるを得ないことになる。

ことが発覚したのは12月に入ってから。

魔力供給システム確立のために召喚したサーヴァント（省エネVer）が設置した、簡易センサーが反応を示した時だった。

急ぎ現場に駆け付けた時にはすでにことが終わった後。何が起こったかわからず、何かが起こっていることしかわからない状況にやきもきしていた時、立香は懐かしい顔と再会した。春に出会った、優しくも繊細な金色に。

「えっと……その……」

「ほら、言ったとおりだ」

いざとなるとなんと声をかけていいかわからず、しどろもどろになるフェイトに立香は「してやったり」といった顔を向ける。

変わらぬ微笑みに安堵を覚えたのは彼女だけの秘密。色々と迷惑をかけた自覚があるだけに、再会した時にどんな反応が返ってくるか不安だったのだが……それは杞憂だった。

あの時と変わらず、この青年はあるがままの自分を受け入れてくれる。それが、初めての友達との再会と同じくらいにうれしかったのだ。

「スウー、ハァー………」  
「はじめまして」フェイト・テストアロツサです」

それは、出会いのやり直し。あの時は結局、一度もちゃんと名前を名乗ることがなかった。だから、再会できた時には最初からすべてをやり直そうと決めていた。

何も聞かずただ静かに傍らにいらして続けてくれた、きつと何か大切なことを教えてくれた人と、今度こそちゃんと向き合えるように。

そんなフェイトの思いを、立香は確かにくみ取った。だからこそ、彼もまた答えるのだ。彼女と同じように……

「はじめまして」藤丸立香です」

「私と、友達になってくれますか？」

「もちろん、喜んで」

後に知ったことだが、フェイトは立香と再会することを望みながら、保護者であるリインディたちの「居場所を探そうか？」という申し出を断っていたらしい。かつて別れ際に立香が言った、「縁があれば何かの拍子でまた会おう」という言葉を信じて、その時が来るのを待っていたのだ。

ただ、事はそれでは終わらず、立香が一人暮らしをしていることを漏らしたことがきっかけとなり、「男の子の一人暮らしは栄養が偏りがちだから」というリインディの気配り（誰に対してかは不明）から、おかずの差し入れと称してフェイトは足繁く立香の元を通うように。立香も家事はそれなりにこなす方だが、どこぞのオカンには及ばない。いつの間にか掃除・洗濯を手伝うようになり、誰が言ったか「通い幼な妻」状態に。

フェイトは善意100%なので断りづらいのだが、実を言うと世間体なんかがちよっ

と気になる立香であった。実際、一度ならず職質されたこともあったわけで……妙な顔の広さもあつて事なきを得たが、あれには本当に困った。

### 閑話休題。

何かが起こっていることはわかっているながらも、魔力的な余裕のなさもあつて蚊帳の外のままいつの間にか事態は進展。

結局、全てが終わる聖夜の夜になつてようやく事件の現場に踏み込むことができた。とはいえ、センサーからの信号を受けて途中から覗き見していた立香には、やはり事態の全容は知れなかったが。それでも、わかったことがいくつか。

全身を鎖や光の輪でがんじがらめになつた銀髪の女性と、フェイトとなのはが背に庇つた少女：「八神はやて」は深く結びついた存在であること。本来なら彼女が負うはずの役目を、はやてにとつて兄にも等しい人物が身代わりになつたこと。そして、はやての未来のために「ろすとろぎあ」なるものを使い、銀髪の女性もろとも虚数空間の彼方に消えようとしていること。

ああ、あと「あんのバカ兄——つ!!」とはやてが激怒し、「1発どつかな気が済まん！」と息巻いていたことか。

残る情報は断片的で判然としない。フェイトとなのははどこかの誰かと通信していたようだが、それは傍受できなかつた。

ただ、はやてと銀髪の女性が切り離されている状況は好都合らしく、うまくやれば最善の結果も望めるらしい。そのためにははやてが何らかの干渉をしなければならぬらしいが、そのままだと弾かれてしまうので、女性に負荷をかけて隙を作る必要があるとの結論に至り、それはもう派手なドンパチが繰り広げられた。

サーヴァントの中には天変地異レベルの出力を誇る者もいるが、規模だけなら引けを取っていないから驚きだ。途中が、外部からの攻撃だけでは足りないということ、フェイトがわざと本のようなものに取り込まれたりしたときには立香も本気で焦った。よくはわからないが、現状回収しているシルシの中で最大火力を誇る「施しの聖者」を召喚してしまうくらいに。

結局フェイトは自力で脱出し、よくはわからないがことはうまく進んで知り合いによく似た少年も無事救出。以前はやてや少年と一緒にいた面々がサーヴァントのように出現したりと、立香をして理解に苦労する場面が出るわ出るわ。

とりあえず、海上に出現したなんか黒いのを倒す必要があるということ、自分の名前は秘密にしてもらったうえでせっかく召喚した「施しの聖者」を派遣。黒いの中から出てきたキモいのがぶっぱしたビームを受けてちよつと傷を負っただけで済んだ彼に周囲が驚愕したり、防御を抜こうとしたら「対神宝具」の一撃で勢い余って半身蒸発させたのにもつと啞然としたり、なぐんてこともあったようだが無事に事態は収束。

ただ、立香としてはむしろこれからが本番だった。

退去する寸前、「施しの聖者」がそれはもう不穏なことを言い残してくれたのだ。

「退去の前に、少しいいかマスター」

「え〜…なくに〜、俺いま割と魔力底つきそうでやばいんだけど……」

フェイトたちにとつてどうかは知らないが、立香たち魔術師にとつて魔力はほぼ生命力とイコールだ。当然、消費しすぎれば割と命が大ピンチ。今はバックアップもろくに受けられない状態だというのに、A級サーヴァントの最強宝具をぶっぱしたのだ。むしろ、よく生きているものである。実際、彼は自室のベッドで息も絶え絶えだ。多分、彼が微妙に加減してくれたのだろう。加減してあれというのが恐ろしい限りだが。

とはいえ、あの「施しの聖者」がわざわざ何か言いに来たのだ、ちゃんと耳を貸さなければならぬ。

「うむ。リインフォースといったか、あれには先がない。因果・宿業に囚われ、その呪いはいずれあの小さき王にも及ぶだろう。それを断つために、あれは自ら消えることを選ぶ」

「なにそれ……」

それでは事態は何も解決していないではないか。フェイトやなのは、それにはやても死に物狂いで頑張った。きつと、彼女たちの後ろでは数えきれないほどの人々の尽力が

あつたはずだ。だというのに、その結末はあまりにもあんまりだ。

救えないものはある。犠牲無くして守れないもの、進めないときはあるだろう。そんなこと、反吐が出るほどよく知っている。あちらがの私俺が嫌というほど体験したことだ。

仲間を失い、友を失い、何の罪もない全ての生物、その世界歴史をも消滅させて進んできた。だから、今更きれいごとを言う資格はないのだろう。だがそれでも、そんな結末をただ黙って受け入れることなんて、できるわけがない。

(どうする、どうすればいい……誰ならなんとかできる！)

今にも断線しそうな意識をつなぎ留め、死に物狂いで思考を巡らせる。「施しの聖者」の姿はすでない。どうせなら答えるくらい教えていつてほしいところだが、彼が一言足りないのはいつものことだ。

(でも、みんなにアレサーヴァントが何とかできるのか？ 見た感じ、魔術っていうより科学・機械方面って感じだし……だったらエジソンかテスラ？ それともバベツジ……はシルシがない！ っていうか、エネルギーの系統違い過ぎて二人も無理かな。なら、ダ・ヴィンチちゃんに解析してもらおう……ってあの口ぶりだとその時間すらないっほしい………あーもう!! こんなとき式がいればなあ!! 因果だの宿命だの、そんな面倒なの全部まとめて「殺せる」のに……待てよ。因果に宿命？ それって確か……)



思い浮かんだのは、立香が契約したサーヴァントのうちの一騎が口にしていたこと。

そう、初めて会ったとき彼は言っていた「オレが求めたものは怨恨の清算——縁を切り、定めを切り、業を切る名刀だ」と。そしてこうも言っていた、「即ち。宿業からの解放なり」と。

（っ！ どうだろう、いけるかな？ 多少強引でも理屈が通れば押し通せるのがこつちの強みだし、たぶん行ける。問題なのは残りの魔力。はつきり言って、今の俺は残りカスも同然だ。薬を飲んで、全身からかき集めても多分喚ぶので精一杯。となると、とてもじゃないけど宝具までは回らない）

彼は幻霊が依り代の力を借りることで足りない霊基を補った「疑似サーヴァント」。霊格に関しては最底辺、故に消費する魔力量も決して多くはない。だが、宝具を使うとなればさすがに相応の魔力がいるだろう。今の立香では、とてもではないが捻出できない。

こんなことなら、魔力供給システムの完成を急ぐべきだった。資金も資材も時間も、何もかも足りない中で彼女は頑張ってくれている。正直、今の思考はないものねだり以外の何物でもない。

そんなものはさっさと切り捨て、より建設的な方に頭を切り替える。足りない魔力を

補う術はそう多くない。

まず浮かぶのは魂食いだ、そんなことを彼にさせるなど論外だ。しかしそうなる……そこで思い出す。そういえば、彼とよく似た容姿の人物がいたことに。

「あつ！ もしも並行世界の同一体だとしたら、ロードの時のアレができるかも。それなら……ああ、でも！」

たとえ魔力の問題が解決しても、問題がもう一つ。彼の宝具は、神ならぬ身で使えばエーテルが崩壊を始め、消滅してしまう。果たして、一度消えた霊基がどうなるかは立香にもわからない。カルデアであれば再召喚もできたが、彼らの霊基は立香の身体に取り込まれたシルシに依存している。再召喚が可能なのか、あるいはいずれ霊基が修復されるのか、現状は全くの未知。また、彼の力を借り受ける側もどうなるか……。

そこでようやく理解する。「施しの聖者」はあえて先を語らなかつたのだ。立香をはじめとした当事者たちが、それぞれの意思で決めるべきことだから。

「……………そうだ。決めるべきは、当事者一人一人の意思だ」

決意を固め、立香は召喚陣の前に立ちなげなしの魔力をかき集める。

最後の判断は、力を貸す側と受け取る側、そして今まさに消えようとしている者が降すべきだ。立香はただ機会を用意し、それぞれの決断を尊重する。どのような結果になつたとしても、負うべき責のすべてを負う覚悟で。

結論を言えば、立香が目覚めた時、普段は目に見えないシルシの一つが光<sup>チカラ</sup>を失っていた。

ならば、そういうことなのだろう。このシルシに再度光<sup>チカラ</sup>が宿る日が来るのかはわからない。来るとして、その時に立香が生きている保証はない。だからもしかすれば、結局碌に顔を合わすこともなく、言葉を交わすこともできなかつた彼とは、もう会えないのかもしれない。

その実感が湧くにつれ、目からとめどなく涙があふれた。

自分の無力が悔しくて、助けてくれた彼への感謝を伝えるように、何より……助かってくれた人たちを寿ぐように。

余談だが、魔力の使い過ぎで立香は年末年始見事に体調を崩してしまった。

すっかり入り浸るようになったフェイトが様子を見に来ると、熱を出してぶつ倒れた立香の姿。

慌ててリンディに助けを求め、懸命に看病しつつ立香の実家に連絡。そのまま実家に護送されたのだが、家族の目が微妙に冷たかつたのは気のせいであつてほしい。自分は断じてロリコンなどではないのだから。

その後は、まあ割と平穩に時が過ぎたといえるだろう。

一年の間に二度も事件が起こったのがウソのように、次の一年はつつがなく過ぎていった。

強いて言えば、3月あたりでフェイトがしょんぼりしてやってきたことか。なんでも、国語や社会といった科目の成績が良くなかったらしい。まあ、この国で生まれ育ったわけでもないのだから当然だろう。

しかし、一体どこで調べたのか。立香が大学で人文学部の歴史専攻であること、あとついでに単位目当てに小中学校の教職課程を取っていることがばれていた。

別に隠していたつもりはないのでもいいのだが、ちよつと清姫の気配を感じて背筋がぞつとした。

(まあ、フェイトは本当にいい子だし、きつと気のせいだな、うん)

ということとで納得し、別に断る理由もないので家事を手伝ってくれるお礼がてら教えることに。

つつい雑学が入り、特に歴史方面になると雑学九割本題一割になりがちだったが、本人は喜んでいるしちゃんと成績は上がっているようなので問題ないだろう。ちなみに、フェイトの友人が「どこの予備校の名物講師よ」と漏らすような内容だったと知ったのは、しばらく後のことだ。

(それにしても、フェイトはなんで怪我をしていると絆創膏とか湿布、包帯の交換を控え

めに強請ってくるんだ？ それに、ちよつと痛がつたりしつゝ微妙に嬉しそうなのが気になるんだけど……)

フェイトの拠点に監禁されていた時は彼女が少しでも気を休められるよう、甘えられるように気を配っていたし、再会してからもどちらかといえば甘やかすように接してきた自覚はある。彼女は甘え下手で、放っておくと自分に厳しくするばかりなので、甘やかすくらいがちよつどいいと思つたからだ。ついでに、「この調子で家でも甘えるように」なんて助言をしたこともある。フェイトが運んできた差し入れにこつそり感謝を伝える手紙が同封されていたのも、記憶に新しい。

なので、まあ甘えてくれるのは一向にかまわないのだが、甘え方にちよつと首をかしげる立香であつた。

あちら側の自分が女性なので、世の男性の大半よりは女性心理に詳しいつもりだが、こればかりはよくわからない。フェイトからそれなりの好意を向けられていることはわかるのだが……

(所詮、男に女の子の心理は完全には理解できないってことか)  
ということまで納得しておく。

そうして瞬く間のうちに時が過ぎ、季節は移ろう。

フェイトは友人たちと毎日充実した様子で学校に通い、度々立香の部屋を訪れては家事をしたり勉強を教わったりしながら、日々のあれこれを嬉しそうに報告してくれる。

かつて見かけたよく見知った風貌の少年は、変わらずはやてをはじめとした面々ともにいる姿をよく見かける。だがそこに、あの銀髪の女性の姿はない。ただ気落ちした様子も見られないので、何かしらの形で落ち着くところに落ち着いたのだろう。

むしろ、はやてと少年の距離感が妙に近くなつた気がする。具体的には、はやてが随分とぐいぐい距離を詰めている。少年は困つたような表情を浮かべつつ、それでもはやてを受け止めているようだ。

なんとなくだが、あの少年は聖杯の少女たちの語る兄に近いように感じるし、はやての様子は彼女たちを彷彿とさせるものがあつた。つまりは、そういうことなのだろう。

そういえば、なのも偶に薄い金色の髪の同い年くらいの少年と連れ立って歩いているところを見かける。

（俺がアレくらい頃は、そういった意識なんてなかつたと思うけど……最近の子は進んでいるなあ……っていうのは、ちよつとやめておこう。ここは、女の子の成長は早いと考えるべきだな、うん）

ただ、手を引かれている少年が真っ赤なのに、なのの方は特にそういった様子がないので、その限りではないのかもしれないが。

そうして季節は、フェイトと出会って3度目の春。フェイトたちも早いものでもう小学五年生。立香も大学三年となり、いよいよ進路を真剣に考える時期だ。

この間、結局そちら方面でフェイトたちに関わることはなかった。やはり、彼らの力を無闇に借りるべきではない以上、あえて知らせるべきではないと思つたからだ。

なので、とりあえずはこの世界で地に住をつけて生きていくつもりでいる。

幸い、フェイトに教える中で本気で教職を目指す気も湧いてきたところ。そういうわけで、進路に関してはそれほど悩んではない。うまくいくかどうかは、この先の頑張り次第だろう。

ただ、プライベートの方で問題が一つ。

最近、フェイトの自分を見る目に若干本気の色が混じってきている気がするのが悩みどころだ。

なにぶん、あちらの自分私は一部サーヴァントから熱烈な愛情を向けられていた。曲者ぞろいのサーヴァントたちとの交流で感情の機微には聡くならざるを得なかったのが、ますます敏感になってしまった。その影響は、きつちりこちらの自分俺にまで及んでいる。正直、経過を考えるとまったくうれしくないが。

とはいえ、そのせいでフェイトが自分に向ける感情の変化にも気づいてしまうわけで……。

(いい子だとは思っただけど、さすがに十歳の子どもは対象外だなあ……)

恋に恋する年頃とか、年上への憧れとか、甘えさせようとしてきたこととか、その辺がいろいろ化学反応を起こした結果なのだろう。一過性の子どもの恋と切つて捨てることは簡単だが、当人にとってはきつと重大事の筈。

あまり不誠実な対応をするのは、さすがにかわいそうだろう。

(傷つけない、なんてのは論外。傷つけることを前提として、どうやってそれを最小限にとどめるかを考えるべきなんだろうけど……)

現状、できることなんてなーんにもない。

そもそも、別に告白されたとかそういうことではないのだ。立香が早々に気付いてしまっているの、さてどうしたものかと考えているだけに過ぎない。

フェイトの方からアクションがあれば対応できるが、まさか何もしていないのに「君の思いにはこたえられない」もないだろう。かといって、フェイトを遠ざける口実になりそうなものも特にない。立香の部屋に通い詰めるようになった初期なら、色々建前の使いようもあったのだが……まだ母との別離からそう時間も経っていない彼女の心を慮り、少しでも心穏やかに過ごせるようにと受け入れてしまったのが運の付きか。

まさか、あの時点でこの未来を見通すなど、それこそ千里眼でもなければ無理だろう。(当分は現状を維持しつつ、少しずつフェイトとの距離をとる方向で……いけるか?)



正直、あまり自信がない。今まで散々甘やかそうとあの手この手を使ってきたので、今更感が強い。

最終的にフェイトを傷つけることになるのは覚悟しているが、彼女が自分を責めるようなことにはなあってほしくない。彼女自身には、まったく過失などないのだから。妙な勘違いをさせるような真似は慎むべきだろう。

(情けない話だけど、いつそフェイトの方から動いてくれないもんか。でも、あのフェイトが自分から告白……ないなあ)

正直、フェイトが自分から告白してくる姿というのが、まったく浮かばない。勇気も行動力もある少女だが、同じくらいに控えめで恥ずかしがり屋だ。周囲のためには前者になれるが、自分のためになると後者になってしまうというのが立香の評価。そして、それはおおむね正しい。

なので、自分は勤務時間の長いバイトを入れたり、会えた時もあまり甘やかさないようにしたりしていくしかない。しばらく会えなかったりするとすごくしよんぼりするので、すごく罪悪感を覚えるが。いや、会えた時には華やいだ顔を見せてくれたことを思うと、もつと早くに対応すべきだったか。

(あとは、恋人でも作ることだけど……うゝん)

思いを寄せる少女を諦めさせるために恋人を作るというのは、相手にもフェイトにも

大変不誠実だ。

一応飲み会やら合コンやらにはそれなりに参加している立香だが、今のところそう言った間柄になった異性はいない。できるならそれが一番だろうが、できないなら仕方ない。少なくとも、不純な動機で作るものではないだろう。

しかし、そんな立香の懊悩は思いもよらぬ形で断ち切られる。

ゴールドデンウィークに海外にシルシ探しの旅に出て帰ってきたところ、ぱったりとフェイトが顔を見せなくなったのだ。内心で首を傾げつつ、しばらく様子を見ることにした立香。

彼は気づいていなかった。今回回収したシルシから無理やり現界した「静謐」が彼にくつついている現場を、フェイトがぼつちり見ていたことを。ついでに、思い切り勘違いしてしまい、泣きながら家に駆けこんだことも。

当然、いち早くフェイトの胸に宿った思いの萌芽に気付いていたリンディが、その芽の名に気付かせたなど知る由もない。

季節は間もなく夏。新たな戦いの時は、刻一刻と迫っていた。

プロジェクトフェイトとシステムフェイト。

運命の名を冠したそれらに縁深い二人の運命が真に交錯するまで、あと少し。

へ鬼滅の刃×Fate／stay night蝶屋敷に  
は家事幽霊が憑いている

——暇だなあ。

——そうだなあ。

——病気だの怪我だのは、治りかけが一番つまらないんだよなあ。

——そうだなあ。

——でも、この後には地獄の機能回復訓練が待ってるんだよなあ。

——そうだなあ。

——訓練が終われば、次はまた鬼狩りの毎日かあ。

——そうだなあ。

——……………治りたくない。ここでずっと屋敷の女の子たちに面倒見  
てもらいたい。

——クズ…いや、ゴミだなあ。

——そこは“そうだな”って領けよ!!

——……………。

——おい、何か言ったらどうなんだよ。

——……………。

——おい、おいってば！

——……………。

——何か言ってお願ひ!!?

——……………なにか。

——……………ごめんなさい。馬鹿なこと言ったのは謝ります。

だからちゃんと相手してください。俺、寂しいと死んじやう生き物なの。

——……………しようのない。で、なんだ？

——友よっ!!!

——抱き着くな、気色の悪い。傷に響くだろうが。

——……………すまん。

——あと、お前は別に友達じゃない。

——え？ 友達だと思ってたの俺だけ？ なんだかんだで話に付き合ってくれる

し、危ない時は助けてくれるからってつきり……………じゃ、じゃあ俺ってお前の何なの!!?

——同期。

——それだけ!!?

— 他に何かいるのか？

— い、いや、〃いる〃か〃いらぬ〃かというと、その……。

— もう……。

— ？ もう、なんだ？

— 同期は俺とお前しかいないんだ。馬鹿な話くらい付き合つてやるから、あんまり死ぬなよ。

— あんまり、か？

— あんまり、だ。こういう仕事だからな、〃死ぬな〃なんて無理は言わん。

— そうだなあ……なら、お前もできるだけ死ぬなよ。

— ああ、〃できるだけ〃善処する。

— そうか。

— まあ、あんまり度が過ぎるようなら絶縁するが。

— (絶交どころじゃない!?)

— で。

— ？

— 話はないのか？ 暇なんだ、付き合つてやる。

— お、おう！ そうだな……じゃ、これ知ってるか？

〃蝶屋敷怪談〃。

——おまつ、花柱様：はともかく、継子に聞かれたら大目玉だろ。

——こういうのは、隠れてするから楽しいんだろ。猥談と同じだ。

——……………：………：………：幼い娘も多いんだから、せめてそっちは自重しろよ。

——わかつてる、だからこそ猥談の代わりにの怪談だ！（ドヤアツ）

——上手いこと言ったみたいいな顔するな、鬱陶しい。

——（シユーン）

——それで、どんな話なんだ？　こんな場所で、しかも俺たちはこんな仕事だ。生い立ちだって、まあ碌なもんじゃない。鬼への恨み辛みには事欠かないし、未練は多いだろうから化けて出るくらいはあるだろうさ。

——それがな、どうにも毛色が違うらしい。

——は？

——最初は、壊れた戸板だったそうさ。

——戸板？　それがどうしたんだ？

——壊れた翌日には、きれいさっぱり直っていたそうさ。

——ふむ……屋敷の誰かが直したんじゃないのか？　あるいは、手の空いた隠とか。

——それがな、誰に聞いても心当たりがないらしい。しかも一度や二度じゃない。

ある時は雨漏りする天井、またある時は床板の軋み、そういうのが気付くと直っていた  
 そうだ。

——まあ、不思議なことではあるな。だが、実害もないし、そもそも怪談なのかそれ？

——いやいや、話はまだまだこれからよ。確かにお前の言う通り、ほとんどの奴はたいして気にも留めなかった。どこかの良いカツコしいが黙っているだけだろう、とな。花柱様ですら、「大助かりだわあ」と笑っておられたくらいだ。だが、それを良しとしない奴がいた。誰かわかるか？

——もしや、継子の……？

——そうだ、胡蝶しのぶ様だ。

\* \* \* \* \*

「……………また、できてる」

厨の前に佇みながら、怒りに肩を震わせながら声を絞り出す。

どこのどいつの仕業か知らないが、これでいったい何度目だろう。

眼前には、白い湯気を立ち昇らせるホカホカの白米と芳しい香りを漂わせるアジの干

物。視線を厨の奥に向ければ、大鍋一杯の味噌汁が見て取れる。具はネギと豆腐だろうか、優しい香りが食欲をそそる。他にも、一口サイズに綺麗に切りそろえられた漬物や鰹節の揺れるお浸まで完備。

加えて、入院している隊士のために粥をはじめとした消化に良い食事も用意されている徹底ぶり。

ただそれだけであれば、短めの髪を固く夜会巻きにして蝶の髪飾り付けた少女、胡蝶しのぶが怒りに打ち震えることはなかっただろう。

完璧で非の打ちどころのない朝支度だが、鬼殺隊の医療施設としての役割を有するが故に常に忙しい蝶屋敷にとって、これは決して楽な作業ではない。屋敷に暮らす者たちの分だけならいざ知らず、入院患者それぞれに合わせた病人食も用意するとなれば大変な手間だ。鬼殺隊の支援部隊である「隠」の者たちも手伝ってくれるとはいえ、有事においては色々なものをおざなりにすることでやっとならしているのが現状。特に、一昨日未明のように大勢の隊士が担ぎこまれた場合には。

なにしろ、昨夜遅くまでのぶをはじめ蝶屋敷の者たちは一睡もすることなく負傷者への処置に駆けずり回っていた。寝食を取る間も惜しんで治療を施して、薬を調合し、血や泥で汚れた包帯やガーゼを補充し、容態に変化がないか見守る。

ようやくある程度落ち着いたのが、昨夜遅くのこと。しのぶも着替える時間すら惜し



んで布団に入り、泥のように眠ってつい先ほど目が覚めたばかり。一応状況は落ち着いたが、まだまだやることは多い。その差し当たつてが「朝の支度」だった。

しかし、目を覚ましてみれば何たることか。その全てが終わっているではないか。

この手間が省けるだけで、いったいどれほど助かることだろう。患者一人一人に声をかけ、経過を丁寧診察し、なんなら屋敷の雑事に手を付ける余裕にもつながるだろう。あるいは、自分自身の鍛錬や研究にも力を注ぐことができる。

本来なら、どれだけ感謝しても足りないくらいだ。そう、これらをやってくれた人物がわかるのなら。

「……い、いったいどこのどいつよ！ 他人様の家の厨を勝手に使つたのはあ!!!」

「しのぶ様!」

「なに」

「汚れていた包帯などが、すべて洗濯して庭に干してあります!」

「継子様!」

「今度は何」

「先日暴れた隊士が壊した壁が、修繕されています!」

「回復訓練で割れた湯飲みが補充されました!」

「薬棚が整理され、使用した消耗品の一覧が……」

その後もまあ、出るわ出るわ。誰も心当たりのない、でも手を抜くわけにもいかない雑事が終わっている旨の報告が次々と。その報告を聞く度に、しのぶの額に青筋が増えていく。

「しのぶ〜」

「次から次へと…次はなんなの!」

「あらあら…姉さん、しのぶの笑った顔が好きだな」

「つて、姉さん? ごめんなさい、つい…」

度重なる報告で、つい反射的に大好きな姉にまで食って掛かってしまったことになだれる。

だが、蝶屋敷の主でありしのぶの姉でもある「鬼殺隊 花柱」胡蝶カナエは特に気にした様子もなく、なぜか持ってきていた愛刀を抜いて見せる。

「ほらほら、新品みたいにピカピカよ」

そこにあつたのは、確かに新品同様に磨き上げられた淡い桃色の日輪刀。

しかし、カナエの日輪刀を刀鍛冶の里に整備に出したのはもう数ヶ月は前の筈。自分の命を預ける相棒だけに、日々手入れは欠かしていないとはいえ…流石に新品同様とはいかない筈だ。

にもかかわらず、現実としてカナエの刀は新品そのもの。まさか、里から刀鍛冶が来

てしのぶたちの知らないうちに整備した、ということもあるまい。  
と、そこまで考えたところでのぶは一つの可能性に思い至る。

「まさかっ!」

「あらあら」

弾かれたように走り出す妹の背中を見送つてから、カナエは厨へと向き直る。

そして色鮮やかな沢庵を一つ摘まむと、小さな口へと放り込んで美味しそうにアジト  
触感を愉しむ。

「うふふ、今日も美味しい。有難くいただきますね、幽霊さん」

その頃、しのぶの自室では。

「あ~~~~~」~~~~~「また勝手にいつ!!」

そこにあつたのは、カナエの愛刀と同じく新品同様になつた自らの日輪刀。

ピカピカに磨き上げられ、同時にしつとりとした艶を放つそれはまさに一流の仕事。  
しかし、しのぶはそれを素直に喜ぶ気にはなれなかつた。それもそのはず、自分の相棒  
をどこの馬の骨とも知れない誰かに弄られて、どうして喜ぶことが出来ようか。ただで  
さえしのぶの刀は、色々と特殊だというのに。

「刀身……よし、鍔……よし、鞘……よし。くつ……完璧に整備されてる。ホントに何者よ、コ  
イツ!」

そう、特殊なのだ。彼女は鬼殺隊で唯一鬼の首を斬ることができない剣士だが、同時に鬼に通用する毒を作り上げ、これを以て鬼を狩る。そのために、彼女の日輪刀は毒を仕込むことができる特殊な構造になっている。

その構造は、しのぶ自身とこの刀を作り上げた鉄地河原鉄珍しか知らない筈。当然、整備はおろか手入れですら他の者にはできない。

にもかかわらず、しのぶの日輪刀は何の不具合もきたすことなく、新品の様になっていた。自分の努力と研鑽の結晶を、易々と扱われて悔しくない筈がない。

「ええ、認めるわ。確かに完璧よ、非の打ち所がないくらいに。それこそ、鉄地河原様が直接研いだって言われても納得するくらい完璧。でも、だからこそ……ああもう、腹立つ~~~~~~~~!!」

その後、カナエが呼びに来たので仕方なく怒りを治め、渋々大人しく朝食をとることに。

蝶屋敷の味ではないが、十分店を開けるその味わいにカナエは頬を綻ばせ、しのぶは忌々しそうに咀嚼する。

「ん、今日も幽霊さんのご飯は美味しいわ」

（くっ、この漬物どうやってこの味を……）

「しのぶもほら、せっかく美味しいご飯なんだから、ね？」

(ムツス〜……)

不機嫌を隠しもせず、無言のまましかめっ面で口と手を動かすしのぶ。そんな妹に困った様な微笑みを浮かべてから、カナエは自らの茶碗に視線を落とす。

「でも、本当にどこのどなたなのかしら？　こんなに良くしてもらってるんですもの、せめて一言お礼を言いたいな」

「……その前に、まず人の家に勝手に上がり込んで動き回る方が問題でしょ」

「まあ、それはそうなんだけど……」

正論であるだけに、カナエとしても特に反論できない。なんとかフォローを入れたい、とは思っているが。

「食材やらなんやらも色々使ってるし、非常識よ」

「そうね。でも、何を何のために、どこで使ったか。全部報告してくれてるから、それほど困らないでしょ？」

「変なところで常識的というか律儀なのが、余計に頭にくるんだけど。もつと別のところで発揮しないさいよ。」

「というか、本当に報告通りなのかすら怪しいじゃない」  
「だからちゃんと確認もしたじゃない」

だから、報告が記された紙の内容に誤りがないことの裏付けは取れている。それどこ

ろか、補充や買い替えが必要なものの申告までしてくれるので、物品の管理という意味でも助かっていたりする。

「食材も道具も減ってなければ、お金もそのまま。少なくとも、泥棒の類ではないわよね。」

あと考えられるとしたら情報だけど、鬼殺隊の情報なんて欲しがるのは鬼くらいでしょうし」

流石に、情報については盗まれたかどうかわからない。しかし、そもそも欲しがる相手自体が少ない。

仮に鬼の作業としても、目立った影響は出ていないことからその線も薄いだろう。いや、まず蝶屋敷に保管されている鬼殺隊の情報というのが医療関係の記録であるため、隊士個々人にとってはともかく、鬼殺隊全体としてみればそれほどの重要情報ではないのだ。故に、盗まれたところで任務にさほどの影響はない。

「悠長過ぎるわ。ここには若い娘も多いし、負傷して弱った隊士もいるのよ。何かあったらどうするの!」

「そうね。しのぶに何かあったら、姉さんかなしいわ」

「姉さん!」

茶化すような姉の言葉に、流石にしのぶも目を吊り上げる。だが……

「でもね、これまでに一度だってそんなことはなかったでしょ？」

「それは、まあ……」

「機会はいくらでもあった。だけど、一度だってそんなことはなかった。

それどころか、容体の急変した隊士がいることに気付かせてもらったり、文机で寝たしのぶを布団に運んでもらったり……」

「ちよ、ちよつと姉さん！」

「信じていいと、私は思うわ」

「……」

姉の言わんとすることはわかる。不埒者であるならば、とつくに尻尾を見せているはずだ。

そんなことはしのぶとて分かっている。わかっているが、それでも信用はできない。なぜなら……

「後ろ暗いことがないなら、ちゃんと姿を見せればいいじゃない」

「……」

「姿を見せて、名乗ればいいのよ。それなら、信用してもいい」

しのぶの言うことは正論だ。どれだけ行動で示していても、顔も知らない、言葉を交わしたこともない、正体不明の人物をどうして信じられるというのだろう。

「そこはほら、幽霊だから」

「お化けなんているわけないでしょ」

「しのぶ、怪談好きでしょ？」

「それとこれは話が別だわ。私はお話として好きなのであって、信じているわけじゃないもの」

「でも、鬼だっているんですもの。幽霊がいても、不思議はないんじゃない？」

「……だったら、真っ先に化けて出てくるべき人たちがいるでしょ。私たちに限らず」

「そうね……」

鬼殺隊の構成員のほとんどは、何かしらの形で鬼に人生を歪められた者がほとんどだ。

胡蝶姉妹としてそれは同じ。幽霊なんでものがいるとして、死者が化けて出るといふのなら……。

「どうして父さんや母さんじゃないのよ」

「しのぶ……」

料理の味付けからも、それは間違いない。アレは、しのぶたちの知る“胡蝶家の味”ではなかった。だから、作ったのは全くの別人だとわかる。

助かっているのは本当だ。毎日というわけではないが、忙しくて手が回らない時には



大抵その「幽霊さん」の影がある。おかげで自分たちは治療に専念できるし、簡易食ではなく、こうして暖かな食事をする事ができているのだ。

だが、どうしても素直に感謝する気にはなれなかった。

「……そもそも、怪談にしたって中途半端過ぎるのよ」

「? どういうこと?」

「まず、確かにおかしなことだらけだけど……全然怖くない」

「あゝ、それはね」

「どこの世界に『家人が忙しい時に家事を手伝ってくれる』お化けがいるのよ。怖くもなんともないじゃない。『ぶらうにい』とか『しるきい』とかじゃあるまいに」

「『ぶらうにい』と『しるきい』?」

「この前、間違って注文したのは別の本が届いたでしょ。アレ、西洋の妖怪とかお化けの本だったのよ」

「ああ、あの本。そこに載ってたの?」

「うん。やってることはうちの幽霊とおんなじ、住み着いた家で家人のいない間に家事を済ませたりするんだって」

「あら、本当ね。じゃあ、海を渡ってきたのかしら?」

「楽しそうにニコニコ笑う姉に、しのぶもようやく少しだけ頬を緩ませる。が、不満な

点は他にもある。

「あと、良く七不思議とか言うでしょ」

「そうね。怪談じゃないなら、蝶屋敷七不思議とか？」

「でも、七つないでしょ」

「えつと……いつの間にか用意されてる食事、研がれた日輪刀、見守る目、他には……」  
割れた窓や食器がきれいに直っている、なんてこともあった。捨てるはずだったものが処分されて補充されたのではなく、修復不可能なはずのそれが直っていたというのは、実に不思議な話だろう。

また、入院患者の中には「燃える街並みの夢を見た」という者が一定数いる。というか、しのぶやカナエも見たことがある。まったく知らない、燃える街の中を歩く夢。蝶屋敷での怪奇現象の中でも、唯一と言っていい不快感を覚える代物だ。

あとは……

「……消える背中、かしら」

「え、それ知らない。5つじゃないの？」

「私も最近、一度見ただけなのよ。太陽が眩しくて目を細めたら、視界の端に私よりも頭一つ分以上背の高い人がいた気がするの。まあ、まるで空気に溶けるみたいに消えてしまったのだけど」

「その人って、見覚えは？」

「ないわ。真つ白い髪に、褐色の肌……それだけ特徴的な人だもの。一度見たら忘れられないわ」

(そいつが幽霊の正体？ でも、真昼間に出てくる幽霊ってどうなのよ)

まあ、鬼の血鬼術の類ではなさそうなので、その点はホツとするが。

「でも、そろそろハッキリさせた方が良くかもしれないわね」

「姉さん？」

「どうもね、この話だいが広まってきてるみたいなの。中には「鬼の仕業じゃないかなんて声まで上がって……」

「昼間に出てくる鬼はいないでしょ。そもそも、鬼がどうして私たちの世話をするのよ」

「あら、私はそうだったら嬉しいわ。きつと仲良くできるもの」

「……できるわけないでしょ、鬼となんて」

怒りに表情を歪ませる妹に、カナエはそれ以上言及しようとはせず話を本筋に戻すことにする。

この件に関しては、どうやってもお互いの意見が一致することはないと知っているからだ。

「……………ここには負傷した隊士もいるし、万が一にも何かあっては事だつて」

具体的にどうするかは決まっていないが、いずれは何かしらの動きがあるだろう。まさか柱合会議の議題に上ったりはしないだろうし、わざわざ他の柱が動くこともないとは思うが……場合によっては、別の屋敷に移ることはあるかもしれない。この屋敷を気に入っているカナエとしては、できれば避けたい事態だ。

「だけど、私はともかく姉さんにも気配を捉えきれない相手なんて……それこそ、本当に幽霊って言われた方が納得よ」

「でも、最近は少しだけど気配を捉えられるようになって来たわ。だから……」

遠からず、幽霊の正体ははつきりすることだろう。

「そう、でも無理はしないでね。私も捕まえるのに協力するから」

「まずは話し合いから始めたいんだけど……」

「女所帯に無断で入り込む奴ですもの、遠慮は無用よ」

鼻息荒く断言するしのぶ。できれば穩便に事を治めたいカナエとしては、あまりやる気になられても困ってしまうところだ。

とそこで話を逸らすことも兼ねて、カナエは懐から先日見つけたあるものを取り出す。

「ん〜……あ、そうだしのぶ。ちよつと手を出して」

「？」

「はい、あげる」

軽い調子でしのぶの手に落とされたのは、深く鮮やかな輝きを放つ赤い宝石だった。

「……つてなにコレ!?!」

「さあ? この前、新しいお花の種をまこうと思つて庭を弄つてたら出てきたわ。あ、ハジメは泥だらけだったけど、ちゃんと洗つたから安心して」

「安心して、じゃないわ!? これ、どう見たつてすごく高そうじゃない!?」

「そうね。私には宝石の善し悪しはわからないけど、しのぶに似合うと思うの」

「いやいやいやいや! 私には無理よ! 姉さんが持つてて、絶対似合うから!!」

「でも、姉さんはしのぶに貰つてほしいな。ほらほら、つけてつけて」

「だ、だから私には似合わないつてば〜!」

その後しばらくの間、姉妹による「似合う」「似合わない」という押し問答が続くのであった。

その日の晩のこと。胡蝶カナエは、何度目かになる『燃える街並み』を見ていた。

「……………(´・`・´)」は」

夢だからだろうか、意識が茫洋としてはつきりしない。自分が今までどこにいて、何をしていたのか。そもそも、『自分』とはいったい何者なのだろう。

それすらわからないまま、カナエは火の海に包まれた見覚えのない街を進んでいく。

クルシイ

タスケテ

カアサン

ミエナイ アツイヨ

ダレカ コロシテ

コノコ ダケデモ

オネガイ

ダシテ

イタイヨ

声ならぬ声が響き渡る。その度に、カナエは声の元へと向かうが助けることはおろか、その手に触れることすらできない。気付けば、目からとめどなく涙があふれていた。

何もできない自分。ただ燃え尽きていくのを見ていることしかできない現実。

いつそ、自分も炎に巻かれて焼かれてしまえばまだ楽だったのではないか。そんなことを思ってしまうほど、目の前の光景は「地獄」そのものだった。鬼による惨劇を数多く見てきたカナエですら、目を覆いたくなるほどに。

何時しかカナエはその場に跪き、ただただ泣きながら死に行く彼らに謝ることしかできなくなっていた。

「ごめんなさい。ごめんなさい。私にはあなたたちを助けることができない。手を取ることも、気休めの言葉をかけることも……何も、できない」

見上げれば、そこには漆黒の太陽。鬼殺隊にとっては「希望」そのものであるはずの太陽が、今は「絶望」の象徴にしか見えなかった。

「ッ！……は……夢、だったの？」

まず視界に飛び込んできたのは、良く見知った自室の天井。柱としていついかなる時も、それこそ眠っている時であろうと全集中・常中を途切れさせるような真似はしないが、今にも途切れてしまいそうなほどに呼吸が乱れている。全身を冷たい汗が伝い、身体の内から冷え切っているのがわかる。

夢の内容はほとんど覚えていない。だが、あの『燃える街』の光景だけは不思議とハッキリ脳裏に残っていた。

「あの街は、いったい……」

見覚えのない街並だった。それも、ただ単に知らない街、というだけではない。ほとんどの建物が燃え、崩壊してしまっていたが、それでもわかることはある。あれは、そもそも日本の風景かどうかさえ怪しい。それ位には、彼女の知る日本に風景とはかけ離れていた。

「……外国、だったのかしら」

呟いた声に返事はない。

カナエは一度呼吸を落ち着けると、蝶の羽のような色彩の羽織を纏って部屋の外に出る。水を飲んで、気持ちを落ち着けたかったのだ。

しかし、廊下に出た彼女の眼前に、思いもしない光景が広がった。

どこまでもどこまでも、果てしなく広がる荒涼とした大地。突き立つ無数の剣。空を覆い太陽すら隠す分厚い雲。

まだ夢の中にいるのかと思うほど、それはこの世のものとは思えない光景だった。

立ち尽くし、身動き一つできなくなっているところで乾ききった一陣の風が吹き抜ける。

思わず目を瞑り、もう一度目を開けるとそこには……見慣れた蝶屋敷の廊下と庭が広がっていた。

「……疲れているのかしら?」

答えなどあるはずのない、自分自身に向けたはずの問いにはしかし、思いもよらぬところから回答があった。

「ふむ、あまり根を詰めるのは感心しないな。どれ、茶でも用意しよう。そこで待っていたまえ」

「え?」

声の方を振り向くとそこには、ただ一度だけ見た黒い着流しを纏った大きな背中があった。

しかし、あの時とは違う。視界の中央でその背中を捕らえ、何度瞬きしても空気に溶



けて消えることはない。

呆氣に取られていゝうちにその背中は角を曲がつて、陰に隠れてしまった。だが、アレが夢幻の類でないことのは間違いない。

こちらのつばやきに応え、しっかりとその姿を視界にとらえることができた。それに、廊下の先からは彼の気配が今も感じ取ることができぬ。

正直、分からないことばかりではあるが、少しだけ気持ち晴れた。

「やつと、お話が出来そう」

間もなく、彼は盆に湯呑を二つと急須を乗せて戻ってきた。気配はあつたのだが、それでもちやんと戻つてきてくれたことに安堵する。今は、何はともあれ誰かと話がしたい気分だつた。

「ありがとうございます」

「なに、元はこの屋敷のものだ。今回に限つた話ではないが、度々勝手に拝借して済まなかつた」

「いえ、それは……こちらも助かりましたから」

「そう言つてもらえると助かる。茶請けでもと思つたが、深夜の食事は年頃の娘としては避けたいだろう。今は茶だけで勘弁してもらいたい」

「今は」ということは、  
「次も」？」

「さて、それは君次第だよ」

そのまま庭に面した廊下に揃って腰を下ろし、まずは一口茶を啜る。

熱すぎず、かといつて温くもない絶妙な温度管理。何はともあれ一息入れたかった力ナエの心情を慮って……と考えるのは、少々都合が良すぎるだろうか。

「あの、初めまして。私は……」

とりあえずは自己紹介、と思つて相手の方を向いて口を開くが、褐色の掌が視界を塞ぎ言葉を止める。

指の隙間から見える顔立ちは精悍だが、風格を感じさせる面立ちはそれなりの年月を感じさせる。若く見えるようで、生きていればカナエの父母とそう変わらない年のようにも見える。

「まずは謝罪を。家主の許可もなく屋敷を勝手に動き回ってしまった挙句、要らぬ世話を焼いた。不快に思ったことだろう、深く謝罪する。申し訳なかった」

「そ、そんな！ 先ほども言った通り、本当に助かりましたから」

「いや、年頃の娘が暮らす屋敷を名乗りもせずうろついたので。叩き出されても文句は言えん」

一度は下げた頭を上げ、ハッキリと断言されては否定もしづらい。きつと、否定しても彼はそれを善しとはしないだろう。

先ほどの後姿も含めて “鋼のような人だ”、カナエはそう思った。  
「律儀なんですね」

「無遠慮、不作法、不心得、挙げだしてはキリがない。それだけのことをした自覚はある」  
「でも、何か事情があつたんですよね？」

「……事情があれば許されるといふものでもあるまい」

「それを決めるのは、屋敷の主人である私ですよね」

「……それは、そうだが」

「ですから、事情を聞かせてください。許すか許さないかは、それから決めさせていただきますね」

「……承知した」

そうして男は、事情を話すにあたりまずは己が何者であるかを口にする。

「私は衛宮、衛宮士郎という」

「日本人、だったんですね」

「こんなナリではあるがね。一応、生まれも育ちもこの島国だ」

「なるほど。だから言葉も字もお上手なんですね」

「そう大層なものではない」

「それで、幽霊の衛宮さんはどうしてこの屋敷に？」

「幽霊……まあ、だいたいそのようなものか。私がかここにいる理由だが、それだ」

言つて、士郎はカナエの方を指さす。一瞬胸元を刺されたと思つたが、すぐに違ふことに気付く。

彼の指先は少し逸れて、カナエの懐を指していた。

「持つているのだろう、赤い宝石を」

「これ、ですか？」

懐から出したのは、つい先日偶然にも掘り当てた赤い宝石。

「士郎さんのもの、なんですか？」

「……というより、それが私の本体だ」

「本体？」

「簡単に言つてしまえば、地縛霊のようなものだ。私はそれに括られていてね、そこからあまり離れられない」

「そうなんですか？」

「だいたい、この屋敷の外周程度だろうか。おかげで、私の活動圏はこの屋敷の内側にとどまつていたというわけだ」

なるほど、それでは出ていきたくても出てはいけない。というか……

「本当に幽霊なんですか？」

「君が言ったことだろう」

「それは、そうですね……」

「信じられんというなら、試してみるかね？」

「え？」

「手……は、この時代だと少々不味いか。そら、着流しの袖を持つている」

言われるがまま、黒い着流しの袖をつまんでみる。何をするのかと思つてみると……唐突に彼の姿が消えた。摘まんでいた着物の袖すらも、はじめからなかったかのよう

に。  
「えっ!？」

「とまあ、こういうわけだ」

驚きの声を挙げた次の瞬間には、先ほどと寸分違わぬ場所に土郎の姿が再度現れる。

「どこかに移動した、とかではないんですね？」

ついでに言えば、*「見えなくなつた」*だけでも違う。

似たような術を使う鬼とも戦つたことがあるが、袖の感触は消え、摘まんでいた指と指がくつつく感触もあつた。

間違ひなく、正真正銘彼は*「消えていた」*のだ。

「私には肉体がない。この身体は、仮初のものに過ぎん」

「何らかの力を使って、その身体を作っていると?」

「そういうことになる。流石は、鬼殺隊の花柱殿だ」

「知って、いるんですか?」

「知らなかった。だが、しばらくいればいろいろと耳に入る」

「血鬼術、じゃないんですよね」

「何なら、日の出までここにいても構わんよ」

その言葉で、彼が鬼のことをそれなり以上に理解していることが分かった。

「他の人でも、その……」

「私だけの特異体質、のようなものだ。だから、君の期待するようなことはない、と言わせてもらおう」

「そうですか」

「残念かね?」

「残念じゃない、と言えば嘘になります。会いたい人は、いますから。」

でも、普通はそういうものでしょう?」

「ああ、その通りだ」

「だけど、どうしてそんなことに?」

「なに、愚かな男が分相応…いや、分不相応な結末を迎えた結果だ。わざわざ君が知る必

要のない、その価値もないことだよ」

「その言い方、あまり好きじゃありません」

思わず、すねたように口をとがらせて不満が零れる。ここ数年の彼女が見せたことのない、年相応の顔だった。

鬼殺隊の柱として考えれば不適切だろう。しかし、胡蝶カナエという少女を知る者が見れば……どうだろうか。

「クッククックク……」

「何がおかしいんですか？」

「いや、すまん。そんな顔もできるのだなと思つてね」

「？」

「姉として、鬼殺の柱として、色々と背負うものがあるのだろうが、あまり気負い過ぎないことだ。偶には年相応に振る舞つても、罰は当たるまいよ」

軽く頭を撫でられる。その感触が、遠い、古い記憶を想起させる。

（ああ……そういえば、お父さんもよくこうやって頭を撫でてくれたっけ）

恩人の悲鳴嶼も撫でてくれたりはしたが、正直彼はあまり撫でるのが上手くなかった。

体格と膂力では柱随一の彼だからこそ、優しくしようとするあまりぎこちなくなりが

ちだったのを思い出す。

“やめてください”、そう言うべきだとわかっている。なのに、結局何も口にできないままその手に身をゆだねてしまう。懐かしくて、悲しくて、けど少しだけ嬉しい。もう二度とないと思っていた、失われた感触をもう少し…そう思ってしまった。

一頻り撫で、士郎はカナエから手を放す。その手を、少しだけ名残惜しそうにカナエが目で追っていたことに、彼は気付いていただろうか。

「それで、どうするかね？」

「どう、とは？」

「医療施設に幽霊、というのも外聞が悪かろう。その宝石を売るなり捨てるなりすれば、晴れて幽霊屋敷の汚名返上だ」

「……」

なるほど、この宝石が彼の本体だというのなら、理屈が通る。

しかし、*“捨てる”*や*“売る”*とこともなげに彼は言うが、それは……。

「まあ、屋敷の運営を考えるなら売るのが良いだろう。そうすれば……」

「これは、大事なものなんじゃありませんか？」

「……だとしても、関係のない話だ。そこから離れられない以上、売ろうが捨てようが何も変わらんよ」



「……でも、誰かの大切なものを売ったり捨てたりするのは、どうなんでしょうね」「では、どうするとかね？」

「士郎さん、蝶屋敷で働いてみる気はありませんか？」

「は？」

翌朝。小鳥が囁る爽やかな空気を引き裂きながら、蝶屋敷には廊下を疾走する胡蝶しのぶの姿があった。

（この匂い、間違いない。またあの幽霊の仕業だ！）

出汁の引き方からして蝶屋敷の住人や出入りする隠のものとは大違いだ。ここまで芳醇な香り、所詮は素人の彼女たちではどうやっても引き出せない。

どうせ厨に駆け込んだところで蛻の殻なのは承知の上だが、万が一にも手掛かりの一つでもつかめれば……そんな淡い期待と共に厨を除けば、案の定そこには……

「ふむ、どうせだから一品追加するか。さて、年頃の娘に喜ばれる品となると……」（ナニカ イタ）

「甘い卵焼きもいいが、後でプリンにするという手もある。であれば、ここは……」

（ヤダ カツポウギ ニアイスギ）

ちよつと衝撃的過ぎて、片言になってしまっているのはご愛敬。

白い髪に黒い肌という日本人離れた色彩で、会話能力が死滅し表情筋も仕事をしていない水柱を上回る体格でありながら、普通なら似合わない筈の割烹着がピッタリするくらい似合う偉丈夫が、実に手際よく朝餉の支度をしているのだ。ちよつと訳が分からなくて混乱するのも無理からぬことだろう。

「む？ ああ、起きたか。少々待ちたまえ、もうじき準備が整う。

とはいえ、君も育ち盛り。なんなら、繋ぎにそこのお新香でも摘まむかね？ 自信作だ」

「というか、誰よアンタ!!」

「うむ。まっとうなりアクション、感謝する。ようやく常識のある相手に会えて、正直ホツとしている」

「りあくしよん?」

「ああ、反応ということだ」

「なるほど…つてそうじゃなくて! まさか、アンタが幽霊の正体?!」

「そういうことになる。まあ、枯れ尾花ではなくて申し訳ないが」

「なんでここにいるのよ!」

「簡単に言ってしまうえば、今日から…正確には昨夜か? とりあえず、君の姉に仕えることになった。文句や抗議はカナエに頼む。何分しがない雇われの身だ、主には逆らえ

ん

「は？ 姉さん？」

いや確かに、こういう突拍子もないことをやりかねない姉ではあるが……と思ったところで、ここの元凶がやってきた。

「おはようしのぶ、士郎さん。あら、今日の朝餉は何かしら？ 楽しみね、ねーしのぶ」

「……士郎さん？」

「ああ、私の名だ」

「……とりあえず、だいたい姉さんのせいってことでいいですか？」

「責任の在り処、という意味ではそうなるな」

「わかりました。あとであなたからも話は聞きますけど、先に姉さんに聞くことにします」

「お手柔らかなに」

「……結構常識的そうね」

「あら？ どうしたのしのぶ、なんだかちよつと怖いような……」

「姉さん、とりあえず洗いざらい話してもらおうよ」

「は、はあ……」

こうして、衛宮士郎の蝶屋敷での日々が始まった。

## 〈鬼滅の刃×月姫〉 死を視る眼、命を燃やす痣

“母”のような人だった。生憎、母はおろか家族の事すら覚えてはいないのだが。強いて言えば、妹はいたような気もする。まあ、覚えていない以上詮無いことだ。

とりあえず、自分にとって“母”という言葉から連想されるのはあの人の姿だった。でも、実際に彼女をそう呼んだのは一度だけ。

呼びたいと思い、何度も何度も胸の内で繰り返した。そして、意を決して呼んだ時……酷く後悔したのを覚えている。

——おやめなさい。“それ”は私には相応しくありません、お母さまが悲しまれま  
すよ。

別に喜んでほしかったわけではない。なんなら、叱ってくれても構わなかった。

だけど、あんなにも“哀しい顔”をされるのは予想外で。いつだって寂しさや悲しみを押し隠していたあの人が、今にも泣きだしそうな顔をしていた。

だから、それからはずっと“先生”と呼ぶようにした。

視界に映る黒い線。見ているだけで酷く気分が悪くなるそれに、気が触れてしまいうだった幼い日の自分。

そんな俺に、大切なことを教えてくれたから。生きていくために必要なことを、たくさん教えてくれたから。

——志貴、あなたのその「眼」は『モノ』の命を軽くしてしまう。

——命はただ一つだけのもの、失われてしまえば二度と戻らない。

——でも、思い違いはしないで。あなたが悪いわけじゃない、その眼が悪いわけでもないのだということを忘れないで。

——そしてどうか、その眼に縛られることなく強<sup>つよ</sup>くお生きなさい。

その言葉に、いったいどれだけ救われたことだろう。

こんな眼を持つてしまったにも拘らず、あの人は思うように生きて良いのだと言ってくれた。

——「聖人」になどならなくて良いのです。ただ、あなたが「正しい」と思う大人になりなさい。

——過ちを素直に受け止め、他者を思いやり、謝ることができるあなたを大切にしなさい。

——そうすれば、きっとあなたは間違うことなく生きられるはずだから。

でも、一つだけ教えてもらえなかったことがある。それは、あの人たち自身の事。

自分たちが何者で、どうして置き去りにしたのかだけは、教えてくれなかった。

——志貴、どうか人の世で生きなさい。母と呼んでくれてありがとう、あなたを愛しています。

怒っているわけではない。恨んでいるわけでもない。ただまあ、家族のように感じていたから、水臭いとは思った。特にやりたいこともなかったし、見つけて話だけでも聞かせてもらおうと思った。

その後のことは……何も考えていない。聞いた上で決めればいいと思っていたからだ。

まあ、同僚たちに知られれば色々言われることになりそうなので黙っていたが。というか、あの人たちの正体についてはもうおおよそ想像がついているので、下手に漏らすと大問題だ。

あの人の願いに反していることはわかっている。他の隊士のような志や信念があるわけでもない。そのことに居心地の悪さを感じないと言えば嘘になるだろう。

だが、好きな仕事ではなくてもやりがいはあるし、特技を活かすという意味では向いているのだと思う。

とはいえ、鬼殺隊全体の空気が自分とはあまり合わないので、親しい相手はほとんどいない。強いて言えば、腹を割って話せるとしたらカナエさん位なものだ。

まあ、本音を出せるかもしれない相手がいるだけマシなのだろう。まだ出したことは

ないのだけど。

——鬼も人も仲よくすればいいのに。

基本的に不可能だと思っっているのだが、心当たりがあるだけに頭から否定することもできない。

なので、どうせなら一度会わせてみたいと思う。現状、居場所すら定かではないのでそれ以前の問題だが。

あと、二人でいると妹のしのぶちゃんが凄いい目で睨んでくるので、居場所がわかっても引き合わせるのは難しい。あの子は普通に鬼を憎んでいるので、会わせると知ったら絶対に反対するだろうし……まあ、むしろそちらの方が普通の反応なだけど。

それにしても……

「俺が柱かあ……身体、保つかな？」

打診が来たのはつい先日的事。うっかり十二鬼月を倒したら、そんな話になってしまった。

だが、この話を受けるかどうかは悩んでいる。というか、正直が進まない。鬼殺隊の隊士として考えれば名誉なことなのだろうが、そう言ったことには特に興味がない。

元々鬼に対する怨恨なんて特にないし、害獣駆除の延長で鬼狩りをしているような俺だ。自分の考えや生い立ちなど、わざわざ口にしても周囲との不和を生むだけ。それが

わかっているので黙っているが、「鬼殺の柱」になるとなれば黙っていれば済むという問題でもないだろう。

実績を積み重ねた結果の打診なので、能力や資格云々を言うつもりはない。むしろ、俺の眼なら届きさえすれば上弦や鬼舞辻でもあつても殺せる筈。客観的に見るなら、当然の措置と言えないこともないだろう。

ただ、思想とか心構え的に、「鬼は絶対に殺す」という気構えのない俺が柱になるのは不適切だ。甘露寺をはじめ、数少ない鬼の被害を受けずに鬼殺隊となった連中だつて、根本的には「鬼は許さない」と思っているのだから。

——そりゃ黙つてればバレないだろうけど、うくん……いいのか、俺で？

“柱”というのは、単に鬼殺隊の最大戦力であるというだけではない。同時に、隊士たちの心の支えでもある。前者はともかく、後者に関しては正直ちよつと申し訳ない。

——あとは、体調面も気がかりなんだよな。

鬼殺隊の最高位というだけあり、柱は極めて多忙だ。東奔西走して休む間もなく鬼狩りの日々。それ自体は別にいいのだが、問題なのは俺の身体がもつかどうか。持病の貧血で、倒れるとまではいかなくても動けなくなることは少なくない。

今でも頻繁に蝶屋敷の世話になっているのに、柱の激務に果たしてこの身体は耐えられるのだろうか。単に自分が倒れるだけなら自己責任だが、柱の権威にも傷がつくかも



しれないし、周りに迷惑をかけるとなると気が引ける。

だが同時に、定員九名の「柱」に欠員が出たままにしておくのもよろしくない、というのもわかる。

柱が足りないというのは、それだけで隊員たちの不安を煽る。だから、資格がある奴がいれば柱に据えるのは当然なのだろう。

一応鬼殺隊の一員として、責務は果たすべきだ。その責務の中には、資格があるのなら柱として立つ、というのも含まれるのだろう。

——となればもう、とつとと後任を見つけるなり育てるなりして、柱を降りるしかないな。

方針は決まった。激務と体調については不安だが、騙し騙しやれば一年くらいは何とかなる……と思いたい。

倒れる前に、何とかして後釜に押し付けるしかない。

こうして鬼殺隊史上初となる、呼吸無を使わない柱柱が誕生した。

同時に、ある意味では最もやる気のない柱でもあったわけだが……そのことを知る者は、ほとんどいない。

\* \* \* \* \*

「柱就任おめでとう、志貴君」

「カナエさん……」

「もう、まだ“さん”付けなの？ これからは同格なんだし、もつと気軽に呼んでほしいわ」

「まあ、そこは先任だからってことで」

まだお互いに柱になる前の頃は、カナエに妹がいることもあつて混同しないために名前を呼び捨てにしていた。

しかし、志貴に先んじて彼女が柱となった際、周りに示しがつかないことから敬称を付けるようになった。まあ、本人が嫌がったので“様”付けはしなかったが。

「いいのか？ いくら夜中とはいえ、俺と会つてるのを見られたらまた何か言われるんじゃないか？」

「別に後ろ暗いことがあるわけじゃないし、気にしなくていいんじゃないかしら」

一応気を回してはみたが、カナエは特に心配した様子を見せない。

それなりに親しくしている間柄……というか、志貴が良く世話になっている身なのだが、周囲からは「ソリが合わないだろう」とみなされることが多い。そのため、志貴と

カナエが会っていると、カナエの心配をされることがままある。

それは、カナエが鬼殺隊にあつて極めて特異な思想の持主であることが割と周知なことで、志貴が少々誤解されていることに起因する。片や「鬼と仲良くしたい」と口にするカナエ、片や何故か「鬼殺隊屈指の鬼嫌い」と噂される志貴。カナエのことは真実だが、志貴の噂が事実なら確かに不仲にしかならないだろう。まあ、実際にはそんなことは全くないのだが。

「……体調の方は大丈夫なの？ 柱は忙しいわよ」

「断ろうかとも思ったけどね」

なにしろ、今もこうして蝶屋敷に検査入院している身だ。柱を務めあげられるかと言われると、不安要素ばかり。

それでも、鬼殺隊の一員としての責務を放り出すわけにもいかない。空気には馴染めないが、それなりに愛着はあるのだ。

「御館様にも進言するけど……月二回の定期健診と、任務中に負傷や体調の変化があれば、どれだけ軽くても必ずうちに来ること。これは欠かしちゃだめよ、いい？」

医学の心得のあつた胡蝶姉妹は、まだこの診療所蝶屋敷が運営されるようになる前から、実質的な志貴の主治医だった。一つ年下のカナエは同期で任務を共にする機会も他より多く、生来の優しさと世話焼き気質のおかげですっかり世話になるようになってしまつ

た。

まあ、妹の方は「大事な姉に近づくと悪<sup>男</sup>い虫」ということで警戒心をむき出しにしているが。生憎、志貴はなぜ睨まれているのかよくわかっていない。

「カナエさんがいない時は……」

「もちろんしのぶに診てもらおうわ」

「俺、嫌われてるっぽいんだけどなあ……」

「大丈夫よ。別に嫌ってるわけじゃないし、しのぶは診察に私情を挟むような子じゃないもの」

確かに、あの生真面目な少女はちよつと感情の沸点が低いところはあるが、私情に流されて手を抜くようなことはないだろう。

共に任務に就いたこともあるが、向ける視線と態度はともかく任務に対する姿勢は一貫して誠実だった。不真面目とは言わないが「終わり良ければ総て良し」などころのある志貴としては、多少肩身は狭いものの背中を預けるに不足のない相手だった。

「……まあ、しのぶも志貴君のことはちよつと苦手みたいだけど……」

「苦手？ 嫌いじゃなくて？」

「ええ。呼吸を使っているわけでもないのに鬼の首をポンポン落としちゃうところは、嫉妬に羨望が混じって結果的に睨んでしまっているけど、別に嫌っているわけじゃない

のよ」

まあ、「何がどうなってるのよ、訳が分かんない!」「何なのよあの理不尽!」と怒っていることはあるが、嫌ってはいない…はずだ。

ただ、しのぶは志貴を「恐れ」ている。鬼に対し怒りを燃やし、憎しみに駆られている者は多い。そのため、鬼殺隊ではそれこそ「鬼のような形相」で戦う者は珍しくない。しのぶも、別にそういう手合いであれば特段怖いとは思わないだろう。

だが、志貴は違う。鬼を前にした時、彼の雰囲気は常のそれから一変する。鬼に対する一点の濁りもない澄み切った殺意に触れる度に、本人も自覚しないままうつつらと浮かぶ笑みを見る度に、志貴のことが堪らなく恐ろしくなる。

轟々と燃える炎のような熱を孕むわけでもなく、凍てつく氷のような冷たさを帯びるわけでもない。

そも、志貴の殺意に熱はない。熱くはないが、冷たくもない。代わりに、唯々無機質なのだ。まるで、「鬼殺」という機能を持った機械の様に、淡々と作業の如く鬼の首を刈り取っていく。

反面、何の感情も伺わせない殺意でありながら、その面にはゾツとするような笑みを浮かべている。「楽しい」のか、あるいは「愉しい」のか、それとも「嬉しい」のかも定かではない。もしも彼が機械だとすれば、自らの機能を、役割を果たせることに対す

る歓喜なのではないか、そんなことを思ってしまう。あるいはそれは、常軌を逸した鬼への憎しみの結果なのではないか、なんて声もある。

そう言ったことを思う輩はそれなりにおり、その結果「鬼殺隊屈指の鬼嫌い」という先の噂が蔓延るようになったわけだ。まあ、本人は自覚していないようだが。

しかし、そう言った噂が生じたのも無理はないだろう。それほどまでに、鬼殺の場における志貴は「外れている」。

いつだったか、しのぶは志貴の姿をこのように評した。

——嬉々として、鬼氣迫る。

そんな姿が、人とも鬼とも違う、まったく別の生き物のようで恐ろしかった。だから、胡蝶しのぶは遠野志貴が苦手だった。

姉に近づくからとか、力を必要とせずに鬼の首を狩れるからとか、それらすべてがどうでもよくなってしまうくらいに。

「……志貴君にも見せてあげたいわ。しのぶの笑った顔ってね、とつてもかわいいのよ」  
夜空に輝く満月を見上げながら、本当に愛おしそうにカナエは呟く。身内大好きな、妹大好きな彼女のことだから多分に鼻唄が入っているだろうが、それを踏まえた上で「見てみたいな」と思ってしまった。

まあ、しのぶとの関係性を考えると、ちよつと難しそうだが。

「……そういえば、富岡が『胡蝶はいつも怒ってる』ってこの前ボヤいてたっけ」

ほとんど交友はないが、任務や食事処で出くわしてもお互い黙ったまま過ごすことは特に苦にならない。

口を開けば他人の神経を逆撫でするような発言が多いが、実際に喧嘩に発展することはない。正しくは、自分からは仕掛けないし、相手が仕掛けてきても反撃せずに受け流すからだ。そして、それで相手がお咎めを受けたという話を聞かないことから、抗議や訴えを起こしたことがないことがうかがえる。

中には「見下している」なんて声を聴くこともあるが、何となく違うような気がする。「そうね。しのぶ、心配したりする時って叱ったり小言が多くなったりするから……」

「まあ、真面目な人にはありがちか」

「うん。富岡君は富岡君で、軽傷どころか割と深手を負ってても治療に来なかつたりするし、しのぶとしては色々言いたいことがあるんでしょね。でも、富岡君怒ってなかつたかしら？」

（むしろ、珍しく嬉しそうにしていたような……）

極僅か、本当に間違い探しののような誤差だが、いつもより口角が上がっていたような気がする。

怒られて嬉しいとか、逆に怒らせるのが楽しいとか、そういうのではない……といい

なあ。でないよ、しのぶの心労がさらに加速することになる。

「まあ、大丈夫じゃないか。あの富岡だし」

正直、あの男の怒りのポイントはよくわからない。というか、喜怒哀楽をはじめ、ほとんどの感情のポイントがわからない。何をしたら感情が、ひいては表情が動くのか、常々不思議だ。

「そう、ならいいんだけど……」

「どうかしたか？」

「……………できれば、しのぶにはいつだって笑っていてほしい。本当は鬼殺隊を辞めて、一人の女の子として幸せになって、皺くちゃのおばあさんになるまで長生きしてほしいの」

それは、姉として当然の感情なのだろう。家族の記憶を持たない志貴には共感できない筈のことだが、なぜか理解も共感もできてしまう。

だがそれは、決してしのぶの望む願いではない。

「しのぶちゃん、納得しないだろうな」

「……そうね」

「もしかして、だから『鬼と仲良く』？」

鬼と人が仲良くなれば、当然鬼殺隊の役目も意味をなさなくなる。



つまり、しのぶが鬼殺の剣士として生きる意味もなくなるということだ。結果的に、彼女は普通の娘として生きることになるだろう。

「それだけが理由じゃないわ。鬼は哀れで、悲しい生き物よ。その言葉に嘘はない」「そんなものかな?」

正直、あまり共感はできない。何はともあれ、彼らは人を喰う。時に騙し、時に弄び、ただ空腹を満たす以上の愉悦を求める。

腹を満たすだけであれば、志貴はそれを「仕方のないこと」と思う。もちろん喰われてはたまらないので、最終的には「狩る」という結論には至るだろうが、人だつて家畜や野生動物を殺して食うのだ。人だけがそれをされてはならない理由はない。そもそも、クマが人を襲ったところで処分することはあってもそれを咎める者はいまい。志貴の鬼への認識とは、そんなものだ。あるいは食われたことに対しても、「運が悪かった」と思うくらいだろう。

弄ばれた命に対しては流石に哀れに思うし、報いを受けさせるべく努力するが。

このあたりが、志貴が鬼殺隊の空気に馴染めない理由だ。とはいえ、カナエの様に鬼を哀れに思うこともできない。

「鬼の中には、きつと普通の人だつてたくさんいたわ。家族を愛し、友人と絆を結び、隣人を慈しむ。そんな人たちが、あんなことになってしまう。それは、とても悲しいこと

だと思わない?」

「まあ……わからなくもない」

「私たちにできることは、人だった頃の彼らが望まないであろう悲劇を一秒でも早く止めること。そして、彼らをその地獄から解放することだけ。本当は、何かが起きる前に止められたらいいのに。あるいは、彼らを人に戻せれば……」

欲張りだな、と思う。できもしないこと、ありもしないものを望むのは欲張りなことだ。

だが、思いはしても口にはしない。そう願うことくらいは、許されるだろうと思う。カナエとて大切なものを鬼に奪われたはずだ。それでもなお、「かつて人だった」彼らのために心を痛めることができる彼女の願いを、否定する気にはなれなかった。

「……ありがとう」

「ん?」

「こんな話、ちゃんと聞いてくれるのは志貴君くらいだから」

実の妹のしのぶでさえ、カナエの願いには最終的に否定の言葉を返す。他の隊士たちであれば、尚のことだ。

唯一志貴だけが、否定することもなく「そういう考えもあるだろう」と受け止めてくれる。志貴が肉体的にカナエに助けられているように、カナエも志貴に精神的に助けら

れている。

だからこそ、カナエは彼が柱になることが嬉しく思う。同志ではなくても、理解者というわけではないにしても、耳を傾けてくれる人がいることに救われている。

そんな内心を知ってか知らずか、志貴は何の前触れもなく爆弾をぶっこんできた。

「まあ、仲良くできる鬼に心当たりはあるからな」

「え？」

「いや、本人たちに確認したわけじゃないんだけど…俺、たぶん鬼に育てられたからさ」

「ええっ!？」

「あれ、言ったことなかったっけ？」

「聞いてないわよ!？」 その人たちは今どこにいるの!？」

「さあ?」

「さあつて!？」

「そもそも、俺が鬼殺隊に入ったのって家族を探すためだぞ。ここなら情報も入ってくるかなって思つて」

「ええ〜……」

もうどうリアクションしていいかわからないといった様子で、ヘナヘナと崩れ落ちるカナエであった。

\* \* \* \* \*

私がそれを初めて耳にしたのは、賜った屋敷を診療所として開放して間もなくのことだった。

負傷した隊士を診るとなれば、当然多くの情報が入ってくる。本人が自覚していなくても、こちらでそれに気付く可能性もある。だからこそ、御館様は“あの事”を教えてくださいださったのだろう。万が一にも“ソレ”を発現した隊士が現れた時いち早く気づき、体調の変化や発現のための条件を調べられるように。

とはいえ、御館様だけでなく悲鳴嶼さんからもこの件はくれぐれも他言無用と念押しされた。だから、血を分けた実の妹であるしのぶにも話していかない。隠し事をする、あるいは蚊帳の外に置くようで申し訳なく思わないわけではない。でも、何があるうと私自身がしのぶにそれについて話すことはないだろう。

だって、あの子がこの事を知れば、なんとしてでも手を伸ばすだろうから。

しのぶが自分の小柄な体格に、それに伴う筋力の低さに悩み、苦しんでいることは知っている。

鬼を殺す方法は二つ。太陽の光に晒すか、あるいは日輪刀で“首を斬る”か。だけ

ど、しのぶには鬼の首を斬るための筋力がない。どれほど呼吸を極め、劍技を磨いたとしても、あの子の刃が鬼の首を落とす日は来ない。

しかし、もしもソレを発現することができたなら、あるいは……。

——酷い姉さんよね、私。

真にしのぶの意思を尊重するのなら、教えておくべきなのだろう。

鬼の首を斬ることは諦め、代わりに“毒”を以て鬼を討たんとしのぶは日々研究と実践に明け暮れている。普通なら首を斬れないとわかれば、隠の道に進むか下野するかどちらかだ。だがしのぶはそのどちらでもなく、今まで誰も試したことのない、考えようとしたことのない試みに挑むことを選んだ。

通常の方法がだめでもあきらめず別の道を模索し、今まさに“第三の手段”の先駆者になろうとする妹を誇りに思う。しかし同時に、せめて妹だけは普通の女の子としての幸せをつかんでほしいとも思ってしまう。

あんな約束をしてしまったばかりに、もつと早くに辞めさせるべきだったのではないか、何度後悔したことだろう。

それが、他ならぬしのぶの決意に対する侮辱と知っていながら、思わずにはいられない。

あるいは、しのぶに生きてほしいと思うならその可能性を少しでも引き上げるために

できることをすべきなのだろう。

いずれ「毒」が完成したとしても、手札が多いに越したことはない。毒が通じにくい鬼と戦うこともあるだろう。

そんな時、鬼の首を斬れるようになっていれば、しのぶの生存率は大幅に上がる。そうとわかつている、わかっているも教えることはできない。

曰く、かつて鬼舞辻鬼の始祖を後一步のところまで追い詰めた剣士たちには、尽く鬼の文様に似た「痣」が現れていた。

曰く、「痣の者」は例外なく短命であり、25歳を超えて生存した事例はない。痣の発現に何が必要なのかも、発現することで何が変わるかもわかっていない。

しかし、痣には大きな力があるのだろう。もしかしたら、痣を発現させればしのぶも鬼の首を斬れるようになるかもしれない。

だが、その代償は命によって支払われる可能性が高い。いったいどうして、最愛の妹の命を削る可能性を示すことが出来るだろう。

……いや、それだけであれば「鬼殺隊 花柱」胡蝶カナエはこうも自責にかられなかった。

彼女が自らを「酷い姉」と自重した最大の理由、それは……

——欲しいと、思ってしまった。

そう。痣の存在を知った時、確かにカナエは思ったのだ。

痣によって得られるかもしれない力ではなく、そのために支払う代償故に、カナエは痣を欲した。

それがかつての痣の者たちへの、命を賭して今も戦っている妹や仲間への、あるいは鬼に脅かされる無辜の人々への、または未来の誰かへの、そして誰よりも「死の意味」を知る「彼」への侮辱だとわかっていながら。

——だって、だってそうすれば……。

「彼」と添い遂げることができないのか。

誰よりも「死」に近い場所にいる、きつと長くは生きられないだろう彼と。

命を燃やして、短い時を共に駆け抜ける。それが、どうしようもなく甘美に思えてしまった。

——私じゃ、彼と同じものを見ることはできない。

「生」の価値を、「命」の重さを知る人はいる。それなら自分にもわかる。

——でも、きつと彼だけだ。

「死」を大切なものとし、「終わり」の尊さを知っているのは。

一度だけ、彼の「眼」に映る世界を見せてもらったことがある。

飛び込んできたのは、筆舌に尽くしがたい光景だった。

“地獄”なんて生温い、“悍ましい”などでは到底足りない。

カナエには、あの世界を表現する言葉が見当たらない。敢えて言葉にするとするならば、かつて彼が口にした言葉をそのまま引用するしかない。即ち……

——俺がイカれてるって？ そんなの当たり前だ。

——この眼に映る世界はなにもかもがあやふやで、酷く脆い。

——地面なんて無いに等しいし、空なんて今にも落ちてきそう。

——こんな世界で、一秒だって正気でなんていられるものか。

視界に映る全てのもの、命の有無にかかわらず走る歪な黒い線。ただそれだけのはずなのに、気持ち悪くて、恐ろしくて、視ているだけで気が触れてしまいそうだった。

——いったいどれだけ見ていたのだろう。永遠の感じられたが、きつと実際には一秒にも満たなかった。たったそれだけで、カナエには限界だったのだ。

彼を育てた人たちは“当然だ”と、“無理をしてはいけない”と言ってくれた。確かにその通りなのだろう。でも、それでもカナエは悲しかった。同じ世界に生きることができない、同じものを見ることができない。彼の苦しさを肩代わりすることはおろか、共有することもできないことが、たまらなく悲しかった。

それでも、胸に芽生えた思花いはなお一層瑞々しく咲き誇る。

そんな世界に生きていながら、誰よりも濃厚な死の気配を纏いながらも、優しく在れ



る彼を……想ってしまったのだ。

——共に生きられないのなら、せめて死に際を共にしたい。

なんて、馬鹿なことを考えてしまうくらいには。

〈艦これ×FGO〉神機残響海戦 硫黄島～天 地 人の

狭間～

—— “汎人類史の方が平和だ”なんてとんでもない

そう言ったのは誰だっただろう。

—— 全ての地獄の頂点に立つ！ それこそが汎人類史を名乗るに相応しい条件だ

！

胸を張ってそう断言したのは、果たして誰だっただろうか。

……そう。いつだって “滅び” と隣り合わせ、地獄の次にまた地獄を積み重ねるのが  
この<sup>汎人類史</sup>人理の在り方だ。

それは、二度に亘る “人理の危機” を経ても変わらない。 “齎した者”<sup>人類悪</sup>の愛のカタチ  
など知る由もなく、 “乗り越えた者”<sup>最後のマスタ</sup>が何を背負ったかなど見向きもせず。

何一つ変わることもなく、今もまた着々と地獄を積み重ねる。

だが、積み重ねられた地獄に埋没した “モノ” たちがそれを “是” とするかは別の話。

代り映えもなく、それどころかなお一層惨たらしさを増す地獄の繰り返しに、果たして「彼ら」は何を思うのだろう。特に、最も「人」が「人を殺した」であろう時代に在った彼らは……

「赦す」のだろうか。

それとも

「拒む」のだろうか。

分からない。生者に死者の想いなどわかるはずもない。

ましてやそれが、人ならざる「人による被造物」のものとなれば尚の事。

あるいは、遠い過去神代の「残滓」ともなれば、最早人知の及ぶものではない。

とはいえ、だ。所詮は過去の遺物。片や「思魂いはあつても力はなく」、片や「力神はあつても思魂いは既に滅びた」。意思無き力に意味がない様に、力無き意志にも価値はない。

とりわけ、その魂が歴史の浅い、帯びる神秘も薄弱な「付喪神の為り損ない」では……。

しかししも、「もしも」の話。

「力無き意思」と「意思無き力」が結びついたとしたら……それは互いの「足りないもの」を埋め合う結果になるのではないだろうか。

奇しくも、どちらも在るは“海の底”。時代に取り残された残骸”と“人理に拒まれた者の残滓”、めぐり逢い結び付く可能性は限りなく“ゼロ”に近いが“無”ではない。

本来であれば“神代”と“近代”、“命の混沌”と“鋼の艦”では相性が悪い。巡り合ったところで結びつくはずがない。

だがそれも、世界の土台たる“人理”が揺らいでいる状況では話が別。その程度の“あり得ない”ならば十分に起こり得る。“残滓の大本”が一度は目を覚ましたとなれば、尚の事だろう。

しかし、相性が悪いことにも変わりない。結びついたとて、融け合い動き出すまでには時間を要した。

人知れず、海の底で胎動していたそれが動き出したのは世界が二度目の“空白”から脱して4年後の事。

ある日——海が“黒く”染まり、そこから“ナニカ”が這い出した。

遭遇初期こそ情報不足や生物学的にあり得ない姿形などへの混乱が重なり多数の被害を出したが、無論、人類として手を拱いてばかりいたわけではない。

狙つての遭遇こそできなかつたが、通信や残された残骸から回収した“レコーダー”から多くの情報を得ることに成功する。

まず、彼のアンノウンと遭遇する時は黒い海に侵入した時か、あるいは海が黒く染まってから。

確認された姿形は小型のクジラを彷彿とさせ、だがそこから砲塔を生やした有機物とも無機物ともつかない異形の群れだった。

速度は早くてもせいぜい40ノット程度<sup>時速7.5キロ</sup>。主な攻撃手段は砲塔からの砲撃だが、射程は短く、最新鋭艦はおろか旧型艦にも及ばない。砲塔を備えてこそいるが、所詮は小型のクジラサイズに搭載されたもの。それでも砲撃は砲撃なので、当たれば無傷とはいかないだろうが、一発や二発当たったくらいでなにほどのものだろう。むしろ、射程の差を以て一方的に撃ち据えてしまえばいい。そんな意見が多数を占めた。

それら多岐にわたる情報を元に、各国は即座に領海の治安回復に乗り出すことに。

その時、彼らは勝利を信じて疑わなかった。むしろ、いったい何者が裏から手を引いているのか、近隣諸国や大国の暗躍、あるいはテロ組織の生物兵器などを疑いそちらに目が行っていたくらいだ。

だが、彼らの楽観的な予想は見事に裏切られる。

確かに射程は短い。速度も特筆すべきものはない。砲塔も、口径からさほどの脅威はないと思われた。

しかし、小型のクジラ程度という小ささが“機動力”としてアンノウンを利すること

になる。30～40ノットで縦横無尽に海を進む、それは最新鋭のイージス艦でも不可能な小回りの良さを意味している。速度で優つても、とてもではないが追いつけるものではないし、そんな相手に主砲や機銃を当てるのは至難の業。

また、外見に反し装甲は堅く、運良く機銃が当たつたくらいではほとんど影響がない。主砲やミサイルですら効果は薄く、一部からは「当たる前に何かに防がれたように見え」た」という証言が上がるほど。

同様に、現代の艦艇から見れば豆鉄砲に等しいような口径の砲撃が、あり得ないほどの被害を齎したりもした。

無論、彼らもやられっぱなしでいたわけではない。人類の英知の結晶たる最新鋭の技術を駆使し、空と海の双方から「ソレ」の駆逐に乗り出した。要は、航空機による爆撃やミサイルなどによる逃げ場のない、逃げる間もない広範囲の攻撃による撃退である。

効果の有無を問えば、効果はあった、あったが「抜本的な解決」からは程遠かった。

そもそも「ソレ」は黒く染まった海の範囲内であれば前触れもなく現れ、痕跡もなく消えて行くことが間々ある。現代のレーダーでは、とてもではないが事前に出現を予想することはできず、運良く発見できた個体や集団に攻撃するのが精一杯。加えて、「黒い海」はアメーバのように形を変え、急激に一か所だけ範囲を広げたかと思えば蛇行するなどまるで規則性がない。さらに範囲内は電波の乱れが著しく、その範囲が広がれば

広がるほど海と陸、あるいは陸から陸への通信を阻害することに。

ある意味、これが一番の問題だったかもしれない。情報社会と言われる現代において、「海を隔てた通信」に限定されるとはいえず、それが不可能になるというのは大問題だ。ならば、すべての元凶と思われる「黒い海」を除去しようと試みるも、生身で触れば瞬く間に全身に「黒」が広がり、吸い込まれるように為す術もなく飲み込まれてしまう。かといって、例えばミサイルを撃ち込んでみたところで、その瞬間穴が空いても即座に周りの「黒い海」がその穴を埋めてしまい、奇しくも「焼け石に水」の逆を行く形だ。

大国の中には、核兵器を以てこれを排除しようという意見まで出ているとか……無論、そんなものの許可が早々降りるはずもない。

結果、微々たる抵抗を見せつつも自衛隊や各国海軍の治安回復作戦はことごとく失敗、それどころか防衛線が崩壊し、ほぼすべての制海権を失うまでに陥った。それどころか浜辺近くまで黒い海が広がり、海辺のすべてを封鎖する事態にまで発展。

どういふわけか陸への浸食は起きなかったが、それがいつまでも続くはずがない。何しろ奴らは、日を追うごとに姿と戦術を洗練させ、次第に人型へと近づいて行っているとの情報もある。知性の有無は不明だったが、全ての海を制することを優先しているか、あるいは浸食のための力を蓄えているか、いずれにせよ「時間の問題」というのが

共通見解だった。

あるいはこの時、“星見の観測台”が健在であれば“空白”と“ソレ”の関係に気付けたやも知れない。だが、役目を終えたそれは本部と9割以上の人員を失っていたこともあり解体され既になく、世界の海は正体不明の異形の謎のベールを？がすこともできず、為す術もなく蹂躪されていった。

そうしてソレは、海の底：深海より這い出す脅威として“深海棲艦”の名で呼ばれるようになる。

海路は寸断され、流通が途絶し、日本のような四方を海に囲まれた国を孤立させることになったそれは、二度の“空白”よりも遙かに現実的な危機だった。

幸いだったのは、高高度を行く飛行機や衛星通信ならば辛うじて可能なことだろう。これにより、各国は辛うじて情報共有と連携を図ることができた。危機的状況故に、反目しあっている余裕がなかったとも言えるだろうが。

しかしそのおかげで、国連より一つの打開策が提示された。

情報源をはじめ、あまりにも秘匿事項が多く各国の不信を買ったその策の名は「プロジェクト・フエイト」。

かつて国連傘下にあつた極秘機関より抽出した技術とデータを用いた、現代科学とは相反する“兵器”。



重要なのは主に4つ。

一つ、理論は不明だが製造法だけは開示され量産が進められる“ヒトカタ”。

一つ、古式ゆかしい手綱を引く鎧姿の兵士が描かれ、裏面がモザイク状の支給された無数の“カード”。

一つ、前者二つを統合することで動き出した“ナニカ”が力を蓄え、傷を癒すための“鎮守府”。

そして——彼らを土地と現世に繋ぎ止める“提督”。

これら4つを以て、対“深海棲艦”を目的に運用される人ならざるナニカ、これを正式名称である“●●●●●●●●”とは別に人々はこう呼んだ。

“艦娘”と。

\* \* \* \* \*

東京都新宿区、防衛省庁舎の一室に二つの人影があった。

片や頭髮に占める白いものの割合が多くなり、その分の貫録と伶俐さを感じさせる顔立ちのスーツ姿の初老の男性。

片や髪はいまだ黒々とし、それと対比するような純白の制服を身に纏った柔和な顔つ

きの壮年男性。

初老の男は重厚なデスクに腰掛け眉間の皺を深くしているのに対し、壮年男性の方は背筋を伸ばしながらもよい意味で肩の力の抜けた自然体。表情こそ引き締められているが、上役の前だというのにこのリラックスした態度を崩さないのは、ある意味大物の証拠だろう。

初老の男性の方も今更この部下の態度を正す気はないのか、眼鏡をはずして眉間を揉み解すだけでそのことには触れず、話を先に進めるつもりのようなのだ。

「つまり、こういうことかね？ 制服組の連中は、これだけ逼迫した状況にありながらも未だに体面にこだわっている？」

「皆が皆、というわけではありませんが、『保守派』が大勢を占めているのは事実かと」「連中は……現実が見えていないのか？」

「ですが、言わんとすることは正論では？」

「民間人を守るのが自衛隊の仕事、か。確かにそうだろう。」

だが、現実を見たまえ一佐。『彗号』なしには我々は自国の領海はおろか沿岸部すら守れなかった。あのままでは、奴らの上陸は時間の問題だっただろう。業腹ではあるが、それを防げたのは国連がどこぞから引つ張ってきた奇怪な兵器とも呼べん兵器によるものだ。それがあつたからこそ、辛うじて近海まで戦線を押し上げることができた。

今更、「ゑ号」を運用することに何の不満がある。議論も衝突も散々やり尽くしたではないか。それを今更蒸し返すなど……」

苛立たしげに人差し指でデスクを「コツコツ」と叩きながら、忌々しそうに顔を歪める初老の男性に対し、壮年男性の方は相変わらず柔和な表情を崩さない。彼はその穏やかな表情に相応しいゆったりとした口調で、目の前の上官の言葉をやんわりと否定する。

「忘れたわけではありませんよ、次官。ただまあ、「ゑ号」については外見はともかく、「兵器」ということで何とか納得することもできました。外見こそ「アレ」ですが、中身は人ではありません。日本が誇るアニメ文化、その象徴の一つですからね。「人型兵器」というのは。

ですが、これは流石に本分に悖る……と思うお歴々が多いでしょう。まあ、お気持ちにはわからんでもないですがね」

「「アレ」が人かどうかは我々が決めることではないが、現実問題として奴らを排除するには「アレ」を用いるしかなく、その運用ができる者は限られる。背広・制服を問わず、予備役すらも引つ張り出して辛うじて近海まで戦線を押し上げることはできた。しかし、それで頭打ちだ。これより先、かつての領海まで制海権を確保するには根本的に数が足りん。

ましてや、それ以上となれば……」

「ここで実績を示せば、首尾よく事態を鎮圧できた折には国際社会で存在感を示せますし、一昔前のご近所さんのように領海を広げることも不可能ではありませんからな。それも、自分たちで確保した領域です。文句を言われる筋合いはないでしょう。それにあわよくば、『世界の警察』とやらも……」

「やめたまえ。我々は、あくまでも自国とその国民を守るための組織だ。領土的野心などなく、あくまでも世界的混乱を終息するためだ。違うかね？」

「おっと、そうでしたそうでした。それは『星の似合う』国の方々の目的でしたな。

とはいえ、我らの領海を侵犯されても困りますし、やはりここは率先して動くのが吉なのは事実ですな」

「無論だ。まあ、中には感謝してこちらに『気を遣ってくれる』国もあるかもしれんがね」

「ははあ、情けは人の為ならず、というやつですな」

実際問題として、日本は比較的早く「●●●●●●」：自衛隊内では『急号』

と呼ばれる兵器を導入した。四方を海で囲まれ、本土から離れた離島を多く抱える日本にとつて一日でも早い制海権の奪取は至上命題だったからだ。多くの問題を孕んだ兵器ではあるが、それらに目を瞑つてでも急がなければならなかった。

深海棲艦が現れて6年、ここまで戦線を押し上げ維持できている国は少ない。これは、国際社会で存在感を示し、その立場を強める格好の機会でもある。せつかくの勢いをここで殺してしまうわけにはいかないのだ。

とはいえ、当初は「国防上の秘匿事項」で通してこられたが、最近では「彘号」の情報は流出し始めている。まず、戦線を押し上げるにつれ海辺に人が戻ってきているという点だ。

沿岸部を封鎖している間は問題なかったが、海洋国家である日本にとって海に関連する事業・産業は生命線の一つ。船舶による大規模な物資の輸入は未だできず、空路では輸送力に難があるし、国内の生産力には限度がある。その状況では、「海産物」は貴重な食料品である。一時期は大きな混乱などもあったが、今はある程度落ち着いているのも限定的ながら漁業を再開できたのが大きい。スーパーでは肉より魚のスペースが増え、野菜と同じ感覚で海藻などが食される時代になったのだ。

とはいえ、そうして海に出る人が増えれば当然「彘号」が人の目に留まる機会も生じる。また、近海の制海権を確保したとはいえ、絶対安全とも言えない。彼らの安全を守るためには、哨戒艇などを回すより「彘号」の方が確実だ。下手に「事故」や「襲撃」があれば、叩かれるのは自衛隊と政府なのだから。

他にも、日本がある程度順調に成果を上げていることから、その足を引っ張るために

他国が手をまわしているという話もある。上辺では「彗号」運用のノウハウを求めつつ、裏では足を引っ張ろうとする輩には事欠かないのが現状だ。

「ですが、世論もそろそろ五月蠅くなつてくる頃合でしょう。そんな時期に「民間人の登用」はリスクもあるのでは？」

「表現には気を付けたまえ。我々は別に強制しているわけではないし徴兵など以ての外だ。あくまでも、適性のある者に「お国のために働ける機会」があることを伝え、希望者に「然るべき教育」をしようというだけだ、違うかね」

「いえ、その通りですな」

「「彗号」にしたところで外見こそ年頃の娘を模してはいるが、中身は血の通わん人形だ。少なくとも、国連がよこした「型」はそうだ。ならば、アレは人ではない。違うかね？」

「違いますせんな」

「だというのに、マスコミや考えの足りん連中はすぐに勝手なことをほざきおる。国連も国連だ、訳の分からん技術もそうだが、何故人間の形をしている必要がある。いや、それを言うならいつそターミネーオー風にでもすればよかつたのだ。そうすれば、むしろ世論を味方につけることもできただろうに」

（ある意味、人気ではありませんが……「艦娘」か。「日本人は未来に生きている」とか

昔は言われていたらしいが、時代が追いついてきたというべきかな?)

口に出せば絶対に怒りを買うので言わないが、もちろん彼はそのあたりのことも承知している。

「彗号」の存在が明るみに出るとつれ、一部オタク層界隈から「艦娘」などという名称で呼ばれるようになった。それが瞬く間に浸透し、今では自衛隊内でもこの名称を使う者がいる。

防衛省事務方のトップとしては、頭の痛いことだろうが。

「とにかくだ。『彗号』の数は揃えられるが、運用できる人間が足りなくては意味がない。大勢を占めているのは『保守派』だろうが、それはあくまでも制服組の中の話に過ぎん。『革新派』には頑張ってもらわなければならん、この私が後ろ盾になっているのだ。分かってているな」

「無論ですとも」

自衛隊：…より正確には防衛省内にもいくつかの派閥がある。

その中で現在最も大きなものが「保守派」と「革新派」だ。

「保守派」は言ってみれば「艦娘」否定派。胡散臭いこと極まりない兵器を信用していないが、かといって彼女らなしには制海権の確保は不可能。そこで彼女らを徹底して「使い捨ての兵器」として扱うのが保守派の基本方針だ。同様に、民間人の起用にも

否定的で、「国と国民を守るのは自衛官である」という強い自負を持っている。

対して、「革新派」は「艦娘」肯定派。何はともあれ艦娘なしには話が進まないのだから、彼女らの存在を受け入れようというのが基本方針。その結果、彼女らの個性や人格についても受け入れ、兵器というよりは「仲間」や「部下」に近い接し方をする者が多い。彼らは基本的に「なりふり構っていられる余裕はない」という考えなので、民間人の起用にも賛成している。

実際には各派閥にはさらに細かな派閥があり、「艦娘は認めるが民間人はアウト」だったり、「彗号を兵器として扱えるなら民間人も少々認める」だったりと色々だ。さらに、二大派閥の他に「中立」という名の「日和見」や企業や他国と繋がって自身の利益を追求するような連中もいたり、様々な者たちがいる。

事務次官にしたところで大まかには革新派に属するが、「彗号という兵器を効率よく運用するためにあれらの個性を認める」という方針に過ぎない。どこを見渡しても、一枚岩からは程遠いのが実情だ。

(いや、そもそも私からして一枚岩とは無縁か)

なにしろ、彼はほとんどの派閥に対して顔の利く実質的には「多重スパイ」だ。建前上は「革新派」だが、「保守派」に情報も流すし、何なら「利益派」に対して協力することもある。



まあ、そんな彼だからこそ事務次官にこうして裏工作の指示を受けているのだろ  
うが。

「ですが、『保守派』を黙らせるとなると、『スキヤンダル』ないし『失態』を演じても  
らうのが手つ取り早い手になりますか？」

「それはいかん」

「やはりですか」

「下手に付け入るスキを作れば、それこそ余計な連中を調子付かせる」

「となると、『革新派』の息のかかった者に実績を上げてもらうことになりますか……」

「『保守派』に比べ、『革新派』の提督たちは実績を上げている方ではあるが、だからこ  
そ目新しさに欠ける。少しずつ影響力を強めることにはなるだろうが、趨勢を傾けるほ  
どとなると厳しい。」

「それこそ、『起用された民間人が結果を残す』くらいでない……しかし、それだと  
順序があべこべだ。『民間人の起用』を押し通すために影響力が欲しいのに、起用した  
民間人の実績を以て影響力を強めるなどできるはずがない。いや、できなくもないが、  
その場合リスクが高すぎる。」

「一応、適性者の中から有望そうな者には秘密裏に教育を始めていますが……使います  
か？」

「いや、それだと万が一が怖い。無理を通して起用した者が失敗すれば、それこそ『保守派』を調子付かせることになる」

（一際有望なものもいるが、アレはなあ……）

表沙汰にはできない伝手から紹介された人物であり、色々と癖が強いのでまだ事務次官も知らない相手だ。

期待はできるものの、事務次官を納得させられるかとなると……。

（何しろ、お偉方に受けの良いキャラクターをしていないからなあ。オネエで明らかかな偽名を名乗っているとか、こつそり紛れ込ませるくらいでない……）

「……実はな、国連から推挙されている者が一名いる」

「国連から、ですか？　ですが、連中にこれ以上借りを作るのは望ましくないのでは？」  
この点に関しては、『保守派』『革新派』を問わず共通の見解だ。ただでさえ艦娘の件で多大な借りを作っているのに、これ以上国連が口出しをする口実を作るのは好ましくない。

そんなこと、この事務次官がわかっていない筈がないのだが、そんな考えを読んだかのようにデスクに一冊の冊子を取り出す。

「見たまえ。調べたが、何故推薦されたのかわからんくらいに凡庸だ。強いて言えば、高校を休学し留学していた時に運悪く『空白』がぶつかったくらいか」

「ほお、ちなみにどちらに？」

「うむ。ロンドンに留学していたようだ。復学後、そのまま卒業し以降は『深海』のことがあるまでは海外を飛び回っていたようだ。とりわけ何かをしたというわけではな  
いらしい。今は、インテリアデザイナ―をしているようだ」

「……なぜ、そのような人物を？」

「国連が用意した留学プランに参加した、というくらいしか繋がりはない」

「家族に国連職員がいたり、軍事教練を受けたりは？」

「特にないらしい」

（ますますわからないな。いったいなぜ国連はそんなことを……）

だが、国連がよくわからないことをするのはこれが初めてではない。それこそ、艦娘の配備を進めようとした時も、各国は『意味が分からない』という顔をしていたものだ。

ならば、この推挙にも何か思惑があるのかもしれないが……。

「それを飲むのですか？」

「国連には借りがあつ、無視はできん。とはいへ、これで失敗するなら良し。その時には、国連の影響力ごと排除し、こちらの有望な者に挿げ替えるまでだ」

（なるほど、国連の推挙を盾に『保守派』を押し切り、失敗すれば挿げ替えて『革新派』

の功績にする、と)

上手くすれば、国連と“保守派”の両方を黙らせられる一石二鳥の策だ。

強いて問題を上げれば、国連の候補者の後に“革新派”の候補者を充てるのには少々強権を振るわなければならないことか。だがそれも、事務次官という事務方トップの権力があれば行けるだろう。

いや、もう一つ問題点がある。

「もしその候補者が成功したらどうなさるおつもりで？」

「いいや、成功せんさ」

(……なるほど、成功させる気はないということか)

事務次官の資料を見る限り、確かにこれといって特筆することのない人物に見える。

“気付けば一年以上の時間が経っていた”という現代の“七不思議”にドンピシャで海外留学中に巻き込まれたことは運が悪いとしか言いようがないが、そんなのは正直掃いて捨てるほどいる。あとは、そんなことがあった後にも拘らず海外を飛び回ったアグレッシブさは非凡と言えるかもしれないくらいか。

とはいえ、それだけの人物がいきなり提督として艦娘の指揮を任されたとして、どうなるかは……想像に難くない。

(まあ、運が悪かったと諦めてもらおうしかないな)

それが、結果的には国と多くの国民のためになる。恨むのも憎むのも、何なら呪つてくれても構わない。そんなものは所詮負け犬の遠吠えで、何の意味もないことなのだから。それで満足するならいくらでもすれればいい。

世界はいつだって「犠牲者」と「利益を得る者」とで回っている。それだけのことだ。

「承知しました。では、さっそく要請し了解を得られ次第着任してもらいましょう」

「うむ、習うよりも慣れろ、というからな」

「立場が人を育てるとも申します。藤丸提督の活躍を期待すると致しましょう」

「ああ、良い働きを期待しているとも」

一抹の同情と共に現住所に目を通すと、そこは……「なんでこんなところに？」と言いたくなるような辺鄙な山奥だった。

\* \* \* \* \*

「……提督、ですか？」

「ええ、藤丸さんにはその資格がおりなのです。我々自衛隊としましても、民間の方を引つ張り出すのは遺憾の限りなのですが、何分適性を持つ者は限られておりまして。お恥ずかしながら、こうしてご助力を賜りたく参上した次第です」

人好きのする笑顔を浮かべながら、襟には大層な徽章をつけて結構偉そうに見える壮年の男性が遡ってくるものだから、どうにもすわりが悪い。

特に、さも「あなたは特別だ」「選ばれた人だ」と言わんばかりの言い様には背筋がゾワゾワしてくる。自分がそんな大層なものではないことなど、他ならぬ立香自身が一番よくわかっていた。

「艦娘のことはご存じでしょう？ 彼女らが戦うには特別な資質を持つ人間が必要なのです。これがまた、中々適性を持つ者がおりませんで。自衛隊内でも方々手を尽くしたのですが、100名にも満たないのが実情です。

それでも、辛うじて日本近海までは深海棲艦を追い出すことが出来ました。ですが、それでは足りないのです。日本は食糧自給率も低く、資源にも乏しい国です。今はまだ何とかなっています、それも時間の問題。輸出入の復活は、最優先の課題です。

ですが、そのためには艦娘たちと共に戦える、彼女らが命を預けられる、そんな勇者が必要なのです」

言わんとすることはわかるのだが、一々大仰で反応に困る立香。

人によってはやる気が出たりするのかもしれないが、立香としては唯々戸惑うばかりだ。

かと思えば……

「アチツ……いや、お恥ずかしい。どうにも猫舌でして」

湯気を立てる出された茶を冷ましもせず口をつけ、ちよろつと舌を出す姿は年齢を考えれば情けなく映りそうなものだが、どうにも不思議な愛嬌がある。そういえば、部屋に通した時も家具に小指をぶつかけたりしていたし、そそっかしいというかドジというか、軍人……もとい、自衛隊員らしからぬ人物だ。

まあ、あまり四角四面な人物に来られても、立香としては困ってしまったのだろう。「……不躰ですが、藤丸さんは艦娘を……彼女らをどう思われますか？」

「カツコいいですね！」

↓可愛らしいな、とは」

「ええ、彼女たちは大変容姿が整っています。『作られた存在』と考えれば当然なのかもしれませんかね、私にはそれが彼女たちの生存本能の表れなんじゃないかと思うんですよ」

まるで、あるいはさも当然のように艦娘を『一人の人間』であるかのように語る。

苦汁の滲んだ表情、やりきれないものを飲み干したかのような重い口調、肩には力が入り、組んだ手は固く握りしめられている。これが演技なら、大層な演技派だろう。

「人と同じ姿をしていれば、特にそれが見目麗しい少女や妙齡の女性の姿となれば、相手が全人類共通の脅威とはいえ、矢面に立たせることには疑問を持たずにはいられませ

ん。だからこそ、そのような姿を取ることによって彼女たちは自らを守っていると思うのですよ。

どれほど大きな力を持っていても、彼女たちは自らを率いる提督なしには戦えませんが、精神的なものではなく、実際的にそうなのです。一時であれば提督抜きでも戦えますが、彼女たちは提督との繋がりを介してしか体力を回復できません。装備は修復できませんし、弾薬も補充できません。体に負った傷も、専用の設備があれば治せます。しかし、失った体力だけは無理なのです。食事や睡眠で多少は回復できますが、提督との繋がりにから得られる力がなければ、いずれは衰弱する」

聞けば聞くほどに、懐かしい人たちを思い出す。人間と比べ、はるかに卓越した力を持ちながら、契約者がいなければほんの数時間、長くても数日で世界から消えてしまつたかけがえのない人たち。

目の前の人は知る由もないはずだが、立香にとってその話はとても他人ごとには聞こえなかった。

「身の恥となりますが、そんな彼女たちを“道具”や“兵器”と見る者は少なくありません。

気持ちはわかるのです。人の枠組みを大きく超えた力に対する畏怖もあるでしょう。年若い女性を戦わせ、自分は安全圏から指示を出すことへのやるせない気持ちもあるの



だと思えます。だからこそ、*「替えの利く道具」* や *「消耗品」* として見てしまった方が楽なのです。

ですが私は、それは違うと思うのです。彼女たちにも心があり、個性があり、命がある。我々と何も変わりはありません。しかし、現実問題として彼女たちの力なしに海を奪還することはできません。彼女たちには戦ってもらわねばなりません。ですがせめて、彼女たちを一人の女性として、かけがえのない仲間として、人の世の理不尽から守ってくれる…そんな人に提督となっていたきたいのです」

言っていることは正しい。彼の主張は、立香にとつても共感できるものだ。サーヴァントと比べあまりにも無力な立香だったが、それでも彼らのためにできるだけのことはしたかった。ちつぽけな自分でも、彼らを守り助けることができるのなら、何でもやるつもりだったから。

結局助けられてばかりの自分だったが、皆はこんな自分を最後まで支えてくれた。守り、助け、道を拓き、信じて送り出してくれた。ただ、その信頼に応えたいと駆け抜けた10年前の日々だった。

「今も、彼女たちは過酷な戦場に向かっています。傷つき、恐怖を押し殺し、時には仲間を失うことも。それはすべてこの世界のためなのです、我々のためなのです。私は、彼女たちの献身に何か一つでも報いたい。

口惜しいことに、私に適性はありませんでした。ですが、それならば適性のある方に、志同じくしてくださる方に、彼女たちの側に立っていただけようと思うのです。こんなことしかできない私ですが、私にもできることがあるのなら、それを惜しみたくはないのです」

つくづく、彼の言葉に頷くばかりだ。

その声に宿る焦りも理解できる。今まさにどこかの海で艦娘たちは命を賭して戦い、散つて行っているかもしれないのだから。むしろ、当然のことだろう。

「つと、いや失礼。年甲斐もなく、熱くなつてしまいましたな。いや、お恥ずかしい」「気持ちには、分かるつもりです」

「有難い。答えは急ぎませんので、どうか――考いただければ」

深々と頭を下げられると、流石に恐縮する。年齢も社会的地位も上の人物にそんなに頭を下げられるのは、本当に困ってしまう。

「そう言えば、藤丸さんは昔よく海外旅行をされていたとか。もしや、今のお仕事も？」  
「↓出来るだけたくさんの人に、＼こんな暮らしもあつたんだ」と見てもらいたくて

旅の中で見てきたものを、無駄にしたくなかつたんです」

「なるほど。今の時代、国内はまだしも海外旅行は難しいですからな。恥ずかしながら、私は海を越えたことがないのですよ。ですから、このような異国情緒あふれるデザイン

というのは、少々憧れます。まあ、妻にはいろいろと買い過ぎて叱られてばかりですがね」

立香の仕事はなにも室内空間の演出だけではない、家具や壁紙、雑貨のデザインなども手掛けている。昔取つた杵柄で建造物の構造や資材の知識は少なからずあつたし、なにより……自分たちだけが知っているものをそこで終わりにしてしまいたくなくなつた。『彼ら』は確かにいたのだと、その『歴史』は確かにあつたのだと、その痕跡を残したかつた。

しかし、旅の思い出や出来事を公開することは固く禁じられている。そこで選んだのがこの仕事だつた。立香たちが見たものを知っているのは仲間たちだけ、報告書からは詳しい生活様式や文化など知る由もない。

だからこそ、立香はそれを世界に伝えることを仕事に選んだ。

世界中を回っていたのも同じ。かつて旅した場所を巡り、彼らが生きていたかもしれない場所を目に焼き付けたかつた。あの旅を、あの日々を、『過去』の一言で置き去りにはしたくなかつた。

最早二度と巡り合うことはないであろう、パートナ<sup>後輩</sup>のためにも。

「しかし、不躰ですがなぜこのような山奥に？ 色々と不便なのは？」

「↓山が好き——！——でも、海も好き——！——」

ネット注文とかあるし、そんなに不便でもないですよ

自分で家具を作るのもやってみたくて」

「は、はあ……」

というのは、まあ冗談だが。

元をただせば、先の旅の話にもつながることだ。なにしろ、その旅も決して安全とは言い難いものだった。

“そもそも、旅の中で多くの縁を紡いだからか、ついには協会に目を付けられ危うく、<sup>封</sup>貴重<sup>印</sup>な<sup>指</sup>サンプル”として保存されるところだった。そちらは、契約の要であった“右手を差し出すこと”でかろうじて回避できた。なので一応、協会からは“手出し無用”との御触れが出ている。

しかし、それに大人しく従う輩ばかりではない。立香がこの山中に居を構えているのも、“安全圏”として確保してもらった場所だからだ。旅に出た場合、命を狙われる可能性は否定できない。

まあ、その旅の最中に出奔した人体工学に優れた人の好い“元”魔術師と出会い、右手の義手をあつらえてもらったのだから、人生とはつくづく何があるかわからないものだ。

そのまま、しばらく雑談に興じると彼はあっさりと帰っていった。もちろん、艦娘や

提督の話などを蒸し返すこともなく。本当に「できればやって欲しいが無理は言わない」と態度で示していた……ように思える。

一等海佐という結構偉い立場の人の乗った車が去っていくのを見送りながら、立香は彼が残っていた書類を手に取り苦笑いを浮かべる。

「赤紙」とはまた、シャレが利いてる」

まあ、ジョークはジョークでもブラックジョークの類だろうが。

とその時、立香の背後の茂みから何かが飛び出してきた。

それは、執権すると仔猫のような……でも四肢が太くがっしりとしており、頭には何やら金と青の縞模様の子猫の被り物。ここまでであれば、獅子の子どもが変な被り物をしている……位でかろうじて通る、かもしれない。問題なのは、その小動物には顔がなく、顔を含まれた全身が宇宙柄であること。

もちろん、こんな生物が通常いるはずがない。普通なら驚天動地ものだが、まだまだ。何しろ、その子ども後ろには同種ながら体高三メートルはありそうなのが鎮座しており、その更に後ろにはその倍はありそうな巨体が寝そべっている。

「大丈夫、話をしただけだよ

↓襲っちゃだめだよ」

一応言っておかないと、立香を害するものと判断してムシヤムシヤしかねない。い

や、何を食べるか知らないが。

何しろ、十年近く前にどこぞのフアラオからもらって以来、適当に立香の食事の一部を貰っていただけでも拘らず、このありさまだ。多分、意図的に成長を調整しているのだろうか……あまり深くは考えない。

というか、藤丸家にはこの手の“得体のしれないもの”は結構いるというか、あるというか。例えば、朝になると位置が変わっている三体のぬいぐるみとか、本当にどこからやってきているのかつくづく謎な白いモフモフとか、その他諸々本当にたくさん。

とはいえ、アウラード……と今も呼んでいいのかはわからないが、あの子たちが警戒したのも無理はない。何しろあの自衛官ときたら……

「絶対怖い人だ、あれ」

外見こそちよつと抜けたところのある穏やかな人だが、その中身は徹底した合理主義者だろうというのが立香の見立て。

人間は非合理的な生き物だ。そんな人間を相手にするには、合理的に振る舞う方がかえって非合理的。本当に合理的な人はそうとは思わせない。有能かつ冷静でありながらも、人情を汲みつつちよつと抜けたところが、大抵のことは鷹揚に受け止めてくれるとなれば、そりゃ支持者や支援者には事欠かないだろう。多少の失敗も“まああの人だから”と深刻なことにはなりにくい。そういうことをせくぶんぶ計算したうえで、

あのように振る舞っている。

何故そう思うのか、理由は簡単。似たような人物に覚えがあったからだ。

「な〜んか、ダビデに似た匂いがするんだよなあ」

そう、あの古代イスラエルの王様も結構似たところがあった。一見すると穏やかで寛容、親しみやすく誠実な人柄だ。涼やかで、切羽詰まることなく余裕を崩さない姿は頼もしい限りだろう。また、思慮深く軽率には敵対しない賢者でもあった。まあ、それらとは別に自分のことを棚に上げた発言が多かったり、女性に滅法弱かったり、自己中心的な面の目立つ「爽やか系クズ」などところもあつたわけだが。

もちろん、それらが嘘だとは言わない。ただ彼の本質は冷徹に、あるいは冷酷な判断を下すりアリストなのだ。

そんなダビデと、あの「ダビデ一佐（立香命名）」はどこか似ている匂いがした。

味方、あるいは「敵ではない」うちは良いが、明確に「敵」となった時、彼はきつと恐るべき障害として立ちはだかるだろう。

まあ、今後どうなるかわからないことに頭を悩ませて仕方がない。それよりも、今考えるべきは……この「召集令状モドキ」の事だろう。

ダビデ一佐は「答えは急がない」と言っていたが……

「ホントいい性格してる」

↓あれで急ぐなって、無理でしょ」

あんな話をされて心動かされない人間はそうはいまい。根が善良であればあるほどに、効果が高い。

艦娘たちの置かれている現状を伝えつつ危機感を煽り、彼女たちの未来を憂えているという彼の話の内容は、立香の人間性的に思いつきクリティカルだ。そういうことをやってくるから、彼は怖い。

まあ、元より断るつもりもなかったのだが。

「王様の言ってた後始末、か」

確証はない。だが、カルデアが解体される前夜、*“未来を見通す目”*を持った彼の賢王は言った。

——貴様にはまだやり残しがある。その完遂を以て、カルデアでの任務は完了となる。努々忘れるな、雑種

立香の手に艦娘についての情報はほとんどない。おそらく、市井に出回っている以上のことと今日語られた事情以上のことは知らないだろう。いまだに手紙で細々とやり取りのある旧カルデア職員たちも、何も言ってきたてはいない。

だが、それでもわかることがある。彼女たちはきつと……

「終わりにせず、次につなげる。それが人間だというのなら」



きつと彼女たちが、自分たちの“次”なのだろう。

ならば、すべきことをしなければ。かつて己が、先達たちによつて多くを与えられたように。今度は、自分たちが与える側に回る番なのだろう。

\* \* \* \* \*

一週間後。藤丸立香の姿は、太平洋の真つただ中であつた。

「う————み

!!!

夏だ！ 海だ！ デッドヒートサマーレース開幕……しません、やったね♪

↓まさか、話を受けた瞬間に飛ばされるとは……」

流石に即決は避けて一応丸三日かけて考えた末に出た結論は、やはり当初と同じものだった。

そんな自分に苦笑しつつダビデ提督に返事をすれば、あれよあれよという間に話が進み、気付けばこうして海の上。向かう先は硫黄島、日本近海とはちよつと言えないものの、一応は辛うじて自衛隊が制海権を確保している範囲だ。とはいえ、実質的にはほとんど最前線。こんな場所に新任の、それもろくに訓練も教育も施していないペーパーを送り込むとか、立香でも正気じゃないとわかる。

まあつまり、その裏の思惑位察せられないほど、立香も若くはないわけで。

「失敗させるのが目的かあ」

↓期待されてないところからスタート：うん、懐かしくなってきた

去勢拳されればいいのに、あのダビデモドキ」

なぜ失敗させたいのかは立香にはわからない。思惑は察せられても、もつと深いところを探るには足りないものが多すぎる。だが、藤丸立香の動揺は小さかった。

不安はある。恐怖もある。緊張も、焦りも、それこそ山盛りだ。

しかし、やることだけはハッキリしている。ならそれで十分。

そう、いつだって、〃やれることをやる〃しかないのだから。

幸い、硫黄島には深海棲艦の侵攻に際して一度は放棄したとはいえ、自衛隊の基地がある。そこに手を加え、〃硫黄島鎮守府（仮）〃なるものを作ったそう。まあ、他と違って立香以外の提督は当面着任予定はないらしいが。

あとあまり詳しくはないが、火山島という地球のエネルギーの噴出点の一つらしいので、霊地としての格もそこそのものだろう。第二次大戦の激戦地の一つらしいので、怨念とかその辺はちよつと心配だが、慰霊はされているらしいので大丈夫：と思いたい。

それに、流石に一人で放り出すほど上も無体ではないらしい。鎮守府や基地、泊地には必ず数名の艦娘が配属され、またそれぞれの提督には秘書艦あるいは初期艦なる艦娘

がつけられると聞いた。

孤立無援というのは立香としても流石にレアなことなので途方に暮れるところだが、そうでないなら何とかなる、多分。

そうやって自分を奮い立たせて硫黄島に降り立った立香を待っていたのは……思っていたよりは立派な赤レンガが鮮やかな庁舎や工廠といった施設の数々。

立香は知らないことだが、一応は「革新派」の息のかかった鎮守府（仮）なので、艦娘に対する設備は充実している。艦娘用の小奇麗な宿舎寮があり、孤島という娯楽が少ない場所だからか庁舎や宿舎から離れた場所には食事処のような店舗が見える。さらに、運動場や大型の倉庫など……カルデアくらいしか知らない立香には比較が難しいが、僻地の割に設備は整っているように思われる。

ただ、とりあえず港に下りて指令書にある通りまず庁舎の「執務室」とやらに向かうも……

「誰もいねえじゃん!？」

そう、人っ子一人会わないのである。一応提督だし、誰か待っててくれるのかなあと思っていたら、だくれも出てこない。一人寂しくゴーストタウンみたいな鎮守府を進むのは、寂しいとか怖いとか通り過ぎてなんか虚しい。

結局、指令書に同封されていた鍵で庁舎の鍵を開け、なんか新築っぽい匂いのする中

を進み、執務室を開ければ……

「↓え、もしかしてもものすごい勢いで嫌われてる?」

ミカンの段ボールって、いつの時代の苦学生だよ

もうドツキリでいいからだれか出てきてください。泣くよ、マジで」

壁紙なし、カーテンなし、絨毯はおろかカーペットもない、挙句の果てに照明は裸電球。外観と内装は立派なのに執務室だけこの有様とか、嫌がらせ以外の何物でもない：と言いたいところだが、この辺はどこの鎮守府でもはじめはこんなもの。まあ、何の救いにもならないが。ただし、実は一番ひどいのは執務室と隣接した立香の自室だったりする。何しろベッドなし、イスなし、テーブルなし、その上風呂どころかシャワーもない。あとついでにトイレもない。トイレはまあ、庁舎内のものを使えばいいのでまだいいが、シャワーすらないというのは衛生的にどうなのだろう。艦娘寮には風呂があるよいうなのでそちらを借りるという手もあるが、上官がプライベートな空間に頻繁に足を運ぶのは、あまりよくないだろう。そのあたり、ロマンもゴールドも結構気を使っていた。というか、提督なのに官舎はおろかまともな自室すら用意されていないのはどういうことか。これにはさすがに怒ってもいいと思う。

しかも、段ボールの上に載っていた封筒を開ければそこにはとある一文、内容を要約すると……

——手続きに不備があり、初期艦をはじめ大淀、明石、間宮、計四名の着任は遅れる見込み。急ぎ手続きを進めるので、それまではマニュアルを参照し鎮守府を運営されたし

完全無欠に嫌がらせである。というかこれだと、艦娘四名と立香以外に基本的に人はいないということか？ 建物が立派な分、全員そろつても寒々しさが半端ではない。

余談だが、ハード面がちゃんとしているのは「革新派」のおかげなのに対し、人員不足や着任遅れをはじめとした不手際は「保守派」の嫌がらせだ。より正確には、「革新派」も「保守派」の横槍を止めなかったからこそこの事態。

要は、さつさと立香を追い出して本命を着任させるための手回しである。

が、彼らは自分たちの目論見の甘さをわかっていない。

この藤丸立香が何者で、どれほどの困難を乗り越えてきたかなど知る由もないのだから当然だろう。

——右も左もわからないどころか、限りなく無知なまま炎に包まれた街に放り出されたことがある。

——容易く己を殺せるものたちが跋扈する月の聖杯戦争を模した地獄を、身一つで彷徨ったこともある。

——大勢の仲間たちを失い、補給はなく食料も乏しいまま閉鎖空間で雌伏の時間を

過ぎたこともあった。

今更、誰もいない鎮守府に一人ぼっちになったところで、挫けたりするほどやわではない。

むしろかつての経験を刺激され、「意地でも居座つてやる」と覚悟が決まったところだ。

とはいえ、着任が遅れている四人がいつ到着するかわからない。

自慢ではないが、藤丸立香の戦力は微々たるものだ。昔からの習慣で鍛えてはいるが、深海棲艦の前では無力だろう。ならば、まず自分がすべきことは……

「確か、建造つてのができたはず」

そう。大体において、戦力補充は各鎮守府が独自に行う。稀に上から配備されることもあるそうだが、建造によって作られた「艦装」にあらかじめ用意された「ヒトガタ」が反応し、対となる「セイントグラフ」にかつての軍艦の魂が降り、三者が一体となることで艦娘を生み出すか、かつて敗れ轟沈した艦娘を「黒い海」からサルベージするかの二択が基本。

特に前者とかメツチャ立香には覚えがあることだが、そこはスルー。サルベージはそもそも戦力がないので論外だし、上からの配備を待っている状態なのでこれも不可。となれば、今できることは一つ。

荷解きをする手間も惜しみ、マニュアルをひっくり返して「建造」の方法と手順を確かめる。

ここは事実上の最前線、いつ深海棲艦が襲ってくるかわからない以上戦力の確保は至上にして最優先。なんか早速書類の山とかあるが、そんなものよりこつちが大事。生きていなければ、書類を処理することもできやしない。

というか、書類の処理の手順がわからないので迂闊に手が付けられない。カルデアと同じ方式ならいいのだが、組織が変われば手順や暗黙の了解も変わる。特に、カルデアは色々と特例が重なっていたので、まっとうな書類の処理とか自信がない。

幸い、艦娘たちや鎮守府の設備のあれこれをサポートする通称「妖精さん」はしっかりといるのでたぶん行ける。

なんでも「見えたらレベル『1』、触れれば『2』、コミュニケーションが取れたら『3』」とか基準があり、立香は普通にコミュニケーションが取れる。が、今は知ったことではない。

ただ、ちよこまか動く姿にノウム・カルデアでシャドウ・ボーダーやストーム・ボーダーの整備をしていたネモたちを思い出すが、それも記憶の引き出しにそつと戻す。

「よし、まずは戦艦だ！」

ちなみにこの人、「軍艦」と「戦艦」の区別がイマイチついていなかったりする。

精々、"戦闘に参加する艦が戦艦"、"それ以外の軍務に従事するのが軍艦"位の認識。なものだから、脇目も降らずにマニュアルに書いてあった"戦艦レシピ"なるものを即実行。もうちょっとちゃんと見ていれば"駆逐艦"とか"軽巡洋艦"とか色々書いてあったのだが、すっかり見落としてしまうという、大ポカをやらかしてしまうのであった。

おかげで、自覚がないままに資材がマツハで大ピンチ。

翌々日着任した初期艦こと"電"は……

「着任したらすでに資材が破産寸前とか斬新過ぎるのです!!」

と頭を抱える羽目になったという。

ちなみに、立香は建造の際に燃料や鉄材、弾薬にボーキの他に自前で持ち込んだなかよくわからない試験管を投入。その結果、どうなったかというところ。

「え、"ぐちく"艦? って戦艦じゃないの?」

「ぜんつつつぜん違うのです! クジラとアザラシくらい違うのです!!」

「いやでも! ほら、ちゃんと戦艦来てくれたし!」

「それは……不幸中の幸いなのです。これで駆逐艦だったら泣くに泣けないのです。

それで、だれがきてくれたのです? というか、建造時間は?」

「8時間だよ」



「は？」

「大和型戦艦、一番艦、大和。推して参ります！」

「ど………」

「ど………」

「どうして通常建造で大和さんが出てくるのですか!？」

ということで、実は各派閥から念のためスパイがてら送り込まれていた明石、大淀、間宮の三人もあり得ない事態に頭を抱えることに。

とはいえ、最前線であることを考えれば大変頼もしい戦力……なのだが。

「とりあえず、大和さん」

「はい」

「当面向撃禁止なのです」

「え、で、でも……ほら、私戦艦ですよ？　とつても強いですよ？」

「強すぎて敵より先に資材が死ぬのです」

「せ、節約しますから！」

「節約してどうこうなる問題じゃないのです！　燃料も弾薬も消費が破格過ぎて戦闘」

／（〇〇）／オワタなのです！」

「ちなみに、もし被弾したら？」

「即破産なのです」

「ごめん、大和。大人しくしてて」

「提督!?!」  
マスター

とりあえず、資材が足りないので明石の工廠も当面は開店休業状態、大淀担当の通信に人手はいらないということから、電秘書官の補佐をしてもなお暇を持て余した大和は間宮の手伝いをすることに。

日本一、ともすると世界一有名かもしれない戦艦かもしれないにもかかわらず、大和は料理上手で食の面で大いに貢献してくれたのだが……

「ふ、ふふっ。ここでも出撃せずに結局ホテル、そう、私は大和ホテル、戦艦大和？知らない子ですね、ウフフフフフフフフフフ……」

と、日に日に病んでいくのであった。

## 蝶屋敷には家事幽霊が憑いている（柱合会議編）

鬼を連れた隊士

それは過去前例がなく、そもそも重大な鬼殺隊の隊律違反である。当然だ、なにしろ鬼殺隊は人喰い鬼を滅し、人々を守ることを存在意義とする組織。故に、張本人である竈門炭治郎と鬼になった妹の禰豆子、そして彼らを鬼殺隊に導いた富岡義勇、以上三名の処罰を柱たちの多くが求めるのは自然なこと。

にも関わらず、鬼殺隊の長たる産屋敷輝哉は本来あり得ない筈のことを口にする。

「二人のことは私が容認していた。そして、みんなにも認めてほしいと思っっている」  
鬼を滅する。その志は同じであるはずなのに、誰よりも自分たちの心の内を理解してくれているはずなのに、どうしてそんなことを口にするのか。柱たちには到底理解できないことだ。

だからこそ、彼らは自らが正しいと信じる言葉を口にする。それが例え、誰よりも敬愛する人物の願いを否定することであったとしても。

「私は承知しかねる。鬼はもちろん、そのの憐れな子どもも殺すべきでしょう」

鬼殺隊最強は言いた目から涙をこぼしながら断じ

「俺も派手に反対だ。鬼を連れた鬼殺隊員などあり得ない」

派手な化粧と傾いた格好の美丈夫が宣言し

「私は、全て御館様の望むままに」

全体的には桜色、しかし毛先だけが薄緑という目を引く色彩の少女は恭しく賛意を示し

「僕は……どうでも。どうせ忘れるので」

茫洋とした眼差し少年は興味無さそうに

「信用しない信用しない。そもそも鬼は大嫌いだ」

白蛇を連れた虹彩異色の男は会議の念を隠しませず

「敬愛するお館様ではあるが、理解できないお考えだ。反対以外ありえない！」

炎のような色合いの髪と羽織の男もまた譲る気は一切なく

「竈門・富岡、両名の処罰を願います」

全身傷だらけの男はさらにその先を求めらる。

「そうか……君の考えを聞かせてくれないか、衛宮」

お館様と呼ばれる青年が後ろに向けて声をかける。すると、つい先ほどまで誰もいなかったはずの空間から声が返ってきた。

「はあ、突然呼びつけられたかと思えば……私はそもそも部外者なのだがね」

そこにいたのは、褐色の肌の上から着流しを纏った偉丈夫。視界に入れば絶対に気付くであろう目立つ風貌の持ち主が、座敷の奥から立ち上がり日の差し込む板の間まで歩を進めてくる。

（あの人、一体いつから……それに、嗅いだことのない不思議な匂いだ。まるで、焼けた鉄のような……）

「確かに君は鬼殺隊ではないが、蝶屋敷の一員であるなら部外者というわけでもない。それに、私の個人的な友人でもある」

「組織の長として、公私混同は如何なものかと思うがね」

「なにより十二鬼月……それも上弦の弐を退けた君には柱合会議に参加する資格が十二分にある。この場の誰も、君を部外者と軽んじたりはしないよ」

（上弦の、弐……!?!）

上弦の弐、即ちそれは鬼舞辻を筆頭とする鬼たちの中で第3位の実力者ということ。それを退けた……倒したかどうかまではわからないが、それがどれほどのことか下弦の伍相手に九死に一生を得た炭治郎には想像もつかない。

同時に理解する。彼が声を発すると同時に場の空気が僅かに変化した、その理由を。

「古い話を持ち出してくれるな。今の私にもう一度同じことは望めんよ。できて、柱たちの稽古相手が関の山だ。最後の力を振り絞ったアレも、正直見るに堪えん不出来さだ

よ

「それでも十分過ぎるくらいなのだけどね。みんな多忙過ぎて中々顔も会わせられないし、必然的に柱同士で研鑽することも難しい。かといって、下の子たちでは稽古の相手には物足りない。

その点、蝶屋敷に行けばいつでも稽古ができる君の存在は有難いものだ。ただ刀を振るうよりも、打ち合う方が得るものが多いのは私にもわかる。加えて、療養中の子どもたちに血鬼術の対策も教えてくれてるんだらう？」

「昔取った杵柄という奴だ。血鬼術には明るくないが、その手の異能には少なからず痛い目を見てきたからな。知らないよりかはマシだらうさ」

ぶつきらぼうに返しているようで、不思議と会話のテンポが良い。「友人」という言葉も、あながち嘘ではないのかもしれない。

「それで、君の考えを聞かせてくれないか」

「……………まったく。おい、小僧」

「か、竈門炭治郎です」

「貴様の妹は二年以上にわたり人を喰っていない、これに嘘偽り誇張はないか」

「はい！ 今までも、これからも禰豆子が人を襲うことはありません！」

妹を守るため、同時に人としての尊厳を守るために炭治郎は断言する。しかしその瞬

間、男の鈍色の瞳が鋭さを増した。それはまるで、獲物を補足した鷹の如き眼差しだった。

「根拠は」

「え？」

「今後も人を喰わない、その根拠を問うている」

「だ、だから、禰豆子は今まで……」

「過去などこの際どうでもいい。私が聞きたいのは未来に対する保証、万人を納得させられる確たる証拠だ。貴様は何を以て『これからも人を喰わない』と口にした。よもや、『これまで大丈夫だったからこれからも大丈夫』などという思考停止ではあるまいな」

「そ、それは……」

曖昧な回答を許さない鋭い問い。

無論、炭治郎は禰豆子がこれからも人を喰わないと信じている。しかし、それを保証する具体的な証拠を出せと言われても、そんなもの炭治郎の手元にはない。

「……話にならない。二年間人を喰わなかった、なるほど真実だとすれば大したものだ。鬼は人を喰う、これは人が食事を取るのと同じことだ。故に人に飯を食うなどといったところですぐに限界が訪れるように、鬼もまた長く人を喰わないままではいられない。そ

れを覆した貴様の妹は驚嘆に値する。

だがそれは、過去の実績であつて未来を約束するものではない。今日までは大丈夫だった、だが明日人を喰わないと何故言い切れる。明日は回避しても、明後日は？ その先は？ いったいいつまで抑えられる。鬼舞辻を滅するその日までか？ くだらん、そんないつになるかもわからん話を信用できるものか」

吐き捨てるようなその言葉に、炭治郎の中で怒りがこみあげてくる。だが、同時に彼の言葉が一々もつともであることも理解していた。

「先ほど、不死川に面白いことを言っていたな。善良な鬼と悪い鬼の区別もつかないのなら柱など辞めてしまえ、だったか？ バカバカしい話だ。そもそも前提が間違っている」

「前提、だつて？」

「そうだ。問おう、そも鬼は邪悪だから殺さねばならないのか？」

（え、だつて、人を殺すのは悪いことで、人を喰う鬼は殺さなければいけないから……）  
「鬼殺隊が鬼を殺すのは鬼が悪だからではない。鬼が人を喰うからだ。生き物の大前提は自らの命を守り、子孫を増やし繁栄すること。故に、自身と同胞の命を脅かす鬼は殺さねばならない。」

そしてこれは鬼にも言えることだ。鬼は人を喰う、だがそれ自体に善悪は関係ない」



「善悪が、ないだつて……」

炭治郎は信じられないものを見るように、男の敵めしい顔を見上げる。まるで、自分とは違う生き物を見るように。

「訳が分からないという顔をしているな。では見方を変えてみる。例えば、人を喰う熊がいたとする。貴様は、その熊を邪悪だと思ふか？」

（それは、どうなんだ？ 熊だつて生きるために必死なわけだし……）

「無論、最終的にはその熊は処分しなければならぬだろう。だが、熊が人を喰うこと自体に善悪を問うなど愚かなことだ。だとすれば、鬼が人を喰つたところで悪でも何でもあるまい。もしそこに善悪を問うとすれば、喰い方……だろうな。ただ殺して喰うだけならそれは自然の摂理だが、そこに自らの愉しみを挟むようなら話が変わる。家畜をただ殺して喰うのと、必要もないのに鬻り殺しにするのでは大分印象が違ふだろう？」

まあ、多くの場合において鬼は必要以上に鬻つてから人を喰うのだから、「邪悪」と言つて差し支えないかもしれんがね」

確かに、言わんとすることはわかる。炭治郎も、別に家畜を殺して食うことを非難したりはしない。殺される家畜を哀れに思ひはするが、それは仕方のないことだからだ。もちろん、男の言う様に意味もなく痛めつけているようであればその限りではないが。そして、確かにそのような行為は「悪」と言つて良いだろう。

「で、でも！ 人を喰わないのなら……！」

「人を喰わないから善良、というのは人間の勝手な言い分だよ。逆に聞くが、人喰い以外の非道に手を染めた場合、それは善良なのか邪悪なのか、一体どちらなのかね？」

「そ、それは……だけど、人を喰わない鬼ならそんなこと」

しない、と続けようとしたところで、それまで沈黙を保っていた人物が口を開いた。

「衛宮、話が逸れてやしないかい？」

「むつ、確かにな。どうにも、青臭い正義感には物申したくなる……私の悪い癖だ」

「昔の自分を見ているようで、かい？」

「口が過ぎるぞ」

「おっと、これはすまない。それで、君の意見は？」

「……………その箱に入った娘が二年以上人を喰っていないことを前提とした上で、私自身が未来を保証するものではないと考える。なぜなら、何故喰わずにいられたのか、その理由がハッキリしない。理由がわからない以上、これから先も喰わないとは考えられんな」

「だからそれは、眠ること……！」

恩師である鱗滝の推測である「眠ることによって回復している」と主張しようとする炭治郎。しかしそれは最後まで口にする前に一言の下に切つて捨てられた。

「たわけ」

「なっ……」

「眠ることで力の消耗は抑えられるだろう。だが、睡眠は回復の手段にはならん。

人が眠ることで回復するように見えるのは、その前に食事を取り、眠ることで消費を抑えることで回復が消費を上回るからに過ぎん。つまり、力を回復するためには何らかの形で外部からの補給が必要ということだ。貴様の妹は人の血肉はおろか、二年以上一切何も口にしていないのだろう。では、いったいどこから力を補給している」

「たしかに、それは私も不思議に思っていた。炭治郎には……心当たりはないようだね。でも、私の見立てでは衛宮、君には目星がついているんじゃないか？」

「さて、な」

誤魔化しはしたが、実のところある程度の目星はついている。ただ、もつともその可能性がありそうな男が現在進行形で割とぴんしゃんしていることから、あまり自信がないというのが本音だった。

（考えられるとすれば周囲からのドレインの類だが……その場合、小僧が真つ先に消費するはず。精密に対象を指定できるのか、あるいは範囲が広く個々の吸収量は少なく済むのか。まあ、これ事態が間違っている可能性もあるわけだが……）

「フンツ、つまりアンタも反対ってことでいいんだろお」

「結論を急ぐな、不死川」

「話が長いのがお前の欠点だ、衛宮。さつきと結論を言え、持つて回った話はうんざりだ」

「やれやれ……では結論だ。その娘が今後も人を喰わないという保証はない。それを踏まえた上で、私はその娘を殺すことには反対だ」

「なにつ!?」

「え?」

結論を急がせた不死川と伊黒の兩名が目を?き、炭治郎もまた目を見開く。いや、驚いているのは他の柱たちもまた同様だ。今までの話の流れでは、彼もまた処分を要求すると思っていたからだ。にも関わらず、彼は一転して炭治郎たちを擁護しようとしている。

「どういうつもりだあ、衛宮あ!!」

「南無……お前がそう言うからには相応の理由があるのだろう。だが、私には理解できん」  
「おうおう、派手な手のひら返しじゃねえか。派手に意味が分からねえぞ!」

「俺も宇随と同感だ! 衛宮殿、説明を求めろ!」

反対派の柱たちが次々に説明を要求する。

そんな面々の様子を、男は「まあ当然の反応か」と至つて落ち着いた様子で受け止め

ていた。

「確かにその娘が人を喰わない保証はない。が、二年以上にわたって人を喰わずにいる、その事実は無視すべきではないだろう。先ほど理由がわからないと言ったが、まずはその理由を明らかにすべきだ」

「明らかにして何になる、必要ない必要ない。そんなものに何の意味がある」

「……鱗滝翁からの手紙によれば、その娘は強靱な精神力で人を喰わずにいるという。だが、私はその考えを支持しない。なぜならば、その程度のことでも人喰いの衝動を抑えられるなら、過去にも似たような例はあつたはずだ。無論、それを確認する前に殺していたという可能性もあるだろうがね」

「で、でも彌豆子は確かに……!」

「その娘の精神が脆弱だと言っているのではない。むしろ、強靱な部類に入るだろう。私が問題にしているのは、それだけが理由とは思えんということだ」

「それなら、君はどんな理由があると考えているのかな?」

「まず思いつくのは、体質だろうな。古い文献によれば、かつて『鬼喰い』なるものをして隊士もいたという。それと同じように、鬼舞辻の血に対し特殊な耐性をもつ体質である可能性がある」

彌豆子が鬼になった時、彼女はまだ十代半ばにもなっていなかった。そんな年頃の娘

が、果たして食人の衝動を抑えられるほどの精神力を持つているものだろうか。もちろん、無いとは断言できない。しかし、その程度の年齢の少女に抑えられるのなら、過去にも前例が合つて良いはずだ。

それなのに、実際に禰豆子のような存在は過去に例がない。だとすれば他に理由があると考えるのが妥当だろう。

「確かに、それならただ心が強いというだけよりも納得はし易いね」

「だからこそ、調べる必要がある」

「調べて何になるというのだ！ 浅学な俺にはとんと考えが及ばんのだが！」

「……なるほど、読めたぜ。解毒剤か！」

「むっ、どういうことだ宇随！」

「その鬼の娘は鬼にはなつたが地味に鬼になり切つてねえ。だとすれば、そいつの体質を調べれば鬼舞辻の血を中和する薬が作れるかもしれないねえつてことだ」

「……鬼を殺す毒を作つたしのぶならば、可能性はあるか」

考えられる効果としては、まず鬼の弱体化。続いて、藤の花の毒の強化。あるいは、予防接種のようにあらかじめ摂取しておくことで抗体を作る、ということもできるかもしれない。そうなれば、鬼を増やさないという手も打てる可能性がある。

（流石士郎さん、どんな時でも冷静で……ステキ！）

(空が、青いなあ……)

「このように、その娘の存在には無数の可能性がある」

「可能性があるからなんだってんだあ!! 鬼を殺してこそその鬼殺隊だろうがあ!!」

「上弦や鬼舞辻はどうする。歴代の柱たちは尽く上弦に敗れてきた。君たちの実力は認めるがね、明確な対抗策も手立てもなく、勝てる」とは言えまい。だが、その娘を調べることでは何らかの打開策につながるやもしれん。奴らを殺す手掛かりになる、それだけで生かす理由としては十分ではないか」

その言葉に、いよいよ反対派も何も言えなくなる。自分たちの実力には自信があるが、その上で上弦の鬼が相手ではどうなるかわからない。ましてや、それ以上の力を持つであろう鬼舞辻が相手となれば……。

奴らを討つためのキツカケになるかもしれない、その可能性はあまりに魅力的過ぎた。

「未来の危険性は確かに看過できないが、それを上回る利用価値があるのは理解できただろう。ここで殺してしまうのは、些か早計だと思いがね」

「……だが、人を喰ってからじゃおせえだろうがあ!!」

「別段、鬼の一匹や二匹確保する程度ならいくらでもやりようはあるだろう。鎖で雁字搦めにして牢に閉じ込めておくなり、藤襲山に放り込んでおくなり、な」

実際、弱い鬼であれば殺さずに藤襲山に閉じ込めて最終選別に利用したりしているのだ。それと同じように考えることもできないことはないだろう。

「ああ、ついでにその小僧も生かしておく方が良いだろう。その娘が人を喰わずにいられる理由が体質によるものだとすれば、血縁である小僧は良い比較対象になる。あるいは、小僧も同じような体質かもしれないな」

その言葉に対する反論は上がってこない。反感はあれども、彼らを生かすことにより多くの鬼を殺し、人を救う可能性が開かれるかもしれないのだ。反論など…できるはずがない。

そう、ただ一人を除いては。

「そんな、そんなこと認められるか！ そんな、禰豆子を物みたいに扱うなんて!!」

「くだらん」

「なにっ!」

「わからんか、小僧。これは本来、貴様が言うべきことだ。

妹を愛し、尊厳を守る…ああ、麗しい兄妹愛だな。実に結構なことだ。お涙頂戴の家族ごっこ、反吐が出る」

「なん、だと……!!」

「貴様はそれで満足だろうか、その結果はどうだ。妹は危うく処分される寸前、貴様に



一体何ができた。

自分の妹なんだ、妹は人を喰わない、人を守って戦える……実に下らん妄言ばかりだ。ここに居るのは鬼殺隊の柱、その妄言の先に何があるかを知り尽くした者たちだ。家族だからと訴え食い殺された者、訴えに迷い剣先が鈍り殺された者、そんな連中を腐るほど見てきたのだ。あるいは、身内が鬼になった者もいるだろう。

そんな者たちを相手に、お前の言葉には芥子粒ほどの価値もありはしないと何故わからん」

そう、少し想像力を働かせれば分かったはずだ。禰豆子のような存在は過去に例がない、だからこそこれまで通り柱たちは禰豆子を殺そうとした。

過去に例がないものを理解し受け入れろというのなら、それだけのものを示さなければならぬ筈なのに。

「なにより、お前の言葉は情に訴えるばかりで何一つとして利がない。組織を動かしたくば、確かな利を示せ。危険を冒しても生かしておくだけの価値を示す、それだけが妹を生かす道だとわかっていたはずだ。そしてそれは本来、お前がするべきことではないのか」

「それ、は……」

「貴様は結局、自己満足のために妹の命を危険に晒しただけだ。真に妹の命を守ろうと

考えるのなら、なりふり構うな。人の心のうちなど、どうせ他者にわかりはしないのだ。舌先三寸、大いに結構。心にもないことを、妹をモノ扱いするのはさぞかし不本意だろう。だが、それで妹の命が買えるのなら安いものだ、違うか」

（反論したい！ 言い返したい！ 何もかも全部、否定してやりたい！ この人の言葉をも、何一つとして認めたくない!!）

それでもわかってしまう。この男の言葉には、非の打ち所がない。禰豆子を守ったのは自分ではなく、この男の非道な言葉だった。もしこの男がいなかったらどうなっていたか……考えるだけで身が凍る思いだ。

今回のことは運がよかっただけに過ぎない。禰豆子を守ることを第一に考えるのなら、他者を説き伏せ納得させるための備えをしていなければならなかった。恩師や富岡、善逸や伊之助といった理解者に恵まれたからこそ見落としていた。炭治郎は、禰豆子を守るためにやるべきことを怠ったのだ。

「……守るということは綺麗ごとではない。泥をかぶる程度で守れるなら進んで被れ。その覚悟もなく守れるほど、お前の妹が置かれた状況は生易しくはない。それを、肝に銘じておけ」

（それは、守りたかったものを切り捨てた自分自身に向けた言葉じゃないのかい、衛宮。あるいは、守ることを選んだ炭治郎が、最後まで大切なものを守るように……）

へシンフオギア×プリズマ☆イリヤへ重なる世界、繋がる  
思い

某国某所。表向きには海外企業が出資したことになっている精密機器工場の地下施設。

決して公にされることのない実験が、今日もまた行われていた。

「これより、第81起動実験を開始します。各員所定の位置につき、各々の職務を果たしなさい」

「「はっ」」

それは、国連直轄の超常災害対策機動部タスクフォース：「  
Squad of Nexus Guardians」に知られば、即座に武力制圧  
されてもおかしくない行いだ。それだけ、この実験は危険なもの。

にも関わらず、職員たちの顔に不安や罪悪感の色はない。ある者は飽くなき探求心故  
に、またある者は己が野心を満たすために……中には、聖遺物研究で後れを取っている  
自国の地位向上を目指して。各々理由は違えど共通することが一つ、この実験に対し一  
切の疑問がないということ。

そしてそれは、研究員たちを取りまとめるこの場の最高責任者も同じことだった。

(あと少し…行け、行け！ 今度こそ!!)

「……フォニックゲインの増幅、規定値を突破」

「コード726、反応を確認。励起状態へ移行します」

「状態安定。フォニックゲインの出力、停止します」

「……………実験、成功です！」

その瞬間、管制室内を満たしていた緊張感が弾け、同時に歓声が挙がった。

“やった…やったぞ！”

“これで連中の鼻を明かしてやれる！ これ以上国連なんぞにデカイ顔をさせてなるものか！”

“見ていろ、これからは我々がこの世界を牽引するんだ！”

“見たか、頭の固い老人どもめ！ お前たちが投げ出したこいつを、我々はついに起動させたぞ！”

長年の努力が実を結び、湧き上がる部下たちを見下ろしながら彼女は考える。これでようやく、悲願に手が届くと。

「ようやく、ようやくよ。今度こそ、あなたを救って見せる。そして取り戻すの、あなたの時間を、私たちの幸せを……今度こそ！」

しかし、現実とは非情なもの。一度失われてしまったものは、もう二度と…戻っては来ないのだから。

「……………どうして、どうしてよ！ 他では無理でも、この聖遺物なら……………」

両目からは止めどなく涙があふれ、やり場のない激情をぶつけるように固い地面に拳を振り下ろす。そんなことに、何の意味もないと知りながら。

本来、聖遺物とは強力ではあれども用途は限定されているもの。特定の使用方法しかない、あるいは特定の機能しか有さないもの。

だが、これは違う。『異端技術の結晶』と称される聖遺物の中にあってもなお異端。決まった用途を持たず、その機能に縛りはなく、それ故に起動に要するフォニックゲインは他の聖遺物をはるかに上回る。だからこそ、誰もが『起動は不可能』と匙を投げた規格外。

そんな常識を覆し、ようやく起動した聖遺物はしかし……密かに持ち出した彼女の願いをかなえてはくれなかった。

「……………そうよ、簡単なことじゃない」

いったいどれほどの間そうしていたのか。顔は青白いのに赤く腫れた目は爛々と輝き、枯れた涙の痕と吊り上がった口角はまるで出来の悪い道化ピエロを彷彿とさせる。

そんな有様でありながら、女は「まだ終わっていない」と血塗れの拳を握り締める。「お前に出来ないのなら、お前の代わりに出来るモノを用意しなさい。お前にも、それくらいならできるとしよう?」

穏やかに、優しい気に：でもどこか狂的に語り掛ける。

最後の希望でもかなわぬ願いであるのなら、この願いをかなえられる十二力を。

世界の果て、時の果て、あるいはその遙か先から。どこでもいい、誰でもいい、何でもいい、何でもいい。願いを果たしうる十二力をよこせと、気が触れた様に繰り返し繰り返し繰り返す<sup>こいねが</sup>。

……正気など、とうの昔に失くしていることにすら気付かずに。

\*以下、ダイジェストでお送りします。

「異常なアウフヴァアツヘン波形を観測したっていう話だったけど……」

「ビツクリするくらい何も無いデスね」

「うん。町の人たちの様子も普通、特に異常らしい異常はなさそうだけど」

「お前ら、氣い抜いてんじやねえぞ。〃ここで悪さしてます〃なんて看板出してるご親切な悪党なんぞ、いるもんかよ」

派遣されたのはS・O・N・G所属のシンフォギア奏者たち。その中でも年若い二

名と、彼女らを監督できる年長者。年長者二名は後輩たちに経験を積ませるために、もう一人の年長者はリーダー役とか無理なのでお留守番である。

遭遇したのは、ある時以来あまりお目にかからなくなった大量のノイズと

「なんでこんなにノイズが湧いて出てくるデスか!？」

「ソロモンの杖で、こっちのバビロンの宝物庫は閉まったはずなのに……」

前例のない人型の黒い影。

「おいおいおい、どうなつてやがる！ 鉛球もミサイルもまるで手応えがねえぞ！」

それもそのはず。肉眼で目視できるとはいえ、相手の本質は霊体。触れることはできないが、その身を構成するのがエーテル体である以上、物理攻撃では効果が薄い。聖遺物の欠片をフォニックゲインで増幅しているとはいえ、シンフォギアの力は基本的に物理的なもの。

機能制限の外れたエクストライブならいざ知らず、通常状態では些かが悪い。戦闘能力では引けを取らないが、攻撃がほとんど効かないのはいずれジリ貧になる。だがそこへ、思いもよらぬ助勢が入った。

「いくよルビーー！」

「ええ、あまり人前でやるのはお薦めしませんけど」

「あれどう見ても私たちの方の厄介ごとでしょ!？」

“どう見ても黒化英霊ですね、如何いたします美遊様”

「気付いたらなくなってたカードが原因だろうし、これは私たちの責任。急いで処理するよ、サファイア」

「つて言うかこんな時にクロはどこ行ったの〜っ!」

“あは、見事にはぐれちやいましたからね♪”

「もう! とにかく全力の……斬撃!!」  
シュナイデン

白い少女から放たれた光の刃と黒い少女が放つ光の連弾。それらは瞬く間に黒い人影を飲み込み……

「つて全然効いてない!」

「これは……出力が落ちてる?」

“どうやら、こちらに引きずり込まれると同時に並行世界へのアクセスに不具合が生じたようです”

“つまり、今のお二人は出力大幅減ということですね。ハードモードですね”

「そんな悠長なこと言っている場合じゃ……」

「私、ただでさえクロに色々持たれてるんですけどお!」

その後、奏者たちと協力して何とかノイズを一掃し、黒い人影を撃退することに成功した少女たち。当然そこで「はい、さようなら」となるはずもなく……



「はへ、魔法少女デスカ」

「そういえば、前に響さんたちもあつたことがあるって言ってた」

「あつちは随分ハイテクな感じだったが、こっちは随分＼らしい＼けどな。つか、ノイズの位相差障壁はどうしやがった」

＼あ、その手の空間系は私たちカレイドステッキにはぶつちやけ無効ですね＼

「とんでもねえなあ、おい」

それはそれとして、＼ところでノイズって何？＼と聞いてみたら、割とヤバイ話が出てきて青褪める魔法少女たち。

（美遊、美遊！ これ、絶対ギル君には聞かせられない話だよね!?!）

（うん、アレは怒らせると手に負えない。サファイア、近くに反応は?）

＼ご安心を、美遊様。どうやら、あちらは巻き込まれていないようです＼

＼自分の宝物庫を兵器塗れにされて、挙句の果てに丸ごと焼却処分ですか。流石にブチ切れてもおかしくありませんね＼

（よかった、いなくてよかったよお……）

でも、近くに反応がないだけで本当にいないかどうかはまだわからない、という現実からは全力で目を逸らす。

なにしろ、とりあえず共同戦線を張ることにしたのはいいものの……

「■■■■■■■■■■!!!」

「あれって…クロ!?」

「あん、お前らの知り合いか?」

「というか、黒いイリヤ?」

「確かに物凄いそっくりさんデス!」

(黒化英霊に近い状態になってる? なんとか、助ける方法を考えないと……)

容易な相手ではないが、幸いお互いに手の内は知り尽くした間柄。おかげで、何とか無事に正気に戻すことには成功したのだが……

「……ん、こっちは?」

「お、目が覚めたか。待ってる、今アイツら呼んで…もがっ!?」

「ん、ちゅぽ……」

足りない魔力を手近なところで補給したり

「シンフォギアねえ……これ、まともな魔術師が知ったら泡吹いて卒倒するんじゃない?」

「ですね。物理攻撃に偏る形で力を出力してる関係で黒化英霊には効果が薄いですけど、普通なら大抵の魔術はかるく吹っ飛ばせる代物神祕ですよ」

「ところで、どんな聖遺物とやらを使ってるの?」

「私がシウルシヤガナで」

「私がイガリマデス！」

「え？ イガリマつてももしかして私が『パンツ！』いったくい!? 何するのクロ！」  
（余計なこと言わなくていいの。へし折つたなんて言つても、ややこしくなるだけなんだから）

適当に誤魔化しながら情報共有したり

「しつかし、これからどうするよ。あたしらじゃあの黒化英霊？ ってのにはいまいち効果がねえし」

「私たちも出力が落ちてるから、真つ向勝負は難しい。クロは？」

「同じく。イリヤたちの回復量が少ないと、私もそうそう補給できないしね」

「私たちの中だと、未来さんの神獣鏡シエンシヨウウジンならいけそうなんだけど」

「この前の任務で壊れて、今修復中なのデス」

「ま、こればかりは仕方ねえだろ。ありやあ対聖遺物特化のシンフォギアだからな。通常任務じゃ、火力不足は否めねえよ。」

「そーいや気になってたんだけどよ。あの黒い奴ら、『セイハイ』とか言つてたがなんか心当たりあるか？」

「そう言えば、みんな私たちをスルーしてイリヤたちを狙っていたような……」

「ギクツ!!」

「さあ? 聖杯なんて、私たちは持つてないわよ」

(まあ、持つてないのは本当、かな?)

しかし、身の安全を守るための隠し事が、結果的に窮地を呼ぶことに

「不味いわね。まさか、二人とも捕まるなんて……」

「確かにヤバい状況だが、要はセイハイつてのさえ渡しちまえば身の危険はないんだろ?」

「……………仕方がないか。そう単純な話でもないのよ。いや、ある意味単純か。聖杯を使うつてことは、そのまま二人の身の危険に繋がるんだから」

そして明かされる、魔法少女たちの真実。

「言わば、美遊は天然物の聖杯で、イリヤは人工の聖杯つてこと。でも、どっちも願いをかなえる機能を持つつていう意味では同じ」

「で、お前はもう一人のイリヤつてことか」

「そうね。私たちは元は同じもの。アインツベルンの聖杯、あるいはホムンクルスとしてのイリヤが私で、人として育てられたイリヤがあっち。ま、ある種の二重人格みたいなものよ。今は別々に体を持つてるわけだけど」

「……………そいつについては一旦置いとく。重要なのは、聖杯としての機能とやらを使った

らどうなるかだ」

「……美遊に関しては、大なり小なり命を削ることになるでしょうね。だからこそ、朔月の人たちは神稚児としての能力がなくなるまで困い込んでいたわけだし。まあ、どの程度削ることになるかは願いの内容次第かな。イリヤに関しては……正直わからない。朔月家と違って、こつちはまだ使用例がないも同然だから。」

とはいえ、今すぐどうこうつてことはないはずよ。イリヤたちはあくまでも聖杯の器でしかない。今、その中身は空っぽ同然。そんな状態じゃ聖杯として機能しない。たぶん、クラスカードを中身にするつもりなんでしょうけど、それも7枚全部揃ってるわけじゃないしね。にしても、聖杯二つを使つてまでかなえたい願いとはまた、豪勢なことよね」

敵側の手には六枚のクラスカード、しかし最後の一枚は幸いにもこちら側。

とはいえ、それはクロの身柄を奪われれば同じこと。なにより、まだ生き残る可能性のあるイリヤたちと違ってクロの場合カードの喪失は死を意味する。

奏者たちはイリヤたちの奪還と並行して、なんとしてもクロを守らなければならぬ。

「でも、私たちじゃ黒化英霊を突破できないし……」

「ああ、クロにやらせるんじゃないや本末転倒だ。やるなら、あたしたちの手でだ」

「だけど、一体どうしたら……」

そこに飛来するは何とか抜け出すことに成功したカレイドステッキ。もとより、相手方のねらいはイリヤと美遊だけだったことが幸いしたのだろう。

とはいえ、それだけで状況が改善するわけではないが、臨時的な例外処置があるという。

「つまりですね、お二人を臨時で私たちのマスターとして登録しちやおうということですよ」

「はい。現状、並行世界からの魔力供給は僅かなものですが、それでもお二人の武装を魔力コーティングすることで黒化英霊にも届くようにすることは十分可能かと」

そうして爆誕する、(臨時)カレイドの魔法少女たち(ピンクと緑)。

「ホントに、出来た」

「こんなに簡単に出来るものなんですか？」

「んー、お二人の場合イリヤさんと美遊さんにすくしばかり縁があつたのもあると思いますよ」

「そうなの？」

「はい。調様は月読、美遊様は朔月。どちらも月に由来するお名前をお持ちです。魔術的に、名前とは無視しえないファクターですから」

“切歌さんの場合、シンフォギアに使われてる聖遺物のせいですね”

「？ イガリマがどうかしたデスか？」

“ぶつちやけ、イリヤさんイガリマへし折ったことがあるんですよ。神剣を折るって割ととんでもないことですし、もしかしたら軽い特攻くらい持つてるかもですよ”

「デデデース!？」

加えて、もう一人。

「で、あたしはお前か」

「そうね。今のままであなた一人戦えないまま…私も残り魔力は心許ないけど、それを割くだけの価値はあると思うわ」

「そうかよ。ところでキ、キキキキスはなしだぞ！ 絶対になしだからな！」

「……………ふり？」

「んなわけあるか!？」

「そう警戒しないでよ。あの時あなたの生気を分けてもらったから、こうして逆にこっちの魔力を送り込むことができるんだから。幸い、能力的に相性も悪くなさそうなんだけど……………」

「なんだよ」

「割とキツツいから、覚悟だけはしておいてね♪」

「はあ？」

その後、短い時間の中でアーチャーの力の使い方を教わるのだが……

「あ、あつたまいて〜……」

「まあ、慣れてないとそうなるわよね」

「おま、こんなとんでもないことやつてやがったのか？」

「見直した？ とはいえ、これが出来なきやその力を十全に活かすことはできないわ。

無茶を承知で言うけど、何とかものにして頂戴」

「わあつてるよ。聖遺物すら複製するなんてチート能力、ノーリスクで使えるなんて都

合のいい話があるわけねえもんな」

「モノによるとは思うし、シンフォギアはメカメカし過ぎてて相性悪いんだけどね」

（あたしじゃ使いこなせねえけど、投影した武器を先輩やマリアあたりに貸せるようになりや戦略も広がるし、とんだ拾いもんかもしれないねえけどな）

そうして少女たちは、仲間を、友人を、家族を助けるべく最後の戦いに臨む

「クラスカード、セイバー！」

「クラスカード、ランサー！」

「インストロル夢幻召喚!!」



## 〈呪術廻戦×Fate／sn〉呪いは廻り、運命は巡る

「……………なにこれ？」

虎杖悠仁がそれを見つけたのは偶然だった。

呪術高専に編入して早数ヶ月。

いくつかの修羅場を潜り抜け、姉妹校交流会での飛躍を経て、知識と経験はともかく実力と言えば一端の呪術師を名乗れるくらいにはなっただろうと自負している。それ自体は大変結構なことだし、悠仁自身も自身の成長に手応えを感じる充実した日々を送れていると思っている。

ただその弊害として、同期と任務が重なることは激減した。未だ階級は未定のため単独で任務に出ることはできないので、必ず誰かと組むことにはなるのだが、七海や二年生といった信頼できる先輩呪術師が一緒の場合が多い。もちろん、担任の五条が引率することはあるし、同期と同じ任務になることがないわけではない。しかし、以前と違って共に行動する一年生は大抵一人だ。

十代半ばを過ぎて寂しがり屋か、と言うなかれ。虎杖は一時期、諸々の事情から死を装って身を隠していた。信頼のおける人たちが顔を見せには来てくれていたが、それで

も寂しくなかったと言えば嘘になる。何より、姉妹校交流戦から、改めて同期たちと共に行動できるようになったのは純粋にうれしかった。

だから、割と久しぶりとなる今回の同期三人での合同任務、虎杖は朝から割とテンション高めだった。何なら、昨夜からソワソワと落ち着かなかった。遠足前日の小学生か、と自分でツツコミを入れてしまうくらいには。

なので、ついつい予定の集合時間よりずいぶん早く来てしまったわけである。しばらくはスマホを弄ったりして時間を潰していたのだが、それも長くは続かず。暇を持て余した虎杖は、普段なら目もくれないであろう掲示板をとりあえず端から見ていくことにしたわけだ。

そして、冒頭の一言である。

「? ? ?」

書いてある内容は、一応わかる。わかるのだが、要所要所に知らない単語が散見される。

いや、読めないわけではない。何なら、何となく意味合いもわかる。だが、呪術界に入って日の浅い虎杖には知らないことも多い。字面から浮かび上がるイメージと、呪術界における意味が本当に同じなのか。自分が呪術……と知識面に関してはまだまだ素人に毛が生えた程度であることを自覚しているだけに、とある掲示物の文面を前に首を

ひねってしまふのも仕方ないことだろう。

とそこへ、見知った二人組がやってきた。

「ん、早いな虎杖」

「つてか何やつてるわけ？　なんか変なものでもあつたの？」

「おう、伏黒、釘崎。いや、これ何かなって思つて」

「これ？」

虎杖の指す先にある張り紙を、二人はそれぞれ彼の両脇から覗き込む。そこに書かれていたのは……

「特別講演会のおしらせ？」

釘崎は顔をしかめ、この上なく胡散臭そうにしている。

しかし、それも無理もない話だ。そもそも、呪術高专自体が呪いの専門機関である。必要な知識は学べるし、資料だって充実している。もちろん、名家にはそれぞれ保有する知識や資料はあるだろうが、現在の高专には御三家の一角である五条家の当主が教師として籍を置いているのだ。必要なら五条家のそれを出してくるだろうし、わざわざ「特別講演会」なるものを企画する意味が分からない。

だが、釘崎と違い伏黒はどこか納得したような表情を浮かべている。

(……そうか、あの人戻ってきてたのか)

「なあ？　今までこんななかったしき、それに講師のとこ見てみるよ」

「講師？」

「おう、これどういう意味なんだろうな？」

「性格はアレだけど、特級呪術師が担任なのよ。今更どこのどい、つ、が……」

「釘崎？」

「虎杖、耳、押さえとけ」

「お、おう」

顔を強張らせた釘崎を心配そうに見やる虎杖に対し、伏黒が自身の両耳を手で押さえながら忠告する。

虎杖もよくわからないままに両手を耳にやろうとしたその直後、硬直から回復した釘崎の絶叫が響き渡った。

「魔術師が講師ってどういうことよ

——つ!!!  
!!!」

「おつかれサマンサー……って、凄い声聞こえたけどどうしたの？　悠仁は蹲ってるし」

「今ので耳やられたみたいですよ」

「どうやら、タツチの差で間に合わなかったようだ。」

「そんなことより、これどういうことよ！」

「俺の鼓膜ってそんなことなの!?!」

「聞こえてんなら問題ないな」

「これ？ ああ、それね。一年……というか在校生は全員参加だからヨロシク。あ、でも秤たちと憂太はどうしよっか」

「三年の先輩たちは普通に呼べばいいんじゃないですか。問題は海外の乙骨先輩ですけど」

「だよね。滅多にない機会だし、なんとか術式模倣とか診てもらいたいんだけどなあ」

「だからどういふことなのか説明しないさいよ！ って言うか伏黒！ アンタも何か知ってんなら教えろ！」

二人で話を進めて蚊帳の外にされていることに釘崎がキレる。

と同時に、早々に復活を果たした虎杖も合流してきた。

「つーかさ、魔術師って何？ もしかして呪術だけじゃなくて魔法もあるの？ あ、俺も使えたりする？」

「無理」

「無理だろうな」

「そもそも魔術師なんて関わるもんじゃないわよ。あの連中、どいつもこいつも呪詛師みたいなものって話だし」

「え、魔術師ってそんなにヤバいの!?!」

よくよく考えなくても、つい最近まで一般人だった虎杖がその辺の事情を知っているはずもなく。

普通なら、ここは教師である五条が懇切丁寧に説明するところなのだが……

「じゃ野薔薇、説明」

「は? なんで私が」

「呪術界での一般的な魔術師の認識から説明してこうかと思つて、訂正は恵ね」

「俺ですか…まあいいですけど」

「先生と伏黒は魔術師つてのに詳しいの?」

「俺は程々だけど、先生は詳しいぞ。なにしろ……」

「この外部講師、僕のししよー」

「はあっ!?!」

あつげらかんと放たれた一言に、魔術師のことなんて全然知らない虎杖も驚きを露に

する。

(まあ、当然の反応だよな)

名実ともに呪術界最強、御三家が一角五条家の当主。そんな五条悟の師匠が、どうして「どいつもこいつも呪詛師」な魔術師なのか。疑問に思っただけだろう。

「……とりあえず、釘崎」

「なによ」

「『どいつもこいつも呪詛師』ってのは流石に言い過ぎだ。9割…9割5分呪詛師まがいの連中だ」

「風評被害コワイ」

「いや、それほとんどみんな呪詛師じゃん」

「フォローになつてないわよ」

伏黒の一見するとフォローになつてないフォローにツツコミを入れる両名だが、これは結構重要なポイントだ。何しろ……

「でも、そうじゃない人もいるんだよね」

「五条先生の師匠はそういう人だ。というか、人間として普通に信頼できるし尊敬できる。少なくとも、五条先生よりも」

「はいっつよりもっ」

「訂正する。五条先生よりも遥かに、だ」

「わかった、それは超重要だな」

「確かにね」

「酷くない？」

五条よりも遥かに、という言葉にようやくこの重要性を理解する二人。

「ついでに、魔法と魔術は厳密には違うらしいぞ。俺も詳しくは知らねえけど、魔術師の前で魔法って単語は使わない方が無難らしい」

「そうなの、先生？」

「まあね。その辺、魔術師的には割とデリケートなところだから、一緒にされると最悪殺されるかも」

「超やばいじゃん!？」

「はいはい。それより野薔薇の魔術師のイメージ、じゃんじゃん話してこ。ま、大体どこかしらで訂正はいるけど」

「訂正するくらいなら初めから教えなさいよね」

一々訂正される側としては、割とイラつくというか気分のいいものではないだろう。こういうことをへらへら笑いながらやらせるから「クズ」と呼ばれるのだ。

「つても、大したことは知らないわよ。基本どっかに引き籠って怪しい研究ばっかして



て、偶に表に出てきたと思えば他人なんて実験台くらいにしか考えてないマツド共」

「……」

「伏黒、訂正は？」

「いや、大体合ってる」

「合ってるの!？」

「基本魔術師ってそういう連中だよ。呪詛師まがいつて言われるのもそれが理由だしね。」

七海は「呪術師はクソ」って言ってるけど、魔術師はゲスか外道ってところじゃない?」

「……………改めて考えると、あの人魔術師とは思えないほどまともですよね」

「まあ、冷酷で冷酷なところもあるし良い意味で魔術師らしい魔術師だけど、悪い意味での魔術師らしきはないかな。ししよーの家伝の魔術が他人を食い物にする系じゃないのと、家訓的に一般人を巻き込むのは流儀に反するからってのもあるけど。」

でも、結構無茶振りしてくるし、身内には横暴だよ?」

「同じくらい身内に甘いでしょ。なんだかんだ、懐に入れた相手は大切にする人みたいですよ」

「……………だね」

思い当たる節があるのか、苦笑いのような、でもどこか感慨深げな笑みを浮かべる五条。

「呪術師は内弁慶つていうかき、あんまり身内を大事にしないんだよね。そりや相伝持ちなら大事にされるよ？」

でも、呪力がない、術式がない、術式が相伝じゃないとか、いろんな理由で血を分けた身内を迫害する家が多い。呪術界全体で見ても、当たり前みたい若い術師、一般出身の術師を使い潰そうとするし。ま、あつちは歴史の浅い家系は見下される傾向が強いみたいだけど、それはこつちも同じだし？ 使い潰さないだけまだマシじゃないかな」

「どつちもどつちじゃね？」

「大差ないわよね」

「いやいや、身内に対しては魔術師の方がマシだって。魔術は基本一子相伝、だから後継者以外は魔術から遠ざけるってパターンが多い。そもそも自分が魔術師の一族つてことすら知らない、なんてことも多いみたいだし。資質の低い子どもを後継者のスペアにすることもあるみたいだけど、それでもあからさまに迫害することは稀らしいよ。」

ま、中には身内を実験台にする家系もあるし、内ゲバとか普通にあるみたいけどね。ただ、全体的に見れば身内を大事にする方だと思うよ。逆に、外に対してはマジでゲスいことやらかすけど」

「ゲスいって、どんな？」

「例えば、身寄りのない子どもを引き取って」

「実験台にするって？ マジでクソじゃない」

「いや、聞いたことあるのだとほとんど燃料みたいに消費する、って感じだったらしいよ。何だったかなあ……魔力の結晶？ みたいなの作るために、子どもの命を使うだったかな？」

その時三人の心が一つになった、「確かに外道だ」と。

「なあ、先生。呪術師的にいいの、そういうの放っておいて」

「あの連中はね、隠れて悪さすることに命賭けてるんだよ。おかげで、隠すことに関しては向こうの方が上手。本気で隠れられたら僕たちじゃ見つけるのは至難の業なの。そもそも、それが魔術関連の被害だって悟らせない」

「魔術協会の方針でしたよね。『神秘の秘匿』、魔術の存在が漏れないなら基本的に何をしても咎めないっていう」

「そう。裏を返せば、魔術師絡みの案件ってこっちが気付く頃には協会の肅清対象ってわけ。僕らが手を出す前に終わってる。仮に終わってなかったとしても、下手に手を出して全面戦争なんてどっちも望んでないからね。被害が最小限になるように睨みを利かせる、が精々だよ」

「あれ？ でも確か、魔術師は戦闘向きじゃないって聞いたわよ」

「それは俺も聞いたことがある。確か、戦闘専門の魔術師とかでも一級術師クラスは限られるとか……」

「恵、正解。中でも色々イカしてる封印指定執行者って連中がいるんだけど、これでもやく一級クラス。その中でも選りすぐりなら、まあ特級に届くかもしれないね」

余談だが、魔術師は呪術師を「脳筋の戦闘屋」と見下し、呪術師は魔術師を「時代遅れの引き籠り」と軽蔑し合っているの、基本的に不干涉ながら仲が悪い。当初、釘崎が特別講演会の講師が「魔術師」と知つてあのような反応を示したのも当然というものだろう。

「ただ、それはあくまでも真つ向勝負になった場合の話。あの連中、引き籠りだけあつて自分の陣地に引つ込んでいる間はホントメンドクサイから。領域展開みたいに術式が必中になるってわけじゃないけど、色々あつちに有利でこつちに不利な条件が目白押しになるみたいなものだし。多少の実力差はあんまり意味がないわけ。」

そもそも、こつちは日本限定なのに向こうは一応世界規模の組織だよ。個人戦ならともかく、組織戦になったら勝ち目が薄い。ほら、僕一人が残つても意味ないでしょ？」

「特級は先生だけじゃないでしょ」

「向こうにもいるんだよ。届くかもじゃない、本当に特級クラスなのがね」

「え、いるの?」

「少なくとも一人、クイーンって呼ばれてるのがね。他にも、噂で聞いたのが本当なら負けはしないまでも勝つのは難しそうなのがチラホラ。呪霊と呪詛師だけで人手不足だっていうのに、そつちまで相手にしてられないよ」

「まあ、それもそうね」

「なにより」

「なにより?」

「『魔法使い』に出て来られたらどうなるかわからない。僕のししよーがね、その領域に片足突っ込んでてさ。昔…初めて会った時に完敗してるんだよね」

「完敗って、先生が!」

「嘘でしょ……」

五条の強さに対する信頼は、ある意味絶対的なものだ。だからこそ、彼自身の口から出た「完敗」の言葉に絶句する虎杖と釘崎。しかし、事実だ。お互いに無傷ではあったが、その意味合いが大きく異なる。傷つけられなかった五条と、傷つけずに制した彼女。下らない、発端は大変バカバカしいものであったが、あの時の二人にはそれだけの実力差…というよりも、経験の差と相性があった。

ただし、それはあくまでも『出会った頃』の話だ。

「それ確か、先生が10歳かそこらの頃の話でしょ」

「は？」

「まあね、今なら僕が勝つよ。驚いた？ ねえ、驚いた？」

「ウザ」

「驚かせないでよ、先生」

(でも、ししよーの更に師匠筋にあたる魔法使いが相手だったら…どうなるかな。割と相性悪いし、他の魔法使いも次元が違うって意味では同じなんだよねえ)

なにしろ、魔術師は所詮「現代文明で再現可能な神秘」の行使者でしかないのに対し、魔法使いは「現代文明では再現不可能な神秘」の担い手だ。これはつまり、現代における人の枠に収まるか否かということ。

五条がどれだけ最強を誇っても、どれほど逸脱した力を有していても、彼はあくまでも「人」の域にいる。そこから外れた存在が相手となれば、どうなることか……。

「そういうえば先生、魔法使いって……」

「みなさん、お待たせしました。良ければ、早速任務に」

「というわけで、三人ともいつてらっしゃーい！ あ、詳しく聞きたいなら白雪に聞くと良いよ」

「それって、四年の先輩だよね？ よく食堂でご飯作ってくれてる……」

「白雪さんが？　なんでよ」

「あの人、魔術師家系の出だからな。と言つても、別に後継者つてわけじゃないらしいけど」

「あ、一応魔術も使えないこともないよ。世にも珍しい魔術と呪術、おまけに魔眼のトリプルホルダーだけど、割とどれも微妙つて言うか使い難いんだけどね」

「そんなにあんの!?　俺どれも使えないんだけどー」

ズルい、とでも言いたげな虎杖。霊丸とか螺旋丸とか卍解とかやりたかった人だから尚更だろう。

「ちなみに、特別講演してくれる講師『冠位魔術師』遠坂凜の姪でもあるよ。あ、冠位つていうのは魔術世界での特級みたいなものなんだ、スゴイね」

「情報量?!」

「ちゃんと説明しろー!!」

「死なずに帰つて来なよ」

「伏黒!」

「……俺だつて詳しくねえよ」

抱えきれない疑問ばかり持たされた生徒たちが、黒塗りの車に押し込まれて走り去っていく。

目隠しの担任が当てにならないと判断した二人は、早々に伏黒に矛先を向けるが、当の伏黒の心底うんざりした声音が印象的だった。そんな可愛い生徒たちを見送った五条が踵を返すと、そこには自身の同期の姿があった。

「あれ、硝子じゃん」

「五条、聞いたぞ。遠坂さん、今年は来るんだってな」

「だいたい4年ぶりだし、在校生で会ったことがあるのは白雪とかくらいだろうね。間に合って良かったよ」

「そうか、もうそんなになるか。あの人の講義はためになるからな、学生のうちに一度は聞けるのは良いことか。お前も、そのつもりで捻じ込んだんだろう」

「また、デツカい借りを作るようになったけどね」

この特別講演自体は、五条たちが学生の頃から行われ始めたものだ。もちろん、師弟関係にある五条の伝手で。以来、数年に一度招いて講義をしてもらっている。主な内容は、術式への理解と解釈について。研究者である魔術師と、戦闘専門の呪術師では見方も考え方も大きく違う。魔術師視点の術式の掘り下げの有益さは、五条自身が身を以て知るところだ。ただ、魔術師的には呪術師と関わることへの利がないため、普通はこのようなことは起こらない。ただ、五条の無下限呪術は遠坂にとつて中々に興味深いものであったことから紡がれた縁である。



もちろん、呪術連的にも魔術協会的にもあまり褒められたものではないが、片や五条家当主の特級呪術師、片や宝石翁が目をかける冠位魔術師。その二人が個人的にかかわるとあれば、よほどのことでなければ口出しできるものではない。

「衛宮も在学中だし、様子を見るといいうのもあるのかもな。そう言えば、あの人は今何をしてるんだ？」

「ん？ 確か、昔海賊とビジネスしてた時の仙人絡みのゴタゴタの後始末だって」

「……………何をしてるんだ、あの人は？」

「意味わかんないよね、ウケる」

実に愉しそうにケラケラと軽薄に笑う五条。特にそこに言及したりはせず、思い出したという様に硝子は九段の魔術師の関係者を話題に挙げる。

「そういえば」

「うん？」

「ライダーさんは来ないのか？」

「……………硝子、あれ特級呪霊の億倍ヤバイ神話級の怪物だつてわかってる？ 英霊寄りだから一応大丈夫だけど、怪物寄りになったらマジで手に負えなくなるよ」

「いや、久しぶりに飲みたいなと思って」

「あのウワバミと飲むって正気？」

「蛇神だけにな。まあ冗談はさておき、サシで飲める相手が少ないからな。七海もいい線行くんだが……」

「硝子ザル過ぎー。万が一食われても僕しくらないつと」

## 呪いは廻り、運命は巡る（特別講演会編）

衝撃的な情報の連打で無量空処されたかのように情報が完結せず、気になって気になって悶々とする事早数日。詳しいことを知っていきそうな先輩やその妹の双子を捕まえようとすると、間の悪いことに揃って遠方の任務に出てしまい、結局謎は謎のまま。一応双子は今日帰ってくる予定なので、そこで何とか話を聞くつもりではいるが。

正直、任務にもあまり集中できそうになかったので、常より全力かつ速攻で呪霊を蹴散らしたものの、今度はそのことで大人オブ大人に説教される今現在。

「いいですか、虎杖君。どんな任務にも全力で臨むのは君の美点です。ええ、それこそ五条さんに爪の垢を煎じてガロン単位で飲ませたいくらいに」

「多過ぎね？ 五条先生溺れちゃうよ」

「ですが、“本気”と“全力”は違います。どんな任務であろうと油断せず、本気で臨むことは大切なことです。しかし、それは必要以上に力を入れるということではありませぬ。以前にも言いましたが、程々で済むなら程々でいいのです」

それは、目の前のちよつと個性的なサングラスをかけた男と、初めて組んだ任務で言

われたことだ。

「任務に不測の事態は付き物です。我々と違い、戦闘能力を有さない窓では呪霊にあまり近付くわけにもいかない関係上、彼らの報告の精度はどうしても低い。ですから、等級違いなんてざらですし、それでなくても途中で等級が変わることもある。君の場合、上の謀略の可能性もありますから、不測の事態に備えて可能な限り余力を残しておくべきだ」

「……ツス」

「まあ、そのあたりは今後の課題としておきましょう。当面は私や五条さんたちが引率につきますし、最悪でも複数人で任務にあたることになりますから、互いにフオーロ合えば……」

そのままありがた〜いお説教を頂戴しつつ高専の敷地内を歩いていく。

これがもう少し遅い時間なら、グルメと評判の七海お薦めの店、且つおごりで美味しい物にもありつけたのだろうが、昼食は任務前に済ませたし、かといって夕食にはまだ早い。なので、こうして仕方なく高専に戻って報告書を片付けに来たわけだ。

（あく、夕飯どうすっかなあ……。報告書仕上げてから外に出るのもアレだし、かといって凝ったもん作る気にもなんねえしなあ……。ん、あれは）

「どうかしましたか、虎杖君」

「ナナミン、あれ……」

「そろそろ本当にひつぱたきますよ」

と言いつつも、本当に手を挙げることはないのは彼が正しく大人だからだろう。虎杖もそのあたりはわかっているのです。視線は前方に固定されたままだ。

やがて、七海も「仕方がない」とばかりに虎杖の視線を追う。すると、そこには兩名にとつて見知った人影が二つと、見慣れぬ人影が一つ。やや距離は離れているが、耳をそばだてれば視線の先の三名の会話を拾うことは難しくくない。

(なるほど、あの人ですか。ということとは……)

「ねえパパ、ちょっとだけでいいから。お願い!」

「いや、でもなあ……」

「……だめ、パパ? 会うの久しぶりだし、欲しいな、お小遣い」

「うくん……」

見知った双子にサンドされた赤毛の男性が、何やらねだられている。左右の腕にそれぞれ両手を絡ませ身体を密着させる姿は、大変親密そうだ。

ただ、それ以上に色々とワードが気になり過ぎる。

虎杖は腕を組んで空を見上げ、続いて俯き、足りない頭を総動員して考えをまとめる。

そうして出た結論は……

「ミミナナがパパ活してる!？」

「失礼ですよ、虎杖君」

どこの世界に、在籍している校内で援交する女子高生がいるというのか。

まあ、相手の男性が二人とサツパリ似ていないので、そう思うのも無理はないのかも  
しれないが、

「あの人は、二人の父親ですよ」

「え……つまり、本当にパパさん？」

「ええ。白雪さんと二人に血縁がないのは知っていますでしょう？」

「あー、そう言えばそんな話聞いたわ」

（さて、あの人が来ているということは……しばらくは学長も手が離せませんか）

「ご無沙汰しています、遠坂先生」

「久しぶりね、夏油くん。顔色は……悪くなさそうで安心したわ」

場所は高専の応接室。来客用の上等なソファに腰掛けたのは、長い黒髪を艶やかに靡かせた美女。中年と呼んで差し支えない年齢だろうし、相応に年を重ねた顔立ちはしか

し、その美貌に陰りを齎すには至らない。むしろ、老いすらも糧として輝きを増す様には、いつそ凄味すら覚えるほどだ。

「その節はお世話になりました。あの子たちの事と良い、施設の事と良い、先生には頭が上がりませんね」

「大したことはしちやいないわよ。双子のことに私はほとんど絡んでないし、施設の方はしっかりシマ代貰ってるんだから、礼を言われるようなことじゃないわ」

「ははっ、硝子とはもう?」

「こつちが終わった後も忙しくてね。関東に来るのも久しぶりだし、色々回っておかないといけないのよ。ま、講演会の後の打ち上げくらいはできると思うわ」

「そうですか。学長はもうじき来ると思うので、先に資料に目を通していただけますか。それで、その…悟のことなんですが」

苦笑いを浮かべつつ明後日の方向を見ながら頬をかく様子には、何とも言えないバツの悪さが滲んでいる。

「大方、任務を口実に逃げたんでしょ。流石に講演会には顔を出さだろうし、そこでしっかり締めておくわ」

弟子の行動パターンは熟知しているので、この場にはない理由くらい聞かなくてもわかる。今となっては戦っても勝ち目などあろうはずもないが、かつて構築された精神的

力関係はそう簡単には崩れない。

夏油も彼女には頭が上がらないが、五条の場合はその比ではない。それこそ、彼の呪術界最強が尻尾まいて逃げ出すしかない、ということまで理解してもらいたい。

冊子にまとめられた在校生の資料にぎっと目を通していく。とはいえ、書かれている内容は概要程度で、術式の詳細などには触れられていない。そのあたりは、講演会を受講してさらに助言が欲しい場合に、任意で開示することになっている。何しろ術式の内容は呪術師の生命線、おいそれと明かせるものではない。

とはいえ、概要程度でもわかることはある。

「……それにしても、毎度のこととはいえ中々濃い子が揃ってるわねえ」

「白雪から聞いていないんですか？」

「無闇に情報漏らすような子じゃないわよ」

呪術と魔術、双方に関わる立場にいるからこそ慎重に動かなければならない。そのことを、姪っ子はよく理解している。だからこそ、今は「呪術高専4年生」として振る舞っている。その立場で言えば、身内とはいえ外部の魔術師に情報は開示しないのが当たり前だ。

余談だが、わざわざ高専に出向いて資料に目を通してするのは、昨今話題の「個人情報保護」が呪術界でも無視できないから……ではない。単純に、この女傑が絶望的な機



械音痴でデータを送ってもそれを開けないからだ。資料を紙ベースで送るという手もあるのだが、それならいっそ直接高専に出向いて遠目からでも生徒たちを見た方がいい、との判断からである。

今回、赤毛の男が同伴していたのも、同じ理由からだ。

「まあ、今回は中でも極め付きだけどね」

「ですね。気になる生徒はいますか?」

とは聞いてみたものの、実はある程度目星はついている。呪言師の狗巻や術式模倣の乙骨あたりも捨てがたいが、それ以上に古い術式を使う釘崎と魔術とも縁深い星座に関連する術式を使う星あたりが有力だろう。

「そうね……宿讎の器って子はもちろんそうだけど、個人的にはこの子かしら」

「え?」

その意外さに、夏油は思わず目を丸くするのであった。

場所が変わって寮の食堂。軽い自己紹介を済ませた虎杖たちは、立ち話もなんだからと移動してきたのだが、どうやらまだ誰も戻ってきていないらしい。閑散とした食堂内

で、適当なテーブルの周りの椅子に腰を下ろす。

虎杖としてはせっつかくの機会なので気になることを色々聞いてみたいのだが、同級生の親とはいえ部外者に聞いてもいいかは悩みどころ。コミュ強の虎杖とはいえ、流石にちよつとためらってしまふ。

そんな虎杖の心中を察したわけでもないだろうが、七海が口を開いた。

「改めて、お久しぶりです衛宮さん」

「ああ、七海も元気そうだな」

「お陰様で、ポチポチやっていますよ」

「ナナミンって、えく…衛宮さん？ と知り合いなん？」

「親しいというわけではありませんが、それなりに面識はありますね。今回は、いつものアレですか？」

「あれ？」

何のことかわからず首を傾げる虎杖に、情報を補足するべく双子が同時に顔を向ける。

「パパ、概念礼装とか魔術礼装…あく、呪具の一種、みたいなの？ そっち方面に強くてさ」

「五条悟の頼みで凜ちゃんの話演会と合わせて、偶に呪具使う人に見繕ったりしてるの」

「ナナミンも？」

「いえ、私は違います。この鈍がそんな大層なものに見えますか?」

「そもそも七海の場合、得物の性能はあまり関係ないからな」

(そつか、ナナミンの術式は弱点を作るものだもんな…んん?)

というか、今何やら聞き捨てならないこと言つてなかつたか。

「りんちゃん?」

「なぜか、昔からな」

「私たちからすれば、怖いもの知らずとしか思えないんですがね」

「だって、オバサンって呼ぶのはなんか違うって言うか…ねえ、美々子」

「うん。凜ちゃんにオバサンは解釈違い」

「あ、でもお姉ちゃんみたいに『叔母様』ならよくない?」

「でも、私たちのキャラじゃない」

「それねー」

とりあえず、別に何か変な理由があつてのちゃん付けではないらしい。

(つてか、白雪先輩『叔母様』って呼んでんだ。いや、なんか似合うけど)

どことなく育ちがいいというか、お嬢様風なところがあるのでその呼び方自体はとてもしつくりくる。

などと思つていたら、唐突に双子が爆弾を放り込んできた。

「あ、ところでパパ」

「うん？」

「凜ちゃん二人だからって不倫はダメ」

「ブハツ!? ゲホッ、ゴホッ！」

「あ、噎せた」

「そりや娘に不倫を心配されたら噎せるでしょう」

言われて、虎杖も「確かにそりやそうか」と納得する。そのまましばらく噎せて喋ることままならずにいる3児の父は、ようやく話せるくらいにまで回復したところで、恐る恐るといった様子で尋ねてくる。

「……あのな、一体全体なんでそんな心配してるんだ？」

「ミスコン常連のマドンナだったらしいじゃん。今もすっごい綺麗だし、いやママも超美人だけどさ」

「それにパパ、昔凜ちゃんに憧れてたって」

「誰がそんなことを……」

「大河ちゃん」

「藤姉……」

確かに、昔はそういうのがあったりしたのは否定しない。否定はしないが、それでも

流石に心外というものだ。

「言つとくけどな、遠坂の奴、昔から外では滅茶苦茶な猫被りだぞ」

「じゃ、素の凜ちゃん知つて幻滅した？」

「違うよ菜々子、凜ちゃんはむしろ素の方が魅力的」

「ジト……」

「……確かに言わんとすることはわかるけどな。だけど、仮に不倫なんてしようものなら、真つ先にその遠坂に殺されるぞ、俺」

「あ……」

「で、次にライダー」

「最後にママだね」

頭を抱えて突つ伏す父親に、更なる追撃を仕掛ける双子。

家庭内比率が圧倒的に女子に傾いている衛宮家での男親の権威は大変低い、家主なのに。

「ナナミン、これって恐妻家つてやつ？」

「やめなさい、虎杖君。家庭の事情に首を突つ込むものではありません」

特にあの家の場合、藪を突いて出てくるのが蛇ならまだマシな方なのだから。

これをきつかけに「魔術師つて言つても結構普通なんだな」なんて結論に至つた虎杖。

とはいえ、やはり魔術師自身がいる前で「魔術師って何なの？」とは流石に聞きにくく、何となくそのまま談笑を続けることしばし。

ふと、唐突に前々から気になっていたことを思い出した。

「そういえばさ、前から聞きたかったんだけど……呪霊は人間の負の感情が生まれんだよね」

「そうですね。厳密には、人間から漏出した呪力の集合体ですが」

「じゃさ、正の感情からは何も生まれませんか？ 呪力は怒りとかがトリガーになるからどうやっても呪い関係はそうなんだってのはわかるんだけど……」

何となく、その逆の存在もいていいのではないか。そう思ってしまうのだ。

まあ、正直言ってもあまり期待はしていなかったのだが、答えは意外なものだった。

「いるかないかで言えば、いるな」

「え、いるの？」

「ああ。人間の正の感情、願いや祈りによって成り立つ、ある意味では呪霊の対極にある存在……これを、英霊と呼ぶ」

「英、霊？ でも俺、そんなのこれまで見たことないけど」

「だろうな。基本的に、英霊が現世に現れることはない。抑止力として現界することもあるが、その場合は……なあ」

抑止力をはじめ、何やら小難しそうなワードのオンパレードに既に虎杖の脳内は混乱の極みである。それを察した双子が、助け舟とばかりにできるだけ情報をかみ砕いてくれた。

「簡単に言うと、世界がヤバい時にそれを何とかしてくれる存在ってこと」

「逆に言うと、そこまで追いつめられないと出て来ない」

「は、なんで？ もっとちよいちよい出てきて助けてくれてもよくね？」

「そう都合のいいものでもなくてな。まあ、色々あるんだ」

流石に、世界の滅びの要因を周囲もまとめて消滅させて解決する、なんて話は気が引ける。虎杖からすれば、そんなもの呪霊と一体何が違うのか、という話だろう。

「ちなみに、力は特級以上」

「伊達に世界の安全装置じゃないってこと」

「へえ、会ってみてえなあ」

（地元冬木に行けば会えるとは言えないか）

（流石に骨董屋でアルバイトしてるとは言えないよ）

そもそもの話、冬木にいるのは英霊と言ってもだいたい呪霊寄りだ。伝説に語られる怪物である彼女は、それこそギリシヤでなら特級仮想怨霊として顕現してもおかしくはない。

まあ、もつと根本的な問題として、英霊自体が特級仮想怨霊に近い存在なのだが。「実在を問わず、共通する畏怖のイメージによって成り立つ」というのは、英霊における知名度補正に通じる部分がある。だからこそ「対局の存在」とも言えるのだろうか。

「そうだな、そういうえば遠坂からこれを渡すように頼まれてたんだ」

そう言うってテーブルの上に置かれたのは小ぶりのジュエリーボックス。明らかに高専の古びたテーブルとミスマッチ過ぎるそれに、小市民な虎杖は早速気後れしてしま

う。  
そして、蓋が開けられるとさらに腰が引けた。

「え、なにこれ？　なんか、宝石っぽくね？」

「ぼいじゃなくて宝石」

「魔除けのアミュレットだね。簡単に言うくと、呪霊とかの攻撃から守ってくれるガチの御守り」

「どちらかというと、術式からの防御がメイン」

「まあ、完全に防げるほど強力なのはいろんな意味で難しいし、術式効果を弱める、くらいに考えればいいじゃん」

「ナナミン、これってもらっていいの？」

「講演会の出席者に毎回一つずつ配布されるものですから、あまり重く考えなくていい



でしょう。私も持っていますし、費用は五条さん持ちですから遠慮する必要はありません」

なので、実は宝石の値段そのものはかなり遠慮がない。ただ、加工にかかる時間や術式の付与などにかかる手間などの関係で、そこまで強力ではないのも事実だが。

「お、おう……もしかしてこれって、サファイヤってやつ？」

「違う、それはブルーダイヤ。サファイヤはこっち」

「……ふつーに目利きできんな。ってか、ダイヤって透明で、サファイヤは青じゃねえの？」

「子どもの頃から凜ちゃんのお手伝いでお小遣い貰いながら触ってたしね」

「本物を見る目は養っておいて損はない、って」

そう言えば、以前からちよいちよい育ちの良さというか、お嬢なところが垣間見えていたことを思い出し、妙に納得してしまう虎杖であった。

とりあえず、どれを貰うかは釘崎が戻ってから決めることにする。下手に今選ぶと、あとが怖い。

その後、双子の養父は打ち合わせを終えた同伴者と共に高専を後にする。ただし、久しぶりに懐かしの味を食べたい双子にせがまれ、腕を振るってからになるのだが。

そのおかげで虎杖が夕食のメニューに悩む必要はなくなり、おまけで彼の腕を知る七

海も高専生たちに交じってしつかりご相伴にあずかるのであった。

「ところで、今の今の高専生で呪具使う奴っているのか？」

「恵と真希さん」

「真希さんスゴイよ、超強い！ あとカッコいい！」

「いや、もう少し何を使うのか教えて欲しいんだが」

「あとは…野薔薇も？」

「あゝ…パパ、金槌と釘の宝具ってある？」

「魔術礼装でも概念武装でも可」

「……………あるな」

「あるの!?!」

（俺が視たものじゃないからアーチャーから流れてきたやつか。にしても、来歴とか考  
えると…あいつ、こんなところで視たんだ？）

余談だが、釘崎の術式との相性が良すぎてかえって渡していいか悩んだそう。

・  
・  
・

そうして特別講演会当日。

基本的に生徒数の少ない高専に大人数で講義を受けられるような部屋はないが、そもそも全校生徒が集まっても20人に届かないので教室一つで事足りる。

とはいえ、常でない人口密度での講義というのは中々に新鮮だ。ましてやそれが、馴染みのない魔術に関連した内容であり、これまで会う機会のなかった先輩たちまでいるとなれば尚更だろう。

「……というわけで、魔術において照応は重要な要素なわけだけど、これは呪術にも言えることよ。術式の解釈を広げる上で、類似した概念、あるいは共通点を扉にすると出来ることの幅も広がるわ。」

例えば、使い魔や式神の類を使う術式を八十八星座や十二辰に対応させたり、なんなら天使と照応させるのもありよ」

「天使って、羽があつて頭に輪つかのある?」

「それは割と最近のイメージね。本来はもつと別の形だったのよ、赤い翼で全身が燃えてたりとか、無数の眼が付いた燃え上がる車輪だったりとかね。車輪系の術式を使う子がいるなら、こつち方面から解釈を広げるのもありじゃないかしら。他には四神に関連する術式なんかも色々応用できるわよ。アレ、季節とか方角とか、なんなら色とも対応してるから。」

あとオーソドックスなのだと、神話や伝承に共通点を求めるのも良いわね」

（なら、猪野さんの術式でも似たようなことができるのか？）

「そして、ここには照応の生きた実例が二人もいるわけだし、そこから話してみようかしら」

その言葉に、高専生たちが一様に首を傾げる。平然としているのは、特別講師の周りで補助に回っている双子とその姉位なものだろう。

一人はわかる。だがもう一人というのは……

「その様子だと、いまいちピンと来ていないようね。なら、まずはみんなわかっているであろう虎杖君から」

「あ、やつぱり俺？」

「そ、あなた。医学における拒絶反応なんかからもわかる通り、自分とは違うものを取り入れるっていうことは大なり小なり齟齬や反発を生むものよ。だけど、あなたは特にそんなものもなく適合した。この時点で、あなたは『現代における両面宿儺』として成立している。この先、指を取り込みれば取り込むほどにその性質は強化されていくでしょうね」

「そうすると、どうなるの？ ……やつぱ、宿儺に乗っ取られたりとか」

「可能性としてなくはないわ。悟辺りは、いずれ宿儺の術式があなたに刻まれて、最終的

にあなたと宿儺のどちらかが生き残る形になると予想してるみたいだけど。でも、私は「両面宿儺」という性質上それはないと考えてる」

宿儺がどういうものであるかわかっているからこそ暗い表情を浮かべかけた虎杖が、パツと顔を上げる。それは、彼にとって予想もしていない回答だったからだ。

「どういう、こと？」

「両面宿儺という名前の由来は色々伝わっているけど、それとは別にその名称そのものが今のあなた達の在り方を示しているとも言えるのよ。両面とは即ち二面性の表れ、虎杖君のうちにいるのが「残虐非道な呪いの王」だとするのなら、あなた自身はどうかしら？ 誰かのために本気で怒れて、正しいと信じたことのために戦えるあなたは、呪いの王とは対極の存在とも言える。なら、あなたの存在そのものが呪いの王の対存在足りえるんじゃないかしら？」

確かに、虎杖の人格は根明の陽キヤ、加えてコミュ強と呪術師らしくない根っからの善人だ。そんな彼と両面宿儺は本質的に水と油、どうあつても交わらない不倶戴天と言える。

「まだはつきりとしたことは言えないけれど、指を取り込むほどに宿儺が力を取り戻していくように、あなた自身も「陽の両面宿儺」として力が強まっていく可能性がある。それこそ、真逆の存在であるからこそ宿儺と真逆の術式を発現する可能性もね。」

まあ、最終的にはどちらが主導権を握るかで対峙することになるのは間違いないわ。少なくとも、あなたたちが溶け合うっていう流れはないでしょうし」

「つまり、どうしたらいいの？」

「嫌かもしれないけど、宿讎のことを理解するよう努めなさい。その性格や性質もそうだけど、何より術式を。あなたがその術式を使えるようになるにせよ、対の術式を発現するにせよ、その理解と応用には宿讎への理解が不可欠よ。いずれ対峙する時が来た際、それが運命を左右する。何しろ、相手は経験豊富な上に既に自分の術式を熟知しているんですもの。現状、圧倒的不利な立場にあるんだから、今のうちにできる限りのことはしておきなさいな」

「う、うつつ」

（ま、それとは別に埋葬機関の『弓』みたいなことになる可能性も否定はできないけど……流石にそのパターンはないか）

魂のラベルが虎杖悠仁から両面宿讎になり、両面宿讎が完全に消滅しない限り死なない身体になる、可能性として全くないとは言えない。ただそれも、やはり両面宿讎という二面性を象徴する在り様から、可能性はさほど高くない。

問題なのはむしろ、あまりにも出来過ぎている虎杖悠仁の存在そのものだ。

（正直、作為的なものを感じなくはないのよね。そりゃ、過去にも資質はあつてもそれが

表に出る機会がなかっただけで、「器」自体は他にもいたのかもしれない。でも、宿儺の指のある高校に器の少年が通つて、封印が緩んだタイミングで見つけて、最終的に飲み込んだ……偶然にしては出来過ぎてない？」

件の「弓」のこともあるので、完全な偶然の結果という可能性もある。なんなら、まるでお膳立てされたかのように英霊となるための道筋が用意されていた妹の夫のようなこともある。考え過ぎなのかもしれないが……

（一応あのバカ……はあんまり当てにならないわね。アイツ、なまじ大抵のことは一人で何とかできちゃうから変に危機感薄いし、夏油君あたりに注意するよう言っておきましょ）

そして話はもう一人の照応の生きた実例にして、今回彼女が最も興味をひかれた生徒に移る。

「さて……禪院真希さん」

「は、あたし？」

いきなり水を向けられ、それまでさして興味もなさそうにしていた禪院の身体が跳ねる。

術式を持たない自分には関係ないだろうと思っていたので、なんなら講演会そのものもサボる気満々でいたのだが、五条に「来いよ、絶対来いよ」と念押しされ、夏油にま

で胡散臭い笑顔で「任務は調整しておいたから安心して参加するように」と逃げ道を塞がれたので、仕方なく参加したのだが……まさかここで自分に矛先が向こうとは。

「あなた、性転換に興味はある？」

「……………なに言ってるんだ、あんた」

とりあえず、黒板の脇でゲラゲラと下品に爆笑しているバカ二人を凄く殴りたい。

五条と夏油

「うくん、やつぱり駄目かあ。これが一番手っ取り早い方法だったんだけど……いやまあ、どのみちあれは必要か」

「おい、話が見えねえぞ」

「ああ、ごめんなさい。あなたの天与呪縛が不完全なのは、自覚しているわよね」

「……………まあな」

正直、この話は禪院にとって限りなく地雷に近い。御三家の出身でありながら本来生まれ持つはずの術式を持たず、呪力も一般人並み、引き換えに超人的な身体能力を得た。だが、その完成度は決して高くない。なぜなら彼女には、一般人並みとはいえ幾許かの呪力がある。

呪術的才能と引き換えに高い身体能力を得るというのなら、呪力は少なければ少ないほどに良い。それこそ、完全に呪力がない状態こそが理想形だ。それでこそ、禪院の天与呪縛は完成する。



とはいえ、実際問題として呪力を捨てるということは無理な話だ。過去、どこの家でもより強い呪力を得ることは模索しても、呪力を捨て去ることなど考えもしなかったのだから。

そのため、彼女の天与呪縛が完成することはない。とりわけ、彼女は生まれながらに一人であつて一人ではないが故に……たつた一つの方法を除いて。

特別講師とやらの言いたいことを察して、禪院の表情が歪む。今すぐにも教室を出るか、さもなければ教壇に立つ女を殺してしまふそうだ……そんなことを思っていた彼女にとつて、続く言葉はあまりにも信じがたいものだった。

「あなたの天与呪縛は不完全、確かにその通りだけど、それでいいのよ」

「は？」

「むしろ、あなたたち姉妹を出来損ない扱いしている禪院家が信じられないわ。こんな可能性の塊を放っておくなんて、コレだから呪術師（術師）は。根源への到達……は流石に二人に分かれてるから無理だろうけど、迫るところまではいけそうなのよねえ」

「待て、待てくれ！ あたしにもわかるように説明しろ！」

「あ、ごめんなさい。そうね……まず先に言っておくと、あなたたちの考える『完全な天与呪縛』も別に間違っているわけじゃないわ。一応、それはそれでアリだと思ふ。でもねえ、せつかくの双子としての特性、活かさないと勿体ないと思ふのよ。ましてやそれ

が、フィジカルギフトッドなんていう垂涎物の特性まで来たらなおさらにね」「ししよー、それじゃわかんないってば」

呪術に限らず、魔術においても基本的に双子という特性はあまり歓迎されない。特に一卵性双生児は同一人物として扱われ、「一人にも拘らず二人である」ということは、力を二分しているのと同義だからだ。

しかし、中には双子であることを逆手に取った家系も存在する。不本意ながらそれをよく知るからこそ、双子に加えて天与呪縛持ちという希少性を惜しむのだ。

「まずはそうね…あなた、太陰太極図って知ってる？」

「あれだろ、陰陽五行なんかを使う白黒の」

「そうそう、あなた達ってアレなのよ」

「……どういう意味だ？」

「あなたは太陰太極図の白い方で、妹さんは黒い方ってこと。太陰太極図において白は陽を表し、あなたの特性は言わば陽の極致。ここまでは大丈夫？」

「まあな」

身体能力とは生命力、まさに「陽」そのものとも言える特性だ。加えて、呪術的才能という「陰」の性質と引き換えにして得たということは、その対に位置することを考えてもこれ以上ないほど「陽」の性質と言えるだろう。

「だけど、あなたの中には僅かばかりの呪力がある。これがあなたの天与呪縛を不完全なものにしているわけだけど、思い出して頂戴。太陰太極図における陰と陽って、本当にそれだけ？」

「……いや、それぞれ小さい点、陽の中の陰、陰の中の陽がある」

「そう、それが今のあなたの状態。じゃあ次、あなたが陽だとすると陰は？」

「真依、妹だ」

「その妹さんの状態は？」

「……………」

そこでつい押し黙る。妹の方は多くはないが呪術師として一応やっていけるだけの呪力があり、使い勝手は悪いが術式もある。これは、概ね「陰」の性質で満たされていると言つて良いだろう。

だがそれでは、太陰太極図の「陰」としては不完全だ。禪院が僅かばかりの呪力を宿すように、妹の中に「陽」となるものが必要だ。そう考えて、真つ先に思い付いたのは……

「……まさか、真依に妊娠でもしろつてか？」

「まあ、それも一つの方法ではあるけど、流石に無理があるわよね。期間限定だし」

「なら……………」

「負の感情から生じる呪力は陰、生命力を陽の性質と捉えるなら、魔術師が使う魔力は、さてどっちだと思う？」

「じっくりと華やかに、慈愛に満ちた聖女のような微笑みが向けられる。」

これまでの講義で、大まかに魔力とはどういうものかは教わった。まず魔術回路という先天的な才能が必要であり、それがなければ魔力も魔術も扱えないと知った虎杖が絶望したのは横に置いておくとして……

（そうだ。魔術回路はあくまでも変換機であり魔力を流す道に過ぎない。負の感情から呪力が生まれるように、魔力は……）

「そう、魔力は生命力を変換して生み出される。本来は魔術も陰性のもものだけど、この点だけを抜き出して考えるなら、魔力は十分に「陽」の性質と言えるんじゃないかしら」  
「……真依が魔力を扱えるようになれば、太陰太極図の陰として完成する」

「そう、そしてあなたたち二人が揃うことで太陰太極図を為す。太陰太極図は森羅万象、全てのが陰と陽の要素によって成り立っていることを表す形。それは言わば、*すべて*の可能性をはらんでいる」ということ。これ、本当に出来たらすごいことになると思ふのよねえ」

「ああ、くそ！ だから性転換なんて話になんのか!!」

ようやく先の言葉の意味を理解し、悪態をつく。確かにそれなら、禪院は女性より男

性である方が都合がいいことになる。

「どういうこと、真希さん」

「この手の話じゃ、男は陽で女は陰つてのが基本だ。つまり、あたしの陽としての特性を強調するんなら男になった方がより照応するってことだろうよ」

「ま、二人に分かれてる時点で完全な形にはならないから、出来ればいいくらいだけどね」

「ちなみに、完全な形つてのは？」

「一つの器に二つの人格、しかもそれぞれ男性人格と女性人格……つてところかしら」

「……それこそ虎杖の領分だろ」

「よし、虎杖。今からアンタ女になりなさい、精神的に」

「なんで!？」

とんだとぼつちりである。

「ははっ、まさかこんな結論になるとはねえ。ホント、ししよーも良い感じにイかれてるわ」

「でも、遠坂先生に来てもらえてよかったよ。私たちだと、どうやって呪力を捨てるか、そのために真依をどうこうって話にしかないからね」

「……とりあえず、真依に話を通して必要な白雪に魔術回路の開発をしてもらう、つて

ところかな」

「そうなるだろうね」

そうすることで、二人が太陰太極図に完全に照応した場合、一体何が起こるのか……。

むしろ、変化は真依の方が劇的かもしれない。彼女が有する術式は構築術式、森羅万象を表す太陰太極図としての性質を得た場合、その術式はそれこそ……

（噂に聞く、空想具現化すら可能にする……というのは、考え過ぎかな）

しかし夏油は知らない。無論、五条も気づいていない。

彼女が、意図的に「両儀」という言葉に触れることを避けていたことを。

へカゲジツ×FGOは？ 陰の実力者って、なんのこと

？

それは透き通るような青空の、何の変哲もないとある日のこと。

ミドガル王国に本店を構えるミツゴシ商会の一角に設けられた執務室で、シャドウ  
ガーデン最高幹部「七陰」第一席たるアルファは部下からの報告に目を通していた。

（みんな、よくやってってくれているわ。末端構成員の洗い出しと活動拠点の絞り込み、おかげでディアボロス教団の動きも多少は事前に察知できるようになってきた。でも……）

成果は上がっている、それは紛れもない事実だ。しかし、何もかもが順調かと言えば  
そうではない。

「……はあ。流石に、幹部級の尻尾を掴むのは難しいわね。手詰まり、というわけではな  
いけど、教団中枢に手をかけるのはいつになることか。こんな時シャドウなら……」

そこまで考えたところで、アルファは頭を振ってリセットする。

（確かに、彼なら私たちが辿り着いていない事実を、見通せない闇の先を掴んでしまおう  
でしょうね。でも、そうやって全てにおいて彼を頼ってしまっていては私たちシャドウ  
ガーデンの存在意義が失われる。シャドウには遠く及ばなくても、少しでも彼の力にな

らないと)

まあ、そもそもそのシャドウ本人が彼女たちの仇敵であるディアボロス教団の存在を知らない、というか「陰の実力者ごっここの設定」と思つて信じていないのだが……アルファたちは知る由もない。

双方の間に横たわる絶望的な溝、即ち認識の齟齬あるいはすれ違いが存在することを知らないことは、果たして幸運なのか不運なのか。一つ言えるのは、それを理解する者がいれば、日々頭を抱え慢性的な胃痛に悩まされることになるだろう、ということか。そんな憐れな被害者がいないことだけは、素直に「善いこと」と言えるだろう……たぶん。

とはいえ、そんな事実を知るはずもないアルファは自らの不甲斐なさに自責の念を覚えずにはいられない。

だが、同時に彼女は凡そあらゆる方面に才覚を示す才媛でもある。その中には、自制心や己を客観視する能力なども含まれる。シャドウ関連に関しては、些か不具合を起すようだが。

とりあえず、思考が堂々巡りに入ろうとしていることに気付いたところで、気分を入れ替えるために冷めかけのコーヒーに口をつける。

「ふう……」



そうして一息つけば、周りを見る余裕も戻ってくる。

例えばそう、窓から燦々と降り注ぐ日の光とか。

昨夜の雨で空気中の塵やゴミが洗い流されたのか、今日の王都の空はどこまでも澄み渡った青色をしていた。

それに誘われるように窓辺に足を運んで窓を開く。すると、気持ちのいい風がアルファの頬を擦った。

風によつて舞い上がる長い金紗の髪を抑えながら見上げた空が、遠く置き去りにした寂寥を呼び起こす。

(……………そう言えば、“あの人”は空を見上げるのが好きだったわね。澄み切った青空、燃える様に赤い夕暮れ、瞬く満天の星空。いえ、それだけじゃない。月も、雲も、雨や雪だつて……まるで世界の全てを慈しむように、優しく目を細めていたわけ)

もう、何年も思い出すことのなかった思い出だ。どうして今になって思い出したのか自分でも不思議だったが、存外答えはすぐに出た。

(あの人だつたら、こんな時どうしたかしら……)

昔から、妙に諦めの悪い……いや、基本的にそんなことはなかったか。我儘とか執着が強いということではなく、諦めるべき時、退くべき場面ではちゃんと自分を抑えること

ができていた。

しかし、他人にはいまいち理解できないポイントで頑固さを発揮することが少なからずあった。だからだろう、彼ならどう行動するかつい考えてしまった。

「……………さ……」

（まあ、あまり奇をてらった答えは返って来ないでしょうけど）

諦めが悪いと言つても、だからと言つて起死回生のアイデアが都合よく閃くようなタイプではなかった。彼はいつだって、出来ることをできる範囲で愚直に実行するだけの人だった。幼い頃から多方面に才覚の片鱗を見せていたアルファには、その姿は酷く泥臭く思えたものだ。

そう、だからアルファは幼心に一度聞いてみたことがある。「どうして、そんなにこだわるの」と。

（彼は、何と答えたんだったかしら）

「……る……………ま」

感銘を受けるような答えではなかったように思う。ありきたりで、面白みなんてまるでない、しかし不思議と力強い、その答えは……

「あ……ふあさ……」

（そうだ。確か……「ただ、そうしたいと思つたから」と「まだできることがあるから」

だったわね。あの人はそんな理由で、あの時も、最後まで私を……」

誰が見ても、自分自身ですらもうどうしようもないと理解し、諦めた状況だった。その後シャドウと出会い救われたのは、ある種の奇跡だった。シャドウのような「特別な人間」だったならいざ知らず、どこまでも凡人だった彼にできることなどなかった。そんなこと、彼だつてわかつていたはずなのに。それでも、最後まであきらめようとしなかった。

そこまで思い出して、胸に残った小さな棘の存在を自覚する。同時に悟った、忘れていた……というよりも、思い出さないようにしていたのだらうと。だつて、思い出したところで、できることなど、ないのだから。

「……ル……ア様」

（自己満足ね。せめて、生きてることだけでも伝えたい）なんて）

「……ルフア様……アルファ様」

「っ！ あ、ごめんなさい。どうかしたかしら、ガンマ」

「いえ、コーヒーのおかわりをお持ちしがてら、〃先日の件〃の中間報告をと」

「そう、ありがとう。それじゃ、早速聞かせてくれる？」

「ですが……」

ガンマと呼ばれた濡れ羽色の長い髪のエルフの瞳が心配そうに揺れる。

「どうやら、物思いに耽って少しぼんやりしていたのを『疲労が溜まっている』と誤解させてしまったようだ。」

（……七陰第一席ともあろう者が、失態ね）

「アルファ様、僭越ながら……」

「大丈夫、別に疲れているわけではないわ。ただちよつと、昔を思い出しただけよ」  
「昔、ですか？」

「氣遣わしげに小首をかしげる様子から、あまり信じてはもらえていないことがうかがえる。客観的に見て、アルファの仕事量は膨大だ。普段から、ガンマ以外にも適度な休息を勧められる程度には。」

「なので、信じてもらうためには少しその『昔』の話をする必要があるだろう。」

「ええ」

「それは、その……主様との」

「いえ、残念ながら違いわ。自分でも珍しいと思うのだけど……悪魔憑きになるより前のことをね」

特に禁止しているわけではないが、シャドウガーデンでは悪魔憑きを発症するより以前の話はタブー扱いされる傾向がある。誰も彼もが幸福な人生を過ごしていたとは限らないし、誰だって詮索されたくない過去の一つや二つあってもおかしくない。それで

なくても、悪魔憑きを発症してからの日々は悲惨なものだ。過去を振り返れば、必然的にそこにも目を向けることになる。同じ苦しみを知るからこそ、触れるべきではないと誰もが思っている。

まあ、新規加入するメンバーの身辺調査は基本だし、悪魔憑きとして扱われているところを保護する際にある程度の事情は知ることになるので、本当に「配慮」以上の意味合いはないのだが。

「あ、これは、失礼しました」

「気にしなくていいわ。幸い、私の幼少期はそれなり以上に恵まれていたという自覚もあるしね。特に話す機会もなかったから言わなかっただけで、隠していたわけでもないもの。」

それより、何か用があつてきたのでしよう。もしかして例の、「聖骸」とそこから生まれる「影」のこと？ 何か分かったかしら」

「残念ながら、今のところ目ぼしい情報はありません。一応、回収できた「聖骸」は現在イータが解析中ですが、現状わかったのは「ミイラ化した成人男性の左人差し指」であるということだけで、これといつて目立った結果は出ていないそうです」

「……つまり、とりあえず分かったのは「気持ちのいいものではない」、ということね。魔人ディアボロスとの関係は？」

「そちらも、今のところは何も」

成果が上がっていないことに対しガンマは申し訳なさそうにしているが、アルファに彼女や解析を担当しているイータを責める気は毛頭ない。また、ここにいらないメンバーに対しても最優先で情報を集めるよう指示を出しているが、そちらの結果も芳しくないのは定例報告で上がってきている。

シャドウガーデンのメンバー、特に幹部級である七陰の能力をアルファは信頼している。彼女たちがこれだけ調べても成果が上がらない以上、他の誰か：それこそシャドウでもなければ何もわからないだろう。だからこそ、シャドウを頼る気持ちが湧いてきてしまうのだが。

「ディアボロス教団も、厄介なものを持ち出してきたものね。デルタの様子は？」

「そちらはご安心を。もうすっかり傷も癒えて元気いっぱいです」

「そう、よかった」

とはいえ、あの“デルタが浅からぬ傷を負って帰ってきた時はアルファですらも動揺は隠せなかった。

“暴君”の二つ名を与えられ、シャドウとアルファを除けばこと戦闘能力において彼女と並ぶ者はいない。そんなデルタに傷を負わせられる者など、そういるものではない。

そして、それを為した者こそが聖骸より生じた「影」だった。

「デルタの話はいまいち要領を得ないし、その時に使われた聖骸は回収できなかったのよね」

「はい。あとから調査に向かわせましたが、既にそれらしきものは無く」

「まあ、別件で教団と戦闘になったゼータが回収してくれたのは幸運だったわ。だけど、ゼータの話だと」

「確か、生み出された影の背丈は十歳前後の子どもほどで、戦闘にはならず無抵抗のうちに倒したそうです。聖骸を所持していた教団のメンバーは「ハズレを引いた」と喚んでいたということです」

「デルタが遭遇したのと同じもの、で間違いないのよね」

「回収した聖骸をデルタに見せたところ、*「絶対に同じ匂いなのです」*と断言していましたから。まあ、あそこまで警戒心を顕わにするデルタというのも、初めて見ましたが」

傷が治りきっておらず、やれ「暇だ」やれ「退屈だ」とジタバタしていたデルタだったが、確認のため部屋に聖骸を持ち込んだ瞬間、爆速で窓枠まで移動し最警戒モードに突入。*「それ以上近付いたら同じ群れの仲間でも殺す」*と、言葉ではなく態度と表情が何よりも雄弁に物語っていた。人に慣れていない野良猫みたいになったデルタを何とか宥めすかし、時に噛みつかれたりしながらやっこの思いで確認を取ったのだ。

「とはいえ、デルタの反応を非難する気にはなれない。なにしろ、デルタだけではなくゼータまでもが……」

「そう、デルタが。ゼータはなにか言っていないかった？」

「それが……担当の者に聖骸を押し付けると、仕方なく持ち帰ったけど、持っている間中悪寒と鳥肌が酷かった。二度と触りたくない、というか近付きたくもない」と、心底嫌そうな顔で。あ、いえ、嫌な匂いがするとかそういうわけではないそうですが、なんでも「圧が怖い」「近くにいただけで呪われそうなくらいに不吉な気配がする」んだとか」

「あの二人がそこまで……それだけの危険物ということね。イータには、くれぐれも注意して扱う様に言っておいてちょうだい」

「はい、それはもちろん」

そのまま、今後のシャドウガーデンの活動についていくつかの確認を済ませ、一礼してから退室しようとするガンマ。それを最後まで見送ることはせず、再度窓の外へと視線を移したアルファは思い出したように呟いた。

「そういえば、あの人の魔力の使い方は独特だったわね。私に血を舐めさせたり、私の血を飲んだり。契約とか、魔力パスがどうのとか言っていたけど、どうしてあんなやり方を……いえ、それよりも一体どこで……」



（あの人？　もしか、アルファ様の仰っていた『悪魔憑きになる前』に関わる人でしょうか）

「……それにしても、今頃いつたどこで何をしているのやら。まあ、あの人のことですよ。またぞろ、得にもならない面倒ごととに首を突っ込んでいるんでしょうけど。ねえ、『兄さん』」

聞き耳を立てるのも悪いと思い特に足を止めたりはせずに立ち去ったガンマだったが、扉を閉める直前に零れたその声は不思議とハッキリ耳に届いていた。

（……………むう、いけないとわかっていても、やはり気になりますね。アルファ様のお兄様、ですか。でも、詮索するというのもやはり……わきやつ!!）

つついっつい考え事をしながら歩いていたら、何も無いところで盛大にスツ転ぶガンマ。思いつき顔面を強打し、鼻血が垂れてきている。絨毯を汚すまいと慌てて抑えるものを取り出そうとしたところで、目の前にミツゴシ製のハンカチが差し出された。

「あら？」

「大丈夫、ガンマ」

「ベータ、戻っていたの」

「あなたねえ、ただでさえ何も無いところで転ぶんだから、考えごとしながら歩くのやめ

なさいよ」

「イプシロンまで」

アルファやガンマと同じく、それぞれ七陰の2席と5席に位置する二人の手を借りて立ち上がる。犬猿の仲というわけではないが、なにかとよく対立している二人は、今日も今日とて飽きもせずは何やら問答を繰り返している。

その距離感は近く、豊満な双丘を押し潰し合っつて形を歪めている。

（「」までくると「ケンカするほど仲が良い」という奴かしら）

本当に嫌い合っつていたら、ここまで近づくことはないだろう。

「……ねえ、イプシロン。少し離れてもらえない？ というか、胸を押し付けてくるの止めてもらえないかしら」

「ああら、ごめんなさい。ほら、私ってちよつと、そうちよつとだけ胸が大きいから。すぐ色々なものにぶつかっちゃうの、不便よねえ、ちよつと大きいだけなのに」

（「ピキッ！」）そう思うなら、あと一歩離れてほしいのだけど」

むしろグイグイ胸を押し付けようとするイプシロンに対し、ベータの額に青筋が浮かんでいる気もするが、本人も一歩も引かないあたりたぶん気のせいだろう。本当に近くて迷惑しているのなら、自分から下がればいいだけなのだから。

まさか、「下がった方が負け」みたいな子どもじみたケンカじゃあるまいし。

(……そういえば、ベータはアルファ様とは古くからの知り合いでしたっけ) そのことを思い出し、沈静化しかけていた好奇心が再度湧き上がってくる。

詮索するべきではないとわかっているが、アルファ本人が「隠していたわけではない」と言っていたのだし……。

(少し……そう、少しくらいなら)

自己弁護、自己正当化の末、ガンマは意を決することにした。

「ねえ、ベータ。一つ聞いてもいいかしら」

「はあ、別に構わないけれど」

「では、アルファ様の事なのだけど……」

廊下で話すようなことでもないと思い、近くの部屋に入りかいつまんで先ほどのアルファとのやりとりを説明する。イプシロンも興味があるのか、同席しているが問題はな  
いだらう。

「……ああ、なるほど。『兄さん』のこと」

「アルファ様のお兄様、なのよね?」

「いえ、そういうわけじゃないの。なんというか……少し年の離れた幼馴染、というのが正確ね。血縁というわけじゃなくて、よく色々な子たちの面倒を見てくれる人がいて、自然とみんなその人のことを『兄さん』って呼ぶようになっただけ」

「ああ、そういう」

ベータまで兄と呼ぶことに一瞬疑問符が浮かんだが、そういうことなら得心もいく。本当の兄というわけではなく、「兄のような存在」ということなのだろう。

ベータも久しぶりにその人物のことを思い出したからか、アルファとよく似た眼差しで窓の外を見上げている。

「確かに、今日みたいな空を見てるとあの人を思い出すかもしれないわ。よく、空を見ている人だったから」

「ふうん、でもベータだけじゃなくアルファ様にも慕われてたってなると、どんな人だったのか少し気になるわね」

「そうね」

「どんな人……」

アルファが言った通り、別に隠すようなことではないのだろう。ベータは二人の疑問の答えを得ようと、古い記憶に手を伸ばす。が、返ってきた答えは少し予想とは違うものだった。

「個人的な見解になるけど、そうね……要領は悪くないのに絶望的に世渡りが下手な人」かしら」

「はっ？」

思わず、ガンマとイプシロンの目が点になった。

「大抵のことは何でもできる人だったわ。でも、器用貧乏というか、どれも本職には届かないというか。でも、自分の知っていること、できることを惜しまない人だったわ。私も色々教えてもらったし、まあアルファ様にはすぐに追い越されてたようだけど」

「ゼータの下位互換？」というか、それ大丈夫だったの？　なんというかこう…普通、そういうことされたら嫌な顔されるものじゃない？」

「それがね、むしろ褒めちぎってどんどん新しいことを教えていたわ」

「お人好し過ぎない？」

「そうね。本当に根っからのお人好しだったから、いつも貧乏くじばっかり引く人だったっけ」

「なるほど、だから世渡り下手、と」

「面倒ごとを背負い込んだり、厄介ごとを押し付けられたり…：そんなことばかりしてたから、子ども心にハラハラしてたのをよく覚えてる」

しかし、言うほど心配しているようには見えないというか、むしろ楽しい思い出を振り返るようにベータは穏やかな表情を浮かべている。それが少し不思議に思えて、イプシロンはつい尋ねてしまった。

「心配じゃないの？　そんな調子だといいいように利用されて最後はポイツ、よ」

「大丈夫じゃないかしら」

「何を根拠に……」

「人当たりが善くて、面倒見もよくて、おまけに付き合いも良い人だったから。困ってたり苦勞してたりすると、不思議と周りの人たちが助けてくれる、そんな人だった。〃性懲りもなく〃 〃仕様のない〃、色々言われながらね」

「人を惹きつける魅力があった、ということね」

「人たらしではあったと思う。でも、いつも輪の中心にいたりとか、周りを引つ張っていくとか、そういうタイプではなかったわ。気付くと集団の中に溶け込んでいて、一緒になつて笑つたり泣いたりしている、そんな人だった」

きつとベータは……いや、ベータだけではなくアルファもその人のことが好きだったのだろう。それが初恋だったのかどうかはわからない。もしも悪魔憑きになどならず、そのまま共に過ごしていたら、あるいは……。

(ま、そこをつっこむのは野暮よね)

疑いようもなく、幸せな日々だったはずだ。だが、仮に「あの頃に戻りたいと思うか」あるいは「やり直したいと思うか」と聞けば、ベータもアルファも「否」と答えるだろう。

確かに幸せな時間だったかもしれない、だがあつたかもしれない未来は今ほどに充実

したものでなかったはずだ。悪魔憑きとなってからの日々は確かに辛く苦しいものだった。しかし、その果てに彼女たちはシャドウに出会い、救われ、大いなる主と果たすべき使命を得た。

決して順風満帆とも、満たされただけの日々でもなかったけれども、あのままでは決して得られなかった多くの宝を得た。ならば、どちらが良かったかなど聞くまでもない。

「……もしよければ、会えるように手引きするけれど」

「……いいえ、いいわ。自分の道に悔いも迷いもないけれど、会うべきではないもの。私たちはシャドウウガーデン、シャドウ様と共に陰に潜り、陰を狩る者。でも、兄さんは違う。あの人は、光の当たるところでありきたりで、ありふれた幸せを享受すべき人。陰も、闇も、裏も、とてもじゃないけど似合わない。そんなものを、あの人の人生に一滴でも落とすようなことがあってはいけないから」

大切な人だった。幸せになって欲しい人だった。だからこそ、自分たちと関わるべきではないと確信する。

例えば、悪と罵られようとも為すべきことを為す、それがシャドウウガーデンなのだから。なにより……

(こんな世界に関わったたらあの人、あつという間に死んでしまうだろうし……)

「確かに、悪魔憑きになって死んだと思ってた相手と再会したりすれば」

「聞く限りその人、相当なお人好しのみたいだし尚更ね」

「本当に。何しろ兄さんだったら、悪魔憑きになったアルファ様を教会に引き渡すのに最後まで反対してたのよ。治療方法を探すべきだって」

「え？」

「この世界の常識として、悪魔憑きは治療不可能な致死の病だ。教会に引き渡し処分か、あるいは放逐するか。いずれにせよ、行き着く先は同じ。」

「例外は、ゼータが生まれた金豹族くらいだ。あの一族だけは、悪魔憑きをはじめとした教会によつて塗り替えられた欺瞞ではなく、真実を伝えていた。だからこそ、『治療』という選択肢を模索することができた。」

「しかし、真実を知らないその他の者たちにとつて、『悪魔憑きを助ける』というのはあり得ない発想だろう。」

「それこそ、アルファをはじめとした多くの悪魔憑きを救ってきたシャドウという例外中の例外を除けば。」

「本当に、治療しようとしたの？」

「ええ」

「でも、アルファ様は……」



「残念ながら、結果は伴わなかったわ。顔の広い人だったから、周りも兄さんの意を汲んで少しだけ待ってくれたけど。シャドウ様と違って凡庸な兄さんに、悪魔憑きの治療なんて無理だったの。正直、見ていられなかった。何をしていたのかは詳しく知らないけど、日を追うごとにやつれていくんだもの。きつと、死に物狂いで頑張っていたのは想像に難くないわ」

「……無謀だとは思うけど、*〃無駄な努力〃* って否定する気にはなれないわね」

「ええ。シャドウ様が特別過ぎるだけで、治療しようと考えられるだけでも相当なことよ」

「結果、これ以上は兄さんも危ないと判断してアルファ様は教会に送られたわ。それから間もなく私も悪魔憑きを発症したけど、思えば驚くほど速く移送されたのは……兄さんに無理をさせないためというのもあったと思う」

周囲の者たちの思いも理解できる。アルファを救えず、続いてベータまで。そうなれば、その人物はさらに無茶をしたかもしれない。ならば、無茶をする前に……と考えるのは当然の発想だろう。

「本当に、今頃どうしているのかなあ。あまり、無茶なことをしてないといいんだけど……」

\* \* \* \* \*

某国某所、とある街角を二人組の男女が歩いてた。

片や、それなりに整ってはいるがさほど目立たない顔立ちの黒髪黒目の青年。どこぞの陰の実力者志望に言わせれば「中々のモブっぷり」と評するだろう。そして、もう片方は何とも評しづらい。何しろ、フードを目深にかぶっていて顔立ちどころか体形すらも判然としない。辛うじて、華奢な背格好やフードの下から垣間見える艶のある唇や細いおとがいなどから女性と判別できる程度だ。

そんな目立つような目立たないような二人組だったが、唐突に男の方が背を丸くする。

「ふあつくしよん!？」

「あら、風邪かしら？ 大丈夫、『マスター』」

「う〜……誰か噂でもしてるのかな」

鼻をすすりながら、何とはなしに空を見上げる。気持ちよく晴れた青空は、『世界が違う』ことを忘れさせるほどに美しい。

「へえ、魔術つてそういうこともできるのね。自分の噂をされるとくしやみが出る術式……有用性、あるのかしら?」

「いや、魔術じゃなくて迷信というか」

「そうよね。だってあなた、自力じゃ基礎魔術も使えないわけだし」

「ワカツテテイウノハヒドイトオモイマス」

魔力量は多少増えたはずなのに、やはり才能がないのか相変わらず魔術はさっぱりだ。一応礼装に魔力を通すことで魔術は使えるが、やっていることは家電製品のスイッチを入れるのと大差ない。『魔術を習得した』とは、間違つても口にできない。いや、召喚陣を敷いての召喚術なら使えないこともないのだが、アレもアレで霊脈の上に陣を敷き、必要な魔力を注げば起動するので似た様なものだろう。

まあ、この世界で生を受けた者の純粹な魔力だと起動しないのだが。世界が違うというのもあるだろうが、そちらは彼の身体が元の世界のものとなぜか同一規格なこともあり、あちらとつながらる門の役割を果たすので理論上使えないことはない。

問題なのは、燃料に相当する魔力の質。肉体の規格が違うこともあり、魔力の質も異なるためそのままでは魔術基盤と繋がれないのだ。使っているのは同じ電気でも、周波数（ヘルツ）が違ふと使えなくなったりすると同じようなものだろう。また、こちらの世界の魔力はあちらと比べ身体強化の効率がいい。その分、それ以外の使い道にあまり向いていないようで、そもそもこちらの世界では魔術と呼べるようなものは発展していない。いや、アーティファクトをはじめ近い事象を引き起こせるものは無くもないの

で、絶対に不可能というわけではないのだろうが、「習得可能な技術」というカテゴリーにはない。

そのあたり、はるか昔に何かあったのかもしれないが、彼のあずかり知ることではないし、別に掘り下げたり説明したりしようとも思わない。

そもそも彼らの目的は、もつと別のところにあるのだから。

「それで、次の教団の拠点は、どこだったかしら……」

「また一から探し直しです」

「……やっぱり、個人レベルで探すのは効率が悪いわね。どこかの機関なり組織なりの力を借りられると良いのだけど」

「どこまでディアボロス教団の息がかかっているかわからないから、下手なことはできないって言ったの『アウロラ』じゃないか」

「マスター、どこに教団の耳があるかわからないのだから、私の真名も教団の名称も控えるように言ったでしょう」

ジロリとフードの下から睨みを利かせてくるその迫力は、常人であれば腰を抜かすだろう。されども、今更ちよつとやそつとの威圧や迫力で動じるほど、彼の経験値は浅くない。

「つと、ごめんごめん。気を付けるよ、バーサーカー……じゃなくて、アウラ」

「本当にそうして頂戴。あと、確かに私のクラスはそうだけど、物々し過ぎてかえって怪しいからクラス名も禁止よ」

「はい。あ、でも例の『シャドウガーデン』？　つてのと協力できたらどうか」

「教団と対立しているみたいだから選択肢としてはありだけど、今のところ遭遇したことなし、規模も拠点もわからない以上あてにはできないんじゃない？　そもそも、敵の敵が味方とは限らないでしょ」

「それもそつか。なら、とりあえずアサシンを喚んで探してもらうのが無難かなあ」

「でも、確かいま喚べるのって……」

「はい。ハサンたちはまだだし、みんなあんまりアサシンしてないんだよね。ロビンでもいてくれたらよかつたんだけど」

なにぶん、いま彼に召喚可能なアサシンは『カーマ』や『カーミラ』、あるいは『

サンソン』だったりと、諜報活動には死ぬほど向かないメンツばかりなのである。それ

でもクラススキルとして気配遮断を持っているので、自分たちでやるよりかはまだマシだろう。

「この前破棄された聖骸と繋がっていた……」

「『アンデルセン』も『レオニダス』もそういうタイプじゃないから」

片や戦闘能力も勤労意欲も皆無の厭世家、片や防衛戦の名手だからこそこつそり探る

とか絶望的なスパルタ王。

うん、向いてねえにもほどがある。もう苦笑いしか浮かんでこないくらいには。

「やっぱり、何事も地道に行くしかないってことね。苦勞するわね、お互いに」

「ホントに。まさか、一度死んでから自分の後始末をすることになるとは」

「本当よね。というか、人の死体を勝手に使わないで欲しいわ」

「それな」

「まあ、私の場合まだ完全には死んでないのだけど」

「九分九厘死んでるなら、それはもう死んだってことでいいんじゃない？」

「完全には死んでないからかえって面倒なのよ」

本当に面倒なのか、深々とため息をついている。似た様な立場なので気持ちはわかるのだが、それでも聞くべきことはある。

「この時代のこと、なにか分かったりしない？ これからどうやって死ぬとか、誰がやったとか」

「……………さつきも言ったけど、もうほぼほぼ死んでるのよね。その間のことは夢の中の出来事というか」

「ああ、覚めたら忘れちゃう的な？」

「そんな感じ。誰かに会った覚えはあるのだけど、う〜ん……」

「ま、そんなもんか」

夢には一家言ある身なので、アウロラの言わんとすることがわかるのだろう。

アウロラもそれ以上突っ込むことはせず、とりあえずは目先を変えてみることに。

「ところで、アレ大丈夫なの？」

「アレ？」

「〃ロミオとジュリエッタ〃とか、〃スパイダー・マンイーター〃とか」

「ああ、一通り読んでみたんだけど」

「読んだの？」

「結構面白いアレンジ入ってるから、ギリセーフじゃない？ こっちの著作権の対象外だろうし、そもそも期限切れだろうし。それにキャスターの中には盗作騒動が起こった時に〃本物よりも俺のほうが面白えだろ？〃なんて言っちゃうのもいるんだから」

「……マジ？」

「マジマジ」

「……スゴイのね、異世界」

ちよいちよい異世界の話を聞かせてもらうことがあるのだが、魔人ディアボロスやディアボロス教団がかわいく思えるようなトンデモ話が次々に飛び出してくるので、もう驚くにも疲れてしまったアウロラであった。

とりあえず、自分一人が疲れるのはなんだか釈然としないので、もう一人くらい巻き込まれてもらうことにする。

「はあ、ベアトリクス、早く合流できないかしら」

「あれ、二人つて仲よかつたっけ？」

「是非とも仲良くなりたいわ。ほら、お友達つて色々分かち合うものなのでしよう、苦労とか苦労とか苦労とか、やっぱり苦労とか。良く知らないけど」

（苦労しか分かち合つてない……）

でも、基本苦労を掛ける側にいることは自覚しているので、それは否定できないのであつた。

「ごめん、ベアトリクスさん。大丈夫、一人じゃなければ割と何とかなる、人間は慣れる生き物だから」

「武神」とも称されるこの世界随一の女剣士相手に言うことではないのだろうが、どちらかというとき昔よく遊んでいた女の子のおばさんという認識が強いので、あんまりそんな気はしないのであつた。

まあ、それでなくてもとんでもなく凶太い性質なので、そんなこと関係なくこんなものなのだろうが。

（……今のところ、二人の手がかりになるようなものは見つかつていない。生きている



可能性は低いけど、死んだという証拠もない。どこかで、生きていてくれたなら……）  
一縷の可能性でしかないことはわかかっていても、願わずにいられない。

魔力を制御する心得があつたからか、悪魔憑きの症状の本質を察することは難しくなかつた。だから何かでできることはないかと、最低限の魔術知識を引っ張り出して模索した。

問題だったのは、彼の技量ではそれを解決できなかつたこと。

自身の血を飲ませることで魔力のパスを作り、暴走する安定化させようとした。

あまりの魔力量の差から到底手に負えず、弾かれてしまった。

逆に相手の血を取り込むことで作ったパスを利用し、魔力を吸い上げることで症状の緩和を図った。

荒ぶる魔力が体内を蹂躪し、血反吐を吐いて倒れたのは一度や二度ではない。

最終手段として、唯一行使可能な召喚術を試みたりもした。

後輩と離れ離れになった時や古巣との連絡が取れない時でも召喚できるよう叩き込まれた召喚陣を敷き、自身の魔力だけでなくあの子の魔力すら使つて術を起こした。

だが、召喚を成功させるどころか、碌に陣に光を灯すことすらできなかつた。

そうして血塗れになつて倒れる彼を見かねた周囲の人々は、意識を失っている間にあの子を教会に送つた。同じことが起こらないよう、次に悪魔憑きになつた少女は彼が動

く前に早々に移送された。

彼らの行動を責める気も、恨む気もない。彼らはただ、無謀な挑戦を続ける仲間を案じただけなのだ。立場が違えば、自分も同じことをしたと思うから。

それでも、彼は諦めることができなかつた。助けられる手段に心当たりはあつた、実現するために何か足りないものがあつただけで。

ただそうしたいと思つた / ただ助けたかつた

できることがあるのなら、すべきだと思つた / 立ち止まることなど、できなかつた

結局のところ、人の性根は死んでも変わらないということだろう。

彼は必要なものをかき集めると旅に出た。自分の知る術を実現できる場所を、あるいは彼女たちを救える手段を求めて。もし万が一にも生きていたなら、その手を取れるように。そしてその旅先で、聖地の話を耳にした。

英雄オリヴィエが魔人ディアボロスの左腕を切り落し封印したときれている場所。ディアボロス戦争の際、大勢の魔剣士たちが倒され、その記憶と残存魔力が滞留する地。そして年に一回行われる「女神の試練」において、闘士の実力が一定以上の場合にそれに見合つた戦士の霊が現れ、その戦士の霊と戦えるこの世界に存在する数少ない現存する神秘。

そこで彼は、年に一回の「女神の試練」とタイミングを合わせて、再度召喚を試みた。そう簡単な試みではなかったが……結果だけを言えば成功だった。ただ一つ予想外だったのは、召喚されたのは彼が未だ出会ったことのない、この世界由来の存在だったことだろう。

とはいえ、これを機になにかの歯車が噛み合った。

召喚に応じた彼女の目的は、魔人ディアボロスの完全消滅。聞けば悪魔憑きも彼女と無関係ではなく、教会の裏にはディアボロス教団なる存在がいるという。

世界の暗部と戦うなどと、またしても身の丈に合わないことだという自覚はあった。それでも、悪魔憑きの少女たちを見捨てることはできなかつたし、伸ばした手を取ってくれた彼女の願いをかなえたかつた。

そうして一人で始めた旅は二人になり、再会したベアトリクスと情報を共有し、協力関係を築くことになった。

その末に、どうやら自身もまた無関係ではなかつたと知った。

それは同行者と彼の運命が、完全に重なった瞬間でもあった。

死んだ後の事など知ったことではないと言いたいのが二人の共通見解だが、「魔人ディアボロス」と「聖骸」……個人的には大仰過ぎる名称だと思うが、アレらを放置するのは色々な意味で危険だし、何より悪用されている以上は無責任過ぎるだろう。

彼女は魔人ディアボロスを完全に消滅させるために。

彼は教団が所有する聖骸を消し去るために。

それらは同時に、悪魔憑きの少女たちを救うための道でもあった。

「さて、とりあえず次の動きが決まるまでは……観光でも楽しみましょ、マイ・ロード」  
「えっと、確かこの街の名物は……」

彼らとシャドウガーデン、ディアボロス教団と対する両者の運命が交わるまであと少し。



386 〈カゲジツ×FGO〉は？ 陰の実力者って、なんのこと？



先日、晴れてミドガル王国魔剣士学園に入学を果たしたシド・カゲノーには秘密がある。

彼こそは、魔人ディアボロスの復活とそのディアボロスの力の私物化を目的とする“ディアボロス教団”と日夜暗闘を繰り広げる陰の組織“シャドウガーデン”を率いる“シャドウ”その人なのである！！

というとなんだかカッコよく聞こえるが、その実“陰の実力者ムーブ”を楽しみたいだけの趣味人。適当に言ってみただけの設定が尽くの中するというわけのわからん星の下に生まれながら、自分ででつち上げたこと故に“設定”と考えまったく信じていないというとても面倒な男だ。その上、やることなすことすべて変な方に転がって周囲の誤解に拍車をかけ、自己認識とのズレが悪化していく歩く傍迷惑。

せめてもの救いは、俯瞰的に見れば一応事態が好転して言っていることだろう。彼と周囲の認識の齟齬は、それはもう酷いことになっているが。

しかし、彼には他にも秘密がある。例えば、異世界からの転生者であるということだ。転生前、彼は“陰の実力者”というものに憧れた。物語の主人公でもなければラスボスでもなく、陰ながら事件に介入し圧倒的实力を見せつける存在。そんなものに、彼はなりたかった。普通なら憧れは時の流れに押し流されていくものだが、彼はそうではな



かった。成長してからもその憧れを持ち続け、影の実力者になるべく研鑽に励んだ。

表向きは平凡で目立たない所謂モブを演じ（ちなみに、演じることにも妥協することなく研鑽を積んだ）、裏では狂的とも言える努力を重ねる。全ては「いかなる力でも打倒できず、総合的な戦闘力はもちろん戦闘技術でも誰にも負けない存在になる」という本人の理想を叶えるため。

だが、現実とは無情なモノ。どれほど鍛えたところで個人が近代兵器に勝ることはない。それを悟った彼は、それでも妥協しなかった。肉体の性能に限界があるのなら、未知なる力にその可能性を求める。「魔力」「気」「チャクラ」「オーラ」呼び方は何でもいいが、そういったものを彼は探し求めた。

結局、生前はそれらを手にすることはなかったが、転生したこの世界には魔力が存在した。

それを知った彼は歓喜し、同時に生前と同じくちよつと：いや、本気で正気とは思えない修煉と実戦を密かに積み重ねた。時に「スタイリッシュ盗賊スレイヤー」とかいふ明らかに頭のオカシイ名乗りを上げながら「命が惜しくば金目のものを出せヒヤッハー！」と世紀末もビツクリなテンションで盗賊を蹂躪したり、悪魔憑きの少女を見つけた際には「自分の身体ではできない実験ができるぞヤッターネ！」とか倫理観をどこかに置いてきた所業に走ったりもした。

その結果、武術と魔力の技術を極め、世界的に見ても最強クラスの實力を身に着けるに至る……こんな狂人をなんて危ない境地に到達させているんだ、世界。

だが、そんなアブナイ男にだって、本心から敬う人間の一人くらいはいるものだ。

(まさか、こんな間近でシャドウ様の剣を見る機会に恵まれるなんて！)

自分の仕事で動けない七陰に代わってシャドウ直属の隠密及び雑用係という役割を与えられたシャドウガーデン「ナンバーズ」、ニユーは自らの幸運に感謝した。

元は「聖骸」と「影」の報告のためにシャドウの下を訪れたのだが、そこには月光を浴びながら剣を振るうシャドウの姿。剣捌きには一切の無駄がなく、脚運びはまるで流れる水のように流麗。あまりに神々しいその光景に自然と膝を折り、首を垂れる自分に気付くがそれを当然のものだと思う。

(今私がすべきことはただ一つ、この神聖な一時を決して邪魔してはいけない)

そう自らを戒め、そつと息を殺す。

まあ、当の本人は「人気のない場所で月明りを浴びながら舞うように剣を振るのってカッコよくない？」と思っただけなのだが。

やがて剣舞が終わりを迎えると共に、それまで一言も発さなかったシャドウが口を開く。

「ニユーか」

「はっ、こちらに！ 流石はシャドウ様、素晴らしい剣捌きでございました」  
「ふっ、この程度手遊びてすきに過ぎん」

（これほどの剣技を持ちながら、まだ満足していないのですね。この方の目指す境地は、我々には計り知れない高みにあるのでしよう）

もちろん、なんとなくフィーリングでかつこよさげなことを言っているだけなこと  
に、ニユーが気付くことはない。

「我が師がここにいたならば、果たしてなんと言ったかな」

（師？ まさか、シャドウ様に師がいたというの!? いえ、でもおかしな話ではない。本来、我流ではどうしても限界がある。若くしてこれほどの境地に至るには、当然優れた指導者の導きが必要。そう、シャドウ様より直々に教えを賜った七陰の方々がそうであるように。いくらシャドウ様の才が隔絶したものだとしても、御一人でたどり着けるものではない。……いえ、それこそ、ディアボロス教団と対するため、長年に渡って積み重ねられてきた研鑽の結晶こそがシャドウ様なのでは）

（二人で高みに至ったつていう設定も孤高の存在っぽさがあっていいけど、やっぱり師匠キャラの存在は大事だよなあ。なんとというかこう、強さとかバックボーンに深みが出る）

一応ねらい通りの印象を与えることには成功しているようだが、当の本人に自覚がな

いのがなんとも。

きつと、全てを知る第三者がいたのなら頭と胃を抑えて蹲るか、シャドウの頭を思いつきり殴っていることだろう。

「シャドウ様！ シャドウ様の師とは、いったい……」

「最早、二度と相見えることはない。遠い、はるか遠い場所に旅立ってしまったからな（僕が）」

（そうか、シャドウ様の師は彼にすべてを託して……）

「だが、我が師の教えは今もこの胸に」

「……はい。例え亡くなられていようとも、彼の御方の志はシャドウ様と共に生きておられます。今までも、これから……シャドウ様の一部として戦って、おられるのですね」

（おおつ、ニュー迫真の演技。嗚咽も涙の流し方もすべて自然だ、アカデミー賞ものじゃないかな？）

演技ではなくガチで泣いていることに気付いていないこのバカ者を、一体どうしてくれようか。

（まあ実際、師匠のおかげで今の僕があるんだけどね。あの人が教えてくれたことがあったから、魔力があるってわかってすぐに魔力制御の訓練を進められたわけだし）

思い出すのは転生前、最初の死（おそらく）より数ヶ月前のこと。

シド・カゲノーは……いや、ここではあえて影野ミノルと呼ぼう。ミノルはあの時も未知なる力、魔力を求めて山に籠っていた。

（たしかあの時は……そう、魔力を感じ取ろうと全裸で断崖絶壁から飛び降りようとしていたんだっけ）

そうして “いざ I can fly!!” しようとしたところで、待ったがかかった。何者かが、突然ミノルの腰に抱き着いてきたのだ。

「何があつたのか知らないけど、自殺なんてやめなさい！ 生きていれば、きつといいことがある！ 死んだらそのいいことと巡り合うこともできなくなるんだよ！」

どうやら、自殺志願者と思われたらしい。まあ、格好が極めて不審過ぎるとはいえ、やろうとしていることを見ればそう間違つた判断ではないだろう。しかし、この時のミノルは魔力を追い求めるあまり割と本気で迷走していたため、“自殺を思いとどまらせようとした” のではなく、“自分の邪魔をされた” と思つてしまった。

「離せ！ 離せえ！ 僕は、僕は魔力を感じ取らなければならぬんだあ！ ジャマヲスルナア!!」

「は、魔力……ぶげらっつ!!」

腰に抱き着いた相手に思いつきり膝蹴りをかまし、拘束が緩むと同時に腕を掴んで投

げ飛ばした……のだが、彼は妙に打たれ強く、地面に叩きつけられるや否やガバツと起き上がるとひどく冷静な声でこう言った。

「いやいや、そんなことしても別に魔力は感じないよ」

「は？」

「やるならこう、集中できる姿勢で自分の内側をね」

「瞑想なら何度もしてきたけど、何も感じなかった」

「漫然とやってもね。いいかい、具体的には……」

本来こんなこと教えるべきではなかったのだが、思い切り地面に叩き付けられたことで若干意識が朦朧としていたと言わせて欲しい。仕方なかったとは言わないが、軽い脳震盪を起こしていたのでちよつとだけ大目に見てもらえないだろうか。

ちなみに、意識がハッキリとしてきたところで「ヤツベ!」と本気で焦ることになるのだが、時既に遅し。持ち前の人たらしつぷりですつかり心を開いていたミノルは自身の夢である「陰の実力者になりたい」ということを熱弁。正直、その夢そのものに対しては全く理解が及ばず宇宙を背負うことになるのだが……

(とりあえず、他人様に迷惑をかける類のものじゃなさそうだし)

ということと否定はもちろん軌道修正をかけるようなこともせず、その熱意と努力、真剣さは紛れもない本物だったことから「一人間性についてはちよつとどこころではな

いくらいに難があるが《クリストファー》、決して諦めない不屈の精神力の持ち主”の言葉を贈ることに。

なにしろ、少なくともアレみたいに関自分以外の全てを願いを叶えるための道具とみなす…というわけではなさそうだったし。

「いいかい。ささやかでも、一歩ずつでもいい。諦めずに前に進んでる、つてことが大事なんだ。そうすれば、必ず目的地に辿り着ける…：そういうものなんだよ」

これは、同時に彼自身の旅路を表した言葉でもあった。

だからこそ、見果てぬ夢を追いかけるミノルにこの言葉を贈ったのだろう。

…：もちろん彼はミノルが夜な夜な「スタイリッシュユ暴漢スレイヤー」と名乗ってアレな所業を繰り返していたことは知らないのだが。

まあ、それはともかくとして…：

「それはそうと魔力の使い方を教えてください、師匠！」

「なんで師匠？」

自分の夢を笑わず、呆れず、真剣に聞いて応援してくれたこと、さらに魔力の存在と制御法を知るが故だった。

「いや、それは一旦置いておくとして…：ごめん、無理」

「なんでですか!？」 師匠、魔力を使えるんですよね!」

「確かに俺は魔力を使う方法を知ってるけど……なんというか、自転車に乗れるからって自転車を一から組み立てられるわけじゃないっていうか。いや、ざっくりとした構造はわかるからやればできるかもしれないけど、失敗したら命が危ないし、そんな無責任なことはできない」

実際、彼の魔術師としての力量はド底辺、それどころか素人に毛が生えたレベル。とてもではないが、魔術回路の開発なんてできるはずもない。

だが、一つ懸念もあつた。それは、ミノルの執念ならいつか自力で魔術回路を開きかねない、ということだ。あり得ないと否定するには、彼の瞳の輝きはあまりにも強すぎた。人類史にその名を刻んだ個性を目の当たりにし、世界を動かしてきた彼らとともにあつてからこそ、彼にはその懸念を考え過ぎと切つて捨てることができなかつた。

故に、魔導と関わる上での最低限の知識は与えることにした。

それは魔力の制御法であり、声高に魔力について触れないことであり、そして……「いいかい。もしも本当に魔力を扱えるようになったら、この人に連絡を取りなさい。俺が昔お世話になった人なんだけどね。変に偉ぶるといふか一見すると尊大っぽいんだけど、根が善人とかどうやって外道にはなれない人だから、きつと君のことも悪いようにはしないはずだよ」

とある連絡先を残して、二人は別れた。その後彼がどこに行き、何をしていたかはわ



からない。そもそも、なぜあんな山の中にいたのかさえ。

確かなことは、ミノルにとって彼はただ一人自分の夢に寄り添ってくれた友人であり、進むべき道とそのための手段を示してくれた恩人だったということだ。故に、ミノルは彼を「人生の師」として敬意を払う。転生する前も、した後も。

（でも、魔力を扱うのは命懸けと聞いたけど、言っていたほどのリスクがあるようには思えないんだよなあ）

その点だけは常々不思議なのだが……まあ、異世界だしそう言うこともあるのだろう。

とまあ、昔のことを思い出しつつニューの報告を適当に聞いていたシャドウだったが、中々に心躍るワードが飛び出してくるではないか。

（「聖骸」と呼ばれるミイラに、そこから呼び出される「影」か……みんな設定を深めようと頑張ってくれてるんだなあ。新しい敵、未知の脅威はテコ入れの定番。分かっているじゃないか！）

テンション上がって来たので、早速この設定に乗ってみることにする。設定ではなく現実だとは、全く微塵も思わない。

「……………」

「シャドウ様?」

「決壊の時は近い。聖骸は鍵だ、奴らはやがて門を開き、一騎当千の兵どもが世界を蹂躪するだろう」

(まさか、この方は既にそこまで予期して!?)

適当に言っただけなのだが、割と的中しているから恐ろしい。抑止力の後押しでも受けているのだろうか。

「……ならば、聖骸の回収と並行して我々も早急に戦力増強を」

「いや、それだけでは足りない」

「え……」

「ただ強いだけの敵と侮るな。奴らは理不尽と埒外が跋扈する地獄を生き抜いてきた猛者たち、あらゆる手練手管を用いてくるぞ。それこそ、私の予想をも超える超常の一手がないとも限るまい」

(そんな……シヤドウ様の想像を超えるような事態だなんて、そんなことが、本当に?)  
いや本当に、どうしてこの男はこうもポンポン的を射てくるのか。碌に情報もなく、全然何も考えていないのに名探偵も真つ青な勘の冴え。これを意識的にやっているのだとしたら恐ろしくも素晴らしい……が、残念なことに、そういう設定だと面白いよなあ」というただのノリと勢いである。おお、テリブル。

「では！ では我々はいったいどうすれば……!」

「鍵を探せ」

「鍵、それは聖骸ということでしょうか」

「ディアボロス教団のねらいが門を開くことであるのなら、こちらの勝利条件は門を閉ざすこと。即ち、門を閉じるための鍵を見つけ出せばいい」

「なるほど！　まだ奴らが見つけていない、存在すら把握していない鍵があるということですね。確かに、それがあればまだ状況はひっくり返せます。流石はシャドウ様、既にそこまで把握しておられたとは。急ぎアルファ様に報告し、シャドウガーデンの全力を以て鍵の搜索に当たります!!」

「我は独自に動く。少々、鍵の行方に心当たりがあるのでな」

「つ!!　承知いたしました!!」

ニューは感動しているが、もちろん心当たりなんぞない。単に言ってみただけである。

こうして今日も勘違いとすれ違いは加速するのであった。

\* \* \* \* \*

某国某所のとある宿屋の二階にて。

「ヘツツツクション！ ぶえつくしよん!？」

「ん〜…なあにマスター、まったくしゃみして。やっぱり風邪なんじゃない？」

「そうかなあ……」

ちなみに、同時に彼にまつわる噂が二度交わされたことがくしゃみを二回したことと関係があるかは、誰にもわからない。

は？ 陰の実力者つて、なんのこと？（リンドブルム編  
他）

○聖地リンドブルム編

影に潜み、影を狩る者たち：その名は「シャドウガーデン」。

世界の裏側で日夜ディアボロス教団と戦い続ける彼女たちだが、ここ最近はいつにも増して緊張感が高まっている。なにしろ、「計画」の決行はもう間近。この計画は、ディアボロス教団と魔人ディアボロスの秘密に迫るために極めて重要なモノ。不測の事態に備え、複数のプランを用意しているとはいえ、容易くはいかないであろうことは誰もが予感している。

それを裏付けるかのように、敬愛するリーダー「シャドウ」もまた聖地に入ったとの報せがあつた。計画のことは伝えていなかったはずだが、神の如き叡智を誇る彼はすべてを見通しているのだろう。故に、彼が現れたのはこの計画になんらかのイレギュラーが発生することを予期してのものに違いない。

それを示すように、七陰第一席たるアルファが大聖堂へと潜入すると、大司教ドレイクの遺体を発見した。

王都にまで黒い噂が広がり、近々調査の手が入るはずだった彼は……消されたのだ。恐らくは、ディアボロス教団の手によって。

計画決行前に聞きたいことがあったのだが、空振りに終わった。これで当初のプランは破棄せざるを得ず、計画は第二に移行することになる。

念には念を入れて複数の計画を用意していたのが幸いしたが、決行前からこれでは先が思いやられるというものだ。

（……だからこそ、シャドウは聖地に来たのでしようけど。私たちの尻拭いに彼の手を煩わせるなんて……まだまだ足りないものばかりね、私たちは）

本来ならシャドウをフォローし、彼の手の届かないところ、目の届かないところを補うためにシャドウガーデンはあるはずだというのに。役目を果たせないどころか、逆に手をかけさせてしまっている現実には、愧れたる思いが湧きあがる。

とはいえ、こんな内心をメンバーたちに知られるわけにはいかない。

平静を装いながら仮初の拠点に戻ると、そこには……

「う〜！ う〜！！ う〜！！！！」

机に突っ伏して唸る古馴染ベイタがいた。

（？ 何をやっているのかしら……確か今日も、表作の顔家としてサイン会だったはずだけ  
ど）

シャドウガーデンは陰の組織だが、そのメンバーの多くは表向きの顔を持っている。ガンマであればミツゴシ商会の会長「ルーナ」、イプシロンなら作曲家兼ピアニスト「シロン」といった具合だ。

そして、ベータの面の顔は新進気鋭の小説家「ナツメ・カフカ」。ジャンルを問わず多彩な作品を世に送り出す売れっ子作家である。その表の顔の活動として、ここ数日はサイン会に参加していたはず。そんな彼女の人気を証明するように、ベータの周りには大量のプレゼントの山、山、山。

(大したものね)

その人気っぷりにはアルファも素直に感心するが、それと今のベータの有様が結びつかない。仮に、ファンレターを装ったラブレターやファンからの贈り物の度を越したプレゼントが紛れていたとしても、シャドウ以外眼中にないベータはすべて華麗にスルーするだろう。それこそ、サイン会中に愛の告白をされたとしてもにこやかに流すだけだ。

そんなベータがあればほど唸る事態とは、いったい何事なのか……。

これから重要な計画が控えていることを考えると、ベータには急ぎ復調してもらわなければならない。

それでなくても、最も付き合いの古い仲間だ。心配9割と一抹の好奇心から声をかけ

るべきかと思つたところで、横合いから呼び止められた。

「アルファ様、お戻りになったのですね」

「イプシロン………ねえ、アレはどういうことなのか、あなた知ってる？」

イプシロンがやたらとベータに対抗意識を持つていることは知っているので聞くべきか悩んだが、前情報がないまま本人から話を聞くよりはと思うことにした。

「それが……」

「？」

「その……どうやら、サイン会中にお兄さまに会つたようで」

「っ！ そう、兄さんに……」

イプシロンがやや返事をためらつた理由がわかつた。まっとうな神経をしていれば、確かに触れづらい話題だと思つたろう。

とはいえ、だからと言つて何故ベータがああして唸つているかは未だ不明なまま。懐かしさや連絡を取ろうとしなかつた申し訳なきから平常心ではいられないだろうが、だからと言つて「ああ」なる理由がわからない。

そして、それはイプシロンもまた同じらしい。彼女が知っているのは、「ベータがサイン会中に昔兄と慕つた人と再会したらしい」ということまで。それにしたところで、マネージャー役のシャドウガーデンのメンバーから聞いた話だ。



一応、その時点では今ほどではなかったらしく、唸るようになったのは拠点に戻ってからのようだが。

「……いずれにしろ、話を聞いてみるしかないわね」

そう思い、意を決してペータに声をかけると……

「次の方、どうぞ」

サイン会は順調だった。ペータの著作を手に人々は長蛇の列を作り、中にはファンレターやプレゼントを持参する熱心なファンの姿もあった。彼ら彼女らと二三言葉を交わし、持参した本にサインを入れ、「これからも応援してくださいね♪」と相手によっては大きく開いた胸元を強調しながらにこやかに見送る。

それをちよつと数え切れなくらいには繰り返した末、*“彼”*が現れた。

「っー」

「あ、サインお願いします」

「は、はい（兄、さん？ どうしてここに……いえ、それよりも私と気付いて……）」

「応援してます、これからもほどほどに頑張ってください」

「ど、どうも……」

全力で表情筋を制御し、何とか不自然にならないよう努めたつもりだが……正直、ペー

タとしてはあまり自信がなかった。表情は引き攣っていなかっただろうか、声が上擦っ  
ていなかっただろうか……目尻に、涙が滲んでいたのではないか。

だが、記憶より少しばかり大人びた彼がそれに気づいた様子はなく、終始穏やかな声  
と表情で一ファンと何も変わらないやり取りの末、差し入れとして布のかけられた籠を  
渡されて終わり。

彼は店の外にいたフードを被った人物と連れ立って去っていった。

（やり過ぎ）せた、のかな）

それに安堵すると共に、少しだけ寂しく感じたのは事実だ。

気付かれなかった / 気付いてもらえなかった

無事に誤魔化せた / 分かってくれなかった

思い出されなかった / 忘れられた

これでよかったはずなのに……それが、酷く悲しかった。

（そう、でしょうね。あの人を巻き込んではいけない、彼に気付かれてはいけない、兄さ  
んは平穏の中で生きるべき人だから……そうとわかっていても、目の前にいながら、気  
付いてもらえないのは……哀しいわよね）

話を聞いて、アルファにはベータの気持ちが届くほどによくわかった。もし、自分

だったらと思うと……きつと、泣きそうになっただろう。これでいいと頭でわかるのと、心は別の問題だから。

しかし、本題はむしろこの後だった。

「それで、兄さんがくれた差し入れがそれです」

「……………これは」

籠にかけられた布をめくれば、そこには……

「どれも、あなたの好物ね」

そう、籠入っていたのはどれもこれもベータタの好きだった果物や菓子ばかり。中には、このあたりではなかなか手に入らなかつたり認知度が低くかつたりするモノまで。

それらの意味するところは、つまり……

「気付いてた！ 兄さん絶対気付いてましたよね!?!」

「そ、そうね……そう、かもしれないわね」

「気付いてて知らないフリとか…滅茶苦茶気い使われてるじゃないですか!?! その挙句にコレですよ、コレ!!」

言つてベータタが差し出したのは一枚のメツセージカード。

“充実しているようでよかった。でも、根を詰め過ぎないように”

「ハ、ハこれは……」

言いたいことも聞きたいことも山のようにあるはずなのに、それらには一切触れずベータへの心配りだけが記されたカード。

もう誤魔化しようがない、彼はナツメ・カフカの正体に完全に気付いている。その上、急遽書き足したのか、こんな文言まで。

“P・S 色々気を張らなきゃいけないのかもしれないけど、偶には息抜きも必要だよ”

対外的には本音を隠していることを見破ったとわかるコメントまで。いつそ不平不満でも書いていてくれればまだ気が楽だったのだが、そんなもの一切ないのがかえってベータの精神的ダメージを大きくしていた。

これにはアルファも、平静を装いつつ内心では……  
（良かった、会わなくて）

と安堵していた。会いたい気持ちがないわけではない。だが、会えばきつと自分も同じようなことになる、その確信があった。こういう気づかいをさりげなくする人なのだ、それが余計に精神的ダメージを増かさせるのだが。

とはいえ、ベータと違いアルファは表の顔を持っていない。ならば、会おうとしなければ早々顔を合わすことはない……そう思っていた時が、アルファにもありました。

\* \* \* \* \*

「今年こそその、聖域？ だっけ。その扉が出るといいね」

「そうね。でも、こればかりは運次第といふかなんというか……」

一般席から「女神の試練」が行われる闘技場を見下ろしながら言葉を交わす一組の男女。

二人の目当ては女神の試練そのものではなく、その結果として開かれるかもしれない扉だ。とはいえこの扉、そう簡単には表れない。

「アウラが出ちやうのが一番手っ取り早い気がするんだけど……」

「そりゃ私が出れば確実でしょうけど、教団に『災厄の魔女が復活してますよ』って宣伝するようなものじゃない。今はよくても後々必ず厄介なことになるから却下よ、却下」

「だよねえ」

「というか、そもそもサーヴァントは女神の試練の判定対象に入るのかって問題があるし。反応して『私』が出てくるなら大成功、反応しなくてもまあオツケー……でも、妙な誤作動とか起きたら」

「うん、それはそれで面倒臭い」

なので、召喚したサーヴァントに参加してもらおうわけにもいかないという次第。

聖域の奥に用はあるが、幸い緊急性は高くない。なので、運良く誰かが扉を開いてくれたらラッキー。くらいの期待値で毎回一応足を運んでいるのだ。最悪、全てのゴタゴタを片付けて後顧の憂いを断つてから、アウロラ自身が乗り込むという手もなくはない。

「ベアトリクスもつれないわよね。前々から相談してるのに、やっぱり今年も来てくれないんですもの」

「まあまあ……」

生者で、実力的にも申し分ないベアトリクスならば何も問題なく聖域への扉を引つ張り出してくれるはずだ。

そう思って以前から打診はしているのだが、そもその緊急性の低さから「出来れば来てほしい」としか言っていない以上、そういうこともあるだろう。

（アウロラが、俺関係の面倒ごとに巻き込む気満々なのもあるんだろうけど）

なにしろ、顔を合わす度に凄く嫌ウゲエそういな顔でアウロラを見ているのだ。

きつと、本当に必要な時以外は極力関わりたくないというのが彼女の本音なのだろう。

まあ、その気持ちはわからないでもない……彼自身は身内サーヴァントの色々なやらかしにすつ

かり慣れてしまっているが、昔の同僚や上司の反応を思い返せば理解はできる。

「ま、あまり期待せずには今はこのイベントを楽しみましょう」

やるべきことがあるとはいえ、それはそれとしてふって湧いた第二の生をアウロラは全力で楽しむ気である。

生前は色々と不遇だったようだし、それについては彼も応援したいと思っている。いるのだが……

(……………飲み物と食べ物滅茶苦茶買い込んで観戦する気満々じゃん。財布、大丈夫かなあ…………)

行く先々で財布を空にする勢いで色々買い込むので、今日も今日とてマスターの財布は寒々しい。

「あら、このウインナーちよつと癖があるけど美味しい！ エールに合うわあ！

…………箱と樽で買おうかしら」

「やめてください、(財布が) 死んでしまいます」

「え〜！ 女に貢ぐのは男の甲斐性よ、マスター」

(そろそろ次の金策考えなきゃかなあ…………)

昔の経験で、ぶつちやけ金銭なんて使える当てがないと単なる紙切れと鉄くず……くらいにしか思っていない。サブ<sup>野</sup>イ<sup>宮</sup>バル経験も豊富なので、使えるなら便利だが無くても何

とでもなるといふ意識が強いのだ。

加えて……

（とりあえず……どこかに賭場でもないかな。手っ取り早く増やすならやつぱりギャンブルでしょ）

これだ。昔、それこそ一生分……いや、人生数回分はカジノで賭けまくったのだ。アホみたいな額の借金も背負ったし、それを全額返済したりもした。正味な話、ロイヤルストレートフラッシュしか出さないディーラーとか、その身を溶かしつくすまで止まらない悪夢のスロットとかが相手でもない限り、ほどほどに勝って軍資金を得る程度なら造作もない。

実際、今の彼の旅の資金は日雇いのバイト1割、教団施設からの収奪物4割、残りの半分は博打で賄っている。アウロラの散財さえなければ、出費は半分以下に抑えられるのだが……これは言わぬが花という奴だろう。

これを知ったベアトリクスは「こいつ正気か？」とでも言いたげな目をしていたが。

ついでに、散財しまくるアウロラをゴミを見るような目で見たりもしていた……のは、気付かなかったことにしておく。

「……そういえば、女神の試練で相手が出てくるかどうか、出てきたとして勝つか負けるかで賭けとかしてないのかな？ ちよつと探して来よう」



「いつてらつしや〜い」

結論を言えば、あんまり表には出せないルートで賭けは行われていた。一応神聖なものなので、表沙汰にはできないのだろう。普通そういうところに出入りするのは容易ではないのだが、それっぽい人を見つけると秒で仲良くなり、あつという間に賭けに参加していたのは流石と言うかなんというか。神話伝承レベルのアウトローに慣れた彼にとつて、街の裏の顔くらいは的屋のアンちゃんとか大差ねえのである。

ちなみに、賭けの勝敗については心配していない。勝負勘についてはそれなりに自信があるのである。むしろ、「ギャンブルは勝ち過ぎず、適度に負けるのがコツだよ。勝ち逃げとかすると目をつけられて次がなくなるからね」とは本人の弁……これ、勝てる前提の人の論理ですよ？

だが、そんなギャンブル上級者な彼も、今回の女神の試練の展開までは読めなかった事だろう。

「シャドウには感謝ね。まさか、こんなに都合のいい展開を用意してくれるなんて」  
本来ならシド・カゲノーなる人物が出るはずが、突如乱入したシャドウガーデンのリーダー“シャドウ”。

ねらいも何も明かさなまま、彼は試練として現れた“災厄の魔女アウロラ”と戦いこれを打ち倒して見せた。あまつさえ、聖域への扉が現れる前に姿を消した。彼が何を

考えて現れ消えたのかは不明だが、怒涛としか言いようのない状況の変化に場は混乱を極めていく。これは、聖域への潜入を目論んでいた二人にとって非常に好都合だ。

とはいえ、何から何まで思い通りにはいかない。

「アレは……例のシャドウガーデンね。なら、シャドウの目的は仲間に聖域への道を拓くこと？ でも、それなら自分も一緒に行けばいいはずなのに……読めない男。マスターの言っていた『名探偵』なら、なにか分かったのかしら」

（やっべえ……これで賭けが不成立になったらどうしよう。払い戻し、あるかなあ？）

「マスター？」

「……………よし、難しいことはあとで考えるところとして、行こう！」

言うや否や、勢い良く観客席の階段を駆け下りていく。観客の視線は聖域への扉をくぐるシャドウガーデンに集中しているため、観客たちが彼らの存在に気付くことはない。

やがて観客席の端までくると勢いを殺すことなく手すりに足をかける。一般席と舞台の高低差は10メートル以上、魔剣士でもなく魔術による強化もまともにできない彼にとつては、十分に致命的な高さ。

それを前に、彼は躊躇なく飛び降りる。

「アウラ、着地任せた！」

舞台に向けて身を躍らせた主に寄り添い、膝下と背中に腕を回し横抱きにする。軽やかに着地すると同時に降ろすと、万が一に備えて周辺を警戒しながら並走しつつ徐々に閉まりつつある聖域の扉へと向かう。

観客たちもようやく新たな乱入者たちに気付いき、中には今度こそ阻もうと動き出す衛兵の姿もある。だが時すでに遅し、彼らが動き出した頃には二人はもう扉を潜った後だった。

\* \* \* \* \*

「ねえ、マスター。どうするの?」

「どうしようか……」

無事聖域に侵入できたのは良い物の、二人は割と途方に暮れていた。

先に聖域へと侵入を果たしていたシャドウガーデンや彼女らに連行されたネルソン大司教代理、そして何故かいるローズとアレクシアの両王女に作家のナツメ・カフカ。彼らは何やら問答をしているようだが、離れた場所に身を隠している二人には良く聞こえない。ただ、断片的に聞こえてくるワードから教団や隠蔽された過去の真実についてと予想できるが、正直そのあたりについては当事者であるアウロラがいるのでわざわざ

聞く必要はないだろう。

あくまでも、二人の目的は聖域の奥に封じられているであろう魔人ディアボロスの左腕、その抹消なのだから。

「無視して先に行く？」

「行きたいのは山々なんだけど……あのおじさん、教団の幹部なんだよね」

「そうね」

「とすると『アレ』も持つてるかもしれないし、放っておくのもね」

「聖骸か…確かにその可能性は高いわね」

「……………」

正直、その『聖骸』という呼び方には一言物申したいところである。何が悲しくて自分で自分の身体を『聖骸』なんて仰々しい呼び方をしなければならぬのか。恥ずかしいし、それ以上に痛々しくてたまらない。

「せっかくだし、合流する？」

それも一つの案ではあるだろう。元々、機会さえあればシャドウガーデンとは協力関係を築けないかと思っただけだ。ただ、あそこには見知った間柄であるナツメ・カフカがいる。なぜ偽名を名乗っているのかとか、再会した時に知らないフリをしていたのかなど気になることは多いが、彼女を巻き込む可能性は極力避けたいところだ。

なので、とりあえずは様子見を…と考えたのが間違이었다。

サーヴァントの現界に近い現象と共に現れた英雄オリヴィエ。彼女に伴われながら、いくつかのやり取りをしたかと思うと突如として戦闘が始まったのだ。

いや、それだけであればまだよかった。アウロラに言わせればオリヴィエの力は本来のそれからは程遠く、彼女を操っているとされるネルソン大司教代理を含めても、シヤドウガーデン側が有利なのは明らかだった。

というか、デルタと呼ばれた黒髪の獣人の少女のバーサーカー染みた戦いっぷりは中々に圧巻だ。念のためにいつでも割り込めるようにと備えていたのが、杞憂に終わったほどである。

問題だったのは、追い詰められたネルソンが懐から出した球体だった。

「……マスター、感想は？」

「クツツツツツツ複雑!!」

「まあ、ハゲの掌の上で転がされる自分の眼球とか見れば、そうもなるわよね」

自分で自分の眼球と判断できるわけではないが、魔術的なパスかラインでも繋がっているのか、なんとなくそうとわかる。元々その可能性を考えてはいたので、その点で言えは「やつぱり」としか言いようがない。

ただ、召喚された英霊シヤドウサーヴァントの影が厄介過ぎる。

「で、アレは誰？」

「うっわ、よりによってパイセンかあ……攻撃範囲広いしメツチャタフだし、なによりあとで何言われるか分かったもんじゃない」

星の表層管理端末、受肉した精霊とでも言うべき彼女の力はサーヴァントという枠に当てはめられてなお強力だ。

何も知らないまま戦うには危険すぎる。

故に、彼の決断は早かった。

「アウラー！」

「はいはい」

詳しく説明しなくても、その意を汲んで被っていたフードが外れるのも気にせずアウローラが疾駆する。

同時に、彼もまた己のうちに意識を集中する。

「術式接続、ブラグセット 召喚サモン」

全身を駆け巡る不快感を抑え込みながら、同時に視線はアウローラの進む先……よく見知ったシルエツト影に固定する。分かっていたことだが、何度目の当たりにしても胸が苦しい。無力な自分の呼びかけに渋々ながらも手を差し伸べ、共に戦ってくれた仲間の変わり果てた姿。

なにより、かけがえのない仲間たちを我が物顔で酷使されるのは我慢ならない。

「ばかな……なぜ貴様がここにいる、アウロラ!」

「さあ、何故かしら。こういう場所だし、そういうこともあるんじゃない？」

とりあえず……死んでくださる？」

「おのれ……殺せオリヴィエ!」

「死んだ後まで続く腐れ縁、か。まあ、そういうものもあるんでしようけど……その有様はあなたも不本意でしょ。昔殺してもらったよしみ誼もあるし、優しく殺してあげるわオリヴィエ」

全盛期の力を振るえない、という意味ではアウロラもまた同じ。とはいえ、高い知名度補正により本来の状態に近いことに加え、正規の契約者からの魔力供給もあるアウロラにはある。

一見して拮抗しているように見えるのは、敵の片割れ……自身の契約者が、敵に回すと厄介」と判断した相手を警戒してのことだ。万が一の時、状況の変化についていけず警戒態勢をとっている面々を庇えるようにするために。まあ極一部、割と見境なく襲い掛かろうとして叱られている狂犬もいるにはいるが。

そこへ、朗々とした声が世界に響く。

「告げる

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に

聖杯の寄るべに従い、人理の轍より応えよ

汝、星見の言霊を纏う七天

降り、降り、裁きたまえ、天秤の守り手よ——！！」

その声と共に、後背にて光が生じる。

理由を知るアウロラ、意志を持たないオリヴィエや影は構わず戦いを続けるが、残る面々の視線が彼の下へと集中する。しかし、彼にそれを意識する余裕はない。

「いつ宝具を使ってもおかしくない、みんなを守って！」

「お任せを！」

主命を受けて一人の男が最前線へと駆ける。シャドウガーデンの面々の合間を駆け抜けた男は手にした槍の石突を振り下ろした。同時に、彼の周囲に無数の陽炎が立ち上る。

「モーラン・ラベ！」

「「モーラン・ラベ！」」

陽炎は人の形をとり、彼に倣う様に石突を地面に叩き付ける。

「モーラン・ラベ！！」

「「モーラン・ラベ！！」」





「……毎度のことだけど、精神的被害がすんごいなコレ」

「毎度って、あなたこれが日常だったの？」

「ちやうねん!? パイセンってばなにもなくても自爆すんねん！」

「ハハハハ！ これに比べれば、年甲斐もなく駄々をこねる方が幾分マシですな」

「いや、アレはアレでだいぶヒドイ。直視に絶えない的に」

（……………聞けば聞くほど魔境よね）

なんか緊張感に欠ける会話をしているが、実際の状況はかなり危険だ。

ばら撒かれた肉片や臓物、あるいは血液が集約し人の形を再構成し始めつつある。だ  
というのに、空からは今なお呪詛が降り注いでいる。ここでレオニダスの守りを解けば  
全員が呪いに晒されるので論外だが、身動きが取れないままでは宝具の再展開を許し防  
戦一方になりかねない。

幸いなのは、あちらも呪詛が降り注いでいる間は手出しできないことだが……

「私が行ってさつき潰して来ようかしら」

「……いや、パイセンも含めたら3対1…数の不利はバカにできない。だから……」

「……止めても聞かないんでしようけど、ほどほどになさい」

「うん、わかってる」

フードの下からではあるが、安心させるように微笑みを浮かべて見せる。同時に、脚

のホルスターから一本の無針注射を取り出すと太ももに押し当てスイッチを押す。

アンプル内の薬液は血中へと送り込まれ、魔術回路が活性化し心許なかった魔力が満たされる。

「ぐっ、術式接続、召喚……頼む、セイバー！」

二度目の光の奔流と共に現れたのは、屈強な肉体に鎧を纏った勇壮なる騎士であった。

「騎士ガウエイン、召喚の招きに応じ参上いたしました。ご下命を、マスター」

「ごめん、陽のないところで」

「なんの。太陽の加護がなくとも、『円卓の騎士』の名に恥じぬ働きをご覧に入れましょう。必要とあらば、日輪の輝きをこの場に招くことも」

「うん。なら、念のためお願い」

「承知。午前の光よ、良き営みを守り給え」

その言葉と共に、呪詛を降り注ぐ暗雲が消え代わって太陽の輝きが聖域内を照らし出す。

「「なっ?!」」

多くの者たちが驚きを露にする中、彼らの動きと判断は早かった。

「アウロラはあつちの<sup>オ</sup>り<sup>リ</sup>を<sup>ウ</sup>い<sup>エ</sup>て、ガウエインはパイセンともう一人を！」

「ええ」

「……感謝いたします、我が主」

（うん？）

指示を受けるや否や二人はレオニダスの守りを抜けてそれぞれの敵へと向かう。

しかし、彼はガウエインの残した言葉に違和感を覚えた。

（感謝って……）

その意味を一瞬図りかねるが、答えはすぐに知れた。

再構成途中の虞美人へ、手にした聖剣を大きく振り被る。

「いざ、真つ正面!!」

再構成中の身体を一刀の下に斬り伏せると、続いて標的をネルソン大司教代理に定めるガウエイン。

凄まじい踏み込みで迫る彼に、ネルソンは生み出した分身に迎撃させるが聖剣の一振りと共に生じた炎がその全てを飲み込んでいく。

「ええい、だが分身はまだ!」

「いいから、燃えるのです!!」

次々に分身が盾になるが、その度に剣戟と炎が薙ぎ払っていく。ネルソンが戦闘を専門としていないことを含めても、それはあまりにも圧倒的だった。

やがて、ネルソンの目前へと迫ったガウエインは剣を握る右腕ではなく左腕を突き出し、その首を鷲掴みにする。

不夜のカリスマによって生じた疑似太陽と聖者の数字の合わせ技によつて3倍増しとなった臂力で肥満体のネルソンを吊るし上げる。その眼には、普段の彼からは想像もつかないほどに苛烈な怒りが宿っていた。

「笑止。如何に分身を生み出そうと、それを制御するのはあなた一人。それは左右の手を別個に動かすことすら難儀する我々の手に余る所業だ。百貌殿のそれとは、比べるべくもない」

「お、おのれ……ええい、何をやっている！ 早くこやつを殺せ！ 役立た……ぐえっ!!」  
ガウエインの背後で再構成を凶っている虞美人に向けて怒鳴り散らそうとするが、首を掴む手に力を込めたことで文字通り首を絞められたアヒルのような声が漏れる。

「いったい、何様のつもりです。彼の御仁はあなた如きの命に従うような方ではないというのに。」

なにより………いったい誰の許しを得て、  
“ソレ”に触れている!!」

ガウエインの怒気が圧となつて周囲に震わせる。  
「ソレは尊き御方の遺体、その一部。貴様などが、汚い手で触れて良いものではない!!」  
「ヒツ………」

「あの御方の軀を辱めるその行い、その身を三度焼き尽くしてもなお飽き足らぬ蛮行と知れ！ 聖劍——抜刀!!」

ようやく肉体の再構成を終えた虞美人の影に向かってネルソンを投げつけると同時に、手にした聖劍を天高く投げる。

回転しながら頂点へと至った聖劍は太陽の如き輝きを放つと同時に、一筋の光がガウエインの手元に降り注ぐ。

それをガウエインは力強く握ると……

「この劍は太陽の映し身、あらゆる不浄を清める焰の陽炎。

——エクスカリバー・ガラティーン 転輪する勝利の劍!!!」

横一文字の一閃と同時に灼熱の業火が波濤となつてネルソンと影を飲み込んだ。

太陽の聖劍たるガラティーンの名開放によつて生じる炎は、その由来を示すように摂氏三千度を優に超える。鉄すら蒸発する超高温に飲まれたのだ、生半可な魔劍士に生存の術はない。

（やっと、御身を一部とはいえ弔うことができた）

微かに安堵の息を吐く。これでもう、彼の瞳が辱められることはないだろうから。

「何者なの、アイツ。っていうか、あの劍反則でしょ、アーティファクトか何かなの？」  
「あの劍もそうですが、当人の実力もすさまじいです。……正直、私では足元にも及ばな

「い」

「悔しいけど同感ね。こっちの槍を持つてるのもそうだけど、もう一人の方とかまさか本当に女神の試練でシャドウと戦ったあの女なの？」

というか、コイツを引き連れてるアイツこそ得体が知れないわ」

視線の先では、アウロラが手にした鎌でオリヴィエを粉々にしたところだった。

途中から乱入してきた面々の力の程に、畏怖と警戒心が湧きあがっているのだろう。

それはシャドウガーデンの面々にしたところと同じ。いや、同じだった、というべきか。

何故なら、ガウエインの一閃による熱波の余波が、*“彼”*のフードを取り払ってしまったのだから。

「うそ……」

(つ！ どうして、あなたが、ここに……)

フードの下の顔に見覚えのある二人が息をのむ。我が目を疑う光景だった、あり得ないものを見たとしか言いようがない、他人の空似か見間違いであったならどれほどよかったか。

だが、それを否定するように彼は言葉を失った二人に向かって困ったように微笑む。

「さて、それじゃ行くこうかみんな」

「そうね。まだ私の方の用は終わっていないわけだし」

「そういうこと。それじゃ、あく………またどこかで」

そう言い残し駆け出していく彼に、ナツメ・カフカことベータは自身の立場も忘れて震える手を伸ばしながら、弱々しい声を漏らすことしかできなかった。

「まって……まって………行かないで！ 兄さん!!」

（なぜ、あなたが……）

アルファが彼を呼び留めなかったのは自身の立場を自覚してのことではない。ただただ、目の前の光景を信じられなかったからだ。「なぜ」「どうして」と、意味のない言葉がリフレインしていただけ。

そうして、シャドウガーデンと人類最後のマスターの初めての邂逅は終わりを告げた。

S i d e : 人類最後のマスター

「良かったの、あれで済ませて」

「うくん、どうもワケアリっぽいし、あそこで話すのはやめた方がいいかなって」

「それって、どっち?」

「両方、だと思う」



「そ。ややこしいことにならないと良いけど」  
「やめてよ、フラグ立てるの」

Side : シヤドウガーデン

「アルファ様……私、いったい、どうしたら……」

「……………止めるわ」

「え？」

「きつと、これは何かの間違いよ。あの人が、兄さんがあんな場所にいるはずがない」  
「ですが……」

「いたのだとしたら、巻き込まれたに違いないわ。そして、それは……」

「災厄の魔女、アウロラ」

「ええ、あの女と無関係ではないはずよ」

「確かに、はるか昔に死んだはずなのに復活したということは……」

「ええ、何かしらの思惑があるのでしょうかね。助けるのよ、なんとしてでも、私たちの手で、兄さんを！」

「……………はい！」

## Side：シャドウ

（え？ 第三勢力？ それも、一見するとモブっぽいのになんかすごく強い騎士やら大昔の魔女を従えてる？ その上、アルファとベータの古い知り合い？）

「アルファ様もベータ様も、さすがに平静ではいられないご様子で……」

（なにそのすつごい美味しいポジション!? シャドウガーデンとディアボロス教団の対立構造に割り込む、得体のしれない第三勢力とか、滅茶苦茶陰の実力者っぽい!! くっそう、僕もやりたかった!!!）

「シャドウ様？」

「……覚えているか、ミュー」

「は？ なにを、でしょう」

「もう一つの鍵のことだ。我は、奴らこそが鍵へとつながる手掛かりと踏んでいる」

「まさか!? いえ、でも、確かに彼らは聖骸に思うところがあつた様子……」

「奴らの目的は慎重に見定めなければならない。敵の敵が味方とは限らん、奴らこそが異界よりの尖兵やもしれんぞ」

「そんな!? ですが、あちらにはアルファ様たちの……」

「そのための人質か、あるいは利用されているのか。だが、それならばまだいい。最悪、その男こそが中核という可能性もある。あまり、考えたくはないがな」

（確かに、お二人のお気持ちを考えれば、それはあまりにも酷だ）  
（ふっふっふっ……確かに今は陰の実力者ポジションは預けておくよ、どこかの誰かさ  
ん。でも、最後に陰の実力者になるのはこの僕だ！）

※力尽きたので以下ダイジェスト

○ブシン祭編

「ベアトリクス様は、誰か気になる出場者はいますか？」

「……ジミナ・セーネン」

「え？」

「気になると言えば、彼ね」

「……………確かに、勝ち方に不可解な点が多い人物と聞いていますが」

「強さはよくわからない。でも」

「でも？」

「知り合いが気にしていた。あの子に相手の強さを見抜く技量はないけど、相手の危険  
度を察知する勘の良さは信じられる。少なくとも、見た目通りの相手ではないと思う」  
「続いて本戦、1回戦第3試合！ シュミット・ハーケン対レジェンド・オブ・サムライ

！」

「なにやっつてんの佐々木い!？」

「べ、ベアトリクス様?」

「試合のレベルを考えなさい! 子どもの剣術大会に一国の騎士団長が出るようなものでしょうが!!」

「はっはっはっ! ベアトリクス殿、あまり怒ると小皺が増えるでござるぞ〜」

（斬りたい、今すぐこの男を斬り捨ててしまいたい!!）

「ふむ、せつかくの親子の語らいに割り込むとは、些か無粋に過ぎる。

そも、花は愛でるもの。手折るのは、あまり褒められたことではないであろうよ」

「あなたは……なぜ、助けてくれるのですか」

「なあに、麗しき花一輪……このような男に手折らせるには些か惜しいと思ったまですと。

しかし、御父君はあまり容態が良くない様子だが」

「それは……」

「少々剣を嗜む程度のしがない農夫でもわかるほど死相が浮かんでいる。これは、少々不味いか」

（え? 嗜む程度って、あれで? 太刀筋、何度見てまるで見えなかったのですが……）

「本来はマスターより『やり過ぎた時用』にと預かったものだが……飲ませるといい。

なに、医神殿お墨付きの逸品故な、生半可な病ならばたちどころに癒えるであろうよ」  
 「あ、あの……」

「さて……マスター！ すまぬが、足を用意してもらえぬか？」

「ピュイ——ッ！（指笛で昔貰った神馬を呼び出す）」

「行かれよ、殿は任された」

「……ありがとうございます。このご恩は、決して！」

### ○紅の塔編

「シヤドウ様!? そんな、私たちを庇って……」

「待つて、なにか……来る！」

「ゴツ（紅の塔の最上部が粉碎された音）」

「さて、市街に蔓延るあの出来損ないの死者の群れは、あなたの仕業で間違ありませんか」

「おいおい、なにもんだあの女。ヤバい気配がピンピンじゃねえか」

「同感でありんす。そもそもどうやって外からこの塔を登ったのやら……」

「では、余興です。狩りをしましょう」

「……なるほど、再生能力は中々のもの。小技でこれを殺し切るのは少し面倒ですか」

「なんなんだ、あの女は。剣の一振りで氷を生み、嵐に光弾まで……天変地異を操るとでもいうのか!？」

「一撃一撃の威力も尋常じゃないわ。無造作な腕の一振りで壁が消し飛んだわよ!」（ですが、違和感がありますね。再生能力の割に攻撃性能が低い上に、防御はおざなり。まるで、自らの力を制限しわざと攻撃を受けているような……）

「……なるほど、意図せず血を飲まされての暴走と」

「そうだ。エリザベート様は、本来このようなことを望まれるような方では……」

「マスターの望みはこの状況の打開です（別に単独行動で元凶を叩けとは言われていない）。

元来、私に彼女を助ける義理も筋合いもないのですが……彼女の境遇には少しばかり思うところがあります。私自身とはなにも関係のないことですが、あとであちらの私に文句を言われるのも億劫です。気紛れですが、特別に……」

「え?」

「空想具現——! ……千の鎖よ、路を示せ……」

「ガアアアアアアアアア!」

「静かに、四肢が千切れますよ」

「またかよ! この鎖といいさつききのマグマといい、どっから出てきてやがんだいった

いー！」

「……どうやら、今度はそれどころじゃないようでありんす」

「あん？」

「見て、塔の下を！」

「これは………城？」

「なんと、荘厳な」

「おや、下ばかり見えていいのですか」

「「え？」」

「仰ぎなさい。星を覆う天蓋を………！」

「まさか、赤く染まった月を戻したというのか!？」

(こんなの人に許された…生き物に可能な範疇を超えている。それこそ、シャドウ様でも…いえ、いいえ! そんなこと、あるはずが!?! それにこの人の気配、兄さんと一緒にいた人たちと似ている)

「………まったく、ここまで来ているのだから何かしら助ける手立てを用意しているのか  
と思いきや」

「ぐう………」

「だ、大丈夫よミリア! 助けられると思ってなかったんだし!」

「そ、それはそうなんだが……」

「あの、それたぶん追い打ちですよ？」

「仕方ありませんか。あまり気は乗りませんが、アレも召喚されていたことを幸いと思ふことにしましょう。」

ふう………：ワアタイヘンダア、コンナトコロニゼンダイミモンノシヨウレイガ  
」

（（なんで棒読み!?!））

「前代未聞の症例はどこだあ!!!!」

「変なマスクの人が蛇に乗って塔の外壁登って来たあ!?!」

（素晴らしい説明台詞ですね、クレア様）

○円卓vs七陰

「行かれるのですね、アルファ様」

「ええ」

「でしたら我々も」

「ダメよ。これは私情、シャドウガーデンを巻き込むわけにはいかないもの」

「ですが……」



「もしもの時は、シャドウとシャドウガーデンを頼むわねガンマ」

「アルファ様」

「私もいきます」

「ベータ……」

「私も、兄さんを止めたいんです」

「………わかったわ」

「貴公らの考えは理解できる。確かに、我らが主は元来非日常とは無縁の御方。世界の暗部から遠ざけようとする、その思いには共感できる」

「なら、そこを退きなさい」

「すまないとは思う、だが答えは否だ。我らは主の剣、マスターが決断された以上その道行の万難を排すのみである。

負う必要のない責を負う、その決断は愚かやもしれんが尊いものだ。

………出直さない。古い知己として旧交を温めるのであれば、我らが貴公らを阻む理由はないのだから」

「………ならば、押し通る!!」

「ガウウ!」

「デルタ!?!」

「あなた、どうして……」

「アルファ様の敵はデルタの敵なのです！ 敵はやっつけるのです！」

「まったく、この子は……」

「ああ、私は悲しい」

「「っ!?!」」

「マスターと縁深いお二人だけであれば、ランスロット卿のみにお任せするつもりでしたが……部外者が割り込むとあらば、その無粋の代償を払っていただくことになりましょう。構いませんね、ランスロット卿」

「ああ、トリストアン郷。元より、そういう話だ」

「では、こちらのお二人は私が受け持ちましょう。あなたは、そちらの金髪のレディを」「素晴らしい勘の冴えです。不可視の我が妖弦をここまで回避するとは。そちらの銀髪のお嬢さんもよい腕をお持ちだ。狙いは正確かつ射は迅速、良く錬磨されている」

（私の矢を尽く撃ち落としておいて、なにを……！ でも、デルタがいてくれてよかったです。私だけでは分が悪かったけど、私が牽制してデルタが攻めるこの戦術でなら！）

「ああ……ですが、私は悲しい（ポロロン♪）」

「デルタにお前のそれは効かないのです!!」

「確かにあなたの勘の冴えは素晴らしい。ですがそれは、己の脅威となるものに限って

のこと。脅威とならない、即ちあなたを傷つけないものにそれは作用しない。それを自覚しないことが、あなたの敗因です」

「ガッ!? なんなのです、動けないのです!?」

「デルタ!?」

「あまり力を込めない方がよいでしょう。過ぎれば、絡みついた妖弦が肌を裂き、肉を切り、骨を断ちますよ」

「攻撃は全部避けたのです!」

「ええ、ですから攻撃ではない弦をばら撒きました」

「畏、ですね」

「察しの善いお嬢さん、その通りです。脅威となる弦は避けられてしまえますが、ただそこにあるだけの弦に彼女は反応しなかった。ならば話は簡単です、彼女の進路上に無数の弦を置いておけばいい」

「なら、引き千切つてやるのです!!! 千切れなくても、繋がってる先ごと動けばいいだけなのです!」

(デルタらしい脳筋発想だけど、それなら!)

「確かに正論です。ですが……それはつまり、この都市そのものを動かすに等しい難行。果たして、あなたにできますか?」

「え？」

「我が妖弦はこの都市全体に張り巡らされています。前例がないわけではないので不可能とは言いませんが、これを動かすとなれば生半可なことではありません。あなたの膂力とこの都市の重み、どちらが勝るか試すのも一興ではあります」

（この騎士、強い！）

「ここだ！」

「このつ、また！」

「これで都合五度、もうあきらめてもよいのではないか。貴公は善く戦った」

（どうしてそこから拾ったような棒切れで私と打ち合えるの！ あまつさえ、私の剣に彼の手が触れた瞬間に支配権を奪われる！ 咄嗟にスライムソードを半ばで切り離していなければ、全て持って行かれていたかもしれない……その繰り返し）

「……………才能はある。鍛錬も積んでいる。場数もそれなりに踏んでいるだろう。だが、貴公には決定的に足りないものがある」

「私に、足りないもの？」

「ここ一番での踏み込みの甘さ、覚悟と言い換えてもいい」

「私に覚悟がないとでも？ 見くびらないで頂戴！」

「ああ、覚悟はあるのだろう。命を賭す覚悟も、手を汚す覚悟も。しかし、同時に貴公の

中にはわずかな甘えがある。シャドウ、と言ったか。貴公らの主は卓越した力を持つと聞く、最悪彼がいれば何とかなる、そんな思いがあるのではないかね」

「それ、は……」

「その甘えが、極限状況下での踏み込みを甘くする。それこそが、貴公の剣が私に届かない最大の理由だ」

「くっ……！」

「持てるすべてを費やして勝つ、手があるうちは負けない、泥を啜ってでも這い上がる、なまじ優れた才があるからこそそういった泥臭さが貴公にはない。それを非難する気はない。だが、そんな貴公にマスターの選択を否定させるわけにはいかん」

「このスライムソードとやらは優れた武器だ。これほど魔力の通りがいい武器はそうはあるまい。」

しかし、言い換えればそれだけだ」

「なんですつて？」

「世界には、100の魔力を通して200、300…あるいはそれ以上の性能を発揮する武具が存在する。いや、これはあまり参考にすべきものではないか」

「……」

「魔力の通りがよく、変幻自在にして攻防一体の武器、確かに素晴らしい。しかし、その

分弱点多い。例えば、魔力の流れを阻害する場や流れそのものを断つ武器とは相性が悪い」

（確かに、強欲の瞳のような状況はスライムソードやスライムスーツとは相性が悪いわ。でも、シャドウなら……いえ、この考えが甘えに繋がっている）

「他にも、元がスライムであるが故に強度に不安がある。なるほど、魔力を通しては鉄を超える強度を発揮するだろうが、それならば芯に鋼を用いてコーティングするようスライムで覆うのもいい。その方が、魔力の消費量も抑えられるだろう。また、何らかの理由で魔力の通しが甘くなつた際の保険にもなる。まあ、今ほどの変幻自在さはなくなるが。」

逆に、変幻自在というのならこれくらいはすべきだ」

「っ！…これは……」

「戦いは高度になればなるほど無意識に全身の動きから行動を予想するもの。だからこそ、全身の動きとまるで関係のない、あるいは真逆の動きを剣がすれば、それだけで意表を突ける。」

そして、真に変幻自在であるならば『武器』である必要すらない」

（なんなの、あれは……ウマのいない荷車？ いえ、むしろ小型の機関車？）

「自在に形を変えられるということは、ある意味では動力と同じ。こうして車輪を回し

てやれば、小回りは効かんが直線での機動力は走るよりも優秀だ」

(まさか、こんな使い方があるなんて……)

「バイクですか。ふふつ、まるで我が王のようですね。それにしても……アレでは戦いというよりも稽古をつけているようではありませんか」

○????

「うっ、ここは……?」

「起きたわね、アウロラ」

「……七陰の面々がお揃いで。その上、ローズ王女にアレクシア王女、アイリス王女まで……中々に壮観ね」

「減らず口が叩けるなら問題なさそうね。ところで、ここに来るまでのことは憶えてい  
るっ」

「それは……」

「正直、私たちも前後の記憶が曖昧で。どうしてここにいるのか、何故この面々で集まっているのか……そもそも、ここに来る前に何をしていたのかもサッパリなんです」

「由々しき事態ね」

「ええ。なにより……この場所の得体が知れなさすぎる」

「この場所？ ……まさか、ここって」

「何か心当たりがあるのかしら？」

「だって、ここは……ミクトラン？」

○N G

「だって、ここは……チエイテピラミッド姫路城!？」

「「はあ?」「」」



# 蝶屋敷には家事幽霊が憑いている（蝶屋敷編）

「お待たせしました。こちらがご依頼の品です」

「ああ、忙しい中スマナイ」

蝶屋敷の一室で隠が差し出したのは白木造りの細長い箱。

箱のフタを開ければ、そこには半ばほど折れてしまった漆黒の日輪刀。

その柄を手に取り、目を細めてみれば……ノイズ交じりにこの刀の来歴が流れ込んでくる。

（……………衰えたものだ。たかだか数日前の情報を読み取るのも難儀するとは）

か<sup>全盛期</sup>つてであれば、刀一口程度一瞥するだけで素材や製法はおろか、理念や来歴に至るまで読み取れたというのに。いまでは意識を集中して入念に精査してなおノイズが交じる有様。

胸中に呆れとも失望とも判然としない感情が湧いてくるのは一旦脇に置き、情報を読み取ることに集中する。

不明瞭な点多々ある中、それでも辛うじて読み取れた内容は得心のいくものだった。

（やはりか）

「……」

「……不思議かね」

「え、いや、その……」

「まあ、当然だろう。折れた刀をわざわざ「検めさせて欲しい」などと……疑問に思っ  
て当たり前だ」

「……はい」

「ちよつとした特技だね。刀を見れば、どう使ったかある程度分かるのさ」  
（スゴツ！ え、達人ってそんなことまでわかるの!?!）

上弦を退けたという話はそれなりに広まっているので、「ケガなどが理由で引退した  
柱並みの実力者」という認識が浸透している。勘違いされていることは何となく察し  
ているが、説明するのは面倒くさく、実害もないことから放置することに。

「君は、新米の隊士が十二鬼月と遭遇したら、どうなると思う？」

「……もう、命はないものと」

「そうだ、それが普通だ。時透という例外もある以上「絶対」ではないが、基本的に隊士

となつて間もない者が十二鬼月と遭遇するということは死を意味する。だが」  
「竈門隊士は、生き残つた」

「そうだ。富岡に救われるまで命をつないだ、それだけでも驚嘆に値する。その理由が気になつてね、こうして里に戻す前に見せてもらおうと思つたわけだ」

言わんとすることはわかる。しかし、本人に話を聞くという手もあるはずだ。先の任務で負傷した炭治郎たちは、現在ここ蝶屋敷で療養中なので機会も時間もいくらでもある。ならば、回収された彼の刀をわざわざ見る必要はない。隠のそんな声なき声を聞いたかのように肩をすくめて見せる。

「柱合会議でのことがよほど腹に据えかねたようですね。どうも、相当に嫌われたらしい」  
「あゝ……」

この隠も柱合会議の場に居合わせたらしく、その時を思い出して納得してしまふ。

（確かに……あれは、嫌われても仕方ないかも）

「そう言うわけだね、当分話を聞くのは難しいというわけだ」

「な、なるほど……ご苦労様です」

「なに、身から出た錆という奴だ。幸い時間もある。あの小僧は単純だからな、聞き出す方法はいくらでもあるさ」

（竈門隊士、すごくお人好しっぽいし、普通に聞けば答えてくれそうだけど……）

とは思ったものの、何となく口にできなかつた隠はそのままその場を後にした。

「手間賃」としてお土産を持たされて。

「蝶屋敷のお土産と言えば珍しいハイカラな菓子だよ……ヤツホイ！」

そんな隠の後姿を見送る神崎アオイの目には、どこか哀れみが宿っていた。

「……………たしか今朝士郎さんが作ってたのって、塩大福じゃなかつたっけ？」

\* \* \* \* \*

その日の夜半、患者たちの回復訓練の計画について意見を聞くべく、カナエは士郎の部屋を訪れていた。

「……嫁入り前の娘が、夜中に男の部屋を訪れるなど何度言わせれば」

「娘に手を出すような倒錯趣味じゃないでしょ。ね、お父さん」

「……………（言いたいことは山ほどあるが、

言つても聞かないのはわかりきっているので堪えている）」

何とも言えない味のある表情でコメカミを揉む目の前の偉丈夫に、カナエはコロコロ

と笑みをこぼす。

本人が「親として不適格にもほどがある」と思っていることは知っている。彼の過去

を知る身として、その自己評価はあながち間違つてもいらないと思う。しかしそれは結局過去の話、蝶屋敷で暮らす娘たちにとって今の彼は誰がなんと云おうと「善き父」なのだ。

だから、諦めてこの呼び方を受け入れてもらわないと困る。

時が経てば、いずれ嫁に行く娘も出てくるだろう。その時に、父として送り出してもらいたいのだ。カナエでは姉代わり、どんなに頑張つても母代わりまで。父親役は彼外にいないし、娘たちも納得しないだろうから。

「それで、これが小僧どもの訓練計画か。なかなか無茶をさせる。全集中の常中など、出来ない隊士の方が多いだろうに」

「ええ。三人とも筋が良いようだし、特に炭治郎君は妹さんのこともあつてか強力な鬼との遭遇率が高いみたいで……早く強くなつてもらわないと」

「その割には回りくどい仕込みのように思うがね」

「自分で気付いた方がやる気が出るでしょ？」

「なるほど……そうして、ゆくゆくは次代の柱候補、か？」

「そうなつてくれたら嬉しいかな」

困つたような、悲しそうな、そんな複雑な表情を浮かべるカナエ。彼らの未来に対する期待はある。だがそれは、同時に苦難の道へと放り込むことを意味する。手放しに

は、その未来を喜べないのだろう。

特にカナエは、上弦との交戦経験を持つ数少ない一人だ。奴らと戦うことの意味を誰よりもよく知っているが故に。

「……………まあ、その方が都合がいいのは確かか」

「都合がいい？」

「こちらの話だ。いずれにせよ、動けるまで回復しなければ話にならん」

「まあ、いいけど……………何か企んでない？」

「さてな」

（……………仕方ない、か。腹芸では敵わないし、この人のことだから悪いようにはしないでしょう）

ジト目を向けるも、そこは年季が違う。涼やかに流され、その考えを読み取ることはできそうになかった。

\* \* \* \* \*

それからしばらくして、炭治郎たちも無事回復。回復訓練に関しては、善逸と伊之助が逃げたりサボったりを繰り返しながら、一応は順調に全集中・常中を習得しつつある。

そんなある日のこと、炭治郎は道場である人物を待つていた。

「私に話があるそうだな、小僧」

炭治郎に遅れて道場にやってきたその人物は、用意されていた座布団に腰を下ろすなりそう切り出した。

「はい。でも先に……」

「? なんだ、いつぞやの文句であれば……」

「いつも美味しいご飯をありがとうございます! あなたのことは嫌いですが、お世話になってます!!」

(律儀というか、バカ正直と言うか……)

面と向かって「嫌い」と言える精神もどうかと思わないでもないが……。

「しのぶさんが、あなたなら『火の呼吸』について何か知っていると」

「いや、知らんが」

「知らんのかい!!!」

「うるせえぞ、紋逸」

「善逸だつて言つてんでしょ!!」

炭治郎の両脇を固めるいつもの二人が何やら騒いでいるが、とりあえずスルー。一々相手にしていると話が進まないのは、決して長くはない蝶屋敷暮らしでもすでに知れ

渡っている。

「そもそも呼吸の剣士ではない私を知るわけがないだろう、たわけ」

「うぐつ……」

「それより、こちらも貴様に聞きたいことがある。小僧、貴様……どうやって下弦の伍と戦った」

「えつ……」

それは、丁度炭治郎が彼に聞きたかったことだった。

「あの時点での貴様の實力では、下弦とはいえ十二鬼月相手に生存の目はなかったはずだ。妹の助けがあつたとしても、それで何とかなる様な實力差ではない。にもかかわらず、貴様は生き延びた。

なぜだ？ 貴様は何をした？」

「それは……」

炭治郎の口から語られたのは、竈門家で耳飾りと共に代々伝えられてきた「ヒノカミ神楽」と称される厄払い舞の存在。同時にそれは、一年間の無病息災を祈つて新年の始まりに山頂にて、舞を一晚中繰り返すことで奉納するという極めて過酷なものであるという。

「それで、ヒノカミ神楽の舞の型は十二あつて……」



「やってみろ」

「え？」

「四の五の言わずやってみろ……ああ、今回呼吸は不要だ。今の貴様では負荷に耐えられまい、ただ型の動きだけなぞればいい」

「は、はあ……（あれ？　なんでこの人、俺がヒノカミ神楽の呼吸を使いきれないことを知って……）」

疑問はあるものの、とりあえず言われるがままにヒノカミ神楽を舞って見せる。

病み上がりとはいえ、機能回復訓練と全集中・常中の修行のおかげでむしろ基礎体力は上がっているのが功を奏したのだろう。以前とは比べ物にならないほどスムーズに舞うことができる。

円舞えんぶ

碧羅へきらの天てん

烈日紅鏡れつじつこうきょう

灼骨炎陽しゃくつこつえんよう

陽華突ようかとつ

日暈にちうんの籠りゆう

斜陽しゃよう轉身てんしん

頭舞かぶりまい

// 飛輪陽炎 //  
ひりんかげろう

// 輝輝恩光 //  
ききおんこう

// 火車 //  
かしや

// 幻日虹 //  
げんにちこう

// 炎舞 //  
えんぶ

十二の型、全てを舞い終えると拍手が炭治郎を労う。

// パチパチパチパチパチ //

「しのぶさん？」

（たあすかつたあ——つ！ 俺士郎この人苦手なんだよなあ優しい音してるはずなの

に時々滅茶苦茶怖い音がするつて言うかあつたかいと冷たいが両方あるつて何なのこの人ホントあれでしょ周りの人のことスツゲエ大切にするけど必要ならばっさり切り捨てちゃう人種じゃん!!）

「話を聞いて私も気になっていたので後学のために見学をと思つて……構いませんか、

炭治郎君」

「はい！」

「そーいや伊之助も妙に静かだけど、どうしたの？」

「……アイツはヤベエ。毒蛇とか毒虫と同じだ、強いとか弱いとかとは別のところにい

やがる」

伊之助は伊之助で、善逸とはまた違う形ながら士郎のことをひどく警戒しているらしい。

善逸自身、個人的には禰豆子をモノ扱いしたことに文句の一つも言つてやりたいと思つているのだが、聞こえてくる音がおっかなすぎで何も言えないのである。

(……やはりか)

「あの、これで終わりなんですけど」

「む？ ああ、ご苦労」

「それで士郎さん、何かわかりましたか」

「……そうだな。まずは確認だ。現在、呼吸は多くの種類がある。しのぶの蟲やその被り物の獸はかなり特殊な部類だが、他にも霞や音、蛇といった具合にな。だが、それらはすべて元々あつた呼吸の派生だ。ここまではいいな」

柱であるしのぶには今更な話だが、経験の浅い炭治郎たちには必要な知識だろう。

「当然、派生であるからには遡れば元となつた呼吸に行き着く。そして、最終的に行き着くのが水・風・岩・雷・炎の五つの呼吸だ。しかし、本来これはおかしい」

「そうなの？」

「なにがだよ、イログロ」

「失礼だぞ、伊之助」

「呼吸の源流はどの型なのか、ですね」

「そうだ。『最終的に』というのであれば、基本となる五つの呼吸の更に元があるはずなのだ。少なくとも、五つの型が『呼吸』という技法を獲得するに至った『なにか』が」

「ここまで話せば、よほど察しの悪い者でなければ士郎の言わんとすることがわかるだろう。」

そして、少なくとも炭治郎と善逸はそこまで察しが悪いタイプではない。

「えっと……今の話の流れだと炭治郎のヒノカミ神楽がその……」

「ヒノカミ神楽の呼吸と円舞についてはわかっていたから確認のために他の型も見せてもらったが、おそらく間違いあるまい。基本の五つの呼吸同士に共通点はほぼないが、ヒノカミ神楽はすべての呼吸に通じるものがある」

（あれ？ ヒノカミ神楽の呼吸は見せてない筈なのに、どうして……）

「ですが、どうして炭治郎君の家で神楽舞として伝えられていたんでしょう？」

「さて……よほどの技を後世に伝えたくない者がいたのだろうよ。まあ、おおよその見当はつくがね。」

付け加えるなら、武を舞という形で隠して伝承するのは割とよくある手法だ。技の断

絶を恐れた竈門家の祖先は、どこかの誰かの目を眩ませるために「ヒノカミ神楽」として伝承したのだろうさ」

一点、士郎の推理を訂正するとすれば、竈門家の祖先は明確に「隠す」という目的をもって「ヒノカミ神楽」としたのではない。「まるで踊っているようだった」から舞という形をとつたに過ぎない。

少しでも彼が受けた印象が違うものであつたら、この技の伝承の形は別のものになつていただろうし、そうなればこの技を恐れた誰かの目に留まり、技が途絶えていた可能性が高い。

「黒く染まった日輪刀の使い手に適した呼吸は現在確認されていませんが、もしかして……」

「ヒノカミ神楽……いや、「ヒの呼吸」こそがそうなのだろうな。ただ、小僧の様子を見るに相当に負荷が大きい。使い熟すには並々ならぬ呼吸の練度が必要になるだろう」

「つまり……炭治郎君はまだまだ修行が足りない、ということですね♪」

「ああ、使い熟すためには辛い修業が必要だろうな」

「「フツフツフツ……」」

（あ、これ俺死んだ？）

「炭治郎」

「善逸」

「強く生きろよ」

……!!」

「善逸」

「?!」

伊之助の腕をひつつかみ、雷の呼吸お得意の脚力を無駄に活かして逃走を果たす善逸。

虚しく空を切った炭治郎の右手が物悲しい。

「逃げたか……」

「大丈夫ですよ、炭治郎君。一人は寂しいでしょうが、仲間がいればきつと乗り切れま  
す」

（……これ、二人もあとで捕まる流れだな）

「まあいい。とりあえず小僧、先ほどのヒノカミ神楽だが順序を入れ替えてもう一度  
やってみろ。少々気になることがある」

「は、はあ……」

そうして、言われるがままに何十通りというパターンでヒノカミ神楽を舞うことにな  
るのであった。







(……やはり、少し妙だな。通常、型とはそれ単体で完結するものだ。もちろん、攻防いずれにせよ次の動きにつなげやすいようにできてはいるが、ヒノカミ神楽の場合明らかに“型同士の連続性”がある。特定の型から特定の型に繋がる場合、他の型より確実に流れがスムーズだ。流石に、この流れに従わない場合支障をきたす……というほどではないが)

舞として考えるなら流れがよりスムーズに、流麗になる方がよいのでそれで問題は無い。しかし、実戦ではわずかな流れの淀みが致命的な隙となるかもしれない。そのため、もし支障をきたす場合、実戦への投入は考えなければならぬところだが、そこまですではないのは幸いだろう。

(気になるとすればもう一点。呼吸の源流とも言うべきこの技を継承してきたことと、あれの妹の体質との因果関係か。しのぶが調べてくれているが、そうそう成果が出るようなものでもなし。いまは置いておくしかあるまい。

当面の問題は、これが舞として伝えられていく過程で加えられたアレンジなのか、それとも元からそうなのかという点だが……)

可能性としてはあまり高くないが、もしも初めからそのような構成になっていたとし

たら、その意図はいつたい……

「……ちつ、情報が足りんな。この技を伝えた者の刀でも残っていれば、そこから読み取ることもできたのだが……」

生憎、竈門家にそのようなものは伝わっていないらしい。

推理はここできるとん挫し、ヒノカミ神楽の真相究明は一旦お蔵入りとなる。しかしそれも、炭治郎が刀鍛冶の里を訪れたことで、再度動き出すことになるのであった。

へカゲジツ×FGO∟陰の実力者？ 知らない人ですね

エピローグ

「……その一步を踏み出す前に、もう一度よく考えた方がいい。そこから先に進めば、君の居場所はなくなるよ」

やるべきこと、為すべきことをすべて終えた背中にかけてられた声。

その声に、踏み出そうとした一步が止まった。

半端な体重量移動で宙ぶらりんになった脚。あと少しでも前に重心を傾ければ、倒れるように彼の身体は境界を超えるだろう。その寸前に“待った”をかけたのは、声の主なりの慈悲だったのか、それとも……

「待つのは当ても終わりもあるかわからない放浪だ。それでもいいと、本当に断言できるかい？

終わりがある、というのを見方によつては一つの救いだ。今ならまだ、君は一応の“ゲームセット”迎えられるんだから」

「……“それでも”じゃない、“これで”いいんだ」

ハッキリと断言する。迷いはない、憂いもない。これがみんなにとっての最善でな

かったとしても、彼にとって最も納得のいく、この長い旅のゲームセットピリオドの形なのだ  
と確信して。

この相手のことだから、わざわざ語って聞かせる必要などない。

それをわかった上で、踏み出しかけた足を戻して向き直る。視線の先には、いつもの  
超然とした微笑みからはかけ離れた、どこか愁いを帯びた眼差し。それが、少しだけ意  
外だった。

「正直、私の趣味ではないんだけどね。物語はハッピーエンドで締めくくりに限る。メ  
リーバッドエンド……とは言わないが、ビターエンドにしても後味がイマイチだ」

「かもしれない。それでも、俺にとってはこれが最善だよ。」

「……………カルデアのみんなが笑っていた。ならそれは、きつと間違いじゃないんだ  
と思う」

「すべてを忘れて、ね」

「ごめんね」

この詐術の片棒を担がせることになる共犯者に、せめてもの謝意を。

人理が揺らいでいる今だからこそ成立し、無意識への干渉者夢魔との混血にして世界見通す目千里眼を持つ彼

にしかできないペテン。ここ数年で数度見舞われた人理の危機、それら全てを「なかつ  
た」ことにする。

「人理焼却は為されなかった、人理漂白はそもそも計画すらされていない。なぜなら、カルデア自体が存在しなかったのだから………やれやれ、つじつまを合わせるのが大変だ」

「いめんて」

本当になかったことにするわけではない。そもそも、起こった出来事を消し去ることはできない。

ことが人類悪関連である以上、それは最早彼の魔神王が為した大偉業の一手、人理定礎の破壊に匹敵する難行だ。

仮にできたとしても、多くの犠牲を払ってようやく取り戻した世界を、それで揺るがしては元も子もない。

彼に頼んだのはそれに比べればはるかに些細な物、〃人々の認識の書き換え〃だ。あるいは、特異点の修復時に起こる時代の修正に近い。

起こった出来事、失われた何かに対し、適当な理由をつけてそれまでとそれから過去につじつまを合わせる。

今回の場合で言えば、死亡したカルデア職員の死因は航空機の墜落とか、なんらかの大規模テロに〃運悪く巻き込まれた〃とか、そういう形に納まるだろう。アニメスフィア家の数々の損失についても同じ、どこかの世界線とあるロードの家門がハリウッド

映画の製作費並みの負債を抱えるに至ったのと似た様な不運に見舞われた、ということになる。そこから家門を立て直さなければならぬ関係者一同には「頑張ってください」とエールを送るしかないが。

あと、カルデアを買い取るために私財のほぼすべてを費やした現所長も、いまいち身に覚えのない理由で私財を失ったことになる。まあ、あちらは「不死鳥」の二つ名を戴いた不屈の男なので、何とかなるだろう。

自分たちの為したこと、払った犠牲、消え去った全てを“なかった”ことにすることに対し忸怩たる思いはある。

覚えているのは己一人……それでも、自分が覚えているのなら、全てが消えるわけではない。

「それに、これならマッシュが生きていられる」

マッシュ・キリエライトにしろ、自分自身にしろ。魔術協会にとっては垂涎の研究サンプルだ。

片や生きながらにして「盾の英霊」として成立し、片や存在しえない歴史異と繋がった魔術師モドキ。

どちらにしろ、魔術師達が放っておくはずがない。

だが、全てがなかったことになってしまえば、その特殊性を認識できるものはいない。

だって、自分たちを“例外”たらしめた事象そのものを誰も知らないのだから。

「これから先、彼女は“マシユ・キリエライト”としてではなく“藤丸立香”として生きる。」

君の生まれ育った場所で、君の家族と共に、君が帰りたかった日常を謳歌するんだ」

“存在の移譲”、あるいは空いた“藤丸立香”の席に座る形で。

そもそもレイシフト適性の高さは、即ちその時代、その場所からの“外れやすさ”を意味する。

そこに“いない”と仮定し、存在証明によつて時代も地域も違う場所に“いる”ことにしてしまえる。そのあやふやさを手にとつて、この世界から消えようというのだ。

「意地悪な言い方はやめてよ。マシユが俺から奪うんじゃない、俺がマシユに押し付けるんだから」

「まあ実際、知れば彼女は怒るだろうね」

「確かに」

あまりにも鮮明にイメージできてしまい、苦笑いしか浮かばない。

泣かせてしまうだろうし、今回ばかりは許してもらえないかもしれない。

でも、こればかりは本当に仕方がない。

「だって、俺がいたらなかったことにはできないから」

「……ああ、君は一連の事件すべての中核だ。マシユもいい線まではいくが、君のサーヴァントという立ち位置に変わりはない。いつだって、最終的に名前が残るのは主導した者なのだから。」

だからこそ、君がいる限りこの詐術は成立しない。その魂に絡みついた無数の縁が、それらが確かに「あつた」ことを証明してしまう」

故に、彼はもうこの世界にはいられない。いたところで魔術師達の餌食になるのが関の山、それでなくても運命力は使い切っているので明日の我が身も知れたものではない。なら、本懐を遂げて消えて行っただけかさんのように、世界を放浪するストレンジャーにでもなる方がいくらかましだ。

そのついでに、空いた自分の席を唯一無二の彼女に押し付ける、ただそれだけの事。カルデアがなかったことになる唯一の弊害、カルデアがなければ存在しえないマシユの存在をどう誤魔化すかも、これで何とかなる。

どうやっても助かる目のない自分が世界から消えることで、仲間たちとかけがえのない後輩に未来が与えられるのなら、迷う理由などありはしない。

人理が安定していれば不可能だが、人理焼却と一人理漂白、そして人類悪の顕現によつて揺らいだ現状だからこそ付け入る隙はある。一度誤魔化してしまえば、あとは世界の修正力が多少不自然でもつじつまを合わせるだろう。その不自然さも、彼が上手い



ことアフターケアをしてくれる手筈になっている。

「……小さい頃さ、自分の名前があんまり好きじゃなかったんだ。よく『女みたいな名前』って揶揄われてたから。でも、いまはよかったと思う。源蔵とかだったら、女の子にはあんまりでしょ?」

「そうだね……そう、かもしれないね」

眼前の白い男はフードで顔を隠す。そうすると、常の胡散臭さよりも神秘的な印象が上回るから不思議だ。

「では、これで『さようなら』だ、マイ・ロード。

いやまったく、君の物語はこの上なくスリリングで、時に愉快的な、素晴らしい旅だったとも! それは私が保証するし、人の世の終わりまで覚えている。

これからの君の旅路に、星の祝福があらんことを」

「ありがとう、行つてきます」

そうして、花の魔術師に見送られて最後の一步…世界の境界を踏み越えるその瞬間……

「まったく、最後まで吐き気のするお人好しっぷりだよ、お前。

自分が消えればハッピーエンド、とかなんなの? 主人公取りで気色悪いにもほどがある、ガラじゃないったらありやしない。泣いて怒って、文句や恨み節の一つでも言

えば可愛げがあるものを………だがまあ、筋金入りだったので認めるさ。じゃあね、カルデアのクソ野郎。君の旅の果てが、分相応に陳腐なものであることを祈っているよ”

聞こえてきた悪態に、笑みがこぼれる。

(ハツ……素直じゃないなア)

そうして、世界を救った”人類最後のマスター”は、救ったはずの世界から自らの意思で消失した。

\* \* \* \* \*

プロローグ

”パチパチ パチパチ”

薪が爆ぜる音がする。ユラユラと揺らめく炎を見下ろしながら、一人の少女が立ち尽くしていた。

(どうして、まだ生きている……?)

それが、心底不思議でならなかった。

死を受け入れていた。この命は明日まで保たないと理解していた。

恐れはなかった、むしろ「やつと……」ときえ思っていた。

彼女にとつて死は「終わり」ではなく「解放」だった。

生きる意味も、理由も、喜びも……何もかもが縁遠いものだった。

だから、毎日死ぬことばかり考えて生きていた。

死んでしまえば、与えられる痛みも、渴きと飢えに喘ぐことも、寒さや暑さに震える

ことも……何もかもなくなる。それが、唯々待ち遠しかった。

そうして、ようやく死ぬると思った矢先に救われてしまった。

(これは、夢？ それとも……)

死後の世界、という奴なのだろうか。益体もない妄想が脳裏をよぎり、そんな自分を鼻で笑ってしまう。

「ハッ……」

救われる夢を見る自分、死後に救われる自分……そんな希望を抱いていたなど、それこそ悪夢のようだ。

しかし、そんなあり得ない可能性を考えてしまうほどに現実感がない。

だから、ここからどうしていいのか本当にわからない。

ただ立ち尽くし、自身に起こった出来事をどう飲み込めばいいのか考えることもできずにいたところへ、険のある声が投げかけられた。

「おい、いつまでそうしている。座れ」

「……」

「座れと言った」

言われていることは理解している。理解した上で、どうすればいいかわからない。

できたことと言えば、焚火を挟んで反対側にいる声の主の方へと視線をあげることにく  
らい。

同時に、焚火越しに見える純白のコートを羽織りフードを目深に被った人物の手前に  
横たわる人影が目に入る。

それこそ、彼女の唯一無二の望みを奪った張本人。望んでいない、頼んでもいない救  
いを押し付けた身勝手極まりない、名も知らぬだれか。

文句の一つでも言ってやりたいところだが、相手は意識不明の半死人。その無意味さ  
を思えば、何もかもがどうでもよくなる。

そこで、コートの人物の剣呑な視線が彼女を刺し貫いた。

「座れと言ったはずだ聞こえなかったかこの愚患者め医者がやれと言ったことはやれや  
るなど言ったことはやるななぜそんな簡単なことができない一通りの治療は済んだが  
体力の消耗が著しい座って休めむしろ今すぐ寝ろそれでは治るものも治らん」

“ドサツ”

「……よし、それでいい」

一息にまくしたてられ、あまりの剣幕に思わず尻もちをつくようにしてその場にへたり込む。

まだまだ雪深いこの季節、雪の上ではなくとも地面に直で座るとなれば体温を奪われかねないところだが、座つたのは倒木の上なのでその心配はいらない。

「……………なんて、助けた」

「くだらんことを聞くな、医者だからだ。医者の前に患者がいる、ならば治療以外にすることなどあるものか」

その理屈は理解できた。「医者だから治す」というのは、自身の役割を果たしただけと言いたいのだろう。

報酬や治す価値などの問題はあがあるが、理屈としては通っている。

だが、分からないのは……

「よし、これで治療は終了だ。とはいえ……つまらん内容だったかな。各末端部位の毛細血管の破裂、内臓へのダメージ、そして魔術回路への過負荷、どれも今更目新しさの欠片もない。

だが、面白い症例を用意していたのは評価しよう。高魔力の暴走による肉体の変容か、実に興味深い」

「ジツ」

「……マスターがお前を助けようとしたことが、そんなに不思議か」

「理由がない。得るものがない。意味がない」

何しろほんの数時間前が初対面、それもその時の彼女は醜い腐りかけの肉塊だった。

そんなものを、何故助けようと思う。血反吐を吐き、目の焦点も合わないほどフラフ

ラになりながら……本当に、心の底から意味が分からない。

「……助げたいと思ったから」

「は？」

「強いて言えばそんなところだろう。あとはそう……助ける方法に心当たりがあつたか

ら、か」

「それでこのざま？」

「こいつはできないことをできないと認められないほど馬鹿ではない、そして事実お前

は助かった」

「頼んでない」

「そうか、それは残念だったな。これはどこぞのロクデナシ夢魔が言っていたことだが、善

意とは基本、押し売りするもの”だそうだ」

「押し、売り？」

そんなもの、聞いたことがない。そもそも、彼女の生まれ育った環境において、善意とは即ち「愚考」だった。

他者に「与える」など論外、「奪い」「騙し」「嵌め」「陥れる」のが当たり前。そんな蛮族の見本のような一族が、彼女を取り巻く世界の全てだった。

母はいずこから拐かされ、誰の種とも知れない子を孕自分まされたのだろう。あそこではよくあることだ。

母親の顔どころか死因も憶えていない。物心つく頃には、似た境遇の子どもと一緒に奴隷のように働かされた。働きが悪ければ罵倒と共に暴力を振るわれ、運が悪ければそれで死ぬこともある。飯にそれなりの成果を出したとしても、当然のこととしてそれ以上を要求される。バカバカしくて、やる気など出るはずもない。

与えられるのは味のないクズ野菜の水煮、稀に腐りかけの肉やカビたパンがもらえれば上等な部類。当然、奴隷の間でも奪い合いが日常だ。その中で頭角を現した者がいれば、引き立てられそれなりの扱いを受けられるが……生憎彼女はそうではなかった。同世代の中でも一際小柄で、当然力も弱く、何より生きる気力に乏しかった。

本音を言えば、さつさと死んでしまいたかったのだが……死ぬ自由すら許されていない。死んだらそれまでが共通認識ではあっても、「死んで楽になる」ことは許さない。相互に監視させ、死者が出れば連帯責任で罰を与えられる。だから、最低限す

ら食べなければ無理矢理にでも流し込まれるし、自死を図ろうとすれば死なない程度に袋叩きだ。

一度ならず周りを説得して皆で死ぬことを提案したこともあるが、だれものつてこなかった。身体のお芯まで刻み込まれた恐怖と隷属精神がそれを許さなかったのだろう。なにより、誰か一人でも裏切れば更なる罰を与えられる。あの環境で誰かを信じるなど、出来るはずもなかったのだ。

そうして、齢5つを数える頃にはいつか訪れる死だけが望みになっていた。

幸いだったのは、数えて10歳になった年に「悪魔憑き」となったこと。閉鎖的で排他的なあそこで「悪魔憑き」は不吉の象徴だった。

—— 放置すれば悪魔憑きが広がるのではないか!?

—— そうだ、早く殺せ!

—— だが、触れるのも汚らわしい。万が一にもうつつたらどうする。

—— ならば追い出してしまえ。

—— 勝手にのたれ死ぬならば……。

—— そうして彼女は死病と共に自由を得た。

生まれて初めて、晴れ晴れとした気分だった。日を追うごとに腐っていく身体も、内側から走る苦痛も、全てがどうでもよかった。



ただ、<sup>〃</sup>どこで死ぬか<sup>〃</sup>を考える時間が堪らなく愛おしかった。非力な彼女では首を括ることすらままならないが、崖から落ちるなりすることはできない。だからさっさと自死してしまってもよかったのだが、それはあまりにももつたいない。

苦痛と絶望に彩られた寒々しい日々から解放され、唯一自分だけが得られた自由<sup>死</sup>を安易に終えてしまうのが惜しかった。

——より気持ちよく死ぬる場所を

そこだけは拘りたかったし、絶対に適当で済ませたくなかった。

重い身体、腐りかけの四肢を引きずりながらようやく見つけた死に場所は、水面がキラキラと輝く溪流だった。

何度も凍死しかけたが、種族としての特性が幸いしたのだろう。故郷とも言えないあそこは犬系の獣人の里だったが、彼女は母の特性を引き継ぎ犬耳ではなく渦巻き状の羊角を持って生まれてきた。毛深いというわけではないが、毛量も多く縮れ毛なのもあって比較的寒暖や乾燥に強い、小柄ながらに生きて来られたのはこの特性のおかげだろう。まあ、逆に言えば狩りや戦いに向かない特性故に上にあがる目がなかったとも言えるが。

そうして、流れる水面を見ながらあとにはただ死を待つばかりと思った矢先、有難迷惑

なああの男が現れたのだ。

腐った身体にみすぼらしい布を被った小汚い子ども。そんなもの、見なかったことにして去ってしまった方がいいのに。

躊躇なく手を差し伸べたかと思えば、あろうことか……

「えつと……困っているようなら助けはいる?」

言葉の意味は分からなかったが、言わんとすることはなんとなくわかった。

ようやく納得のいく死に場所を見つけ、少しでも早く死ぬために目の前の水でのどを潤さなかったのも悪かった。加えて、最後の気力も尽きた後だったのが運の尽き。

乾ききった声帯では「否」と答えることもできず、何とか手を払いのけようと持ち上げた手は途中で落ちる始末。それどころか、手を持ちあげたことで「助けを求めている」とでも思われたのか、男はあの手この手で彼女を助けようとした。

これで男に何の知識も技術もなければ「お手上げ」で終わったのだが、幸か不幸か彼女の魔力が暴走状態であることを察する程度の知識と技術を持っていた。

まずは自らの血を介して彼女の魔力を鎮静化させようとし、それがダメなら逆に彼女の血を通して魔力の内圧だけでも軽減しようとした。本来、彼の身体にとって魔力は異物、加えて質の異なる大量の魔力を無理に受け入れたことで瀕死の有様だ。

自分のため、頼んでもいないのに助けようとする男を彼女は冷ややかな目で見てい

た。

——バカなやつ

——恩でも売るつもり？

——腐った身体で何ができると思っているのやら

——こつちは早く死にたいのに、余計なことを

感謝の念などビタイチない。文字通り懸命に助けようとする姿に感銘など受けなかつた。

抱いた思いは、無駄な努力を重ねる男への呆れと余計な世話に対する苛立ち、そして……善意の裏を探る猜疑心だけ。

そして、男は全身の毛細血管から血を流しながら「自分では助けられない」という至極当たり前の結論に至つた。

——まったく、やつと諦めたのか

これで死ぬ。出来ればさつさと目の前から消えてほしい。

そう思っていたのだが……男の諦めの悪さを彼女は理解していなかつた。

「ダメで元々、やるだけやってみるさ」

そう言つて、男はケースのようなものを傍らに自らの血を使い河原に奇妙な円陣を描いていく。

ぐるりと一周描き終わった彼は、間違いがなにか一通り確認した上で、懐から取り出した細いナニカを袖をめぐった腕に刺す。

「くっ……はあ、はあ、もう一本！」

刺す度に苦悶の声を漏らしながら、立て続けに3本。

それを終えると、右手の手袋を外して円陣に向けて掲げる。そこには、見たこともない赤い文様が浮かび上がっていた。

〃告げる。

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に

聖杯の寄るべに従い、人理の轍より応えよ〃

朗々と響く意味の分からない言葉。だが、それに呼応するように円陣が光を放つ。

〃汝、星見の言霊を纏う七天

降し、降し、裁きたまえ、天秤の守り手よ——！！〃

力強く放たれた言葉と共に、円陣が一際強く輝く。

目も開けていられないような光量に思わず目を閉じる、同時に一陣の風が吹いた。

恐る恐る目を開けると、そこにはフードを被った見覚えのない第三者にぐつたりと力なくしなだれかかる男の姿。

「ははっ、まさか、うまくいくとは思わなかったなあ……」

顔は見えなかったが、泣きそうな声だったのが酷く印象に残った。

「ふん、患者ありきでの召喚か……少しは道理を弁えたな、マスター」

「うん。あの子を、お願い」

「当然だ。僕<sup>医者</sup>の前に患者がいる、ならばすることは一つだからな。だが、その前に……」

「俺は大丈夫だよ」

「患者の自己申告など当てになるか。いいから、聞かれたことに正確に、かつ嘘偽りなく答えろ。治療の順番はそれを踏まえて決める。無論、問診に虚偽を働いた場合どうなるか……わかっているな？」

「は、はあい……」

「よし、ならば……」

「アスクレピオス」

「なんだ、今は大人しく……」

「応えてくれて、ありがとう。また会えて、よかった」

「……………そうか。お前は貴重なパトロンだからな、請われたのなら応えるさ」

素っ気ない、だがどこか温かみのある声でフードの人物は応えた。

その後の展開はめまぐるしいものだった。

フードの人物は男を重症と診断しつつも緊急性は低いと判断したらしく、簡単な応急手当を施すと、足早に彼女の下へと歩を進めた。

「ほお、これはなかなか……だが、問題は患者の体力か。これでは時間はかけられん。出来れば誰にでも施術可能な治療法を確立したいところだが、そうも言っていられないな。」

治すぞ、大人しくしている」

そう言つて彼女の頭に手を乗せると、魔力を注ぎ始めた。

「マスターのやったことは間違いではない、むしろ最適解と言つて良いだろう。高い魔力が制御できず暴走状態になったことで肉体に変質・崩壊していく……ならば対応は簡単だ。自身で制御できないなら、外部から魔力を鎮静化させ制御可能にするのが最善。次善の策として、体内の魔力を排出することで症状の緩和を図る。」

どちらも間違つてはいないが、そのためには他者の魔力に干渉する極めて優れた制御能力が膨大なキャパシティが必要になる。だが、マスターにそれほどの技量もお前の魔力を受け入れるだけの容量もない。その結果がああの有様なわけだが……魔術は専門ではないとはいえ、僕なら造作もないことだ」

その言葉通り、瞬く間のうちに彼女の体内の魔力は落ち着きを取り戻していく。それと共に腐った身体は元の姿を取り戻す。気付けば、そこには純白の癖毛と渦巻き状の角

が特徴的な、痩身の少女の姿を取り戻していた。

「治療はこれで終了だ。症状こそ興味深かったが、治療法自体はさほど目新しいものはなかったな。だが、原因の方は……まあいい、そちらは後回しだ。今は先にマスターの処置……と言いたいところだが、もう陽が沈むか。ならば、先に野営の準備だな。」

お前もしつかりと食事と休息をとれ、その痩せ方は不健康極まりない。いつ別の疾病を発症するかわかったものではない。いや、だが食事はまず流動食から始めるべきか。待っている、野営の準備がてらお前でも食べられるものを用意する。ちつ、こういう時あの赤い弓兵がいれば……！」

なにやら文句を垂れながら、フードの男は森へと消えて行った。

というのが、事ここに至るまでの大まかな経緯である。

思い返してみても、なぜこんなことになったのか何一つ理解できない。

それこそ、はじめは全く何を言っているのかわからなかったのが、いつの間にか言葉が通じるようになってきていることも。

「余計な、事を……」

「……」

「やっと、やっと死ねるはずだったのに……！」

「……………なら、なぜお前は泣いている」

心の底からの、魂の叫び……のはずだった。

なのに、言われて気付いた、双眸から零れる透明な雫の存在に。

念願が果たされなかったから？

ようやくこの苦界から解放されるはずだったのを邪魔されたからか？

その筈だ、その筈なのに……

「死にたいならそうすればいい。今のお前にとって、さほど難しいことではないだろう」  
その通りだ。里にいた時の用に監視されているわけでもない以上、選り好みさえしな  
ければ死ぬことは難しくない。

ならばなぜ、この目から塔に枯れ果てたはずの涙があふれて止まらないのか。

「……死にたくないと、思ったからか」

「っ！ そんなわけ……!! そんなわけ、ある、はずが……」

否定の言葉が思うように出て来ない。どうして、あれほど死を待ち望んでいたはずな  
のに……

(死ぬのが怖いなんて、どうしていまさら……)

いや、本当は理由なんてわかりきっている。

あの時は何も感じなかった。彼が血反吐を吐いてもなんとも思わなかった。

だというのに、全てが終わった後になって、どうして……



「……………キレイだと、思った」

「生まれて初めて、キレイだと、思ったんだ……」

言葉としては知っていたが、一度も意味を実感したことのないソレを初めて理解した。

「美しい」とは「キレイ」とは、あの瞬間の光景を指すのだろうと。

魂の奥深くに、決して色褪せることのない記憶として刻み付けられた。

「なぜ、そいつは助ける意味も、その価値もないのに助けた」

「助けたいと思ったからだろうな」

「自分が死にかけてもか」

「まだできることがあったからだろうな」

「……………意味が、わからない!!」

価値も意味もないのに助けようとすることも、そのために死にけることも、何もかもわからない!　なのに!　どうしてあの時の光景が頭から離れない!　なぜそいつは笑いかけた!　死にかけても笑い続けた!　お前が現れた時の安心したあの顔は……なんなんだ!!　まるで、自分が救われたような顔をして……………どうしてあの時」



自分への殺意以上に、それを赦すことができなかつた。

しかし、生きるといふことはこの嫌悪感と共にあり続けるといふことだ。それは、彼女にとって自らの半生など及びもつかない苦行に他ならない。なにより、生きてどうすればいいというのか……。

元より、生きる目的も、理由も、何一つとして持ち合わせていないといふのに。

そこへ、雪に覆われたこの地に相応しくない、甘い花の香りと共に聞き覚えのない声が投げかけられた。

「なら、生きると良い。生きていれば、あるいは君が真に救われる日も来るかもしれないよ」

反射的に声の方向へ視線を向ければ、そこには浮世離れた容貌の青年の姿があつた。

「どこから湧いて出た、マール夢魔リン」

「やだなあ、同じキャスターの誼じゃないか。そう邪険にしないでおくれよ、医神殿「ふんつ……喚ばれてもいないのに」苦勞なことだ」

「そこはほら、単独顕現のなせる技という奴さ。まあ、この世界自体が元々外世界の存在を受け入れやすい性質を持っているからこそだけだね。でなければ、君の召喚自体成立しなかつたはずだ」

「それが僕が召喚できた理由か。この世界の抑止力はどうなっている」

「いや、ホントにね。これ、下手をしなくてもいつ世界が滅んでもおかしくなくらいには危うい状態だと思うんだけどな。よく今の今まで存続できたものだよ」

話の内容自体は極めて深刻なものはずなのに、それを語る当人の口調はどこまでも軽い。

どこまでいっても他人事、当事者ではなく傍観者としての語り口。そのあまりの無責任さには、為人を知り自身も医学以外にはさっぱり興味のない性質のアスクレピオスをして眉を顰めるほど。

「まあ、それはそれとして、だ。こんな機会はもう二度とないかもしれない、それは君も理解しているだろう?」

「また悪巧みか」

「悪巧みだなんて人聞きの悪い。我々にも、彼女にも、他ならぬ■■■■…と、そういうえば彼、名前を彼女にあげてしまったんだっけ。ふむ、なら…マイ・ロード、うん、これならいけるね。彼にも得しかない話さ」

(うさぐさい……)

嘘を言っているかどうかはわからない。ただ、青年の語り口が、表情が、雰囲気、すべて信用ならない。

「やれやれ、そんな目をしなくても別にだますつもりなんてないというのに」

「日頃の行いだな」

「こほん。誓って、私がこれから話すことに嘘偽りはない、真実のみを話すとも」

「気をつける。嘘を吐かずに、真実のみを口にしながら他人を操ることくらい造作もない男だ。なにしろ、真実を『すべて』話すとは言っていないのだからな」

「信用ないなア。何はともあれ、まずはマイ・ロードをよおく見て御覧」

「……透けてる？ いや、掠れてる？」

目を凝らせば、治療された彼の姿、その輪郭が曖昧だ。

ぼやけたと思えばハッキリとし、かと思えば向こう側が透けて見える。

「色々とワケアリだね。彼は一つの世界に長く留まることができない、これまでも色々な世界を渡り歩いてきたはずさ。一応この世界は外部の存在を排除する力がほぼ働かないようだけど、それとは別に彼自身の存在が曖昧になっているのさ。遠からず、彼はまた果てのない旅を続けることになるだろう。そうして、いつかどこかで終わりを迎えるのか、それとも終わらない旅を続けるのかはわからないけど」

「……何をすればいい」

「理解が早いね。なあに、難しいことをする必要はない。君が、彼がこの世界に留まるための楔になってくれればいいだけさ」

「くさび?」

「ああ、既に互いの血を交換したことで君たちの間にはパスが通っている。あとは、ちよつとした契約を結べばOKさよ。おや? よく見れば君の魔力はやや変質しているね。彼の魔力を注がれた影響かな? ふむ……これならおまけの一つもつけられるかもしれないぞ」

そうして、言われるがままに「契約」とやらを本人の意識が戻らぬうちに交わしてしまふ。

「良いのか?」と思わないでもなかったが、本人の同意を得ている時間があるとも限らない。

恩を返そうとか、そういう考えがあつたわけではない。ただ、彼を当てのない旅に出させてはいけない、その確信があつた。

「我々から君に望むことは一つ、彼が『身の丈に合った終わりを迎える』こと、ただそれだけだ。それさえ果たされるのなら、その『力』も含めてあとは好きなようにしてくれて構わない」

「幸せにしろ、ではなく?」

「はははっ、簡単そうに思えるかい? だが、はたしてどうかな。」

彼は元々色彩豊かな少年だった。しかし、長い旅路の中で徐々に…誰もが気付かない

うちにその色彩を失っていった。まるで、「彼女」に自分の色を与えるかのようにね。今の彼は、限りなく透明に近い。そんな彼に本来の彩を取り戻させるのは、言うほど簡単なことじゃないよ」

「……」

「だから、君は精一杯君の人生を生きなさい。それが結果的に、彼の人生に色彩を取り戻すことになるだろう。」

自分だけで難しいと思うのなら、他の誰かの力を借りるのもいい。彼も、そうやって自分の物語を走り抜けたのだからね。まあ、君にはそちらの方が難しいかもしれないが」

「……………わかった」

「それでは……おっと、そう言えば君の名前をまだ聞いていなかった」

「ない」

事実だ。里では「おい」とか「こら」とか、そんな風と呼ばれていた。

名前というものがあることは知っていても、自身を指す名称というのは、奴隷以下の扱いだった彼女には縁遠いものだ。

「そうか……では「ミスミ」、これからはそう名乗りなさい。姓は、「スノーウッド」なんてどうかな？ 今日の出会いは、君にとって特別なものだろうからね」

「わかった。コレはこれから『ミスミ』、『ミスミ・スノーウッド』」  
「よろしい。ミスミ、ロードのことをよろしく頼んだよ」

そう言つて、青年は先んじて光と消えた医者のように姿を消した。

「それじゃ、行こうか。ロード」

「きゆう……」

腕の中の黒いふわふわの：リスのようなネコのような小動物を抱え直す。

契約を交わす際、あの男は「ちよつとした小細工」とやらを施した。彼の存在が不安定なのは「彼が彼であること」に起因するらしい。その因果がある限り、契約を交わしただけでは完全に安定しない。

そこで、その不安定さを利用し姿を変えることで「彼ではない」とだまくらかすのだから。任意で元の姿に戻ることまでできるが、存在が安定しないうちは長持ちしない。

対策は二つ。一つは純粋な時間経過、長くこの世界に留まることで「世界の一部」として存在が安定するのを待つこと。ただし、これには十年単位の長い時間が必要になる。

もう一つは契約対象を増やす、要は楔が増えれば増えるだけ安定しやすくなるというもの。これも、相当な数が必要になるので今日明日で解決できる問題ではない。何より、彼の存在を明かすことにはリスクが伴う。その見極めには慎重を期す必要がある。



「旅をしよう、ロード。ミスミはあなたと会ってキレイなものを知った。もつとキレイなものを見たい、キレイなものに出会いたい。そうすれば、いつか……」

自分自身が、キレイなものになれるだろうか。

なれなくてもいい、近づこうとすることにはきつと意味があるはずだから。

そうして、一人と一匹による長い永い旅が始まった。

それはそれとして、この時は知らなかった。まさか自分の名に、あんな意味があるなどと……そして、後年その意味を知った彼女は旅の目的とは別に一つの決意を抱く。「とりあえず、マーリンは次に会ったら殺す」

\* \* \* \* \*

十数年後、ミドガル王国王宮の一室にて。

下座に座するのは正装の上から白衣を纏った女性。ふわふわとした純白の腰まである長い癖毛と渦巻き状の角が特徴的な彼女は、一見すると年端もいかない少女に見える。何しろ小柄だ、身長は140cmにも届かず、女性らしい起伏や丸みにも乏しい。しかし、そんな自分の外見など知ったことではないとばかりに、ソファに座る姿は堂々

としている。

自身を卑下する要素など何もないと、なによりその姿勢が如実に物語っている。王宮という最高位の格式を有する場に赴きながら、この自負。並大抵の人物に持てるものではない、ましてや二十代前半の年若い女性となれば尚のこと。

出された紅茶に口をつけながら、待つことしばし。

流石は王宮、出される紅茶も一級品だ。その味と香りを十分に堪能していると、室内にノックの音が響き渡る。

即座にカップを置き立ち上がると、間もなく来訪者にしてこの場に彼女を呼び出した人物の名が告げられる。

「アイリス第一王女殿下、ならびにアレクシア第二王女殿下のおなりです」

その声と共に扉が開き、二人の女性が応接間へと入ってくる。

彼女はその場で深々と一礼、やがて二人が対面の席まで来たところで声がかけられた。

「初めまして、スノーウッド代表。顔をあげ、言葉を交わすことを許します」

「拝謁の誉に浴することを光榮に存じます、アイリス第一王女殿下、アレクシア第二王女殿下。」

ミスミ・C・スノーウッドと申します。以後、お見知りおきを」

「名高き『オーバー・ザ・ボーダー』の代表に会えて私も嬉しく思います。

国の境を超えての医療活動を中心に、各地の工芸品や特産物の発掘、その流通など……多岐にわたるご活躍の噂はかねがね」

「ありがとうございます。ですが、僭越ながら一つ訂正させていただいてもよろしいでしょうか」

「なにか、間違いでも？」

「一国の王女に対しても、物怖じすることないその姿勢にアイリスはむしろ好感を覚える。

第一王女にして王国最強の魔剣士でもある彼女に遜るものは多いが、面と向かって意見するものは貴重だ。

対して、アレクシアはさりげなく胡乱なものを見る目をミスミに向けている。

「私は代表ではなく、あくまでも医療部門の長に過ぎません。どうか、お間違えの無いよう」

「ですが、確かあなたが起こした団体だったと記憶していますが」

「その通りです。確かに当初は私が全体の運営を統括していましたが、規模が大きくなり部門ごとに権限を分ける際、組織全体の運営については各部門長の合議により決定することとしました。」

です。今の私はあくまでも意思決定機関の一員でしかありません。もちろん、医療部門では基本私の決定が優先されることにはなりません。」

「自ら権力を分散させたのですか……」

アイリスも意外な事実には驚きを隠せない。下からの突き上げや周りからの圧力で権力を手放すことはあるだろうが、自分からとなると並大抵のことではない。

「殿下、私の本分は医者なのです。組織運営はもちろん大切ですが、そのために本分を疎かにしては本末転倒というもの。『権力を分散させた』と言えば聞こえはいいですが、要は自分の本分のため、他のメンバーに仕事を押し付けただけに過ぎないですよ」

「そう言つてのけるのですね、あなたは」

「おかげで、今は研究と実務、そして後進の育成に集中できるようになりました」

「……信じておられるのですね、仲間を」

〃ニッコリ〃

アイリスの言葉に微笑みを返す。

〃羨ましい〃とアイリスは思う。信頼して役割を任せられることのできる仲間というのは、得難いものだ。それが自分の権限を切り分けても問題ないと思えるほどとなれば、どれほど……。

「ところで、最近話題の新薬についてなのですが……」

「まだ治験の段階なのですぐに流通とはいきませんが、今のところ目立った副作用もな  
く……」

「資金についてはどうです？ お金のない民衆に格安で、あるいは医学書や技術指導を  
低額で、というのは素晴らしいことですが、それでは活動に支障をきたすのでは？」

「幸い、我々の活動に理解を示してくれるパトロンがおりますので。もちろん多少の優  
遇はしておりますが、全体の活動には影響しない範囲です。むしろ、お金のある所から  
如何にしてむしり取るかが腕の見せ所と申しますか」

「では、貴族や豪商には割と吹っ掛けるというあの噂は……」

「ニッコリ」

「貴族を敵に回すのはリスクが大きいですよ」

「OTBは団体の名称であると同時に我々のスローガンでもあります。」

いざとなれば、さっさと出て行くだけのこと。むしろ、まともな人物であれば我々と  
縁が切れるリスクの方が大きいとご理解いただけるかと」

「最近では財務の方の商いも軌道に乗っているので、その意味でも活動資金は何とかなっ  
ていますよ」

「……辺境の織物や染め物、あるいは工芸品、それに珍しい食物なども取り扱っているの  
でしたね」

「元は各地で細々と伝えられている薬草や生活の知恵などを集めていたのですが、それが長じて様々な情報が集まるようになりまして。目新しい技術や品物もよいですが、存外既存の技術や知識も馬鹿にできないものですよ。辺境だから、田舎だからと下に見るには惜しいものがたくさんあるのです」

「耳の痛い話ですね」

そうして会話は和やかな雰囲気のままに終わりを迎えた。

アイリスからは税の優遇や国内での活動を保証する旨の公文書が与えられ、ミスミ側からも医学を中心に知識や技術提供の場を設けることを約束した。

多忙なアイリスは会談を終えるときも足早にその場を去り、代わりにあまり会話に参加しなかったアレクシアがミスミを王宮の外まで見送ることに。

だがその道中……

「なにか、お聞きになりたいことがおありなのでは?」

「……………ふーん、御見通しってわけ」

「立场上、人からどう見られるかには注意しておりますので」

「そ」

王女としてではなく、個人としての素が出ている。

隠す意味がないと判断したのもあるのだろうが、純粹にアレクシアはミスミのことを

信用していない。

医者としての本分を優先して自ら権力を手放し、貧しい人々のために格安で治療を施す。そのためであれば、貴族にも平然と歯向かう。確かにご立派だが、ご立派過ぎて信用ならない。

彼女の婚約者と同じだ。一見すると欠点が見当たらないが「欠点がないのがおかしい」。

「そんなに私は信用なりませんか？」

「信用できないわね。医者としても人しても完璧、弱者の味方で強者には屈しない？ そんな完璧な人間いるわけじゃないじゃない」

「ええ、まったくもって同感です。私も、そんな人間がいたらまず疑ってかかります」

「はっ」

思ってもみない返しに、思わず目が点になる。

「まあ、私の場合そもそも他人を信じるのがないのですが」

「なにを、言って……」

「なにを、と言われれば私の本音ですよ。なにしろ、基本的にというか根本的に他人を信じられない性質です」

“我ながら困ったものです” などと言いながら肩をすくめて見せる。

「……仲間のことはどう思ってるのよ」

「残念ながら、彼らのことも信じているわけではありません。ああ、“能力を”という意味であれば信用してきますね。ただまあ、“できる能力がある”からといって“結果”は必ずしもついてきません。予期せぬ出来事、外野の横やり、体調不良 e t c ……色々可能性はありますが、基本的に失敗することも織り込んで計画するようにしています。

ましてや、人間性など言わずもがな。どれほど高潔な人物に見えても、その腹で何を考えているのかなど私には知る由もありません。一応人を見る目は磨いているつもりですが、私を騙す大嘘吐きがいなくても限らないではありませんか。その意味で言えば、私は自分のことも信じていないのかもしれないかもしれませんね」

「それじゃなんで権力を分けるようなことをしたわけ。言っていることが矛盾するじゃない」

「それに関しては先ほど話した通りです。私の本分は医者で、それが疎かになるくらいならばリスクを背負う、それだけのことです。裏切ったのなら、その時は相応の報いを受けさせるだけですしね」

つまり、信じたから権限を分けたのではなく、自分の本分がおろそかになることを嫌っただけ、と。

裏切りさえも織り込み済みで、対処するための方策が立っているから権限を分けた：



そう言っているのだ。

「それを私に言っていていいわけ？」

「問題ありませんよ。別に隠してはいませんし」

「え？」

「わざわざ言いふらすことでもないので全員が知っているわけではありませんが、私に近しい者……各部門長と医療部門の大半は知っています」

「それじゃ……」

「完璧」の仮面をかぶっている意味がないではないか。アレクシアのそんな言葉は承知の上なのか、それまでと一切変わらない微笑みでミスミはその前提を否定する。

「私の仮面は他者ではなく、自分を偽るためのものだからですよ」

「じぶん、ですって」

「ええ、私がこの世で一番嫌いなものは自分です。他人を信じられない自分、裏切られることを前提にしなければ関係を築けない自分、そして……裏切られても、粛清しても心の痛まない自分。そんな自分が私は世界で一番嫌いなんです。」

でもほら、それは悲しいじゃないですか。私だつて自分が好きになりたいですし、周りの皆のことも頭はでは「信じていい」と思っているんですよ。まあ、理性ではなく感情、むしろ本能の段階で他人を信じられないわけですが。

なので、とりあえず形から入ることにしたわけです。王女殿下が完璧と思ったのも当然でしょう、だって私が被っているのは私が「理想とする自分」なのですから。他者に慈悲を、寛容を、信頼を向けることができる……そうやって形だけでも整え、それを続けていればいつか、内実が追い付くのではないか。そんな期待を抱いて、私は仮面をかぶっているんですよ」

だから、「ミスミ」なんて名前は本当に皮肉でしかない。

ミスミソウの花言葉は「自信」と「信頼」、どちらもミスミが欲しながらも手が届かないものだ。

こんな名前を付けてくれやがったあのロクデナシは、いつか必ず落とし前をつけてやらねばなるまい。

「……………本当に、誰のことも信じていないの」

「……………実を言えば、一人だけ。」

昔、ある出会いがありました。おそらくは、一秒すらなかった光景。でも、その姿ならば、たとえ地獄に落ちようとも、鮮明に思い返すことができる。

私に世界と人の美しさを教えてくれた人。あの人の事だけは、信じてることができる。それが、私のささやかな救いなのですよ」

そうやって仮面ではない、本当の笑顔を残してミスミは王宮を後にした。

馬車に揺られ、ミドガル王国王都における活動拠点である建物へと帰ったミスミだが、のんびりとはしてられない。

本来、彼女はアイリスと比べても劣らないほどに多忙な身の上なのだから。

「お帰りなさい、先生」

「経過報告を」

「患者の容体は安定しています。今の所急患の搬送もありません。こちらがデータになります」

長い白髪を首の後ろで手早く結わえると、手渡された書類に目を通す。

見た限り確かに問題はなさそうだが……

「よろしい。では、このまま各病室を回ります」

「少しは信用してくださいよ」

「私が根っからの人間不信なのは承知の上でしょう」

「いやまあ、そうなんです……」

「それと、この患者はそろそろ退院の手続きの準備を」

「……改めてですが、本気ですか」

指定された患者は、色々と曰く付きの人物だ。

ギリギリ犯罪者として手配されていないだけで、限りなく黒に近い灰色。手配されていないので騎士団に引き渡すことはできないが、果たして野に放していいものか。そう躊躇うのも無理はないと思うような人物だ。

だが、ミスミの決断は揺らがない。

「関係ありません。聖人が気の迷いで悪行を働き、悪人が気まぐれで善行を為すのが我々です。彼が退院すれば、なるほど高い確率で犯罪に手を染めるでしょう。ですが、そうならない可能性は捨てきれない。

なら、我々に彼を救う義務はあつても、彼の自由を束縛する権利はありません。我々が救った命が明日誰かを殺すかもしれない、逆に大勢の人々を救うかもしれない。どちらも同じ可能性です。医者は患者を救うだけ、その後行動は彼らの責任であり我々が関知するところではありません」

「先生のそういうところ、極まり過ぎて私はむしろ好きですけど、たぶん余人には理解されませんよ」

「自分の人間性がロクでもないことなんて、私が一番知っていますよ。ところで、例の件は?」

それまでよりなお一層真剣な表情で声を潜めながら問う。

聞かれた方も、腰を折り耳元で囁くようにして報告する。

「運輸部から先ほど連絡がありました。不全症患者、計5名を明朝に到着予定だそうです」

不全症、正式名称は「魔力制御不全症」。対外的なカモフラージュのため、そして妙な迷信を払拭する目的でそれらしい名称を付けたものだが、世間一般ではこちらの名の方が通りが良いだろう、そう「悪魔憑き」と。

「内訳は？」

「ステージⅢまでが4名、ですが1名はステージⅤ食い込みつつあるとのこと」

「わかりました。4名の処置はあなたに任せます、手に余るようなら呼びなさい。それと、残る1名は私が処置しますが、見学希望者は可能な限り同席させるように。到着次第処置を始めますので、遅れても待ちませんよ」

「はい、そのように通達します」

彼女たちはこれを5つの段階に分類した。

ステージⅠ：初期胸部を中心に微かな違和感と魔力制御の乱れが生じる。この段階でそうとわかることは稀なため、発覚することはまずない。

ステージⅡ：軽度違和感は痛みに代わり、胸に黒い痣が広がり始める。

ステージⅢ：中度痣が広範囲に広がり、魔力の制御がほぼ聞かなくなる。

ステージⅣ：重度痣はほぼ全身に広がり、さらに各部の腐食が始まる。

ステージV<sup>末期</sup>:全身が腐りロクに身動きも取れなくなる、いつ命を落としてもおかしくない。

そして、ステージIIIまでであれば投薬と施術により時間はかかるが治療が可能だ。具体的には、専用のアーティファクトで体内の魔力を吸い上げることによって体への影響を最小限に留め、その間に魔力を鎮静化させる薬を投与することで暴走を安定化。これを繰り返しながら訓練を通して自身で魔力を制御可能にする、というものだ。

逆に、ステージIV以降はこの手段は使えない。悠長に構えていられないというのもあるが、ここまで魔力暴走が悪化すると自力での制御はほぼ不可能だからだ。そのため、これ以降の段階については外部からの干渉による魔力制御が必要になる。前者であれば必要な知識と技術があればなんとかなるが、後者に関しては天才的な魔力制御技術が必要になる。OTB内でも、これをできるものは数えるほどしかない。

その一人にして筆頭が、医療部門の長であるミスミだ。とはいえ、だからと言って施術できる者が限られたままでいい道理はない。そのために可能な限り見学者の同席は許すし、ステージIV以降についても投薬や施術による治療の可能性がないか、日夜研究を続けているのだ。

「……そろそろあなたも挑戦しますか?」

「え、いやいやいやいや!! 無茶言わないでくださいよ!」

「あなたも元は同じ不全症でしょう。ステージⅢながら処置を受けはじめて僅か8日で快癒したのはあなたくらいなのですから、そろそろ……」

「もうちよつと時間ください、お願いします」

「……………仕方がありませんね。あまり尻込みしていると、現場に放り込みますからそのつもりで」

（鬼だ、鬼がいる……!!）

元々、OTBはミスミが世界を巡りながら各地で治療を施すうちに賛同者が集まり、やがてこのような組織へと発展していった。そのため、悪魔憑き専門というわけではなく、悪魔憑きとは無関係なメンバーも多い。

ただ、発足の経緯から悪魔憑きなど関係なく受け入れる土壌がある。そのため、悪魔憑きの患者が搬送されることに抵抗はないし、その情報が外に漏れることもない。

「ところで、例の組織は？」

「なにぶん、あちらは教団と思いつきり対立する気満々ですからね、その分中々接触が持てず……」

「いずれは接触したいところですが、変に拗れることにならないかが気がかりですか」  
「それなんです、何やらあちらも王都で動きがあるようで」

「いよいよ、ですね。目的が重なる部分も多いですし、出来れば穩便に行きたいところで

す」

「うちのメンバー、特に元不全症の中にはあっち寄りの人も多いですからねえ」  
O T Bの場合、教団の存在に気付いたのは組織の形がある程度できあがってからのことだ。

そのため、気付いた頃には今更教団との全面対決をできるような状態ではなかった。悪魔憑きとは無関係な者も多く、悪魔憑きを救うことには満場一致しても、教団に対する感情の温度差にかなりのばらつきがあった。

だからこそ、O T Bにとって例の組織の存在は非常に重要なものだ。彼らの方針は自分たちでは今更選択できない方向性だが、協力する形でなら何とかなる。

「どう転んでもいいように、準備だけは……」

「ふおうー!」

「ロード? お出迎え、ありがとうございます」

十年來の最も古い仲間を両腕で抱きとめる。

小柄なミスミの両腕にすっぽり収まるサイズの小さな黒い毛並み。

十年以上の間、変わらず傍にあり続けた自らの標。この瞬間だけは、ミスミも仮面ではない本来の笑顔がこぼれる。

「あゝ、先生〜!! 私にも代わってくださいいよ〜! 私だってロードをモフモフしたい



んですから〜!」

「諦めなさい。私がいる限り、このポジションは譲りません」

この数日後、アレクシア王女が失踪する事件が発生する。

それから間もなく、王都内で暴れる謎の巨人が出現。騎士団はこれに対処するために出撃するが、そこでシャドウガーデンを名乗る謎の組織と遭遇する。だがそこへ、更なる闖入者が現れた。

「手を引きなさい、アルファ」

「なぜ、私の名を……」

「そちらがこちらを把握しているように、こちらもそちらをある程度は把握しています。

似た境遇、類似する目的……共闘できると思うのですが?」

「……そうね、確かにあなた達の存在は知っているわ。でも、ここで名を呼んでもいいの?」

「配慮に感謝を。でしたら、私のことはキャスター0と。他のメンバーだと作戦ごとにナンバーが頻繁に振り直されますが、コレだけは変わりませんので、固有名詞とと思ってもらって構いません」

「そう。ではキャスター、手を引けとはどういう意味?」

それまでは友好的な雰囲気だったのが一転し、剣呑な気配を発するアルファ。

しかし、キャスターの方もそれを涼やかに受け流す。

「医者の前で患者を殺すなど、許すはずがないでしょう」

「患者? あなた、まさか治すつもり?」

「当然です。私の前に患者がいるのです、治療以外ありえませんが」

「……………できるの?」

「ステージVの先があるとは思いませんでしたがね。さしずめ<sup>異常症例</sup>ステージVIといったところでしょうか。まあ、治しますよ。仮にもキャスターのモニユメントを預かる以上、我が師“医神”の名に泥を塗るわけにもいきませんので」

言いながら取り出したのは、金の駒。一見するとチェスの駒にも見えるが、見たことのない意匠だった。

（あれは、何かのアーティファクト?）

「セイバー、ライダー」

「はいはい!」

「各自ピースの夢幻召喚を許可。暴れる患者の動きを止めなさい」

「りようかい!」

「キャスター、騎士団の方は?」

「顔見知りです、私に対応しましょう。あなた達はその間に」

「まっかせて!!」

「あ、でも完全召喚アップデートはあり?」

「ダメです。あなた達のピースの場合、特に何をしでかすかわからないトラブルメーカーなんですから」

「ちえ〜」

「それじゃ、サーヴァントピース、セイバー」

「いこつか、サーヴァントピース、ライダー」

「夢幻召喚!」インストール

両名が取り出した銀の駒が輝きを放ったかと思うと、それまでと異なった武装を身に纏う。

片や突撃槍ランス、片や剣:しかしただの剣ではない。明らかに間合いの外であるにもかかわらず一振りすると、刀身分断されよく見ればワイヤーで繋がれているのがわかる。

セイバーと呼ばれた人物はそれを巧みに操り隻腕の巨人の腕を弾く:が

「わっ、力強つ!?! ちよつとボク! あんま長くもたないから早くして〜!」

「も〜、しようがないなア〜。いつくぞ〜、触トランプ・オブ・アルカリアれれば転倒:って近づけないんですけど

!?! しつかりしてよボク!」

「そんなこと言われても〜!」

「まったく、何をやっているのやら……」

そんな二人を横目に、キヤスターは見知った顔の下へと歩み寄る。

「あなたたち、一体なにもの！」

「どうかこの場はお任せください、王女殿下」

「っ!? あなた、まさか……」

「私の本分は医者、この場には患者の治療のために参った次第」

「あれが、患者だというの？」

「ええ。魔力制御不全症、分かりやすく言えば悪魔憑きという名の病です。そして、私もまたかつては悪魔憑きでした、と云えばご理解いただけますか」

「ですが、私の部下や国民たちを……!」

「騎士と民間人のことでしたら、O T B が仮設テントを設置し治療にあたっています。殿下には、無事な騎士たちに搬送の指示をお願いしたく」

「事情の説明は……」

「後程、必ず。それと、こちらを」

「これは？」

「悪魔憑きの治療薬とその処方箋です」

「本物、ですか」

「それも含めて、調べていただければと」

なにしろ、この世界では教会の影響力があまりにも大きすぎる。

密かに治療を施すのではどうしても限界が来る。ならば、より高い地位から流してもらうのが一番だ。表立ってやれば教会と事を構えることになるが、シャドウガーデンとの対立が本格化すればアチラもそれどころではなくなるだろう。その間に、この薬をキツカケに教会の権威を引きずり下ろすことができれば……。

（表と裏、両方から教団の力を削ぐことにつながる）

「いいでしょう。でも、僅かでも嘘があれば……」

「ご随意に。では、私は患者の治療がありますので」

「どこまで行つても医者なのね、あなたは」

残されたアイリスは、一言そんなことをつぶやいた。

「よつしや当てた!!」

その声と共に、巨人が地響きを立てて崩れ落ちる。

両足が思うように動かず、態勢を維持できなくなったのだ。

「よおつし、いつくぞ〜！ 暴れる巨人をとつかまえて、勇気凛々行進だ！

ヴァルカーノ・カリゴランテ  
僥倖の拘引網!!」

それまでと比較して一際長大に伸びた剣が縦横無尽に宙を駆ける。四方八方から伸

びた剣は巨人を囲い込むと、徐々にその包囲網を閉じていく。やがて、その身を完全に縛り上げることに成功した。

「キャスター！」

「ご苦労様です。最悪ロードのお力を借りることも考えていましたが、そうならずに済んだのは幸いです。」

「それでは……手術オペの時間です」